

模倣の決号作戦

帝都造営

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——我々は『やつら』が生物であるという仮説を立てています——
艦娘なんて愛称も、その存在すら認知されていなかった頃の話。

沖縄県にて発生した「琉球諸島事変」。国籍不明の未確認勢力——後に深海棲艦と呼ばれる異形の軍——に日本は大きな損害を被る。それはこの国が一世紀以上維持してきた軍事国家としての存在に大きな影を落とすものであった。

『やつら』の存在に国民は大いに怯えている。

採りうるべき対策は？

艦娘が出てこない艦これ小説。

目次

まだ艦娘なんて愛称も、その存在すら認知されていなかった頃

H 3 4.	2.	2 8	《X—	2 4 5 days		1
H 3 4.	2.	2 8	《X—	2 4 5 days	②	14
H 3 4.	2.	2 8	《X—	2 4 5 days	③	26

事変で済まされた琉球

H 3 4.	3.	1	《X—	2 4 4 days		39
H 3 4.	3.	1	《X—	2 4 4 days	②	51
H 3 4.	3.	1	《X—	2 4 4 days	③	65
H 3 4.	3.	2	《X—	2 4 3 days		80

定義すべき存在

H 3 4.	3.	6	《X—	2 3 9 days		92
H 3 4.	3.	6	《X—	2 3 9 days		107
H 3 4.	3.	7	《X—	2 3 8 days	②	120
H 3 4.	3.	7	《X—	2 3 8 days		135
H 3 4.	3.	8	《X—	2 3 7 days		149

協調へは程遠く

H 3 4.	3.	1 1	《X—	2 3 4 days		165
H 3 4.	3.	1 1	《X—	2 3 4 days	②	184
H 3 4.	3.	1 2	《X—	2 3 3 days		196
H 3 4.	3.	1 2	《X—	2 3 3 days	②	211
H 3 4.	3.	1 4	《X—	2 3 1 days		224
H 3 4.	3.	1 4	《X—	2 3 1 days	②	238
H 3 4.	3.	1 4	《X—	2 3 1 days	③	253
H 3 4.	3.	1 5	《X—	2 3 0 days		265

H
3
4.
3.
1
5
X
—
2
3
0
d
a
y
s
②

—

まだ艦娘なんて愛称も、その存在すら認知されていなかった頃

H 3 4 . 2 . 2 8 《X | 2 4 5 d a y s》

——西暦2022年11月1日。 鹿児島——

画面上に光点が浮かぶ。何十にも張り巡らされた海面に浮かぶ海底敷設聴音機の索敵網に引つかかったのか、もしくは潮流監視ブイを転用した簡易な警戒システムか……案外哨戒中の駆逐艦かもしれない。

だが重要なのは、光点がわかには見え、そして既にシステムのキャパシティを上回ろうとしていることだ。もちろん構うことはない、『やつら』は一ついれば百という。言うならシロアリのようなものだ。シロアリが家に群がりそしていつかは食いつぶすように、『やつら』も建築物を食いつぶす。そんな調子でいよいよ『やつら』は沖繩のみならず南九州という建築物の一端を食い荒らそうとしている。それだけ分かれれば十二分であった。

何十にも並べられた画面が照らす部屋の中。視界一面を覆い尽くさんほどに広がる画面たちは、時々刻々と変化し続ける情報を映し出し続ける。液晶が伝える情報のせいで、さながら地下司令部のように……もつとも昨日降った雨のせいで感じられる過大な湿度により、ここが仮設指揮所に過ぎないことを忘れることは叶わないのだが。

通信機器や演算機器、組織を支える機器が吐き出す排熱ファンと、それぞれ取り付いた要員の抑えられた調子の報告だけが旋律もなしに連なってゆくだけの指揮所の中。にわかには交わされる情報の量が増える……当然だ、作戦が始まったのだから。状況は想定通りに推移し、そして計画を現実へ加工するという作業がついに始まる。始まってしまふ。

「……」

そんな慌ただしさを帯び始めた指揮所の中で、沈黙を保つ一つの影。肩章と略綬の列から軍人、それも佐官級の高級将校であることは間違いなく、顔つきを見るにまだ50にも達していなさそうな男だ。脇に控える尉官と何事か言葉を交わすと、また画面へと視線を注ぐ。

この半年——もう少し正確に言うなら八ヶ月——という時間。この短いとは決して言えない時間に、あまりに多くのことが書き換えられた。それは政治や経済というレベルではない。いくつもの街がそれぞれに抱えている住民と文化、歴史が尽く破壊された。片手には収まらない国がその全国土を喪失し、その国家たる所以を失った。工業力は本当に久しぶりにその全力を發揮して祖国のために働いたが、それでも多くの価値あるモノが消えていった。

だからこそ、男は思わずにはいられない。目の前に状況が迫っている、いや迫っているからこそ、思わずにはいられないのである。

遙か以前から始まっていた世界の変遷に、初めて自身が関わった日のことを。

——西暦2022年2月28日。東京——

湿った洗濯物は太陽に晒すに限る。太陽光には強い殺菌作用があるし、なにより乾燥機なんかよりずっと経済的だからだ。

物干し竿の機能を拡張する角ハンガーに吊るされてゆく靴下やらハンカチ。洗濯籠が軽くなったところで屋内に戻ると、男は窓を閉めた。

世間一般で言えば平日。なのに今窓を閉めたのは男。それも働き盛りであろう男である。専業主「夫」という蔑称よびなも定着しつつあるが、

それを彼に当てはめるにはまあ、ワイシャツ姿が似合いすぎているというもの。

彼は慣れた……とはお世辞にも言えない動きで洗濯籠を片付けると、居間へと向かう。すると何かを目に留めたようで、口を開く。

「このくら、手が止まってるぞ」

彼がそう言うのは、居間のちゃぶ台で勉強する少女。狭いちやぶ台はロングセラーなノートや東京教育委員会認定の教科書などで埋め尽くされており、一部がはみ出してまた何冊かは畳の上に落っこちている。

男に声をかけられたことで動きを止めた——「固まった」という表現が適切だろうか——少女。しかしすぐに振り返ると手を振りながら反論する。

「待つて待つて、ちゃんとやってるってば」

自然な発音はもちろん日本語を母国語にするそれで、顔立ちも男同様に日本人のもの。強いて言えば長くのばされた髪の明るさだけが日本人らしくないといったところだろうか？

しかしそんなことは彼女の父親たる男にとってはどうでもいい。彼は自身の腕時計に目をやると、さも楽しそうな笑みを浮かべた。

「そうかそうか、じゃあ成果を見せてもらおうか？」

予想通りに顔色を変える少女。しかしすぐに顔色を元に戻すと、いやに説教じみた調子になる。

「まあ待ちなってお父さん、世の中には機密保持規定ってものが??」

問答無用。彼は教科書を一冊引っぺがす。するとそこから顔をのぞかせる雑誌。

そもそも彼が洗濯物を干しに行った時、ちゃぶ台の上に教科書ノートは一セットしかなかったはずなのだ。それが数分の間いきなり増えているのだから、偽装工作そうじゆうこうなのは火を見るよりも明らか。

「あーあ……」

ややがっくりとした調子の少女……だが口元が緩んでいるあたり、発覚を見越した犯行らしい。

「まーた航空雑誌か」

彼は雑誌を取り上げて、その内容に少し目を通す。

「いーじゃん」

「趣味としてはな」

地方空港でのちよつとしたイベント。揉めに揉めた新型空母艦載機の採用決定がまるで最適解であるかのように書かれた記事。ある航空会社が新しく導入した機体の紹介……記事のネタはいつも尽きることがない。

「まあ別にサボってたわけじゃあないんだよ？　ちよつと分からないところがあつたから『先生』を待っていたという話であつて……」

「それを世間一般ではサボるといふんだ……で、どこが分からないんだ？」

「ああうん、（ニニニニ）」

そう言いつつ少女は僅かに右にずれ、彼はそうして出来たスペースに入り込む。ノートに書かれていた内容は数学だ。並ぶ大量の三角形。学生時代の記憶を引きずり出して解を導き出すと、教え子は気だるそうに聞いてきた。

「ねえ、（こ）こつてやつぱし丸暗記しかない？」

指差されたのは一つの公式……まあ受験として考えるなら丸暗記が妥当だろう。

「ええーそれじゃあまったく意味ないじゃん。こんなの羅列されても訳分かんないよ」

「公式なんだから当然説明は出来るが……長くなるぞ？」

「それはメンドイ」

そんな少女の調子に彼はため息。

「お前なあ、仮にも国防大目指す奴の台詞か？」

「うん、第一志望」

そんな脳天気になられても困る。もちろん時間が迫っていることは当の本人が一番よく理解しているだろうから言わないが、とりあえず何かにつけて自分に質問したがるのは勘弁して欲しいものだ。もし間違いを教えれば目も当てられないというもの……と、そこまで無言の愚痴を綴ったところで携帯端末がブルブルと震えた。素早く取

り出し一瞥した彼は、やれやれといった様子でため息をついた。

「すまん、ちよつと出てくる」

「呼び出し?」

その問いに肯定を返すと、娘の声はいかにもつまらなそうな調子に変わる。

「……今日はずっと家にいるって言ってたじゃん」

「文句は部下に言ってくれ、どうも面倒ごとを起こしたらしい」

そして彼はさっさと支度を整えてゆく。隣の部屋で愛用のジャケットをひつたくり、そこに袖を通す。鞆に読みかけの資料を放り込み、そこで帽子がないことに気付いた。居間に置きっぱなしにしていたようだ。

「なあ、帽子取ってもらえるか? 例の山高帽」

「あいー」

少女は立ち上がってぱたぱたと動く気配、大した間も置かずによくやってきた。

「はいこれ」

「ありがとう」

山高帽を被る。すると視界の中の娘は、どこか訝しげな表情をしていた。

「……なんで山高帽? というか軍服じゃないの?」

彼女の指摘はもつともだ。彼はこれでも軍人、それも現役の軍人だ。今年は変なタイミングで休暇を取らされていたのだが……そんな彼が呼び出しというのに軍服を着ないのは、いったいどういう風の吹き回しだろうか。

「相手が民間だ、軍服で行ったら高圧的にみられる……詫びに行くわけだからな」

いったいどういう風な話をつければいいのやら、山高帽を被った彼はそう肩を竦めてみせる。対する少女は小首をかしげて意味ありげに笑った。

「……ところでさ、お父さんにはもうひとり詫びを入れなきゃいけない娘がいると思うんだけど?」

「ほお、親に対して謝罪を要求するとは」

休暇といつても時期が時期だ。彼はどこかに出かけるのではなく、たまった書類をのんびりと眺めつつ娘の勉強をみるという話になっていたのである。しかし彼は先生ではないし、勉強を見るといっただくまでついでの約束だ。

「でも、約束を破ったには破ったよね？」

「はいはい……考えとくよ」

そう言いながら彼は鞆を引つ提げ、居間から出ていこうとする。

「あそうだ、そういえばさ。あいや、いまの話とは関係ないよ？ でも今度立川飛行場で——」

続く言葉は分かっている。彼は断ち切るように言い切った。

「じゃあ詫びの品は抹茶アイスでいいな？」

「バカあ！」

娘の言葉に、父は高笑いで応じる。そんな昼下がりである。

そんな昼下がりであったのだ。

父、飯田孝介いいたこうすけは自宅を出た。鍵を閉め、山高帽を深くかぶった彼の眼はもう見えない。間もなく三月を迎える東京の空は今日も透き通っており、裏路地を歩いていると塀から飛び出した梅の木が見える。そう言えばもうすぐひな祭りだったか。そんなことを流すように考える飯田。にわかには自転車のベルの音が聞こえ、彼の脇をやんややんやと騒ぎながら、学ラン姿の若者たちを乗せた数台の自転車が通り過ぎてゆく。テスト期間である娘と違い通常授業なのだろう。私学だからテストの時期がずれているのに違いなかった。

しかし、そんなことは考えていられない。すでに飯田の『仕事』は始まっているのだ。

頭の中から雑念を追い払い、鋭く歩く先を見つめる。1ブロックも歩きそこそこ大きな通りに出ると、自転車や自動車がのんびりと走る通りの中央にある路面電車の停留所に向かう。すでに電車はこちらへとやってきていた。通りを覆うかのように張り巡らされた空中線から電力をもらい、遅くもなく早くもない速度でやってくる路面電車。都民の主要な短距離交通手段であり、開業から一世紀以上が経過した今なお活躍し続けている。鉄道を名乗るには遅くて、輸送可能な積載物も限られる。それでも未だ現役の路面電車。交通機関にはそれぞれ役割がある。鉄道や地下鉄を血管とするならば、路面電車は毛細血管といえる存在というわけだ。

電車が到着。二両の短い車両から人影を二三吐き出す。飯田はそれに入れ替わるように乗り込み、交通系ICカードを読み取り機に押し付けた。

発進、大窓の向こうの景色が流れ始める。自動車を追い越しながら進んでいく車両。通勤ラッシュでもなければ車内は割合空いており、座ろうと思えば座れるような状況。車内アナウンスが次の駅を告げ、無人の停留所が運転席の窓越しに見えてくる。誰も降車ボタンを押すことなく通過。

そんな調子で次の停留所も通過するかに思われたが、そこで飯田が待ったをかけた。彼はまさにギリギリのタイミングで降車ボタンに手をかけ、電車は慌てたように——もちろん、全然慌ててなどいないのだが——停車する。そこから素早く停留所に降り立てば、丁度上手い具合に信号機が赤に。自動車の流れが止まり、飯田は車道を横切る。

そしてすぐさま、路肩でエンジンを吹かす黒塗りの乗用車へと取り付く。やや世代遅れかも知れないが、市街地の路肩に止めておくにはやや刺激が強すぎる黒。飯田は窓を叩く。電動モーターが作動し、窓がわずかに沈む。

その先にいたのは、意外なことにそれは見知った顔だった。

「ご無沙汰しております。中佐」

「小牧か……？　なんでこんなところに」

そう飯田が言うと、小牧はニコリともせず続ける。

「ひとまずお乗り下さい」

言われて飯田は後部ドアより自動車の中へ。ドアが閉まるか閉まらないかのうちに自動車は滑り出し、慣性の法則が飯田を柔らかくシートに押し付ける。

「……久しぶりだな、最近どうしていた？」

「半島です」

それ以上を言う気はないのだろう、小牧は押し黙る。彼の勤める海軍情報局のことを考えるならそれは当たり前のことであり、別に飯田としてもこれ以上問い詰める気もなかった。

そんなことよりも問題なのは、彼……即ち『海軍情報局』の人間が出てきているということだ。

海軍情報局。それは海軍省の内局の一つである。

「二度入れば二度と艦隊には戻れない」……海軍の人間でなくとも知っている言葉だ。

一九四八年に発生した日本海軍のとある巡洋艦で発生した大規模反乱は、エリート層たる海軍士官にも共産主義の浸透を許していることを知らしめる事件となった。欧州全土を席卷しつつある赤軍との戦い。それに耐えうるには、裏切り者の発生を許すわけにはいかな

い。しかし、一度海へと出れば運命共同体となる海軍において、同僚を疑うというものは何よりも罪である。それを前面に押し出して推奨することは許されなかったのだ。

それゆえに、その汚れ仕事を担うために設立されたのが海軍情報局。共産主義との戦いが一段落した今現在においても、海軍組織における防諜活動を行っている。

そんな諜報組織が飯田の前に現れる。それが持つ意味は大きい。

「大迫閣下からの伝言は？」

「特には」

ミラーに映る小牧の顔は、やはり動かない。

「そうか……何分で着く？」

「少々回り道をする予定ですので、三、四十分ほどを見積ってもらえれば」

車内は沈黙に沈む。舗装された市街道路の上を進んでいく乗用車、目指す先は——霞ヶ関の海軍省だ。

飯田孝介、彼は大日本帝国海軍の血を引く日本国自衛海軍の中佐である。30代で佐官に滑り込んだ彼は既に幕僚課程を修了。かつて軍令部と呼ばれていた海軍幕僚部に勤務している。

とはいえ所詮は中佐。彼がこのように面倒かつやけに準備のいい手段で出勤せねばならなくなったのには、当然深い訳がある。

飯田は後部座席に置かれたそれを見る。どこからどう見てもありふれた新聞紙、日付は今日のもの。問題なのは発行元だ。

「琉球か……」

置かれていたのは沖縄県の地方新聞。飯田はそれに向けて何の感情もなく呟くと、自身の携帯端末に表示されたメッセージの内容をもう一度確認する。

『十束剣ハ健常ナリ』

十束剣。日本神話に登場するスサノヲがヤマタノオロチを切り刻んだ剣のことである。しかし日本神話を見れば、十束剣は実際には欠けている。なぜ欠けたか。それはかの怪物の尾に天叢雲剣くそなきのつるぎが存在した。がゆえ。スサノヲは怪物を倒すことで天叢雲剣を手に入れるのだ。

そして、天叢雲剣。それは天皇の武力の象徴。

琉球で、とんでもないことが起こりつつある。ヤマタノオロチを倒しても、真に必要な力が手に入らなかったというのだ。それはつま

り、この国の国防を根本から揺るがしかねない事態が起きているということ——とりあえず、飯田はそう解釈した。

飯田孝介は手を組み合わせ、しばし沈黙する。

飯田孝介は、海軍幕僚長補佐官であった。

二十四時間体制を求められる組織というのは、人材を交代制で配置する。だから飯田は今日という日を休むことが出来ていた訳だが、非常事態となれば人材は多いにこしたことはない。

そのために海軍省内の奥に設置されている海軍幕僚部——一昔前は、「軍令部」と呼ばれていた部署だ——は普段以上に人でごった返していた。省に着くと同時に着替えを済まし、飯田もその人ごみに混じる。彼と同様に呼び出されてきたのだろう、何人かの佐官が慌ただしく資料を捲り、その擦れあうのが幾重にも重なったが故に聞いたこともないメロデーが生まれる。

そんな中を縫うように進み飯田はようやく、目的の人物にたどり着いた。

「遅れました」

「いや、こちらこそすまん、貴様の休暇を台無しにしてしまつて」「何をすればよろしいですか？」

何が起こっているか。などとは聞かまい。飯田はそこまで偉くないし、必要な情報があればそれは逐一説明されるだろうからだ。

「ついでにい」

飯田の上司、即ち海軍幕僚長である大迫善光^{おおさきよしみつ}。常日頃から艦橋で鍛えてきたのだと豪語する大きな肩に桜花四つを乗せた彼はただそれだけを命じると、さっさと歩き出した。

飯田は低く返事を返し、彼の後についてゆく。どうやら大迫は、飯田が出てきたばかりの駐車場へと向かっているようだ。

歩きつつ、海軍幕僚長は小さく漏らした。

「……八分前に、統合幕僚本部が幕僚会議の招集を行った。既に状況は海軍の手を離れている」

海軍の手を離れている。

それはつまり、先程までは海軍のみの管轄であったということだ。となると問題が起きたのは海軍の所属……水上艦艇や航空機ということか？

そこまで考えを回した時、飯田の頭には当然二週間ほど前の出来事が蘇ってきた。

「第二機動艦隊……」

飯田が呟くように漏らしたが、大迫は歩き続ける。無言は肯定か、はたまた聞こえていないだけなのか。道を示すように歩く大迫に追従しつつ、飯田は考えを纏める。

第二機動艦隊。

知つての通り呉を母港とする空母打撃群の名称だ。旗艦を七万t級航空母艦「日向」に据え、八隻の護衛艦により構成されている。60機程度の航空機を有し、『日本の中庭』とも言われる中部太平洋を守備範囲としている。

で、この機動艦隊なのだが、実はある特殊な任務に就いているのである。

——「日向」被撃沈？

そんな文章が頭をよぎる。疑問形になったあたり、組織人特有の身内びいきなのだが……しかし飯田はえこひいきなどではなく現実的理屈から即座にそれを打ち消した。七万の巨体を誇る日向級航空母艦がそう簡単に沈むはずはなく、そしてなにより、航空母艦の被撃沈なら別のシナリオが用意されているはずである。

……そしてなにより、あの文章だ。軍令部を出ても続く赤絨毯を視

界の端に、飯田は内心で顔をしかめた。

『十束剣ハ健常ナリ』？ 緊急の呼び出し符牒にしてはやけに難解であるし、そもそもこんな符牒は聞いていない。知らされていなければ符牒に意味はないはずなのだ。

だが、不思議なことに飯田にはその意味が分かった。理由は飯田が古典に精通していたからではない。つい最近、この話を聞いたのである。

——それも、他にもない大迫善光その人から。

事が起こるのが分かっていたということか？ それにしたって回りくどいやり方である。海軍幕僚長の職にある彼は多くの海軍軍人と同様、整合性を第一とする人間であるはずだ。少なくとも職務においてはそれを貫くはずなのだ。目の前を歩く上司に対して浮かび上がる小さな疑念。当然気にしていられないので、頭の片隅に留めつつも……今は考えないことにする。

更新が遅れ気味な昇降機で駐車場へ……いや、駐車場の階では止まらない。階を示すランプが消え、昇降機はそのまま地下へと降りていく。海軍省の地下には地下鉄有楽町線への引き込み線が存在する。これで要人や機密書類の輸送を容易にしているのである。

「五分後に入間への臨電が出る。まるで貴様を待っていたかのようなダイヤだな」

私は四十分も待たされたんだぞ？ 背中であらう大迫。念のため言っておくと要請から四十分で臨時ダイヤが組め、そして列車を手配できるのは官民双方の努力の賜物なのだが……しかし飯田は小さな疑問符を浮かべる。

「入間ですか……？」

統合幕僚本部——統合幕僚長より統幕会議の招集がかかった際の集合場所——が設置されているのは府中だ。入間ではない。

入間と言えば航空総軍の司令部、そして……

「……一防」

まるで不可侵タフに触れるかのように、飯田は口の中で呟いた。

一防。第一防空指揮所とは————全面核戦争を想定した施設であつた。

——西暦2022年2月28日。東京——

海軍省の地下。地下鉄へと向かうための連絡線を引き込む形で設けられた特設のプラットホーム。飯田の前を歩く大迫の姿を認めた者たちが次々と教科書通りの敬礼で海軍幕僚長を迎えた。大迫は答礼しつつ、近くの軍人——階級章は大尉を示している——に声をかける。

「ご苦労、いつ出せるんだ？」

「後七分ほどだそうです、なんでも遅れているそうです」

適度に照明が抑えられたこの空間には、二両編成の短い車両が待機している。見た目は通勤形車両の二階建て車両と同じだが、要人輸送かつ有事の際の指揮所にもなりうるこの車両にはいくつかの改良が施されている、らしい。らしいというのは、そもそもこういった車両を使うことはないからだ。

ともかく、十人ほどの軍人が段ボールを列車へと積み込んでいく。機密資料というよりは直近で最低限必要と考えられる資料だろう。統合幕僚会議が統合幕僚本部のある府中でなく入間で行われるとなれば、追加で持参しなければならぬ資料が増えるのは当然だ。飯田は念のため資料の入った鞆を再確認する。地上勤務のほうが断然多い飯田にとって、弾丸というのはこの弾薬庫カバンに詰められた書類のことだ。

そして大迫海軍幕僚長はその車両の中へと。飯田もそれに続く。ゆったりとスペースの取られた車内はやはりグリーン車の流用らしく、穏やかな色合いの灯で落ち着いた雰囲気が出されていた。

まるで旅行にでも行くかのようにだ……そんな考えが脳裏をよぎり、それにしてもあまりに物々しい旅行だと考えを打ち消す。

「飯田は、これに乗るのは初めてだったな」

「はっ」

存在は知っていたが、実際に利用することになるなど思ってもみなかったことだ。

「引き込み線の歴史は案外に新しくてな、東京に人口が流入した関係で在来線が飽和し、さらに在来線では手の届かない範囲を繋ぐために発展した地下鉄網……地下鉄で核が防げるかはともかく、地下のほうが断然に安全であるのは間違いない。軍用路線が引かれるのは必至だったわけだ」

大迫の話を聞きながら、飯田は徐々に身構え始めていた。さして重要でない話をやけに長い枕とするのは彼の癖だ。

「……閣下も、ここを使われるのは初めてなのですか？」

それも、重大な話をするときに限つての癖だ。海軍幕僚長は身一つ動かさず次の言葉を放つ。

「ああそうだ。二機艦所属の「雷」が——イチゴーマルナナ一五〇七に沈没したからな」

「……！」

その言葉は、いやに自然に、また異様な静けさをもって大迫海軍幕僚長たる大将の口から放たれた。飯田への招集はその直後。つまりそういうことだったのだ。

何も返しまい。何も返せまい。飯田はその言葉をそのまま受け止める。駆逐艦「雷」。村雨型七番艦。今はただ、それ以上でもそれ以下でもない記号。

飯田が言葉を返すことを想定していないであろう大迫は、そのまま淡々と飯田に情報を伝える。

「現在、この事実を把握しているのは二機艦と連合艦隊^G、あと海幕^{ウチ}に統幕本部。他国にはまだ感づかれていない……二機艦に衛星データリンクを切らせておいたのが功を奏したと言えるな」

データリンクを切らせていたのか。飯田は驚きの目線で上司の横顔を見る。

号令と同時に一気呵成に敵防空網を打ち破る空母機動艦隊。防衛部隊ではなく攻勢部隊という位置づけにあるこの艦隊を日本は見せ

ないことにこそ価値があると考えている。しかしこの時代において姿を見せずに大艦隊が移動するなど不可能なわけで、データリンクを切るリスクはデータリンクを用いるメリットとは比べようもない。それは自らを暗闇に投じるということで、まったくもって悪手なのであるはずなのだ。

だが、それを目の前の海軍幕僚長はわざわざ二機艦に指示していたのだというのだ。いくら派遣先が沖繩沖とはいえ、派遣名目はSEA TO 諸国の関心ごとである昨今の貨客船破壊を防ぐため……データリンクを行わないことで痛くない腹を探られることになるのは明白だろうに。

「大迫閣下。それで、国内の情報共有の方は……」

「安心しろ、すでに藤巻統幕長がやっていてくれている。統幕本部に管轄が移った時点で首相に指示を仰いで、外務省を通じて同盟諸国に伝達される手筈になっている」

つまり、今頃は総理の耳にも伝えられているということ。それを聞いた飯田は安心した。大迫大將は必要と判断すれば割と無理のある進め方をすることがある男だが、流石に国内にまでリンクを切っているということはなかったようだ。

「失礼しました」

その言葉を待っていたかのようにブレーキの解除音が聞こえ、列車はアナウンスもなく走り出した。

——西暦2022年2月28日。埼玉——

軽武装とはいえ屈強な兵士。彼らが退くことで重厚な扉——当然、核爆発の直撃を想定したものだ——への道が開かれる。普段なら閉まっている扉であっても、これだけ多くの人員が出入りするとなれば

一々開け閉めするわけにはいかない訳で、観音開きの扉は右側だけが開け放たれていた。

「海軍幕僚長、入られます」

その言葉で道が開ける。複数の影が敬礼し、それに返す大迫。飯田は続くようにして並走してきた尉官へと声をかける。

「どこだ？」

「現時点では何とも。少なくとも同盟諸国ではなさそうです」

「そうか、捕捉はしてるんだな？」

「はい」

「よし、そのデータ回せ。閣下」

飯田の言葉に、大迫は領かずに答える。

「聞いていた。統幕長はもう来ているのか？」

「第三会議室です」

追加された問いに答えたのは別の人間だ。大迫が歩いた道筋に、海軍幕僚長という役職を支えるべく飯田を始めとする何名もの将校が付き従ってくる。本来集まるべき情報が——これまで見られなかった分余計に——集約され、あるべき一点へと集中していく。

「第一統合防空指揮所^防であれどこであれ、移動すればその間我々は情報に触れられなくなる。昔はこの程度の時間的空白は問題なかったのだろうが……やはり、指揮所を分散するというのは冷戦時代の発想だな」

歩きながら言葉を紡ぐ大迫。続く形となる飯田の頭上^上が急に開けた。そこは二階分ほどありそうな高い天井の広々とした空間——
—第一統合防空指揮所、『一防』の中枢へと入ったのだ。

あちらこちらにモニターやコンソールが設置され、各要員がそれに張り付いているこの施設は、重厚な扉や彼らの会話からも分かる通り核戦争を想定して作られたもの。仮に帝都東京が核の雨に晒されよう……各地に展開する軍に反撃命令を、そしてその後も軍を、政府を維持できるようにするための施設。もはや東西の宥和が叶ったた

めにその本領を發揮する瞬間は来ないだろう——というか、来たら困る——が、今日もこの国の安全保障を支える情報集約施設の一つとして機能し続けている。やけに首都から離れているのが玉に瑕ではあるが……。

「それにしても閣下、この様子ですと」

しかし飯田の視界に入ってくるのは平時の指揮所としての風景ではない。段ボール箱が台車により搬入され、明らかにこの場所に慣れていないであろう将校たちがあわただしく歩いていく。海軍省とは異なる空気であった。

「ああそうだ。すでに統幕長は防空警戒態勢を空軍向けに発令している」

「もう3ですか……」

防空警戒態勢。それは統合幕僚本部が設ける核戦争への、^{ぜんめんせんそう}核戦争への準備段階の指標であり、米国におけるDEFCON—3に相当すると考えればいいだろう。この僅かな時間に二段階も格上げされているなんて、20世紀にもなかつた反応の速さである。

だが、大迫は表情も動かさず言った。

「沖縄だからな、まあそれが当然の反応だろう。藤巻統幕長の判断に疑問はない」

沖縄と言えば自衛空軍の設立理由でもある大陸間弾道ミサイルの^I一大発射基地が存在する場所だ。その近辺で駆逐艦を撃沈するならば、敵が核戦力の無力化を狙ってきてもおかしくはない……というか、それがセオリーというものだろう。核の大規模投下後の戦車軍団による侵攻計画が存在するならば、核戦争が始まる前に核戦力を無力化するのも立派な戦術である。

しかし、なぜ沖縄が……危うくそう言いかけて飲み込む飯田。そう、その戦術には現実味が皆無、というか戦略性が皆無なのだ。なるほど沖縄は大陸間弾道ミサイルの^I一大発射基地だろう。だがそれをわざわざ潰しに来る理由は？ これまでの瀬戸際外交は別に戦端を開くことを目的としたものではない。東西宥和が証明する通り、人類は話し合える種族だ。そして戦争はその話し合いの一環だ。要求も

交渉もないというのに、沖縄を、西側を襲う意味などないはずなのである。

何が目的だ？

そしてその問いに答える者はいない。飯田は自らの上司の前に出ると、第三会議室の扉を開けた。大迫がそこに入るのを見届けてから飯田も中へと入る。

第三会議室は会議中というより物事を整理している段階に見えた。薄暗いテーブルにいくつもの資料を広げ、座ることなく議論を交わす幕僚たち。その中で唯一座る男。

その男に対して、大迫が直立をとった。

海軍大将、いや海軍幕僚長たる海軍大将である彼の上位はなかなかいない……特にこの場においては統合幕僚長たる陸軍大将、藤巻統合幕僚長ただ一人である。全自衛軍をその指揮下に収めることもできる男は、陸海空から均等に選ばれた幕僚たちの議論にじつと耳を傾けていたが、大迫に気づくや否やそちらにじつと目を向けた。

「海軍幕僚長ただいま参りました。遅参の旨、お許しください」

大迫の敬礼に、ゆるりと答礼する藤巻統合幕僚長たる陸軍大将。表情筋をわずかに動かしながら大迫に言葉を返す。

「いやなに、私も今しがた到着したところだ……現場への指示はどうなっている？」

「すでに第二機動艦隊には戦闘配置が発令されています。また即応性が求められることから、連合艦隊は現在第四番作戦に基づいて作戦行動を開始しています」

そう大迫が言うと、やや顔をしかめる統幕長。

「それはつまり、海軍としては交戦状態に突入したという意味か？」

大迫は飯田に目配せ。どうやらそういう意味ではないと説明しろとの命令らしい。飯田は一步前になると、それから口を開いた。

「いえ違います。第四番作戦は東シナ海にて開戦のリスクが非常に高まった際の事前行動であり、目的は戦力の集結です」

とはいうが、この作戦を発動すること自体が海軍に交戦状態に突入したも同然の緊張を走らせることになる。統幕長の言い方はあながち間違っていないかった。

「補佐官、こちらが資料になります」

尉官が運んできた紙媒体はまだ僅かに熱を帯びており、印刷されたばかりであることが伺える。内容は第二機動艦隊の哨戒機による観測、その詳細だ。「雷」を沈めた戦力は現在、沖縄沖に潜伏中。地底の振動と思しき音は確認されるがスクリュー特有の音紋を確認することはできずとある。スクリューを使わないならば……ウォータージェットか何かだろうか？ いや地底の振動と併せて考えると水圧に耐えられる戦車のようなものを想定するといいかもしれない。ソビエトの戦車は単独での渡河能力を持つのだ。

「ありがとう、あと二機艦の艦載機状況を」

「はっ」

敬礼を返して薄闇へと消えていく尉官。

こういった場所では将官である大迫に定位置などは存在せず、それは彼を補佐する飯田も同様だ。彼らは人の行き交う指揮所の適当な位置に陣取り情報収集の体制を整えていた。現代戦においての情報かすみがせきは水よりも流動性が高い。おかしな例えかも知れないが、海軍省からここまで移動する間に……アメリカや満州が壊滅していてもおかしくはなかったのだ。感覚的に説明するならそうなる。

余裕を見せるように佇む大迫の横で飯田はもたらされた資料を読む。それは今回の件に関する事象が時系列順に纏められたもの。その資料によれば、ことはいきなり「雷」から始まったのではなく……第二機動艦隊の哨戒機が「砲撃を受けた」ところから始まっているらしい。

砲撃？ 砲撃だと？ つまり我が軍の哨戒機は砲撃を受けるような位置まで近づいたというのか？ しかし哨戒機を砲撃する意味など果たして意味があるものだろうか。そして哨戒機が撃墜されてい

ないのもまた、驚きである。砲撃を受けるということは恐らく待ち伏せを受けたのだろうし……。

だが、それでは話が合わないのである。砲撃を行うということから相手は水上艦、しかも待ち伏せできるような仮装巡洋艦——卑怯な戦術だが、ソビエト・ロシアでなく人民共和国ならやりかねない——に違いない。しかしその通報を受けて向かったのなら、なぜ「雷」は沈没せねばならなかったというのだ。しかもこの書類には、僚艦と二隻で向かったとある。もう一隻はどうなったというのだ。反撃は？

——だが、それよりも大きな問題がそこにはある。

「……大迫閣下」

「なんだ」

飯田の言葉に大迫は顔も向けずに応じる。指揮所の照明は控えめで、動きもしない彼の姿は周りから見れば普段通り頼もしく、彼をよく知る飯田にしてみればその微動だにしない様子は不気味でもあった。

「今回の件は、今現在も断続的に発生している貨客船への破壊行為の延長線上の事態……という解釈でよろしいのでしょうか？」

恐らくは、それはこの場に居合わせる人間全員の疑問であろう。南シナ海で多発している貨客船の遭難、それも事故調査委員会が「攻撃」と断定するほどの爪痕をはっきり残してのだが生存者は残さない容赦ない破壊活動。最近は被害が東シナ海の方へと徐々にだが動き始め、第二機動艦隊の派遣もそれが理由の一つとされているのだ。

「数週間前より潜水艦司令部よりいくつかの不確定な情報が上がっていた。その状況でこの事態だ。なんらかの目的があつての行動だろう……海軍幕僚部としては、これがいかなる勢力により引き起こされたとしても断固として対処する。それだけだ」

しかし大迫海幕長の返した答えは、露骨なまでに公式発表だった。

「……分かりました」

やはりなにか自身に回ってきていない情報があるのだろう。そう確信するには十分すぎる返答。逆に言えば現時点で与えられた情報

で必要分は満たしていると他ならぬ自身の上司が判断したということ。

それを受けた海幕長補佐官は再び情報に目を通し始める。頭の中に描かれるのは日本近海。沖縄方面に展開している海軍戦力は第二機動艦隊のみ、いくら四番作戦が発動済みとはいえ物理的な距離は克服のしようがなく、横須賀の一機艦やトラックの四機艦を呼ぶ暇はない。展開できたとしても、佐世保の第四戦隊が限界だろう。

だが今は「日向」艦載機とその護衛艦、これが海軍の事件で土俵に挙げられる戦力の全て……初動が肝心だ。飯田の思考回路は、軍人としてのそれだった。

『ええー、帰ってこないのぉー?』

夕方。関東平野を見下ろす山々の向こうに夕日が沈んでいく。東京中心部から適度に離れた人間には未だにヘリの離発着がせわしなく続けられており……携帯を持つ飯田の耳にも、携帯の相手にもその音が届いていることだろう。

「すまない」

しかし謝ったところで、まあ相手方が追撃の手を緩めることはないわけで。

『じゃあ晩御飯どうすんのさあ、母さん今日帰らないんだよ?』

「ああ、それに関してはもともと店屋物頼むつもりだったから。一人で頼んでくれ」

『そーいう問題じゃないでしょー!』

電話の向こうにいる娘の不満げな顔がありありと浮かぶが、とはいえ仕事は仕事だ。飯田は宥めるように言う。

「勘弁してくれ、思ったより大事になりそうなんだ。明日帰れるかも分からん」

『ふーん……民間さん相手じゃなかったのお?』

「……」

ちよいと小バカにしてくるような娘の声。察しているのか、それともドラマみたいだと勝手に興奮しているだけなのか。

『まあいいけどさ別に。じゃピザ注文させてもらうんで、よろしくね』それから二三言交わして通話は切れる。自宅と書かれた携帯の表示を消すと、現れるデフォルトから変えていない待ち受け画面。時間はもう間もなく午後五時半を回ろうとしていた。

飯田は小さくため息をつく。そもそも一防が入間という位置に存在するのは東京中心部から適度に離れているからである。核戦争が近いかもしれない——少なくとも軍としてはそれを想定している——この状況。それはつまり、彼の家族もまた危機に晒されているということであつた。

しかしその手の対策を怠つたためしはない。彼の家には英国印度の上流階級御用達の別荘のごとく簡易な防空壕シェルターを準備していたし、娘も国防大を目指すくらいにはしっかり育てた自信がある。これで察してくれなければそれまでというものだ。

それから彼は電話帳を開き、もう一人の家族の番号を見る。親戚たちの間に紛れ込んで消えてしまいそうなフルネームで書かれた名前だが、まさか彼がその名を忘れることはないだろう。明日までは親戚一同と逗子にいますで、最悪が起る可能性は極端に低いはずだつた。

「……」

飯田はその画面を消す。そして携帯を仕舞つた。政府の要職にあるということとは、それだけ政府は保護してくれるということだ。はつきりとは言わずとも家族に仄めかすことは誰も文句を言えまい……とは友人の論。だが飯田は、結局娘に夕食の指示を出すだけに留めたのだった。

「飯田中佐」

と、彼の名を呼ぶ声が。一防の出入り口へと繋がる庁舎から出てき

た海軍尉官の服装からだ。

「木更津か、今から戻るところだ」

尉官服の名は木更津。階級は海軍中尉で、飯田とともに海軍幕僚部に勤めている。

「お急ぎください、大迫閣下がお待ちです」

その言葉に飯田は木更津を見る。外の空気でも吸って来いと飯田を追い出したのは大迫だ。

「……どうしたんだ？」

「なんでも官邸は、この件の発表を見送るらしいです」

「なんだと、それは本当か」

無言で頷く木更津。飯田は軍帽を直すようにして頭を押さえた。発表を控えるということは、それだけ部隊を動かさずらくなるということだ。従つてもともと出港予定にない佐世保の四戦は動かせない。実質的に二機艦——空母1巡洋艦2駆逐艦5の戦力で対処せよということだ。

しかもそれだけではない。もし本当にこの件が貨客船への破壊行為と密接に繋がっているのならば、日本が国際協調を求められる場面において独断専行を行ったと後々非難を浴びるというリスクもこの判断ははらんでいる。

……つまり、軍部には他国の介入を招かず、そして民間に情報が漏れて大事となる前に対処を終わらせることが求められるわけだ。他国に介入されると困る理由が分からなかったが、命令とあればそれまでだ。

沖繩の件は現在展開している戦力のみで十分。総理と海軍大臣の間でどんな会話が交わされたかは知らないが、ともかく「対処しきれぬ」という判断はもう下されたのである。

「永田町も無茶を言う……」

そんなことを聞かれぬようぼやきつつ、海軍幕僚長補佐官は一防へと消えていく。

状況が一変するのは、その僅か一時間後。
「雷」を沈めた謎の勢力が——沖繩本島へと進路を変えたので
ある。

——西暦2022年2月28日。埼玉——

「進路を変えたか」

報告を受けた大迫^{おおむし}海軍幕僚長は、もちろん顔色を変えることはなかった。彼の変化を強いてあげるなら、先ほどまで手に持っていたサンドウィッチを皿に戻したぐらいである。

それからこう言った。もちろん、顔色一つ変えずにである。

「で……沖縄に直接向かってきている、そうだな？」

入間空軍基地に存在する第一防空指揮所こと『一防』。分厚い盛り土とコンクリート、そして放射線を防ぐための各種金属板。そういったものに保護された二階ほどはあるだろうこの空間にいる彼。海軍幕僚長にふさわしい数の略綬が並び、肩の四つ桜がどちらかといえば薄暗い一防の照明に照らされて鈍く光っている。

「まだ恐らくは、という段階です。具体的な情報はまだ何も」

飯田はそう否定した。まだ連合艦隊^よ司令部^すからの報告は進路を変えたというだけの曖昧な報告に過ぎず、断定することなど出来るはずもなかった。

だが、やはりというべきか真っ先に思いつく可能性は同じらしい。

「統幕長のところへ移動する。むこうに報告は」

「まだ行っていないものと思われませう」

「よし」

そうして大迫は立ち上がる。飯田も素早く鞆を持ち、歩き出した。飯田の他にも書類を整理しつつ待機していた数名の将校服が続く。

「第四番作戦を再開できる可能性は？」

第四番作戦。それは海軍が定めている東シナ海にて開戦のリスクが非常に高まった際の事前行動だ。「雷」の被撃沈を受けて既に発動された作戦だが、勘づかれるのを嫌った官邸の命により中止されている。

「沖縄本島に向かっているのが確実だという情報が上がれば」

大迫が引き連れる幕僚部員たちの誰かが答え、それに対する反論は上がらない。大迫はそのまま歩きつつ口を動かす。

「よし、佐世保の第四戦隊^四だけはいつでも動かせるようにしておけ。それと佐世保に九州方面の航空基地を準備させる、GFにこの旨を伝えろ」

「はっ」

そして誰かが離脱。暗がりの中を歩いていく将校たちの勢いは止まらない。

航空基地を準備させるというのは、もちろん空母艦載機が前進展開するための措置である。現在日本近海には呉を母港にする第二航空戦隊と横須賀を母港にする第一航空戦隊、そして搭載機数が劣るものの呉の第五航空戦隊と三個空母打撃群が待機している。全艦載機を集中運用できれば戦力は100機を優に超え、十分すぎる航空戦力の展開が可能であった。

GF、連合艦隊に佐世保に補給用の滑走路を用意したことが伝われば、それを前提として沖縄方面への戦力抽出の準備がなされるはずだ。

「統合幕僚長」

大迫が口を開き、周りに通るようにハリのある声を放った。それに反応したのは大迫と同じく四つの桜を身に着けた男——ふじまき藤巻統合幕僚長。

「何があった」

「『魚群』が進路を変えました」
「ほう」

藤巻は大迫たちを真正面から見据える。『魚群』は「雷」を屠ったのち、愚直に北東へとぼく進していた。進路を変えるところの重大性は、彼もすぐに理解した様だ。

「で、どっちに進路を変えたんだ」

その言葉に応ずるように、統幕長の前に差し出される紙媒体。

「東に進路を取っているのは間違いありません」

「……先に沖縄があるな、それで？」

紙媒体を手に唸る藤巻。大迫は迷わず続けた。

「まだ北東に進むのを止めたという段階です。後続の移動速度が変化していないと思われるので、東方向に進路を変えたと判断しました」

「それだけか」

「現段階では、これ以上のことは」

もちろん『魚群』の目的地が分かっているわけがないので答えにはなっていない。先ほどの「沖縄に向かってきている」と言った大迫の言葉にはこんな曖昧ではなくもつと確信めいたニュアンスが含まれていたはずだったが……相手が統幕長ともなれば下手な発言に気を付けるのは普通の対応と言えるだろう。

とはいえもちろん、統幕長という立場としても沖縄のことは気になるわけで。

「ふむ……沖縄の守備状況はどうなっている？」

藤巻はゆっくり振り返ると確認するように後ろの幕僚へと問う。専門家集団だけあって返答は早く、一人がタブレットをひっくり返しながら言った。

「五日前より嘉手納周辺で日満合同の上陸作戦演習を行っています。その他は通常配置です」

「演習は中止だ、満州軍を引き上げさせろ。それと西南^{くまもと}方面軍に沖縄県知事とのホットラインを確保しておくように」

「満州軍を引き上げるのですか？」

幕僚の一人がそう返す。当たり前前だ、満州国は日本にとって最大のパートナー。むしろ日本の危機となれば沖縄防衛を手伝ってもらおうのが筋というもの。

それを聞いた藤巻は、そんなことは百も承知だと言わんばかりのうんざりとした表情で言った。

「そうだ、総理から直々のお達しでな。今回の件で同盟国軍にリスクがあると判断された場合、速やかにそれを後方に下げるとのことだ」

その言葉にその場に居合わせた大半の人間が似た表情をする。

海軍が基本とする戦力集中型の運用計画である第四番作戦を中止させたり、同盟国軍をわざわざ帰らせたり、今日の政府はやけに歪な対応が目立っていた。まあ、今政権になって初めての核戦争の危機——誤解を招かないように言っておくが、核戦争の危機は十数年ぶりだ——であるから、対応が錯綜している可能性もあり得るのだが……それにしては情報封鎖の方針がしつかりと定まっており、飯田たち幕僚部が違和感を抱くのも仕方がないというもの。

第四番作戦の中止はまだ分かる。予定されていない動きを各地の艦隊にさせるのだ。どう慎重にことをやっても嗅ぎつかれるに違いないし、間に合わないなら無暗に動かす意味もない。

だが満州軍を帰らせるのはどうだろうか？ 演習だけ中止し、沖縄で待機させればいいものではないだろうか？ 帰らせればそれだけで詮索を受ける。確かにことが起きてから撤収していたのでは間に合わないのだが……時期尚早ではないだろうか？

同じことを思う人間はやはり多いらしい、代表するように陸軍の佐官が前に踏み出た。

「しかし統幕長。後方でしたら、ひとまず宜野湾から宜野座へ移すだけでもいいのではないでしょうか？ それでしたら、単に演習場を変えただけとすることができます」

もともと、どこを「後方」とするかは難しい。『魚群』が東シナ海側にいけば後方は太平洋ということになるが、逆なら後方は東シナ海側だ。

「指示は「県外」だ。満州軍には撤収作業に入ってもらい、南西方面軍管区で適当な移動先を選定しろ」

「承知しました」

その時、飯田の後ろより誰かが駆け寄ってきた。
「補佐官」

受け取った紙媒体の内容を確認する。その媒体に刻まれた情報はいくつものデータとそれを解説する図表であったが、飯田にとってはそれらを解析することで生み出された情報が重要だった。

目を通して、それから息をつく間もなく一歩踏み出した。

「閣下」

こちらをチラリと見るだけで先を促す大迫。飯田はその資料を迷うことなく渡した。

「……進路は東南東。沖縄です」

「統幕長」

「聞いた、間違いないんだな？」

「進路上には沖縄があるのは間違いありません」

それだけだとしても、軍組織が動くには十分だった。

その僅か数十分後。『一防』の第三会議室には統合幕僚本部を構成する主要幹部たちが集まっていた。陸海空幕僚部の長にその部下たち。将官、佐官クラスにしか使われない会議室としては手狭で数の多いはずの椅子も既に空席は残っていない。

「防衛計画部としては……今回の事態は南西諸島における作戦行動要領に則り、三軍統合運用にて対処すべき事態と判断します」

会議の始まりが宣言されるのと同時に戦端を開いたのは防衛計画部、つまり統幕本部だった。深緑の軍服に大きな星が一つ光る陸軍少将は、しかしそれだけ言うとすぐに口を閉ざした。まあ統合運用と小難しくいってみても、要は一つの指揮官の下に各部隊を編入することで各軍の足並みをそろえようという話だ。

「陸軍幕僚部としてはその意見に賛成ですな」

その言葉に満足げに頷くのは陸軍幕僚長。やや遅れて空軍幕僚長も賛同の意を示す。

「とは言いますが……現状、海中の勢力に対して攻撃が可能なのは沖縄沖に展開済みの第二機動艦隊のみです。指揮の混乱を避けるためにも、ここは連合艦隊への助言という形をとるべきではないでしょうか？」

そう発言したのは海軍幕僚部運用副部長だ。統合運用部隊を設け

ることはそれ専用の司令部を編成するため、少なからずのタイムラグが発生しかねない。それを嫌ったのだ。

「……ふむ、海幕長」

「はっ」

大迫が応じる。

「連合艦隊はどうなっている？」

「第四番作戦は統幕長により差し止められたままですが、いつでも再開できます」

「今再開して、何時間で集結できる？」

「佐世保の四戦が十二時間、チエークの四航戦が二十三時間、呉の五航戦が四十四時間です」

「一部しか間に合わないじゃないか」

苛立つように口を開くのは峰村航空幕僚長。確かに進路を変更した『魚群』が沖繩付近に到達するまでに残された時間は十八時間ほど、佐世保に待機している第四戦隊だって間に合うかは微妙なところである。四番作戦が事前準備としての作戦であることを考えればこれでも早い方なのだが……ことが起きた以上はそんなことも言っていない。

「とにかく、現状対処可能なのは第二機動艦隊だけということですよ。統幕本部として無暗に動くよりかは、普段通りの助言にとどめ運用は現地司令官に任せるべきかと」

それを聞いた空軍の幕僚が手を小さく挙げる。発言許可を求めるポーズだ。

「何かね」

統幕長が発言を促すと、空軍軍人はおもむろに口を開く。

「でしたら、第二機動艦隊の司令部が置かれている呉に統合運用司令部を設置するのは如何でしょうか？ 沖繩防衛となれば我が空軍の部隊も役に立つでしょうし、やはり統合運用が適切かと」

空軍としてはどうしても統合運用に持っていきたいらしい。陸軍もそうなのかもしれないが……海の、それも海中を進んでくる『魚群』に有効打を持たない陸軍は自動的に議論から外れてしまっていた。

と、海軍側のひとりが控えめに言った。

「……それは難しいかと」

「なぜですか？」

意味不明な横槍に空軍が顔をしかめる。

「実はですね、今月中旬に機動艦隊司令が病気療養のため急遽艦隊司令の任を降りまして……現状、第二航空戦隊の戦隊司令が艦隊司令を兼任する形で水上指揮を執っているのです」

「はあ?! ……いや、失礼」

素つ頓狂な声を出しかけ——出したのはもちろん空軍だ。艦隊司令部は地上から支持を出す。これは基本中の基本だというのに。「ですので第二機動艦隊の司令部は沖縄沖に展開中の「日向」にあり、統合運用司令部を設けることは現場の効率的な部隊運用に支障をきたす恐れがあります」

沈黙。それを認めた藤巻統合幕僚長は表情を変えずに言った。

「よろしい、ではこの件は第二機動艦隊に任せることにしよう」

「対潜ミサイルの射程はおおよそ11km、下手をすれば「雷」と同様に海の藻屑です。加えて、第二機動艦隊では艦艇の数が足りません。艦隊を前進させるのは悪手でしょう」

とは言ったものの、海軍とて対処能力が十分なわけではなかった。そもそも第二機動艦隊の運用は航空部隊であって、対潜水艦戦に関してはかなり軽視されている傾向すらあるのだ。そんな艦隊に海面の色が変わるほどの数で押し寄せてくる『魚群』を攻撃せよといったところで、そう簡単に有効打が与えられるはずもない。「雷」が被撃沈された際にとっさに行われたという「雷」艦載機の報復攻撃の成果より、どの程度の効果があるかは既に判明しているからだ。

会議室から戻って海軍幕僚部が陣取るスペースに戻ってきた大迫は、腕組をしながらそういつた希望の少ない会話に耳を傾けていた。飯田も資料を読みながら、聞きに徹している。

「閣下、ここはやはり、対潜核弾頭ス号弾を用いるしかないのではないのでしょうか？」

対潜核爆弾。無誘導にて調定深度で爆発するそれは、『特別な安全保障事項』である核兵器運用に関する基本指針が変更されて以来巡洋艦クラス以上にのみ配備されている。もちろん射程が非常に短い対潜ミサイルにしか装填できないよう細工が施されているので、勅命なしに核弾頭の戦略的運用をすることは出来ないとする政府の基本指針からは逸脱していない。

そして戦術核といえど10Ktの出力をもつそれ。おそらく『魚群』の大半をなぎ倒すことが可能であろう。

「飯田、どう思う？」

大迫は飯田へと話を振った。間をあげずに飯田は答える。

「核戦争が差し迫ったこの状況での運用は控えた方がよろしいかと」

「だろうな、官邸もいい顔をしないに違いない」

大迫はどこか諦め顔で言うが、忘れずに「海軍大臣に確認だけ取っておけ」と指示を飛ばした。

「結局、対潜哨戒機と艦載機による爆撃で攻撃するほかはないな」

「ですがそうなりますと……」

言葉を濁す幕僚。当然だ、先ほどの会議で対処できるのが海軍しかないと言ってしまった手前、これでやすやすと突破されるようではメンツが立たない。

だが大迫は、調子を変えずに言った。

「どのみち空軍を投入しても海上で止めることは不可能だ。そもそも対潜攻撃は効率が悪い……限りある弾薬は、その性能が最大限に発揮される場所で運用されねばならない」

違うか？ 大迫はそう言い切った。

夜食は決して身体にいいものではない。そもそも胃腸が機械ではなく生きている体組織であることを考えるなら、どう考えても休息が必要なはずなのである。

にも拘わらず飯田に茶漬けを運ばせた大迫は、それに塩を振りかけながら箸を動かしていた。

「よろしかったのですか、あんなことを言ってしまった」

「……茶漬けのことか？ 夕食が『魚群』のせいで中断したからな。それだけのこと……海軍幕僚長を動かすのには栄養が必要だ」

周りに誰もいないからだろうか。冗談めかして言ってみせた大迫も、流石に完全なコンディションとは言えないようだ。飯田が押し黙るのを見て、箸をしばし止める。

「私はあくまで可能性のひとつとして言ってみただけに過ぎない。事実として空軍は対潜爆弾を所持していないのだから、間違っていないだろう」

「……」

先ほど彼が幕僚たちに言った言葉——限りある弾薬は、その性能が最大限に発揮される場所で運用されねばならない——。それは確かに常識的な言葉でしかない。だがそれが沖繩での陸上戦を示唆するものであるのは誰でも容易に想像がついた。

それを、海軍を率いていく立場にある海軍幕僚長が口にする。それが問題なのである。

『魚群』を沖繩沖で防げない可能性が高い。沖繩沿岸部において陸軍が活動せざるを得ない状況に陥る公算大」

大迫はゆっくりとそう言ってみせる。それから、続けて言う。

「……あの統幕長なら、そのくらいは既に総理に報告しているだろう」

あの人は海軍のこういつた事態に対する能力に懐疑的だからな。そういつた大迫の恨み言が隠れ見え、飯田は無言にて肯定とした。

「では、統幕長は」

「ああ、どうせもう南西方面軍や沖繩の53軍に作戦立案を命じているだろう。故に海幕部としても、海軍大臣から対潜核弾頭の使用が許可されないとは回答があり次第正式に統合運用司令部の設置を要請する」

政治的理由により対処が不可能、よって統合運用司令部を設置する。なるほど確かに、海に関する指揮権を端より取り上げられるより

かは海軍の面子が立つに違いなかった。

——西暦2022年2月28日。 沖繩——

時計の短針による半日おきの登山も間もなく佳境に入りそうな午後八時、那覇に存在する陸軍第53軍司令部ではこんな夜遅くにも関わらず喧騒に包まれていた。普段は使わない故に更新の進んでいない地下壕のような司令部施設に各種資料と司令部要員が運び込まれ、彼らが動けば掃除もままならない狭い空間に埃が舞う。

「……間違いないですね？」

そう重々し気に確認をとるのは先日来たるべき息子の卒業式に備えてクリーニングしたばかりの将官服——最も、いくら正装とはいえ将官服で来られた日には息子もたまったものではないだろうが——を着込んだ男。カーキ色の開襟、その肩に小さくしかししっかりと輝く星二つ……陸軍中將であることを示す階級章だ。

彼は目の前に鎮座する液晶モニターに映された方面軍司令官の顔を真正面から見据えた。

『そうだ、海軍が阻止攻撃を行うそうだが……上陸を許す公算は大とされている』

それを聞いた中将——陸軍第53軍の軍司令は、小さく長く息を吐いた。

長大な日本列島、その一角である南西諸島は決して平和な土地ではない。しかし53軍の編成は島嶼防衛が目的であり、担当領域の人口故に軍の中では最も規模が小さい。

沖縄本島にこそ海外派兵を目的とする南西特別混成団が編成されているが、これは南西方面軍直轄の部隊。彼が指揮下に収める部隊は僅かに一個旅団。砲兵大隊付きで旅団と呼ぶには豪華な編成であるが、離島警備に割かれる戦力を考えれば弱小軍と言わざるを得ない。

しかし53軍とはそういう部隊なのである。海に囲まれている沖縄は日本にとつて爆撃機基地にも兵站基地にもなりえる安全な立地をしており、指令が飛べば颯爽と大陸へ殴り込む兵たちつわものを支援するのが彼らなのだ。

それゆえ軍司令も、昨日までは離島警備など傘下の連隊に任せて、大陸展開時の空軍との折衝の仕方ばかり考えていたのだ……そう、今日この瞬間までは。

「承知いたしました。それでは、上陸戦を想定し行動を開始します」
『半世紀ぶりの本土攻撃だ。我が軍の精鋭が樺太の頃から全く衰えないことを見せつけてやれ』

先ほどまで沈黙を保っていた内地総軍司令がとつてつけたようにそれだけ言うと、さっさと通信を切ってしまう。第53軍が所属する南西方面軍の上位司令部だからと言つてのこの顔だけ出すとは……なんと傲慢な男なのだろうか。

『……顔に出ているぞ』
窘めるような方面軍司令の声。

「失礼しました」

『まあいい、南西方面軍として最大限の支援を約束する。南西特別混成団混も君が直接の指揮に入れられるよう取り計らおう……同じ熊本男児として、しっかりやろうではないか。期待しているぞ』

「はっ」

そして通信は途切れる。

「……珈琲を持ってきてくれ」

そう控えていた士官に指示を飛ばす。そして軍司令は部屋に誰もいないことを確認すると——こめかみを抑えるようにして頭を抱えた。

正直、方面軍司令部からの情報は不明な点ばかりだ。

唐突にもたらされた沖縄における地上作戦の立案命令。想定火器は無制限とし、沖縄本島のいかなる地点に上陸されても対応できるよ

うにすること。しかしこんな命令で立てられるのは精々が住民の避難誘導をどこが担当するかぐらいだろう。いったいどの勢力を想定すればいいのか、そもそも敵対勢力の装備はなんなのか。そういった事前情報は一切ナシである。それどころかそれを調査するのも53軍の仕事ときた。

唯一参考になりそうなのは、その勢力が潜航しながら接近する可能性が高いこと。既にその勢力の攻撃により海軍の駆逐艦が沈没、状況は一刻を争うということだけ……作戦立案を急かす要素でこそあれ、中身に役立つ情報ではない。

氣を利かせてくれているのだろう。まだ士官はコーヒーを持って戻ってこない。

軍司令は自分の持つ駒の内容を頭の中で思い返してみる。

一個旅団。この文字だけでは53軍は無力ということになるだろう。しかし決してそんなことはない。

三分の二が他の島嶼警備に分散配置されている第119連隊を除いても沖縄本島に歩兵連隊と砲兵大隊がいるのである。これだけで人員は3000、加え100弱もの火砲を装備しているのである。

加えて方面軍隷下にある南西特別混成団まで53軍の指揮下に収めていいとまで言ってくれた。これで戦力は四個連隊。人員は一万を優に超える。

兵力は十分、戦車こそいないが105mm砲を備える装輪装甲車である七十六式機動戦闘車により編成された部隊が二個連隊もある。三十四式戦車と同じ口径の砲を備える戦闘兵器は、歩兵直掩という名目と装輪装甲車という分類にしては大きすぎる火力を保有するのが特徴で、まさに53軍が保有する最大の機動火力といえよう。

司令は脳裏に沖縄本島の地図を、その道路・鉄道網を思い浮かべる。北部に上陸されれば山岳地帯とそこに立てこもる山岳・島嶼連隊である第119連隊が敵を防ぎ、南部なら第53軍にて最強の連隊である第56連隊が熱烈な歓迎をする。そして、中部に来たところで南西方面軍肝いりの特別混成団が迎え撃つ。

何の問題があろうか。ここ沖縄には、いかなる敵も寄せ付けない防御がある。

「司令、珈琲をお持ちしました」

第53軍司令はその声に振り返る。次に彼が出した指示はなんの躊躇いもなくそして——自信に満ち溢れていた。

「よろしい、今すぐ参謀を招集。各連隊司令部も呼び起こせ。それと公共交通関連企業、土木業者も全部集めろ。総力戦だ」

事変で済まされた琉球

H 3 4 . 3 . 1 《X | 2 4 4 d a y s》

——西暦2022年3月1日。 沖縄本島——

南国ならいくらでも存在する。だがいざ観光で南国に行こうとすると、なかなか多くの問題が立ちふさがる……それは時差であり為替であり言語であり疫病であり、せつかくの休暇を台無しにしかねないものばかり。

だからこそこの沖縄という最南端の県は、もっと観光を前面に押し出していくべきなのだ。

しかし現実として、沖縄の観光地化はあまり進んでいないのが実情だ。東西の宥和によって観光地化が加速するという話に胸を躍らせていた県民は、見事に裏切られたと言って良い。

三月上旬というシーズンから外れた中途半端な平日。もちろん客が少ないことを見越した大手航空会社も便数を減らし、那覇空港のターミナルは閑散としていた。未だに国際線の就役が認められていない案内板の行き先欄には主要な国内線ハヴ空港だけが記載され、搭乗者向けの保安検査所では係員がヒマそうに手持ち型の金属探知機をパタパタ振る。

と、到着口からばらばらと人影が出てきた。ほとんどがスーツ姿で、私服の人間も旅行者には見えない。

そんなスーツ姿のひとりが、ポケットより携帯端末を取り出した。時代遅れなフューチャーフォン。スマートフォンよりも長い起動時間を待ってから、キーを押して耳に押し当てる。

「……もしもし、岡沢です……はい、今那覇着です」

地声より高いのであろう業務用の口調。電話の先は上司だろうか。

「……はい。分かっております。失礼します」

それだけ言うとはたつ折りの携帯端末を閉じる彼、そして次の瞬間には表情を変える。その表情は憤怒だった。何かに当たりたくなつたようで、そして当たる対象を発見できなかった右足が宙を切る。勢い余つた靴先がどこかに持つていかれる感覚に苛立ちが二乗にでもなつたのだろう、いつもと変わらぬ汚い言葉が彼の口を出た。この場所が空港という公共の施設であるがゆえに大声こそ出さないが……呪詛のように口からこぼれ出るその台詞は、まあ聞いていて気持ちのいいものではない。

「まあまあ先輩、そうカツカしても仕方ないですよ……それより、経費で沖繩に来れたって考えた方が楽しいですって」

そう自分は岡沢先輩へと一応宥めの言葉をかけるが、そんなので収まるぐらいなら彼は初めから苛立つてなどいない。それどころか振り返つた彼の怒りは二倍となり、その半分近くが自分へと矛先を変えていた。言葉を間違えたらしい。

「うるせえな、どうせ今回も商談は失敗するって分かってんだよ……」
無能課長めと吐き捨てる先輩。残念ながらその課長は先輩の三期後輩だ。そんな課長がいないのいいことに陰口を叩く先輩、どつちが無能かは火を見るより……いや、やめよう、自分まで陰口に汚染されてはお先真つ暗だ。

そして、自分がそんなことを考えているなど夢にも思っていないであろう岡沢という名の男は携帯電話を弄ぶ。大人気ない乱暴な扱いだが、落とすようなヘマはしないのが彼らしいところだ。右手から左手へ携帯を強く投げれば、手のひらの皮を構成する物質たちとぶつか音がよく響く。

結構お冠だなあと感じた自分は、岡沢に見えないように顔をしかめ、それから笑顔を作つて言う。確かに今回の商談が成功する可能性は低い。だがこんな先輩のせいで確率をゼロにされるのはゴメンだった。

「失敗するって分かっているのならさっさと全部終わらせましょう？」

そうしたら最後ぐらい観光できるかもしれないですよ」

「お前はポジティブでいいねえ！」

やってらんねと先輩。いったいどんな言葉をかければいいのか。せめて別の人と一緒ならなあとは思うが、ないものねだりで現状を変えることはできない。気付かれないように小さくため息。とりあえず話を変えることを選択する。

「それで先輩、ここからはどう向かうんですか？ 今日の予定は名護でしたよね？」

同じ便を降りた人の波は沖縄電気軌道へと向かっている。そして先輩もそちらの方へと向かっている。確かあれは那覇まで繋がっていたはずだから、そこから乗り換えだろうか。

「ああ、午後三時だから……あと四時間ちかくあるんだよなあ」

「それこそ那覇観光でもしていきましょうよ、首里城とか首里城とか」
その実自分、沖縄に来ることを楽しみにしていたのである。国内旅行で南へ、というつついつい台湾を連想しがちであるが、日本人にとっての南国は太平洋の島々。いくらパスポートが簡単に取れて、北マリアナ共和国などのリゾート地に気軽に出かけられる時代とはいえず、やはり国内の南国と聞けば行きたくなくなってしまふものである。

仕事とは言っても、多少雰囲気を楽しむだけなら怒られまい。

「ほんつとにポジティブだな、お前は」

せめて別の人と一緒なら……そんな呟きも口から出そうだ。もちろん口にはしないが。

とりあえず昼食だけは食べようと先輩を説得し、電気軌道の終着駅である那覇で降りる。駅前ロータリーはこぢんまりとしつつも綺麗で、車止めにシーサー風の彫り込みが為されているあたりなどから観光地としての努力が感じられる。

「んで？ どうすんの」

「昼食にしましょう。自分、一度でいいから沖縄そばを食べてみたかったんですよ」

どうするかなんて自分で考えろ。そうは思うが、しかし先輩のこと

など知ったことではない。自分はとにかく携帯端末に意識を集中し、ここから一番近い沖繩そばへの道を検索する。観光ガイドもしてくれる高機能なバス・鉄道時刻表検索アプリがたたき出してくれた結果によると、十分も歩いたところに店があるらしい。評価も4と上々だ。

先輩に見せると、ようやく楽しむ気になってくれたのだろうか、まだ無関心を装いつつも興味ありげに覗いてきた。

「んじゃあ、さっさと行こうか」

そして自分は先輩を先導するように——もつとも、自分はアプリに先導されているのだが——歩いてゆく。広々とした車道と歩道。観光案内板が首里城の方向を指し示し、財布の紐を緩めようと土産屋の看板が奮戦する。

と、そこで轟音を立てつつ進んでいく車列。観光地にあるまじき深緑の車体。

「自衛軍？」

岡沢先輩は、なんでこんなところにと言わんばかりの口調でそう漏らす。もちろん沖繩なのだから軍用車がいるのは当たり前なのだが、なぜこんな市街地のだ真ん中に走らせる必要があるのかという疑問は残る。

「さあ、なんででしょうね……？」

目的の店は次の角を曲がった先だった。

青空。県営鉄道からの眺めは素晴らしいの一言に尽きる。それも湾岸に近づいてからは最高だ。幾度となく訪れる台風にも耐えらるる堅牢な一階石造りの家々の向こうに広がる、澄んだ青い海。水平線で空と交じり合い、浮かぶ雲がアクセントになるキャンバス。時折通り過ぎるリゾートホテルの巨体が大変邪魔だが、なるほどこういった雰囲気は国内の旅行者を集めているのだと思いきや知らされる。優しく差し込む光と座席の底にて穏やかに脈動するエンジン音、そして枕木

が奏でる音楽。昼ご飯直後ということもあり、うつかりすると眠ってしまいそうだ。

自分も先輩も、ただ車窓から眺めていた。非電化の鉄道と聞いていたから田舎のもっとチャチな車両を思い描いていたのだが、車両の内装は案外に綺麗。東京での過密さを思えば、この一両編成が可愛いとも思えてくる。自分が沖繩に行くことを知った友人が、いやに県営鉄道を勧めてきた理由はこれなのかもしれない。

「立派な観光資源があるじゃないか……」

国際線の就役が認められて、海外からも直接旅行客が来るようになれば大分変わるだろうに……などと、そんな考えても意味のないことを思った時。車内に甲高い、どこかヒステリックにも感じられる声が響いた。

「もう、おじいちゃん……閉めなくていいんですつてばー」

一体何ごとだろうか。そんな野次馬根性丸出しで声の方を見ると、陸側の席に座った高齢の方とご婦人が会話しているようだ。エンジンの駆動音のせいで全く聞き取れないが、おじいちゃんと呼ばれたのだろう老人が、こともあろうか窓から身を乗り出しているのはよく見えた。

まるで何かを探すように手を動かすその横顔。焦りを帯びており、とてもじゃないが普通には見えなかった。口がパクパクと動き、何かに追われるかのように手を動かす。ワンマン運転のせいで対応できる車掌もいなく、他の乗客たちも互いに顔を見合わせている。

と、隣の前輩も口を小さく動かした。

「え？　なんですか？」

小声のつもりなのだろうが、騒音が五月蠅すぎて残念ながら聞き取れない。先輩は小声を諦めて普通に声を出して、それでようやく聞こえた。

「なんだ、あれ？」

自分も同じ質問をしたい気分である。

「いや、分かりませんよ」

なにか深い事情でもあるのだろうか。考えてみるが、全く思いつか

ない。と、老人の顔が絶望に染まる。そして大慌てでしゃがみこむ……そう、まるで窓枠の外に天敵でもいるかのよう。

そして次の瞬間、窓の外の景色が変わる。先程までの住宅地が一変、なにもない平地へと……いや、これは平地なんかじゃない。ただの平地ならあんな風に数メートルはありそうな鉄柵があるわけない。

「だからおじいちゃん、要塞地帯はもう十年前になくなったんですってばー！」

要塞地帯。

普段聞かない言葉に頭の回転が一瞬遅くなり、それから学生時代——そう、数年前のあの自分史上最大にして唯一の輝かしき怠慢の時代——の記憶を引きずり出す。

そこですぐに察しがついた。

「ああ……嘉手納要塞地帯だ」

「嘉手納要塞、地帯？」

自分は思い出したが、しかし先輩は分からなかったらしい。まあ先輩は理系だし仕方がない。

「ほら、日本最後の要塞地帯ですよ。2012年に廃止された」

「あ、あれか。財政再建で補助金減らすためにやった……」

「そう、そうです」

つまりこういうことだ。軍事機密、すなわち国家機密の塊である基地や飛行場は保護されなければならない。だからこの国には要塞地帯法という国内法が存在する。それはもちろん鉄道にも適用されるわけで、要塞地帯を通過するときは外が見えないよう窓を閉めなければならぬのだ。きつとあの老人は、それに従っているつもりで、かと思ったら窓を覆い隠すための戸がない。なるほど混乱するわけだ。

……まあ当然、要塞地帯なんて考え方は旧世紀の遺物。はつきり言ってるなんの意味もない政策——なんせ今は米国の秘密基地エリア51ですら衛星写真を撮られてしまう時代だ——である。だから今では要塞地帯の指定を受ける場所なんてどこにもないし、深い意味も

なく継続されていた嘉手納要塞地帯がおかしいぐらいなのである。

まあともかく、老人が車両から身を乗り出すという大変危険な状況も終わり、車内に平穏が訪れる。

海の方へと視線を戻すが、残念ながらこつち側も基地になっている。資材の搬入に使われるのであろう殺風景なプラットホームを通り過ぎ、列車は基地内を通過していくと思われた――

――が、列車は急に止まる。進行方向に倒れるような感覚。列車に急な減速Gがかかったのだ。窓の外の景色が減速し始め、基地内でぴたりと止まってしまう。

「……ん。おい、なんで止まったんだよ」

先輩が疑問符を浮かべる。まあどうせ車両間隔の調整だろう。そう思つて口を開きかけると……モールス信号みたいな音が聞こえ、列車は動き出した。

「お、動き出した」

「よかつたじゃないですか」

ところが加速が続かない。列車は滑るように進むだけで、先程までの速度が出ない。するとスピーカーからノイズ混じりの声が聞こえてきた。先程まで間もなく嘉手納だと言っていたのと同じ声だ。

『ええご乗車中のお客様にお知らせ致します。ただいま嘉手納線でございますが読谷駅における信号トラブルの影響により運転が出来ない状況となっております。この先この列車嘉手納止まりとなりますので、折り返し那覇方面の列車となりますのでご了承承ください。この列車嘉手納止まりとなりますので那覇方面の列車となりますのでご了承承ください』

僅かな間。その内容を理解すると同時に、隣の先輩の空気がすつと冷える。

「折り返しだア……?」

「先輩、落ち着きましょう」

自分は咄嗟に腕時計を確認、まだ午後一時半を回ったばかりだ。

「大丈夫、まだ全然時間あります。振替輸送でいきましよう?」

鉄道が止まれば振替輸送が始まるはずである。あと一時間半もあるわけだし、どう考えたって間に合うはずだ。けれど念のためカーナビから乗換検索まで万能の交通アプリを起動するべくスマホを取り出す。ロックの解除キーは1145。慣れた手つきで入力すると、先程まで開いていたSNS短文投稿サイトが表示された。

『沖縄県営鉄道公式：現在嘉手納線は信号トラブルの影響で運転を見合わせています。順次、嘉手納〜那覇間で運転を再開いたします』

『キハ07S:@kentetu 今日県鉄トラブル多くない?』

『嘉手納BT：読谷駅信号故障とか笑う』

『なごてつ：は?せっかくキハ07嘉手納線運用入ったのにマジなんなの』

「あー……先輩、これ見てくださいよ」

「ん?」

先輩も自分のスマホを覗き込んで、それから顔を歪めた。

「えなに、朝からなん?」

「みたいですね……」

そんな会話をする間に列車は嘉手納駅へと滑り込んでいく。どうやら本当に信号が壊れているらしく、駅員がホーム上で緑色の手旗を振っていた。

折り返しとなれば仕方がない。嘉手納駅にて県営鉄道を降りると駅前からでも見える自衛空軍嘉手納基地のゲート。車止めの手前に銃を構えた兵士が佇み、車道にはみ出さんばかりの様子で機動装甲車が待機している。やけに物々しい警備だが……まあ嘉手納といえばアジア一の国際航空基地とも言われる重要な場所だ。仕方がないかもしれない。

「で？　これからどうするんだ？　お得意のスマホで調べたまえよ」

紙くずとなつてしまつた切符を握り締めつつ岡沢先輩は自分に言う。ガラケーを未だにフューチャーフォンと呼んで憚らないこの人。スマホを持たないのはこういった仕事を他人に押し付けるためではないのだろうかとすら思つてしまふが……文句なんて言つていられない。

「ええつと……このまま那覇に戻つてのうるま線乗り換えだと間に合わなさそうですね」

「はあ？　あと一時間以上もあるぞ、どうなつてるんだ？」

「いや、なんか接続悪いみたいで……平日昼なんで本数少ないっぽいですね」

どうやら間に合いなさそうである。その旨を伝えようとすると、岡沢先輩は最後まで聞かずにスタスタ歩きだした。なんなのかと追いかけると、先輩は手を大きく振り上げる。いつもの奇行……ではなく、タクシーを止めたのだ。

「ならタクシーだ、それしかない」

うちの会社でこういう場合のタクシー代が経費で落ちるかは怪しいものだが……まあ先輩に払ってもらうことにしよう。そんな自分の考えを知らないであろう先輩は、停車と同時に開いていた後部ドアからするりと入り込んだ。自分も続く。

「名護に行ってください」

「名護？　名護ならその県営に乗ればいいじゃないですか？　そちらの方が早く着くはずですよ？」

先輩がそう告げると、振り返つた運転手はやはりというべきか怪訝な顔をする。

「いやそれが、信号トラブルで止まつて……どのくらいかかります？」

「まあ、三十分もあれば」

「ではお願いします。ああそうだと祖谷原、お前も半分払えよ」

先輩が唐突にそう告げたのはタクシーが走り出して……そう、メーターが回り始めてからだつた。

「ええ？」

「当たり前ええだろうが、お前と俺で二人分。なんで俺だけが払わなきゃならん」

これはいくらなんでもないだろう。これまでも散々な人間であったが、そもそもこの信号トラブルに引つかかるような時間まで遅れたのは先輩がなんだかんだけ言いながら那覇観光をしたせいじゃなかったか。自分は沖縄そばを食べようとはいつたが、そこから先は先輩が勝手にギリギリまで詰め込んだ遊びだったはずだ。

急に緊迫し、互いに牽制しあうような目配せをする先輩と自分。

「あー……お客さん。お取り込み中のこと悪いですけど、読谷村方面通行止めみたいなんで沖縄市経由でいきますね。混み具合によつては四十分かかりますが……大丈夫ですか」

時間的には何ら問題ないだろう。だがこの時、自分は先輩には思いつけないことを思いついていた。

「運転手さん、なら一番早いうるま線の駅までお願いします」

「となると……嘉手納基地東駅かね」

「ではそこで」

「おい祖谷原、なに勝手に決めてるんだ。名護に行かなくてどーする」
予想通り食いついてくる先輩。出張先の交通手段ぐらい少しは調べっておけというものだ。

「先輩。沖縄東海岸には県営鉄道のうるま線が走ってるんですよ、時間的には間に合いますし、タクシー代が安く済むに越したことはないでしょう」

「……確かにそうだが」

それだけで呆気なく終わる反論。車内は沈黙に包まれる。この沈黙が先輩にとってどれほど悔しいものか、それが愉快になるほど伝わってきた。

と、タクシーのフロントガラスの向こうをさつき那覇で見たのと同じ色の深緑が対向車線を通り過ぎていく。

「ああ、気になります？」

「え？　はあ、まあ……」

思ったよりも長い車列を眺めている自分に気づいたのであろう。運転手さんはさも楽しそうに話しかけてきた。

「いやまあ別にね、ここらは基地多いんで普通のことなんですけども。今日はやけに多くてね」

「満州国防軍との演習の関係ですか」

「いや、そういう訳でもないと思いますよー、今日に限ったことですよ」

自衛軍と満州国防軍による合同演習が沖縄にて行われるとの報道があつたはずだからそのように考えて口に出してみるが、運転手の反応はイマイチ。まあ観光タクシーの運転手が事情を知っているのもおかしな話なので、この話はこれで終わりだ。

タクシーは嘉手納基地沿いに続く道路を走っていく。窓から見た景色はただの住宅地だが、このすぐ向こうには基地とその外を隔てるさつきみたいな柵が延々と続いている……そう考えれば、かつての嘉手納要塞地帯とこの町。それらがあまりに不思議で微妙な関係の元に成り立っているのだと感ずることができない。

もつとも自分の隣にふんぞり返る岡沢先輩は、そんなこと考えもしないのだろうか……。

と、その時だった。窓の外の住宅。その向こうから、起き上がる巨大な影。

「ファッ!?!」

先輩の前だというのにアレな言葉を使ってしまった自分をどうして責められよう。目の前では解明しきれたわけではない空力を華麗に利用してグングン持ち上げていく真つ黒な要塞。側面にはその黒に映えるよう真つ白な文字で「日 本 国 自 衛 空 軍」の文字列が刻まれ、白縁に真つ赤な日本のマークが鈍く光る。

「なんだあの爆撃機？ あれか、富嶽か!」

隣で興奮気味に口走るのは岡沢先輩だ。その言葉を聞いた自分の中にいつもの優越感が生まれ、少しだけ落ち着くことができた。もし

先輩がいなかったら、自分はこの悪魔の如き飛翔体に圧倒されたまま
ことだっただろう。

「違います、あれはB―52。富嶽は半世紀以上前に開発中止されて
ますよ」

「あ、そなの？」

そんな先輩の言葉を気にかけず。そのストラトフォートの要塞は飛
び上がっていく。二機セットで房のようにぶら下げられたエンジン
が見えた。あれがB―52には四セット、八機のジェットエンジンで
空を翔るのである。

「あ、二機目」

岡沢先輩がポツリと漏らす。慌てて見やると、住宅地からもう一機
のB―52が浮遊を開始したところだった。息もつかせず続いて三
機目。タクシーの窓に顔を押し付けるようにして空を見上げれば、ま
るで一つの筋のようにB―52が上がっていた。さながら鈍重な空
飛ぶ要塞線だ。

「……なんでB―52があんなに複数？」

訓練か何かなのだろうか。しかし自分も所詮は一般人。一体どん
な事情があるのかなど、当然知りうるはずもない。

ともかくタクシーは走っていく。目指す先は――沖縄市だ。

——西暦2022年3月1日。 沖縄本島——

田舎とは思えないほど広々とした片道二車線。しかも車幅は自分の知るそれよりも遥かに広い。

しかし道路は渋滞していた。広い車幅を利用してバイクが後ろに取り付けられた出前用の運搬ボックスを揺らしながらあつという間にタクシーを追い抜いていく。

それを見た岡沢先輩が、ついにしびれを切らす。

「……運転手さん。いつになったら動くんですか？」

「いやあおかしいですねえ、74号線はそんなに混まないはずなんです……」

運転手の声もどこか困惑気味。アイドリングの振動が先輩の貧乏ゆすりと共に鳴る。窓の外では、またしても幌が被せられた自衛陸軍のトラックが走っていった。さつきから一方通行で、自分らがやって来た嘉手納の方へと向かっていく。

だがしかし納得できない。自分らは今嘉手納とは反対の方向に向かっていている、なのに一体どうしてこっち方面も渋滞するのだろうか。

とその時、運転席脇フロント中央に設置されている料金メーターが

——上がった。

「運転手さん、降ります。降ろしてください」

「ああでもお客さん、ここは有事の際の指定道路だったはずですし、すぐに進むと思いますが……」

「いいから！ お会計！」

岡沢先輩は乱暴に財布を取り出し、そして紙幣をくしゃりと取り出した。もうメーターは上がってしまったのだから、もう少し待ってもいいだろうに。

「まったく、なんでこんな短い距離に千円ちかくも払わなきゃならんのだ……」

タクシーを降りれば、まだまだ空高く上がっている太陽が自分と先輩を照らす。温度が十度後半ということもありまさに心地よい陽気というやつだが、隣に悪態をつく先輩がいてはそれを楽しむ気にもなれないというもの。先輩を促し、相変わらず団子になっている車列を脇目に県道74号線沿いを歩いてゆく。なんだかんだ言っていて目指すべき県営鉄道の駅までは一、二キロほどしかないはずなので、歩くにしても大した時間はかからないはずだ。

「おい祖谷原、間に合うんだろうな？」

「次の列車が13時58分なんで……これを逃したら危ないですかね」

「ん？ まだ時間あるだろ」

「いや、次の14分発がうるま中央止まりなんです。名護、というか恩納まで行こうと思ったら次が30分発になります」

スマホの表示を読み上げると、岡沢先輩はうむむと唸った。

「じゃあちよい急ぐか」

そんな先輩に続きながら歩いていくと、交差点のあたりがやけに混雑していた。乗用車が74号線に乗ろうとして、そこでつかえていくのである。

「これが渋滞の原因か……」

岡沢先輩が呆れるように呟く。全ての乗用車は住宅街の方向から74号線に乗ると、全てが沖縄市中心へと向かっていく。

「ここって……確か軍人系の住宅地でしたよね？」

異様な数の軍用トラック。それが向かうのと逆方向へと向かう民間人の車列。冷や汗が落ちた。それを肯定するかのようには、恐らく十何機目となるB-52が飛び去っていく。

沖縄県営鉄道うるま線。「嘉手納基地東」と書かれた看板を見ながら、その綺麗に整備された駅舎へと入る。腕時計が示す時間はまだまだ

だ余裕があり、コンビニでちよつとした飲料を買う余裕もありそうだ。電光掲示板に表示された案内はナビサイトの言うとおりで……どこか安心した。やはり自分の思い違いだろう。さっきまでの光景には、きつと何らかの事情が有るに違いないのだ。

アナウンスが電車の到着を告げ、間を置かずに一両編成の車両が滑り込んでくる。自分が電車を待つ下り線ホームはラッシュアワーでもなければ閑散としている訳で、電車に乗り込むとすぐに走り出した。適当な座席を探し、先輩を座らせ自分はその隣に。

「とりあえず、間に合いそうだな」

「……そうですね」

それから岡沢先輩はガラケーを開くと、そこに熱い視線を注ぎ込み始める。メールだかiモードだか知らないが……スマホでもないのによく熱中できるものだ。

自分たちが揺られているのは東京でならしよつちゆう見かける通勤型の車両。壁沿いに配置された座席から眺める車窓から見えるは緑の山。悠々と構えたその山の麓に続いている住宅。台風の島沖繩の家というと、背が低い石造りの頑丈な一階建てを思い浮かべるが……ここら一帯はどちらかという新興住宅に当たるようで、そういった「いかにも」な家は見当たらない。

「なあ祖谷原、今思ったんだが……これ初めからうるま線乗った方が早かったんじゃないかね?」

「え……ああー確かにそうかも知れませんが」

のんびりとした青空にちらりと輸送へりの姿が見える。青空に不釣り合いな深緑の塗装。あれでも十二分に巨大だが、それよりさらに巨大なローターが回っていると考えると空恐ろしい。もしあの羽にぶつかってしまったらどうなるのだろう。きつと真つ二つどころの騒ぎどころではないに違いなかった。

合成音声によるアナウンスが次の駅名を告げ、早速減速し始める列車。停車すると、また数人が降りて、代わりに同じくらいの人数が乗り込んできてくる。なにも変わることもない平和な風景だ。

「……ん？」

岡沢先輩が不思議そうに呟いたのはその駅——アナウンスによれば、北具志川駅とかなんとか。嘉手納基地東といい、この路線の駅名はやけに方角が入る——を出た直後のことであつた。そちらを見やると、携帯の画面とにらめっこしている先輩の姿が。話しかけて面倒事、というか先輩関連の話題に巻き込まれるのは勘弁なので、知らないふりで視線を窓に戻す。それでも先輩のぶつくさ言う声は聴こえてくるわけで。

「圏外ってどゆことだ……いや、少し待てば回復するか。そうだな」

「圏外？ そんなまさか」

思わず反応してしまった。先輩と目が合う。

「そんなこと言うなら、ほら、お前のも確認してみろよ」

そう言われては仕方がないのでポケットへと手を伸ばす。どうせ先輩のスマホだ、壊れてしまったに違いな

「あれ、圏外ですね」

「だろう？」

『うるま中央、うるま中央』

そんな会話を交わす間にも事実を感じさせぬように列車が止まった。駅舎ホームと外界を区別ける柵の向こうにうるま市庁舎が見える。

「全くもって圏外……中央ってなんだよ」

先輩がそう言う。確かに、こんなに街の中心部で圏外なんておかしい話だった。あれだろうか、アメリカとかでメガヒットした歩きスマホゲームが日本でも猛威を振るっていて、そのせいで電波塔がダウンしたとか……いや、ないか。

『えーこの電車列車間隔調整のため、二分ほど停車いたします』

スピーカーの調子ものんびり。床下に埋め込まれているのである。何らかの機械が微かな振動を椅子越しに伝えてくる。

「また遅れるのか……いい加減にしろよ、県営つてことは国民の血税

使ってんだろが」

先輩が真横でまたとんでもない批判を始める。先輩、血税とか自分のことみたいに言うけど……そもそもアナタ、沖縄県民じゃないでしょうに。

まあそれは置いて、だ。自分はこの遅延で起きうる先輩が苛立ちそうな事象を考えてみて、それからそんなものはないことに気付いた。一体全体、二分程度の遅延で何が起きるといえるのだろうか。

「何が列車間隔だ……ん？」

先輩の口調が急に変わる。今度は何だというのか。

「おい、祖谷原」

「なんですか」

「お前、さつき列車は15分間隔だとか言ってたよな？」

「え？ ええ、まあ……」

だから何だというのだ。恐らく表情が表に出てしまったのだろう。先輩はやや力を込めて、なんで分からないんだと言わんばかりに口を開いた。

「じゃあなんで列車間隔の調整なんてするんだ？」

……なんだそれは。そんなことでよくまあ真剣な顔つきになれるものだ。

「さあ？ 回送電車でもあるんじゃないんですか？」

「とは言うがな、ここは沖縄だ。東京みたいな超過密地帯じゃないんだぞ？」

僅かな間。無表情を保つ自分。みるみる血相を変えていく先輩。

「分かった、分かったぞ。そうかどうか考えてもそうに決まってる」

「……なにがですか？」

それを言ってから「しまった」と思うがもう遅い。先輩は口早に捲し立てた。

「よく考えてみればおかしかつただろ、飛行場から爆撃機はバンバン飛ばし、那覇市街にも、さつきだつて自衛軍が動いてた！ 間違いない、これは何かの陰謀だ！」

「陰謀って……」

「そうは思わないのか？ こんなことって普通あるかつて話だ。きつと列車間隔の調整っていうのも、列車砲とかそういう類を……」

そのまま自分の感覚の中でフェードアウトしていく先輩の声。聞いているのが億劫になって来たので意識を別のところにシフトしたのだ。普通じゃないというが、そもそもここは東京じゃない。ここ沖縄における普通を知らないのがこの目の前にいる先輩だし、それをまるで知ったかのように話すのはどう考えても傲慢である。そりやもちろん、あれだけの数のB-52が飛んでいくのを見た時には驚きもしたが、それが沖縄におけるスタンダードである可能性もあるのだ。

と、携帯が震えた。自分はここぞとばかりに話題をそらす。

「あ、なんだ。やっぱり電波生きてるみたいですね」

——しかし、携帯スマホに表示されていたのは。

「エリア、メール……？」

青い空、白い雲。

そして、それらを振り切るかのように飛んでいくB-52ことストラトフォートレス成層圏の要塞。

「遅くなりました！」

沖縄中部に位置する読谷村は万単位の村とは思えない規模を誇る村である。そんな村の北部に位置する長浜公民館に若者が駆け込んできた。

「遅いぞー」

そんな罵声とともにプラスチックで作られた識別票が飛んでくる。若者が迷うことなく受け止めるのと同時に、同じ自警団の人間から防刃チョッキを渡される。強化プラスチックで作られたこの装甲は、銃火器でなければほとんどの攻撃を防いでくれることだろう。

「いったいどうなってるんですか?!」

ヘルメットの首紐の締まりを確認しながら聞く若者。民間人向けのエリアメール——厳密には全国瞬時警報システム——が配信されていらい防災無線は大規模攻撃情報大規模攻撃情報といやに呑気な調子でのたまうばかりで、はつきり言ってなんのために召集されているのかは謎でしかなかったのだ。

「なんでも県庁からの命令だそうだ。沖縄県中部の市町村自警団は緊急招集。連隊管区……まあ読谷だと団管区だが、とにかく自衛軍部隊が到着し次第、その指揮下に入れとのことだ」

その言葉を聞いた若者から一気に血の気が引いた。作業の手が止まる。

「……ということは、核戦争ですか?」

沖縄。

それは九州地方に属する県のひとつだ。人口は百数十万で、東シナ海と太平洋を隔てるように連なる琉球列島を構成するほとんどの島がこの行政区に属している。

しかし多くの日本人、いや西側世界の人間にとっては、沖縄とはもっと別の、それ以上の意味を持つ言葉だ。

沖縄の数奇な運命は1944年の日米講和から始まる。

ナチス・ドイツの支配する全領土の開放。そのソビエト連邦一国がもたらした英雄的勝利は同時に、ドイツ打倒でのみ結託していた連合軍陣営の対立を表面化させた。

欧州大陸は赤い波に飲み込まれた。かつて鍵十字の靡いたエッフェル塔に高々と赤旗が掲げられ、一方連合の盟主たるイギリスは対

日単独講和にドイツの臨時政府保存に手を貸すなどと迷走を続ける始末。

米国のソビエト及び英国に対する信頼はもはや地まで落ちたかに見えたが、しかし彼らの言うとおり第二次世界大戦は終わってしまった。

そう、時代はもはや悪の枢軸正義の連合といった構図を抜け出し、悪の共産正義の自由といった新しい局面を迎えたのである。

アメリカが目指すべきは日本を従えることではなく、共産に中国利権を奪われないこと。一時期はソビエトの満州利権を認めてすらいた米国が大転換を図ったのである。それほどに共産陣営は強かった。

四年という平和と呼ぶには短い年月。モスクワからパリに至るまでの広大な戦場に鍛えられた赤軍はさらに精強となつて大義を掲げた。赤旗はドーヴァーを超えバッキンガム宮殿に翻ったし、日本や満州、中華民国といった反共の防波堤がアジアで勝利を収めようと大勢は変わらなかつた。旧大陸が共産の手に落ちようとしていたのである。

そして、その流れを救つたのが原子爆弾だ。ヒトラーが戦争には間に合わぬと切り捨て、日本が開発を諦め、そして米国すらも戦争終結ゆえに一度は凍結させたその計画が西側諸国を、自由資本主義連合を救つたのである。

そしてそれは——今日も沖縄の嘉手納でアジアの平和を見守っている。沖縄という稀に見る要塞島には、世界を幾度となく滅ぼす究極の力が眠っている。

「さあな、ともかくお前だつて爆撃機^{B152}は見ただろう。積んでるのが通常だか核かは知らんが、少なくともあの数が一斉に飛び立つのなんて何十年ぶりだ！ ほら、手を止めるな！ 隣の山中さんの様子見てこい！ こりや大ごとだぞ!!」

「は、はいっー」

とんでもないことになった。そりやもちろん、もしも戦争が起これ

ば軍事的に大きな意味を持つ沖繩が狙われることはよく分かっている。そして自警団に志願して訓練を受けているのだから、故郷を本気で守りたいからだ。軍事拠点でありながらなまじ現地住民の数が多し、沖繩を守る手段は駐留する軍でなく民間防衛にある。民間人を装って迫りくる工作員をはねのけるのは、地区を単位として編成される自警団とそして住民の絆である。そのためにと勉強の片隅で心身ともに鍛えてきた。父親のあとを継ぐつもりである若者はそうして日々を過ごしてきた。

それでも、まさか今日ことが起こるなんて思いもしないだろう。慌てて車道へと出る。いつもニコニコしている駐在さんがどこか張り詰めた表情で自動車を使わぬよう呼びかけている。ともかく山中さんの家へと急ぐ若者。駐在さんの脇を通り抜け――

――そして、あるものを目にした。

それは緑よりも濃い緑。側面にばさりと掛けられた幌。がたごとと地を踏みならし、騒がしくエンジン音を奏でながら進んでいく。

そして、そんなトラックに牽かれた、とんでもなく細長い棒。それは幌やトラックと同じように緑に舗装され、ごちゃごちゃと取りつけられている付属品と共に引つ張られていく。

「自衛軍……?」

見間違えるはずもない。あれは自衛軍の砲兵部隊が主力として用いる野砲だ。つまり、自衛軍の部隊が到着したということである。

もちろん安堵した。自警団に貸与されるのは精々対人武器、構成員だ。だって在郷軍人が少し混じっているくらい。敵が装甲車を持ち出しただけで一気に形勢が不利になってしまう程度の部隊でしかない。だから立派な装備と最新の戦術を身に着けた自衛軍が来るのは喜ばしいことなのだ。

だが、若者は思った。

早すぎる、と。

うるま中央駅は、予想以上の混雑だった。避難命令が発令されてから僅か数分しか経っていないにも関わらず駅のホームでは職員が待機しており、拡声器を抱えているところからも間違いなく避難誘導を担当する人員に違いない。ホームに並んでいるのは避難民かと思っただが、よくよく見てみれば男性しかない……推測だが、動員された予備自衛官ではないだろうか？

車内のスピーカーが何事かと告げる。当然うるま市も避難地域に含まれているわけで、この電車は回送電車となるらしい。要は一般客に乗るなど言っているのだ。

「おいおいおいおい……またかよ、ふざけんな」

そして怒りを隠さないのは岡沢先輩。自分のことなど忘れたようにツカツカと降りると、駆け上がるようにホームとホームを繋ぐ駅舎への階段を駆け上る。

「駅員さん！」

慌てて追った自分が駆け上がるころには、もう先輩は駅員を怒鳴り半分で呼びつけていた。ホーム上にいた駅員のように、彼らも拡声器を引っ提げていて、先輩に対してどこか面食らったような表情をしていた。

「はい、どうかなされましたか？」

「どうかなさるもクソもあるかってんだ、名護行きの電車はいつ出る！」

彼らは顔を見合わせる。それから、帽子が少しばかり豪華な——といっても、一本の金線が追加されただけだが——駅員が答える。

「お客様、現在うるま市には避難命令が発令されておりまして……何時に出るとはお約束できません」

「あのねえ駅員さん、私たちは名護に行きたいんですよ。一刻も早くです」

「先輩先輩、駅員さんについてもどうしようもないですって！」

やっぱり先輩の宥め役となる自分。こればかりはもはやどうしようもないというか、このひと 駅員たちは立場的に宥め役にはなれないのだ。だって避難命令を出すのはこの人たちではないのだから。

「うるせえ、ならお前が何とかしろ！」

「んな無茶な！」

「んだとお?! それが先輩に対するものいいかあ！」

岡沢先輩は乱暴に言ったが、それでもそれ以上も以下もないわけ。それ以上言葉が続かずに、ぷいとそっぽを向いた。子供か。

と、目の前の駅員さんのところへ駆け寄ってくる別の駅員さん。耳打ちすると、駅員さんはどこか安心したような表情になった。

「お客様、避難列車は間もなく恩納方面にも出ますので……それに乗って下されば幸いです」

「ああそうなの？」

岡沢先輩は、ちよつと面食らったようになって、それから――

「……まあ、出ればいいんですよ、出れば」

――とだけ言った。

そして同時刻。

太平洋側のうるま市から小高い山を挟んで反対側にある東シナ海側の読谷村。

「よーし、止めろ」

僅かなブレーキ音を響かせて八輪のタイヤが動きを止めた。残るのはエンジンのアイドリング音。青色の空の下では、どこか不釣り合いな深緑の塗装。

「第二小隊、配置完了。送れ」

『第二小隊配置完了了解、指示あるまで待機。終わり』

インカムで報告を終えた小隊長は、愛用の双眼鏡を撫でながら息をついた。目の前に広がるのは海、海、ただ海。ここ沖繩はプレートの境目に出来た典型的な弧状列島だ、大陸からは数百キロ離れているわけで、しかもその大陸に知人がいるわけでもない。

何が悲しくて海を眺めなければいけないのか。

「小隊長」

と、声が聞こえた。インカムからではない。

「どうしたあ？」

小隊長が声をかけるのは自分の部下であり、この車両の運転手を務める陸軍軍人。戦車兵向けのバイザーが太陽に反射して少し光る。

「こんな湾岸にいたら、敵さんに撃つと言っているものじゃないですかね？」

全くもってその通りだ。水際防衛とはよく言ったものだが、あれだって別に海岸で戦うという意味ではない。何にも隠れることなく部隊を展開させれば、まず巡航ミサイルやら航空攻撃で全滅してしまう……そのぐらい、上だつて分かっているだろうに。

「上の命令だ、仕方ないだろう！」

連隊長から話を聞かされたのは僅か十数分前のこと。なんでも、海軍の駆逐艦がやられたとかなんとか。やられた海軍の駆逐艦はつい最近派遣された第二機動艦隊の所属艦らしい。

確かに最近急増する貨客船への破壊行為——破壊行為といつても、被害にあつた船は全て沈んでしまっている——を防ぐべく、第二機動艦隊が派遣されたというニュースは聞いていた。聞いていたが……まさか返り討ちにされるとは。

しかもそれが沖繩こちんに向かつてきていると来た。駆逐艦も倒す水陸両用兵器とは全くもってバカバカしい話だが……もし本当なら大変な話だ。

「まあしかし、連中も我々の七十六式ナナロクには勝てんでしょう」

「当然だ。俺らはともかく、この車両は結構な値打ちだからな」
《隊長！ それ死亡フラグ！ 折って、今すぐ折って！》

隣の車長から茶々が入る。まあ死亡フラグ云々は置いて、小隊長は自身の率いる部隊、そして愛馬でもある七十六式ナナロクに自信を持っていた。

この七十六式戦闘機動車の装備する105mm滑空砲。侵徹力では七十七式戦車の120mmにも負けないし、道路整備が済んでいる沖縄であればこの八輪タイヤが叩き出す巡航100km/h超の快速を存分に生かすことができる。

そして彼らにかけられた期待が、指示となって飛び込んできた。彼ら村役場前を担当する第二中隊の中隊長からだ。

『中隊長より全車両へ。連隊長より発砲許可が出た。弾種榴弾、装填』
発砲許可は珍しいことではない。21世紀に入っても満露国境は緊張感に満ち溢れているし、21世紀が宥和と世界平和だけの時代でないことはこの20年で証明済みだ。

それでも、沖縄という後方支援基地での発砲許可は、まあ気持ちのいいものではなかった。

「榴弾装填しますー！」

装填手がデバイスを操作、自動化された機構が榴弾を砲身へと送り込む。

「……」

次の瞬間、小隊長は息を飲んだ。

海を濁らせるかのようにどす黒い色がにわかには広がり始める。知る者は船から漏れ出した黒い油が広がってゆく様子を思わせるものだが少し違う。それは海底を這うように広がっていくのだ。

『……これは訓練ではない。全力をもって、敵勢力を排除せよ』

インカムからの声も重々しい。小隊長は再び双眼鏡を持ち上げ、そして双眼鏡を支える自分の手が震えていることに気づいた。

何が来るといふのだ。あれが……東側の新兵器といふのか？

刹那、にわかには海面が沸き、白い飛沫を上げながら黒色の『それ』が飛び出した。

「……」

『射撃開始。統合射撃システムに従い、順次対象を無力化する』

それは一つではない、二つ三つ、数で数えられるものではない。姿は遠目に見てもおぞましい、そんな空気を纏っていた。

『――撃え！』

「撃てー！」

車両が震える。巨大な真鍮製の薬莖に詰められた火薬の爆発ガスが15kg越えの砲弾を押し出し、螺旋状の条線により高速回転を与えられ、そして飛び出す。空気抵抗で真っ赤に熱せられた塊。この車両から、そして周囲から一斉に『それ』へと飛びこんだ。

「撃てー！」

彼我の距離は僅か数百メートル。戦車砲の初速が毎秒1500mを超えないとはいえ、ヒトにとつては一瞬の間に目標へと到達。そして、その大半が外れることなく着弾。いや、もしかするとすべて着弾したかもしれない。

この七十六式戦闘機動車には装輪装甲車とは思えないほど重武装な105mm滑空砲を装備しており、ここまでの命中率を叩き出したのはひとえに技術陣による努力の結果といえるだろう。

しかし、榴弾の煙の中から出てきたのは……決して技術陣、いや日本を喜ばせる結果ではなかった。

「……なんだ、これは」

その後に残されたのは、波。そう波である。既に水平線を覆い尽くさんばかりの『それ』がこちらめがけて突っ込んでくるのである。先ほど撃破した『それ』は後続の『それ』にやすやすと弾き飛ばされ、波に飲み込まれてしまう。

《射撃継続、続いて射撃——撃て》

装填、発砲、着弾。先ほど同様に先頭の『それ』だけが破裂し残骸へと変わる。しかしすぐに波へと飲み込まれる。波をかき分けていた『やつら』はついに、読谷の砂浜を踏みしめた。先ほどまでは分からなかったが、『やつら』には足があったのだ。

しかし続けて放たれる中隊長の声は、とにかく冷静だった。

《弾種切り替え、徹甲弾》

「次弾徹甲弾！」

その言葉を聞くや否や砲手はコンソールを叩く。自動装填装置が設計通りに砲身へと徹甲弾を送り込み、栓尾が閉められた。

《徹甲弾射撃——撃て》

徹甲弾が赤く輝きながら飛翔。『やつら』の先頭にめり込むと、遅発

信管が作動するよりも早くその外皮を食い破り外へと飛び出した。その後ろもバターのごとく容易に引き裂かれ、そして何かが発火する。

徹甲弾の爆発ではない。『やつら』自身が爆発したのだ。

《第一中隊より連隊へ、未確認勢力への徹甲弾の有効性を認^{みとむ}。繰り返す、徹甲弾の有効性を認^む》

混線しているのかそれともわざと聞かせたのか、中隊長の連隊長向け通信が入る。構わず撃つ。統合射撃システム^{データーシステム}はまだ生きているが、残念ながら斉射のタイミングを合わせるほどの余裕がなくなっていた。各車両で次々撃つ。

ところが『やつら』の数は減るどころか増え、距離は余計に縮まった。人海^{human wave}戦術という言葉があるが、『やつら』はヒトでなく、またヒトが創造したものにも見えない。『やつら』はその足に頭を直接乗つけたような不格好さで、農地を踏み荒らし、納屋を吹き飛ばし、同類の残骸すらも蹴散らしてやってくる。突っ込んでくる。

《第一中隊縦列。県道六号線は放棄する、村役場まで後退せよ》

その指示が下ったのは、丁度弾薬が心もとない数になり始め……そして、西側の住宅地から土煙があがり始めた時だった。目の前の敵はなかなかの大群だが、どうも客人はこいつらだけではなかったらしい。

——西暦2022年3月1日。埼玉——

長くなるのでカットされることが決まっていたのだろう。車載カメラが取り付けられている砲塔が海岸に背を向け、海が見えなくなるところでその映像は切られた。

入間空軍基地に併設される第一防空指揮所こと『一防』。冷戦を背景とした武力衝突が激化する中で怯えるように建設されたこの対爆施設、その第一会議室。スクリーンとしての役目を果たしていたのはこの部屋を囲っている四面の壁の一つで、映像を映し出していた窓が消えると、再び日本全土を網羅する地図が表示される。そこには自衛空軍の対空迎撃ミサイル、そして海軍のイージス艦の配備状況が示されていた。

「つまり、105mmは通用したが数に押し切られた……と？」

映像の後に残された余韻、というか漂う沈黙。それを破るように口を開いたのは誰だっただろうか。ともかく、それに反応するように西南方面軍——沖縄諸島から九州にかけての防衛を司る——の連絡官が立ち上がった。

「はい、現在は宜野湾市あたりで防衛を行っております。映像の通り、敵勢力は単純に数で押ししてきました、回転翼機を投入しても状況は改善していません」

「とはいえ、浸透は防げているんじゃないのか？」

その質問に、先ほどから耳を傾け続けている飯田は顔をしかめた。なにが浸透は防げている、だ。映像を見る限り『やつら』の体格は数メートル。ただ単に、市街地に入ってもその図体では身動きがとりづらいだけだろう。

そして飯田の予想通り、連絡官の顔は暗くなった。

「いえ、工兵による幹線道路及び鉄道線の破壊を行っていてもこの一時間で戦線が7キロ押し込められています。まれに突出してくる少数ならともかく、全体としての圧力を支え切れていません……那覇に到達されるのは、時間の問題かと」

そんな後ろ向きな言葉が出るとは思ってもいなかったのだろう。会議室内にざわめきが走る。先ほどの映像が異常な映像なら、今のは異常な報告。

そう、異常に異常が続いているのが今回の案件。海軍駆逐艦「雷」の沈没から始まる一連の事象は、沖縄最大の軍事拠点である嘉手納が陥落するという事態によりさらに混乱を極めつつあった。しかも統合幕僚長が官邸に呼び出されているというのがなお痛い。ついでに言えばこの件はもはや陸軍の案件として扱われているようで、方面軍からの連絡官やモール^飾持^緒ちの陸軍幕僚……会議室の席はほとんどが陸軍佐官で埋められていた。

と、鳴り響くコール音。この会議の音頭をとっている陸軍幕僚長が受話器を取ると、会議室を見回すようにしてから重々しい調子で言った。

「沖縄からの全島避難の可能性を、総理が聞いてきたそうだ」
「……」

やはり聞いてきたか。それがこの場に居合わせた全員の感想だった。総理が嘉手納^Iに対して大陸間弾道ミサイル^Bの封印を命じた——『特別な国家安全保障事項』に該当する核兵器に関しては、統帥権を委任されている総理大臣が直接指揮することとなっている——時点で、総理が沖縄の件を「負け戦」として認識しているのは明らかだったから、まあ次に考えるのは沖縄からの完全撤退となるのだろう。

「西南方面軍の意見を聞こうか」

陸幕長が受話器をゆっくり戻しながら言うと、再び連絡官へと視線が集まる。

「恩納方面は山岳地帯であることが幸いし防衛は成り立っています。現在第51軍の砲兵部隊を名護に緊急空輸することで北部よりの反撃を企図しております」

「北部方面はいいとして、南部はどうするつもりだ。民間人の数は那覇市だけで30万、南部全体を合わせれば50万を超すんだぞ？」

その言葉は全島避難を前提とした言葉だろう。民間人が何万いようと、防衛が成り立つのなら問題はないはずだ。

しかし現実問題として、沖縄南部の防衛は崩壊しつつある。

「南部に關しましては……可能な限りの遅延作戦を行い、現地行政と協力しつつ住民の避難誘導を行います」

連絡官も齒切れが悪い。

「避難先は？ 沖縄は島だぞ」

「那覇空港からある程度は逃げられるんじゃないのか？」

疑問に疑問を重ねる会議室の惨状は、ひとえに情報不足がもたらしたものだ。ここに正確な情報が来ていない以上、誰の言葉も正しいとは言えなかった。

『やつら』が上陸したのは約二時間前。上陸場所は沖縄本島中部の読谷村。南西特別混成旅団が迎撃を行うも十数分と持たずに村役場が陥落。国道58号線への侵入を許してからは読谷村中に雪崩れ込まれたために村中に展開する混成旅団はたちまち分断、現時点で連絡の取れる部隊は数えるほどだ。宜野湾より飛び立った攻撃ヘリの攻撃も焼け石に水で、即席の河川防御陣もたちまち突破。嘉手納空軍基地への侵入を許した……この時点で、もはや日本一国の問題ではなくなっているのだ。

「とにかく、早急の課題は南部の孤立した部隊の救出、そして沖縄県民の安全確保だ。誰か具体的な案を出してくれ」

陸軍幕僚長が一言。それを受けて会議室が動き始める。

「輸送機で増援部隊を送り込み、帰りは民間人を乗せればいいのでは？」

「いえ、沖縄の予備役人数を考えれば現地で足りていないのは人員ではなく物資であると思われます。そして大型機が離着陸可能な滑走路といえは南部にはもう那覇しかなく、そこは既に避難のための民間機を飛ばすので限界です。那覇に關しては運輸省主導で進めている

のもあり……避難向けの空便ならともかく、物資を下す作業スペースを割いてもらうのはほぼ不可能かと」

「とにかく、打診しろ。打診しないことにはどうしようもないだろう」
「……善処いたします」

そう言う連絡官の顔は浮かれない。その言葉に焦りの表情を浮かべるのは会議室の大半を占める陸軍軍人たちだ。

統幕長が政府に沖縄上陸の可能性を報告した時点から、既に沖縄における避難計画は官邸主導に移っていた。県営鉄道の車両を必要ない場所に待機させていたように沖縄側での準備はもちろん、隠しきれないとの判断から結局同盟諸国とも情報共有を行っていたそうだ——
——始めから下手に隠して情報を独占しようとせずそうしてくれればよかつたものだが……こればかりは言ってもどうしようもない。

まあともかく、陸軍省としてはそれが厳しい状況を招いた理由なのだ。

陸軍は海軍の駆逐艦とは違い、事前に通報があり準備を整えていた。奇襲に近い形で攻撃を受けた「雷」とは違い、陸軍には短いながらも明確な準備期間があった。

それでこのありさまなのだから、陸軍は恥をかいってしまった形になるに違いなかった。

避難も防衛も官邸におんぶにだっこ。これだけは避けたいのである。

とその時、海軍の代表である大迫海軍幕僚長が口を開いた。

「第二機動艦隊で回転翼機を用いたピストン輸送を実施しよう。対地支援に上げた航空機を「日向」ではなく九州に飛ばせばある程度の人数は収容できる」

それは実質的に海軍が戦列を離れるという意味でもあったが、今さらそれに文句を言う人間はいない。北部方面がどうなるかはともかく、南部の負けは確定的。重要なのは民間人の安全だ。

「そうだな、海軍にはその方向で動いてもらう。細案を纏めてくれ。それと空輸に関してだが物資だけなら空中投下で事足りる。それなら投下場所だけ整備すればいいからどこでも出来るだろう……南部

に工兵はどのくらい残ってるんだ？」

「二個工兵中隊がいます。現在は宜野湾市街のインフラ破壊に従事しています」

その言葉に、陸軍幕僚長は満足気に頷いた。

「よし、なら多少抽出して那覇南部に場所を作ってくれ。それと空軍は使える輸送機のリストを、陸軍各方面軍は空軍基地に一時間以内に移送準備が終わる装備品のリストを纏めてくれ」

それが実質的に、この緊急会議を締めくくる言葉となった。

「飯田。どう考える？」

「どう、と言われましても……」

大迫が口にした言葉に飯田は違和感を覚える。結局先ほどの会議の場では沈黙を保ち続けた飯田であった——そもそも彼は海軍幕僚長補佐官だ。海軍幕僚長である大迫がいる場で予定外の発言するようでは、その会議はよほど海軍に不利な状況に違いない——が、どう考えるも何も、あの会議で海軍として発言できることは出来なかった。

「というか二機艦をもって避難の支援をするほかに提案もなにもあつたものではなかったではないか。」

「南部は消極的防御と避難活動に徹し、北部より反撃を行う。北部を支えられるかはともかく……方針としては妥当かと」

恩納には急峻な地形が広がっている。故に進入路は限られ防御は南部に比べて容易だろう。戦力不足については何ともしがたいが……まあ陸軍は既に空挺部隊の投入も決めている。耐えてもらえない。

「そういう話じゃない。今回の『敵』に関してだ」

「……ヒトが作った兵器には見えません。陸空軍にとっては嘉手納の

陥落にショックを受けるのは当然ですが、逆に言えばあれだけの数を投入して嘉手納しか落せていません。兵器としては効率が悪いですし、それに」

そこから先、飯田は次の言葉を僅かに躊躇う。

「それに……あまり理性的な兵器には見えません」

「全くの同意見だ」

大迫が振り返る。相対する飯田より一回り大きい彼の肩。そこにつけられた四つの桜——海軍幕僚長たる海軍大將を示す——が照明により鈍く光る。

「それと配布された資料。お前も気づいただろう」

それは大迫にとつての当然で、また飯田にとつての当然でもあった。

「敵が『読谷以外には上陸していない』こと、ですね」

上陸作戦において、もっとも難しいのは橋頭保の確保だ。そこから先は補給の問題こそ付きまとうが通常の陸戦と変わりはない。すると説明がつかないのが、敵勢力が上陸地として嘉手納周辺を選んだ理由……いや厳密には「なぜほかの場所には陽動攻撃を仕掛けないのか」である。

確かに上陸を受けた読谷はなだらかな地形からもある程度上陸には適しているだろう。しかし上陸前には南西特別混成旅団が展開済みだったわけで、少なくとも奇襲にはならなかった。もっといい場所——それこそあの見た目だ、那覇市街に現れば現場は大混乱だろう——があつたのではないだろうか。

飯田の言葉に大迫は頷き、それから立ち止まる。そこには機材がコンパクトになつた関係で放置された制御卓のひとつあり、大迫はそれを一瞥してから振り返えつた。

「その通りだ、だがもう一点ある……会議の資料を」

「はい」

飯田は先ほどの会議で配布された資料を大迫へ。すると彼は卓の

上にそれらを次々広げていく。

その紙媒体に印刷されているのは何枚もの写真だ。高高度から偵察衛星がもたらした写真や無人偵察機による写真。しかし目を引くのは、やはり地上部隊が直接捉えた『やつら』の姿……だがこれは先ほどの会議室で配布された資料だ。目を引くとはいえ、驚きはない。「これが沖縄に投入されている敵勢力」

そう言いながら大迫は、また別の資料を——そう、彼は組織の長らしくもなく紙袋を手にしたのである——取り出した。会議室の資料よりも多く極秘の文字が躍る資料に映し出されたのは……海の上から空を見上げる『やつら』の姿。

「……」

「これが海鳥Q14に砲撃を行った敵勢力だ」

息を飲んだ飯田に、大迫がそう告げる。それは確かに形状こそ似てはいるが、素人目にも——いや、この国では誰もが『やつら』の素人のはずなのだが——違いが分かるほどであった。そう、先ほどの会議では全く論じられることなく終わったが、そもそもこの事態は海軍哨戒機である海鳥Q14が砲撃を受けたことから始まっている。

「本体部から、なにか棒状のものが突き出しています……砲煩兵器でしようか？」

「そういうことだ。問題なのは、この種類はまだ沖縄の地上では確認されていないということ」

言わんとすることは分かるな？ 大迫の眼はそう語っていた。

可能性としては、役割分担か予備兵力だろう。だがそれにしては違和感がある。写真の中での『やつら』は本体の大部分を海上に出しているように見える。それならば、沿岸部に対し射撃支援することだって出来るはずだ。だが実際には写真の『やつら』は沖縄本島では確認すらされていない。

「私の出した結論はこうだ……写真のは「制海」。沖縄のが「占拠」だ」「制海？ 占拠？」

訳が分からず飯田の口からオウム返しに言葉が漏れる。大迫海軍幕僚長は飯田のことを見定めるように眺めてから、短く言った。

「こいつらは進化している。目的別にな」

その言葉を聞いた飯田、彼の背筋に走ったのは悪寒だった。悪寒でしかなかった。

何を言っているんだ海軍幕僚長は。

飯田は大迫にまっすぐ向き直ると、それから直立の姿勢を取る。

「お言葉ですが閣下、そのような結論は急ぐべきではないかと存じます。結論で急げば視野を狭めることになります。ここは、あらゆる可能性を考慮すべきかと」

それを聞いた大迫は、目の前で小さく笑ってみせた。しかしその眼は笑っておらず、むしろ威圧するような凄みをもって飯田に向けられている。

「そうだな、それが正論というものだ」

その時飯田が大迫に感じたのは「焦り」……なんの焦りだ？

「ついでに」

そして歩き出す大迫。飯田は無言で後続く。

角を曲がればそこに扉が待っていた。警備兵の敬礼と共に扉が開くと、そこには打ちっぱなしのコンクリートに落下防止のフェンス……昇降機だ。それを見た飯田は通常業務として大迫を先導した。扉が閉まるのと同時に駆動音が響き、振動と共に加速度がかかり始める……が。

下っている？

先程までいた部屋^{一防}は電波の遮断も可能な場所である。それほどに厳重に管理されている場所に、さらに下層があったとは。目の前の大迫は無言だ。どこへ向かうというのだろうか。

そんな飯田の疑問に答えるように降下が止まる。昇降機に取り付けられた小さな電球が飯田と大迫を照らす。目の前に広がる空間は見えない。大迫は迷う様子もなくその闇へと踏み出した。

「ここを使うのも久しぶりだな」

大迫はそう言いながらどこかを探る。手を付いたということは壁面に触ったのだろうか。その直後にプラスチック製の素材がばねで

弾かれる音、わずかな間において蛍光灯が瞬きした。空間から暗闇が消える。

「……」

「二十年前の代物だ。『一防』は冷戦時代の遺産というがまだ十二分に現役……ここそ過去の遺産と呼ぶべき場所だな」

大迫はそれだけ言うと言飯田を気にかける様子もなく中央の机に置かれたコンピューターを起動する。上司にだけ作業をさせる部下というのも考えようであるが、しかし大迫から飯田への指示はない。

まるで自分の、いや全てのことを拒絶するような雰囲気。これだけは自分の手でやってしまいたい。そう彼の背中が語っているように感じられた。

飯田は待機の姿勢を保ちながらその部屋に視線を走らせる。収容できるのは十数人程度だろうか、宙に吊られた蛍光灯の向こうには息苦しく感じない程度の空間が広がっている。机の上にはほとんど物が置かれておらず、使用頻度が少ないのは感じられたが……埃などが積もっている様子が認められない以上、完全に放置されたわけではなさそうだ。一防の付属施設なのだから当然といえば当然だが、それなら使えばいいものを。

「これを見る」

飯田がそんなことを考える間に、彼の上司は準備を終えたようだった。大迫が取り出したのはありふれた記憶媒体。

辛うじて液晶への更新だけは済ませてあるコンピューターの画面に向き直ると、データ管理の徹底を促すためにカバーが被せられたUSB端子に差し込む。

「……」

画面に表示されたのは、日付だ。2021. 19. 7——その映像が八か月前のものであることを示している。

「平成33年7月19日。海洋科学開発機構の調査船である「おきしま」がもたらした映像だ……公船としては、初の『犠牲』だったな」

映像が流れ始めた。画面端に映されたマストがこの映像が船内の

監視を行う目的ではなく、外洋の観察を行うために撮影されたのを語っている。

飯田は表情を動かさないうまま、小さく呟いた。

「証拠映像が、あったのですね……」

「海洋国家である我が国にとつて、貨客船破壊は看過できない事態だ」
大迫はそれだけ言う。飯田も黙ったまま画面に目を注ぐ。

——貨客船への破壊行為。

これが始まったのは東京オリンピックの興奮冷めやらぬ2020年末のことであった。当初は事故扱いとされていた客船「はわい丸」の遭難は、その残骸が発見されると同時に大きな国際問題へと発展した。

破口は船体下部に一箇所、しかしその常識外れの大きさや「はわい丸」が座礁の危険性のある海域を通過したわけでもないことから単なる難破でないことは確か。急遽規模が拡大された事故調査委員会が導き出した結論は……『潜水艦による魚雷攻撃』というものだった。
どこが？ なんのために？ これまでの東西対立の歴史を紐解いてもこのような動機すら不明な事件はなく、西側による自作自演との憶測すら飛び交っていた。

映像は進んでいく。時折船員の声が入ってくるが、未だに画面の中には平穏な海が映し出されている。

「……」

「おきしま」は全船員が行方不明となり、残骸も発見されていない。ここに映像があるのはただ単に映像を逐次衛星経由で送っていたからだろうか……飯田に残るのは疑問である。

なぜ使わなかったのだ？

被害は拡大した。この一年と三ヶ月続いている一連の貨客船破壊による損害は既に十二隻。当然ソビエト・ロシアを筆頭とする共産陣営は事件への関与を否定。しかし犯人というと他に妥当なものな

いわけで、ひとまず西側諸国はSEATO南シナ海掃海群を設立するなどして対処にあたっていた……こんな映像が残っているならば、使えば良かったものを。

「不満そうだな」

飯田の考えを読み取ったように大迫が言う。

「……いえ」

「実際、一度は東南アジア条約機構軍に提供される予定だった。日付はその名残だ……海軍が止めたがな」

その言葉に飯田は何も言わない。それは海軍幕僚長の判断であり、飯田の役目はその補佐である。飯田の沈黙を見た大迫は、横目だけを飯田にやる。

「見ていろ」

言われずともそのつもりである。飯田は画面に意識を注ぐ。画面の中では状況が動き始めていた。

「沖繩の写真と比べてどう思う？」

飯田は信じられないといった様子で呟く。

「確かに、沖繩のよりも原始的です」

これが大迫に「進化」という言葉を使わせた理由なのだろう。

「……今現在我々は、沖繩での一連の動きを「攻撃」として認識し、それに基づいて対処を行っている。そちらの方が都合がいいからだ」

大迫は、飯田の上司はそれだけ言った。飯田は何か返答を求められたわけではない。だから何も返すことはしない。だから沈黙を保つ。しかしその沈黙は、言うまでもないが困惑からであった。

『やつら』は一体何だというのだ。今まで見てきた写真は全て軍事向けだ。技術と資金が注ぎ込まれた観測機器のはじき出す映像の画質が悪いなんてことはなく、明確に、くつきりと見えている。生物兵器？ 化学兵器による海洋動物の汚染？ もしくはそれらに見せかけた無人機？ いくつかの可能性が——今日になってから何度も繰り返し浮かんだ可能性が——脳裏に浮かび、そしてほぼ同時に消されていく。

大迫は『やつら』を国のものとも、個人のものとも思っていないようであった。ではなんだと？

飯田が次の言葉を待つなか、大迫は椅子へと座り込んだ。一応は高級調度品に違いない椅子の関節部から軋む音がして、そこに身体を沈める海軍幕僚長。

「雷」は沈んだ」

大迫は声を低く、重く吐き出す。飯田の脳裏によぎったのは、彼からの呼び出し文書。

『十束剣ハ健常ナリ』

彼がこの短い文字列で言わんとしていたのはこの件が勃発したというだけでは決してないだろう。なんせこの文字列が意味するのは国防が根本的に揺らいでいるという意味だ。駆逐艦一隻程度の喪失で国防は揺るがない。

では、なにによって揺らいでいるというのか。

「沖縄中部への上陸。確かに航空基地や誘導弾保管庫が集中している中部を先に押さえられたのはその後の行動に多少の影響は及ぼすだろう」

そこまで言うと、大迫は飯田へとその双眼を向ける。

「だが、飯田……ことは既にそういう段階にない」

その言葉と同時に映像の再生が終わって沈黙していたコンピューターの画面が瞬いた。表示されるのは地図、いや作戦地図だ。

「これは……」

大量に印字された英字の活版。アメリカ式の兵科記号が示す通り、アメリカ軍の作戦計画であることは明らかだ。

そして飯田だって、この図ぐらいなら見たことがある。これは万単位の兵力を用いたとある離島への攻撃計画だ。

「氷山作戦だ。知っているな」

「……二次大戦中、米軍が立てた沖縄上陸作戦です」

セリフが決まっていたかのように口を開く飯田。だが実際、これ以外になにを言えばいいというのだろう。

「この作戦はペーパープランのみで実際には実施されなかった。ですが……」

「中部に上陸、南部の主力を撃破後、北部の部隊を掃討する。それが『やつら』の狙いだろう。方針としてはこの作戦と一致する」

「……ありません。中部に上陸したのは偶然であり、上陸地である読谷の北部には山岳地帯が広がっていました。南下するしかなかつたんです」

「米軍だって同じだろう。山岳部を、それも敵国の山岳を攻めるのはリスクが大きすぎる。だから中部で分断し司令部のある南部を制圧。北部に投降を呼びかける腹積もりだったはずだ」

「大迫閣下……」

「あくまで仮定の話、その通りだろう。しかし今のこの状況を都合よく説明するならこれがちょうど良い」

そこで大迫は言葉を切った。重い沈黙がゆるやかに流れる。今の話はあまりに合理的ではないものだ。憶測に憶測を重ねた代物だ。それが海軍という組織の相当な上位に立つ人間の口から飛び出してくる。それがどれほど許容しえない行為であるか、それは目の前に立つ大迫善光海軍幕僚長自身が最も分かっているはずであった。

「だからこそ……海軍幕僚長がこの仮説を表立って主張するわけにはいかないのだよ」

その言葉が、大迫が飯田をここに連れ込んだ理由だった。

——西暦2022年3月2日。東京——

府中に立川……例をわざわざ挙げずとも、この街が東京に名を変えて以来多くの陸軍施設が設置されている。首都防衛という大役を担うそれらの土地は今でも一部が陸軍の所有であるが……時代の変遷の中で所属を変えたものもある。代々木公園なんて民間開放の分かりやすい例であるし、立川飛行場が空軍の所管となったのも大きなニュースだったことだろう。

そんな陸軍より譲り受けられた府中市の一角に、統合幕僚本部の第一庁舎は存在する。実際には核兵器にも耐えられる鉄筋コンクリート造だというのに赤レンガで化粧したその建物は、なるほど化粧した分だけ見た目はお洒落だ。そんな第一庁舎の窓から、海軍幕僚長である大迫善光は天辺から降り始めた太陽を見た。

「……もうこんな時間か。遅いが昼食にしよう」

その言葉に彼の補佐官である飯田が釣られるように腕時計に目をやると、既に時計は二時を回ろうとしていた。思ったよりも長く続いた会議だったなど、そう飯田は数時間ぶりに見る窓からの風景に思いながら歩を進める。

目指す先は、無論食堂だ。

統合幕僚本部の設立。当時はあの陸軍と海軍がまさか——多くの国において、陸軍と海軍の仲が良くないのはよくあることである——と驚かれたものだが……時代の流れ、すなわち戦術の高度化と戦争の短期決戦・局所化によりいかなる作戦も各軍単独で行うものではなくなった。国家という統率の取れた有機体を維持し、そして戦争という最大級に国としての価値を問われる外交戦術では動きを誤らないためにも一つの国の軍隊は同じ首脳部の下に組織されるのが適当というもの。

実際の指揮権は三軍別々と——陸軍なら内地総軍司令部、海軍なら連合艦隊司令部、空軍なら航空総軍司令部といった具合に——することで各軍のメンツを保ちつつ、各司令部への統一された「助言」を行う。それが統合幕僚本部の存在意義であった。

すなわち、統合幕僚本部で決められたことが、日本国自衛軍の方針となるわけだ。

「今回の被害想定は効果てきめんだったな。あれだけの見積もりを見せられれば、無理してでも沖縄奪還をと叫ぶ輩も減ることだろう」

沖縄本島陥落を受けての緊急の統合幕僚会議の結果は、まあ海軍にとつては上々というべきなのだろう。沖縄を占拠した敵戦力の分析と、なによりも今後の対処についてが話し合われた先程までの会議での最大の争点は今後の方針……すなわち、「奪還か防衛」この二択であった。奪還とはもちろん沖縄の奪還。防衛というのは、沖縄の二の舞を避けるべく各地の防備を固めるという意味である。

「ですが奪還派はこの程度では諦めないかと。むしろ今後の世論に後押しされ拡大する可能性も捨てきれません」

もちろん奪還を訴えているのは主として陸軍の幕僚たちだ。上陸の一日前に通報を受けていながら敗北を喫し、しかも反撃が可能とされた沖縄本島北部では海岸沿いに浸透された結果山中に部隊が取り残される事態が続発……結果として九州からの増援含めて万単位の兵員を地上から消してしまい、それどころかその数十倍の民間人を戦鬪に巻き込むんでしまった陸軍にとつて、沖縄を奪還することにより何とかして世論への言い訳を作ろうとしているのだろう。

しかもそれだけではない、軍の方針が防衛となれば既に草案を作成している海軍主導になりかねない。大迫海幕長は主導権を握るために草案を飯田に作らせたのだから、陸軍がそれを嗅ぎ付け警戒するのは当然と言えるだろう。

つまり現時点での沖縄奪還派とはまだ、単に陸軍の都合により誕生した意見に過ぎなかった。

「既に沖縄のインフラは完膚なきまでに破壊されている。奪還したところで再建には途方もない予算と時間が必要だ……そして奪還の戦力を抽出すればするほど、まだ国民がいる地域の防備が薄くなる。どっちを優先すべきかは明白だろうに」

もつとも、最終的に判断を下すのは統合幕僚本部ではないのだが。そう付け足した大迫は昼食の乗ったトレイを受け取った。将官クラスともなれば割り振られた執務室に食事を持ってきてもらうことも出来るはずだが、よほど多忙でなければ彼はそんなことはしないのである。

「……」

豪勢な人だな。とは前から思っていたので今更言うつもりもない。彼の目の前に置かれているのは脂たつぷりのステーキ、ナイフを走らせればそのこげ茶の装甲板に隠された柔らかな赤みが現れる。

食材をすりつぶして作られたソースがその赤を染めていく。そんな様子を眺める彼は今にも鼻歌を歌いだしそうだ。やはり自分の上司は肝が座っている人間だなどと、飯田は改めて実感する。ステーキと肝の据わり方は関係ない？ いや関係あるとも、いくら会議の前に情報を知り必要な根回しを済ませているにしても、自身にあの馬鹿げた草案の立案を命じたのが紛れもない彼だとしても、やはりここまでどっしり構えていられる人間は少ない筈だ。

そんな大迫は咀嚼を終えると、飯田に視線を投げた。

「今日は随分と小食だな。昼は食べないほうがいいと主張する奴もいるが、お前は食べないと体が持たないだろう」

「……」

大皿の大迫と対照的に飯田の目の前にはコーヒーカップがひとつだけ。湯気だけで腹が膨れるわけがない。しかし飯田はどうにも食べる気になれなかったのだ。コーヒーに手を伸ばすこともしない。というかそもそもコーヒーなど飲まない質なのに、どうして受け取ってしまったのだろうか。

「おい、こいつにカレーでも持ってきてやってくれ」
「閣下」

大迫は近くの職員へと声をかける。飯田は止めようとするがもちろん階級は大迫のほうが上の訳で……統幕本部の職員はさっさとカレーを取りに行ってしまった。

「これだけ早くやつらの侵攻予想と防衛の草案を作ったんだ。それに見合う栄養は補給しておけ」

大迫はステーキに視線を注いだままそう言う。

「はい」

そうして少しも待たずに飯田の前に置かれるカレーライス。今日は水曜日なのだが……いや、カレーの曜日にこだわるのなんて海軍だけだ。細かいことは気にしないことにする。実際、よく煮込まれたカレーはまるで流動食のようで少なくともステーキよりかはのどを通りやすかった。今はそれだけで十分だ。

「ところで飯田」

大迫が再び口を開いたのは、彼のステーキが半分ほどになった頃だった。

「私が食べているこの肉が、どこ作られたか知っているか」

「いえ、存じ上げません」

その言葉に大迫はうむ、と大きく頷く。

「私にも分からん。恐らくは米国かオーストラリア、もしかすると日本産かもしれない」

ところが彼はこう続けるのだ。

「書いてある限りでは日本産だがな」

「……」

「産地はそれが育った場所だ……だが、それらを育てる飼料はどこから来る？」

牛肉を1kg用意するのにかかる飼料はだいたい11kg。加えて、美味しい肉には穀物飼料が不可欠だ。ここ数十年の世界情勢から自給自足の必要性も少なくなり、人口が増えても山ばかりで自給率は徐々に低下しているこの国。全ての飼料が生産できるはずもない。

「そう考えればまあ、私が今食べているこれは外国産といって差し支えないだろう」

大迫は皿の上に寝転がっている食材を一つ一つ食べてゆく。まるで、それぞれの産地を確認するように。

「米は自給率100%と言われているが、単に米の代わりがあるから100%を保っているだけだ。前々からパンの人気も上がってきているしな……小麦の自給率はいくつだったかな……思い出せないが、かなり低かったはずだ」

大迫がなぜこんな話をするのか、飯田には掴みきれずにいた。もちろん『全海路の封鎖』は草案シナリオに組み込まれている。既に沖縄の件が貨客船の破壊行為のさらに延長線と解釈する報道が多いように、ことが落ち着けば誰もがその可能性に怯えることだろう。だが大迫がしているのはどれもわかりきった話だ。海路は封鎖され、食糧、エネルギーは輸入されなくなる。

「ですが統制を行えば食料に関しては大きな問題はない。違いますか」

一食分の牛肉を作るために消費される穀物だけで何人分の空腹を満たせるのだろうか。この国は足りない足りないと言われつつ何故か食料が豊富にあり、むしろ豊作による価格破壊を恐れているぐらいだ。隣中華民国の国では吐いて捨てるほどの食事を振舞うことが最高のもてなしだという。足りないようで、余っている。

馬鹿みたいな話だが、それが共産主義を以てしても克服できない、むしろ共産主義のおかげで克服ができないと証明された真実だった。その実、海上封鎖は生活レベルを落とし国民の不満を高めることこそあれ、決して国民を死に追いやるほど深刻ではないのである。

「……」

しかし、大迫は咀嚼を止めてまで飯田を見据えていた。普段から口数が多い彼らしくない。飯田はそう感じた時、大迫はおもむろに口を開いた。

「……実際、食料は何とかなると私も考えている」

そう言いながら大迫はステークをナイフで割く。

「だが資源はどうだ？」

飯田は小さく頷く。実際、それだけが問題だった。

「満州からの石油・石炭は対馬海峡の警備を強化すればいい、だが中東から運ばれてくる石油はどうする？ アフリカやインドネシアから運ばれてくる希少資源は？ いずれの資源もやつらの活動範囲内を超えてやってくるのだ。豪州からの輸出だって脅かされる」

先進国が先進国たるために必要なもの。それが産業であるのは間違いない。日本の重工業はその多くが満州を始めとする大東亜経済会議加盟国に移転したとはいえ、未だ最先端産業は日本の十八番である。それらを生産するために絶対的に必要な資源、それらを獲得するために島国である日本は海路に頼るしかないのである。

「私の言いたいことは分かるな？」

そう言葉を切って、大迫は口へとステークを運んだ。海上封鎖の可能性は、工業国を維持するための資源を失うということである。これをされた日に日本は干上がる。

もちろん対策は可能だ。だからそれは可能性でしかない。

だが、この恐ろしい可能性に……果たして金融街の人間は耐えられるだろうか？

「……この国が敗北を喫すれば喫するほど、海運会社は日本行きを嫌う。そうでなくとも、迂回ルートを取ることは必然的に価格を吊り上げることになる」

ところ変わって、統合幕僚本部第一庁舎の一室。海軍幕僚長に割り当てられた部屋には代々受け継がれてきた掛け軸や直近の観艦式で撮影した愛宕型巡洋艦の雄姿、そして飯田の教養でも分かる著名な壺

などが置かれていた。執務机脇に置かれた日章旗はこの場所が公務を行う場であることを主張し、執務机の上に置かれた金属のプレートには大迫の名前と彼の役職が刻まれている。

そんな調度品に囲まれながらも、窓の外に視線を注ぐ大迫の背は決して安堵に満ち溢れてはいない。

「だからこそ、我が国はこれ以上の敗北は避けなければならない。防衛においても、攻勢においても……ですね」

「そうだ」

飯田の言葉に同意を示し、振り返る大迫。それから素早く机へと取りつくと、おもむろに筆を取り出した。

「今回の会議で三軍共同の対策チームを近いうちに設立するという話はまとめた。だがそれが実際に動き始めるのはどうやっても二週間後。現実的に考えるなら年度変わりになるだろう」

海軍幕僚長の筆が滑る。何のためらいもなく文字列が長くなっていく。

「……よって、海軍は今から動き始める必要がある」

それは海の管轄が海軍であるべきだから。陸軍や、ましてや空軍に先を越されるわけにはいかないから。

大迫の筆が宙に浮いた。そのまま筆立てへと戻される万年筆。大迫はゆっくりとその紙を持ち上げると、飯田に渡す。

「海幕付の対策チームを編成する。責任者は飯田、お前だ」

そうなることは昨日から分かっていた。だから飯田は戸惑うことはない。だがそれでも、受け取った命令書はふわりと重い。

「はっ」

「室にはお前と木更津を入れておく。ひとまずは補佐官と兼任してもらうことになるが……このチームは後に統幕本部付の三軍合同対策部門の母体となるべきものだ」

その言葉を聞きながら飯田はその文面を見る。海軍幕僚長の直接の指揮下に入るのであろうその部署は「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室」とやけに長ったらしく命名されていた。これで室員が総勢二名だというのだから、なかなか冗談のような

組織だ。

だが大迫たちにとっては、海軍が動き出したという事実だけが重要だった。人員は明日にでも増やせばいい。仕事場は来週オフイスにでも用意すればいい。どうせ海幕の内部組織なのだから予算はゼロだって構わない。

だが編成は今日だ。飯田は直立。

「飯田孝介。琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室室長、確かに拝命しました」

それを聞いた大迫は、おもむろに頷いた。

「うむ……やはり長いな」

それから先は早かった。飯田は大迫と共に霞が関の海軍省ビルに併設される海軍幕僚部に戻り、室の編成に関する事務処理を次々と――それこそ違和感を覚えるほど早く――こなすと、海軍大臣がそれを内閣へと報告、その日のうちに承認を得るまで話は進んだ。総理としては一刻も早く国民を安心させる対策部署が欲しかったのだから内実などどうでもよく、室の設置は即座に談話として公表されることだろう。

これで大迫海幕長のシナリオ通り、三軍合同の対策部門設置への話は海軍主導となるに違いない。

そのような形でようやく一段落ついたこともあり、飯田孝介こうすけは彼女の家へと帰ってきていた。帝都急行グループが開発した閑静な住宅地にある彼女の家。約50時間ぶりの帰宅である。50時間という長く聞こえるが……まだこの国が有事の真っ只中にあることを考えれば、むしろ驚くべき程早く帰ってこられたというべきだ。

「ただいま」

鍵を回し、扉を開ける。玄関口は相変わらず何もなく、華を添える

ように飾られた植物の香りが鼻腔へと流れてくる。靴を脱いでいると廊下から彼の妻が現れ、普段通りにただいまのキスを交わしてから靴を預ける。

部屋に入ってから流れ作業だ。軍帽を取り、制服を脱ぎ、そしてそれらを定位置へと戻していく。普段ならここで二三言を伴侶と交わすものであったが、今日はどちらも一言も発しない。気遣ってくれるなら話題を選ばず声をかけて欲しいものだが、こちらも話題を見つけれない以上はお互い様だろう。

「あ、お父さん。おかえりー」

夕食を出すと言ってパタパタとキッチンへ向かう妻の後から居間へ入ると、畳の上にごろりと寝転がった娘、飯田望^{いいたのぞみ}が飯田を迎えた。「相変わらず寝転がっているな、お前は」

「いーのいーの、今日もたっぷり勉強したんだしね」

そんな娘には何も言わないでちやぶ台前に陣取る。亭主の帰りを待ち受けていたのであろうひっくり返された茶碗と箸。ようやく息をつける自陣に帰ってきたことを実感するのには十二分の景色だった。家族の息遣いがあればなおさらである。

と、テレビのアナウンサーが話題を変えた。

『………続いて、先日沖縄県で発生した琉球諸島事変についての情報です。動画共有サイトで話題となっている新種の生物とされる映像と今回の事変について、与党幹部g

途切れるアナウンサーの声。テレビが故障したわけではない。画面が切り替えられたのだ。

父は娘を見る。彼女の手にはリモコンが握られていた。

「やっぱり民放のニュースは適当だよね、何言ってるかわかんない。ねえお父さん？」

「………別に消さなくてもいいんだぞ」

報道など目を瞑っていても入ってくる。こればかりはどうしようもないというものだ。しかしそれを聞いた娘は、どこか不機嫌そうに

なつて顔を背ける。

「違う、アニメ見るの」

それから思い出したように録画機のリモコンに手を伸ばす娘。数秒後には視聴途中だったのだろうアニメーション番組の再生が始まる——舞台は1948年のロンドン。五輪の裏で繰り広げられる陰湿な諜報戦を華麗に描くスパイアクション作品だ。

と、目の前に置かれる夕食。焼き魚を搭載した焼物の皿。陶磁器に盛られた湯気の立つ白米。あと小皿が数品。

「ああ、すまないな」

そう言えば小さく微笑む孝介の妻。揺れる髪は娘と同じ——いや、彼女から娘に遺伝したという表現が適当なのだが——明るい茶髪。それからテレビの中の風景に気付いたようで、じつと視線を薄型液晶の画面へと注ぐ。

「……」

孝介はなにも言わずにその様子を見守った。彼女には英国から落ち延びて来た貴族の血が混じっている。平和の祭典である1948年ロンドンオリンピック。それから数か月も待たずに始まった世界革命戦争。ロンドン、いやブリテン島は彼女の祖父や祖母の故郷であるわけで……それが過去のものとしてフィクションの舞台になるというのは、どうなのだろうか。

と、長い間見つめ過ぎてしまったらしい。彼女は孝介を見ると、それから微笑みを浮かべ夕食が冷めてしまうと指摘する。片言の日本語なのはいつも通りだが、そこにこちらを気遣うような色があるのを見逃すほど鈍感ではない。

「……そうだな、頂こう」

箸を取り、食材への感謝を込めて挨拶。口へと運び、咀嚼する。確かに考え過ぎなのだろう。別に彼女だってアニメくらい観るに決まっているわけで、それを何でもかんでも望郷の想いに結び付けるのは彼女に失礼というものだ。

二三口食べてから、ふと手が止まる。

あの日。バトルオブブリテンを乗り切ったはずの王室空軍をあざ笑うような大量の航空機がドーヴァーを突破したあの日。空を埋め尽くさんばかりに咲いた落下傘の白い華から民衆は逃げるように避難船へと飛び乗ったという。

——こんなことを思うのは、それが沖縄の映像と重なるからだろうか。

どちらも孝介は資料としてしか知らない。ただ撮られた時代が1949年か2022年かの違いしかそこにはない。いずれも受け継いできたその土地での暮らしを投げ捨て、命だけでもとただただ逃げ惑う姿をそのままに映した映像。

だがそんな彼らを追うモノ。それだけが明らかに違った。赤軍の急速なブリテン島攻略は何か月も練りに練られた作戦に基づくものだった。だが——

「……」

——なんだ。

あいつらはなんだ。なんなんだ。

沖縄には師団規模の部隊が展開していた。数十の爆撃機と一個機動艦隊が展開していたのである。密度的には沖縄以上に軍が展開している場所など存在しやしない。しかも完全な奇襲ではなかったのだ。陸軍は——完全であったかどうかはともかく——準備を整えたうえで戦いに臨んだはずだった。

なぜ負けたというのだ。数で押し負けた？ いやそんなことは聞いてなどいない。なぜ負けねばならなかったというのだ。あれはあまりにも醜い。とてもじゃないが人間の作り出したものではない。しかし自然の作り出したものでもないだろう。もしあれが自然の産物なら今すぐダーウインを糾弾してやるつもりだ。

我が国が負ける理由が、どうして転がっているというのだろうか？
いや分かっている。それは傲慢というものだろう。この国が国家である以上。人と人の関係によって構築される以上。この世界が優劣を前提とする以上。この国が負けることはあり得ることだ。そうだが奇跡だったのだ。第二次世界大戦でアメリカと講和を果たせたのも、結論から言えば日本の力によるものではない。
だがなんだ、この惨状は。

沖縄県の人口は百万を優に超える。そしてその多くは沖縄本島に住んでいた。いったい何人の脱出が叶ったのだろう。そんな考えても仕方のないことを考える。

あんなのが我々の生活を脅かしている。それに納得しろと？
我々は学び舎で、練習艦で、図版上で、司令部で、そして戦場で様々なものを積み上げてきた。その洗練されたもの、そして実践してきたことはどれも効かないというのか。なら自分自身が同期と共にやってきたことは何だったのだろうか？

そこでふと浮かんだのは同期の、118期の首席である奴の顔だった。考えないようにしていたが、奴は「雷」の艦長だった。琉球諸島事変における海軍の喪失は「雷」のみだ。

孝介はそんな悪い方向へ転がり落ちそうな考えを打ち消す。今日ここで栄養補給を済ませれば、後はいくつかやるべきことを片付けてから眠りに就くのだろう。そして朝を迎えると同時に軍服に身を包み、職場へと出かけるのであろう。

やるべき仕事は決まっている。その価値と重大性は理解している。それをこなすことが、この国を護ることである。

彼は、再び箸を動かし始めた。

定義すべき存在

H34. 3. 6 《X—239 days》

——西暦2022年3月6日。北海道——

「中佐、まもなく目的地です」

その言葉を聞いた飯田は窓の外に目をやった。要人輸送も想定しているこの小型機の窓は軍の所有物にしては割合大きく、椅子の座り心地からも快適を重視して作られていることがよく分かる。

窓の先には延々と続く海岸線。砂浜というよりも崖がちで、不規則にかつ暴力的に変化する黒い岸壁には添えられるように白い雪が盛り付けられていた。飯田はその雪景色から逃れるようにその景色から眼を逸らす。そして、誤魔化すように先ほどの報告を送ってきた部下へと声をかける。

「木更津」

「はい」

答えるのは木更津海軍中尉。大迫海軍幕僚長が飯田に付けてくれた幕僚部の士官、まあ要するに飯田の補佐役である。海軍幕僚長補佐官の補佐役と聞くとなんだか日本語がおかしいようにも感じるが、まあそういうことなのだから仕方がない。

「お前、択捉に来たことはあるのか？」

「はい、大湊勤務の際に視察で」

すました顔して言う木更津に、信じられん話だと飯田は口を閉じる。

大湊は北の一大防衛拠点。しかし北の防衛拠点が東北地方に存在する時点で日本が北方において消極的防衛作戦しか想定していないのは明らかであり、大湊勤務は少なくとも中央への道ではない。

しかし彼の経歴を見れば、大湊に飛ばされて僅か半年で戻って来ているのだ——それも海軍省に、である——。いったいどんな理由で戻ってきたのやら……。

そんな考えてもどうしようもない考えを回すうちに航空機は高度を落とし始め、ただ真つ白なカーペットにしか見えなかった雪原も微妙な起伏をあらわにし始める。少なくとも冬だけは低認識な色彩である白に塗られたレーダー施設を確認するころには、機体は滑走路へと滑り降りていた。

航空機は低速で滑走路から退避すると、エンジンの音をより一層絞る。扉に取りついた要員がコンソールを操作することで、与圧されていた機内の空気と北の冷たい空気が交じりあう。それを合図に飯田は航空機の数段しかないタラップを降りる。木更津もそれに続く。

「……やはり、雪景色には慣れん」

飯田が格納庫や緊急車両の待機施設、気象台など屋根が等しく雪の白さで装飾されている滑走路脇の建造物群を見ながら呟く。雪景色が嫌いなのではない、雪景色を見るのが苦手なのだ。

飯田たちが乗ってきた飛行機は小型であったが、彼らを迎える空港は広い——これはこの空港が観光客を乗せた大型ジェット機の着陸を想定しているためだ。その証拠に駐機場の向こうには旅客ターミナルと思いき小洒落たデザインの建物が客を待ち構えている。

それを一瞥した飯田は視線を前方へと戻す。既に航空機の前には海軍将校の外套に身を包んだ男と下士官数名——佐官相手にはやけに豪勢な出迎え——が飯田を待ち構えているからだ。外套は飯田と目を合っただのを確認してから一步前に出ると、丁寧な調子で挨拶した。

「単冠根拠地隊司令の大岡です。択捉島へようこそ」

択捉島。

それは北海道の東に位置する細長い島である。幕府軍と帝政ロシアが戦火を交えた地、日米開戦の出発点、日ソ戦の激戦地のひとつともなれば、歴史関係の史跡を見に訪れる人も少なくない。北海道地方特有の手つかずかつ雄大な自然も観光資源となり、観光客を引きつけ

ている。

しかもそれだけではない。島内の電力供給を全て地熱発電で賄うこの島は地熱も含め地下資源も豊富、レアメタルの一種であるレニウムを産出する茂世路岳の他にも金鉱があるという指摘があり、鉱業なども含めて今後の開発が期待されているそうだ。

まあ今の飯田たちにそんな情報は関係ない。ここ日本国北海道紗那郡に、国内のものとしては最東端の海軍基地があるということだけが重要だ。

「まさか司令自らお越しただけとは……海軍幕僚部の飯田中佐です。よろしくお願いします。大岡大佐」

飯田の敬礼に大岡が答礼し、それから彼は自動車に乗るよう促す。そして飯田たちが乗るや否や、その自動車は滑走路から走り出した。

空港施設を囲うように設置された柵を通り越せばそこはもう紗那の町だ。流石は観光地というべきか空港周辺や市街地には活気があり、人も多い。

とはいえここが本土から離れた島嶼であることには変わりないわけで……少し離れると車内からの風景は小さな漁村のそれに戻っていく。もちろん観光客はあちこちに行くだろうから誰もいない田舎の風景とはまた異なるのだが、ともかく人の数は減り、そしてついに誰も見かけなくなった。

大岡司令が思い出すように言ったのは、ちょうどその頃であった。「今回は……随分と人数が少ないんですね」

彼の指摘は最もだ。飯田の肩書は海軍幕僚長補佐官であり、今回彼は駆逐艦「雷」の撃沈原因調査、その責任者という形でこの地まで赴いてきている。

もつとも、肝心の「雷」は沈んでしまい、沖縄本島周辺の情勢からも引き上げは叶わない。そのため調査の対象は僚艦として琉球諸島事変で交戦——正確には駆逐艦「雷」が撃沈される様子を観測——し、生還した駆逐艦「時雨」なのだが……まさか数千トンの駆逐艦に将校

がたったの二人という無謀な調査に挑むだろうか。

「まあ、今回は特別ですからね」

そう平然と告げる飯田に、大岡はカツカと乾いた笑い声で車内を満たすことで応じた。

「飯田中佐の仰るとおりだ、こんなろくな修理施設もない泊地に大型駆逐艦を引つ張ってくる時点で普通じゃない」

それにね、と大岡は続ける。

「実は我々、まだ「時雨」の乗員と会ってすらいらないんですよ。なんでも修理に使用するスペースと兵舎、食料だけ渡してくれればいいとか言われましてね……まあ修理とは言いますが、クレーンすらない拵こしらでなにを修理するんだか」

そして、自動車は減速。

「……で、そう命じたのが今「時雨」と乗員たちを守っているあいっつらですよ」

大岡は顎をくいとフロントガラスの先へ。彼が示そうとしたのは『止まれ』と書かれたプラカードを振りながら近づいてくる数人の兵士だった。

彼らの先には閉じられたゲートと簡易な車止め。この道路はどうやら封鎖されているらしかった。

「飯田中佐ですね？」

運転手が自動車の窓を開き、そこから覗き込むように聞いてくる兵士。北方用防寒マスクにゴーグル……見紛うことのない完全武装であった。答える飯田に、大岡司令は意味深げな笑みを浮かべた。

「お知り合いなのですか？」

「まさか。海軍の全職員なんて把握しきれませんよ」

飯田がそう返せば、また大岡の笑う声。それに毒が籠っているのは、やはり大岡にとつての飯田が『中央の人間』であるからだろうか。「でしような……さて、自分の管轄はここまでです」

そして飯田に降車するよう促す大岡。飯田が木更津を伴って車を降りると、兵士たちからゲートの先に置いてある別の自動車に乗り込むよう指示を受ける。主な理由は車止めがぶつきらばうに置かれて

いるからなのだろうが……それにしたって、嫌気がさすほどの嚴重な警備体制である。こんな山道に車止めなど誰が置くものだろうか？

ふと振り返ると、大岡を乗せた車は道を引き返していくところだった。ゲートを守る兵士には小銃を構えている者もいるが、信じられないことに銃先は根拠地の司令の車に向けられたままだ。

「……」

先ほど知らないとは言ったが、このような場所に素早く展開できる部隊なんて強襲揚陸艦乗り込みの特設陸戦隊ぐらいだろう。根拠地を守る特別陸戦隊より選抜され、上陸は訓練のためだけと言われるほどの猛訓練を積んだ強襲揚陸艦付きの特設陸戦隊。海軍の地上部隊としては精鋭中の精鋭である。

そこに陸と「時雨」を接触させたくない連合艦隊司令部の思惑が読み取れ、飯田は知らぬふりをして自動車へと乗り込んだ。

それほどに、主力駆逐艦である村雨型の撃沈——それも、抵抗ままたらぬままの撃沈——は海軍に波紋を与えているのだ。

琉球諸島事変の生き残り、駆逐艦「時雨」。

村雨型の十番艦であり、平成14年に舞鶴にて——ちょうど村雨型七番艦である駆逐艦「雷」の建造が行われたのと同じドックで——起工した。

就役後も「雷」との縁は深く、同じ第一機動艦隊に配属、新型空母の出雲型の就役により第二機動艦隊へ空母「日向」が移されたときも二隻は共に第二機動艦隊へ移り、第二機動艦隊二機艦の駆逐艦として「日向」を守り続けてきた艦。

「木更津、ここまで人影を見たか？」

「いえ」

その「時雨」、今は艦内に人影もない。乗員は恐らく心身ともに疲弊しているだろうから大半は大岡司令が提供したと言っていた兵舎で休んでいるのだろうかとあたりを付けた飯田だったが、それにして

もおかしい……いや、「時雨」乗員にとってしてみればこちらは土足で乗り込んでくる内地のお偉方。必要なければ接したくないのが本音だろう。

「……まあいい」

通常の調査であれば水兵の様子を見ずして判断するなどもつてのほかであったが、今回は事情が違う。接触がないのはこちらとしても好都合であった。

そして、飯田は目的の「艦長室」と書かれた部屋の前にたどり着く。ノックして所属と階級を告げれば、即座に返される入室許可。

飯田は木更津に外で待つよう目配せすると、金属の擦れる音を立てて扉を開いた。

「失礼します」

「久しいな、飯田」

入ってきた飯田を迎えたのは笑みを浮かべた男だった。ワイシャツ姿でのんびりとベッドに腰かけた彼。壁に掛けられた冬服に刻まれた階級章が示すのは飯田と同じ海軍中佐……とはいえ先任の中佐に当たるわけで、飯田は直立の姿勢をとる。

「おう待て待て、お前に敬礼されたら俺も答礼しなくちゃいけない」

ところが相手は飯田の敬礼を手で制する。そうされては仕方がないので、飯田は敬礼を辞めて手を差し出した。

「西園中佐、お久しぶりです」

駆逐艦「時雨」艦長である西園海軍中佐は、飯田の握手に応じた。

「うん、まあ座れ」

西園艦長は普段執務に使っているのであろう椅子を示す。飯田は失礼しますと座り、そして軍帽を取る。それから向き直ると、仕事を始めるべく口を開いた。

「西園中佐、今回は……」

「待った」

西園は飯田をまたしても手で制する。

「階級で呼ぶのはやめろ、研究会みたいに先輩後輩の関係でいこう

じゃないか」

「分かりました先輩」

良くも悪くも、西園「先輩」はそういう人間だった。彼が親しいとした後輩にはあまり階級で呼ばれたくないらしいのだ。飯田はそれを咎められる立場にはないし、それで会話がスムーズになるというのなら従うことに異論はない。ただ、木更津を下がらせておくのはやはり正しい判断だった。そう思うだけだ。

そして一旦訪れる静けさ。今この部屋には、書類上は海軍幕僚長補佐官と駆逐艦「時雨」艦長、実際には先輩と後輩の二人がいる——
—流れるのは静けさというよりか、沈黙。

「……」

西園は両手を合わせてゆつくりと揉み出し、視線もそちらへと落ちていく。何か困っている時の彼の癖だった。

そして、ゆつくりと口を開く。そこから出てきたのは、絞り出すような苦い言葉。

「すまない。私の判断ミスだ」

慰めの言葉など不要なわけで、飯田は事実だけを述べる。

「生還できた時点で、先輩の判断は間違っていないかった……少なくとも、この国を守るといふ点においては」

生還はなによりも尊ぶべきものである。それは人命とかそういうレベルの問題ではなく、そもそも生きていないと報告が出来ないからである。訓練された軍人の報告は、多くの場合写真よりも価値があるのである。

だが西園は引き下がらない。

「防げたはずなんだ。松原だって……」

まだ西園の言葉は終わっていないだろうに、それに対する飯田の答えは異様に早かった——それこそ、条件反射のように早かった。「いえ、仕方のないことです。彼も同じく誓ったように——」そんな定型文はいい！」

瞬間、時間が止まったようにも感じた。飯田はわずかに目を逸らし、

西園は気づいたように手元に視線を落とす。

「……声を荒らげてしまつてすまない」

「いえ、こちらこそ失礼しました」

「もしよければ忘れてくれ」

「大丈夫です。自分も……先輩が羨ましくなることがあります」

飯田がそう言うと、西園は自嘲気味に笑う。

「感情的になりがちなの俺をか？ お前は大迫大将さんの懐刀なんだ、下手な世辞はやめとけ」

本心ですよ……そう言いかけ、飲み込んだ。

初めに彼が先輩後輩の関係と言った時に気づくべきだったのだろうか？ いやそうだったに違いない。飯田もこの件に衝撃を受けているが、それはまさか飯田だけに限った話ではない。加えて目の前にいる西園先輩は目の前で「雷」の喪失を目撃した人間だ。感情的にならないことがあるのか。

だが、ここは日本国自衛海軍。建国以来の独立国たる日本を守る組織なのである。どうして感情的になることが許されよう。飯田は小さく咳をすると、場を切り替えるように西園を見据えた。

「私がここへ来た理由は一つです——何があつたのか。話していただけますね」

「報告書の焼き直しになるぞ？ どうせ目は通したんだろう？」
「構いません」

飯田のその一言で、西園はベッドに座りなおす。煙草を出そうとしたのか西園の手はポケットに伸びかけたが、結局なにも掴まずに口を開いた。

「……この「時雨」が所属する第二機動艦隊が、何のために沖縄諸島に展開していたかは知っているな」

「ええ。南シナ海での貨客船の「沈没事故」の発生位置が、北上し始めていた……それを受けての派遣でしたね」

事故にしては派手すぎて、事件にしては杜撰すぎる。そんな貨客船の破壊行為を止めるべく投入されたのが第二機動艦隊——二機

艦だった。この時点でこの件の担当とされていたSEATO軍部隊は数か国から少しずつ供出された小型艦からなる掃海群であったことから、日本がいきなり空母を投入したのには各国も驚いたことだろう。

「……ああ、最近急増してきた貨物船の「沈没事故」を防ぐため——
—だが、上層部だってソビエトの仕業じゃないことぐらい分かっていたんだろ?」

「……」

飯田は沈黙を保つ。少なくとも大迫海軍幕僚長は知っていた。彼にしてみれば、航空母艦の投入に疑問を抱くことはなかったのだろう。

「ともかく、通常編成より多めに対潜哨戒機を搭載した「日向」率いる二機艦は2月12日に呉を出港した」

——西暦2022年2月28日。東シナ海——

命令の内容はどちらかという戦時よりの哨戒任務。20年代に入ってから初となる久々の戦闘を想定した任務に、当然「時雨」も少なからず緊張していた……と、いうわけではなかった。

「貴様らア、職務に集中せんかあ！　そもそも沖繩には上陸せん！」

「前任伍長?!」

「副長、あれをしろ、盛り上がってるなあ」

沖繩への上陸スケジュールがないことを嘆く水兵たちを下士官が怒鳴りつける風景をたまたま見かけた西園は、彼らに声をかけることはせずに後ろから付いてくる副長へのんびり言った。

「申し訳ありません、最近規律が緩んできています……」

基本的に艦の長が規律などに口を出すことは少ない。部下たちに死を命じる部隊の最上級指揮官というのは、そんなことに構ってられないし……なにより平時から恨まれるわけにはいかないのである。

「なあに、戦意が高いのはいいことだ」

水兵たちが砂浜に思いを寄せることが戦意の高い証拠なのかどうかはともかく、西園は余裕気に笑って見せた。そうでもしないと責任感がやけに強い副長が辛くなってしまうだろうからだ。

『艦長、至急艦橋までお越しください』

そんな時、そう告げたのは艦内のスピーカーだった。この声は航海長だろうかとあたりを付けた西園は、ひとまず艦橋へと進路を変更する。呼ばれたということは何らかの問題が発生したのだろう。艦橋へと向かいつつ、西園は自身の背中に冷たいものが走るのを感じていた。

今回の第二機動艦隊^{二機艦}派遣は貨客船の破壊行為に対処するためとされている。空母を前進させるためだけならもつと都合のいい——例えば、佐世保を母港とする旧式空母「比叡」がSEATO即応海上部隊に供出されている関係で東シナ海に空白が生まれているとか……もつとも「比叡」が即応海上部隊に供出されたのは半年も前の話なのだが、ともかく——言い訳があるだろうに、わざわざ貨客船の破壊行為への対処と名指しで命令が来たのである。

政治的なアピールが主目的であるのは明白であり、実際二機艦はなにか特別な作戦を行ったわけではない。無論これから行うわけでもない。強いて言うなら豊後水道を通過して、哨戒機を飛ばしつつ艦隊の防空演習を行うくらいだ。

今回の作戦は編入されたばかりの防空戦特化で知られる新型の吾妻型巡洋艦^{あづま}の「ならし」。この作戦に対して、西園はそんな認識を抱いてすらいた。

だからこそ、艦橋に上がった西園を出迎えた情報は、彼を十二分に驚かせた。

「海鳥が『魚群』を発見、「雷」と調査に向かえ？」

「はっ」

知つての通り海鳥とは艦上哨戒機のQ14—C「海鳥^{うみどり}」のこと。艦上運用を前提としたこともあり割と大きくてずんぐりむつくり、運用

するのは滑走路の短い基地か空母くらいである。

「それは司令部そのままの言葉か」

「それが……いかにそうらしくて」

認める尉官も困惑気味。当然だ、海鳥が魚群を発見なんて上手くいったつもりだろうか。

「副長、底引き網でも持ってくるんだったな」

「はは、それもそうですね」

西園が冗談臭く笑い飛ばすと、副長もそれに応じる。しかしそんな空気が長く続くはずがない。司令部の命令はその魚群とやらの調査なのだ。動かすだけで金のかかる軍艦を、まさか漁に使うわけもないわけで……魚群が意味する事柄は、その言葉通りではないということ。

ともかく、規定に沿って「時雨」と「雷」は第二ふたひと駆逐隊を編成。双方の艦長が中佐であったため、先任である西園が駆逐隊を指揮することなったのである。

「……しかしまあ、ここまでなら世にも奇妙な物語って感じだ」

沖縄沖での出来事を語った西園は、そこで一旦言葉を区切った。

「しかし本当におかしいのはここからだ」

飯田も頷く。彼自身もその話を聞いたときはひどく驚いたものだ。そんなことが、果たしてあってもいいものだろうか、と。

「……司令部より攻撃許可が下りた、でしたね？」

西園は、深く、ゆっくりと頷いた。

「ああ、そうだ——海底の魚群は沖縄周辺を航行中の全船舶の安

全を害するものである。全力を持って、これを排除せよ」

「……」

飯田は目の前の西園という海軍中佐を見た。彼がその命令に従ったことを悔やんでいるのは明白であった。つまり彼は、そういう人間なのだ。

「生還という事実がある以上、司令も俺の判断を評価してはくれた。だが、「雷」のみでの攻撃はれっきとした命令違反だ」

そんなことはない。数の限られる兵器を用いて戦うならば、初めから全力投入する阿呆などいないはず。ましてや相手は正体不明の『魚群』。全力攻撃に躊躇いを持つのは当然だった。むしろ西園が言いたいのは、なぜ「時雨」が率先して攻撃しなかったのか。ただそれだけ。

初めの報告は巡航ミサイル浮上、だったよ。と西園は振り返る。

それは「雷」がアスロック対潜ミサイルを一発発射した直後だった。海底に着く前に自爆させることで、『魚群』を動揺させることを狙ったもの。

「ソナー士がその報告をする前に、ハッチが空いた音も、それ以前に潜水艦のスクリュウ音も聞こえていなかったんだからもとよりおかしな話だったが……そして、その報告を聞いた次の瞬間には『やつら』が海上に飛び出していた。巡航ミサイルよりはるかにでかかったよ」

ありやまるで……トビウオのようだった。いや、イルカかな。

「……とにかく、「雷」はその一撃で沈んだ。腹を食い破られたんだ」

空に上がっていた対潜哨戒ヘリや「時雨」の報告を複合的に判断すると、飛び跳ねた『やつら』はそのまま重力に従って中部甲板に激突。狙いすましていたかのように——実際に狙っていたことは流石になんかと思いたいが——搭載されている誘導弾に誘爆。それが撃沈の主要因とされている。

「誘爆しなかったなら防げたでしょうか？」

飯田はそう聞く。西園は少し迷ったようだったが、やがて答えた。

「無理だろうな、俺が見ただけでも三体は飛び掛かっていた。誘爆し

なかったところで、船体を滅茶苦茶にされて結局沈んだことだろう」「そうですか」

「雷が襲われた瞬間に俺は転舵を命じた。あんなのと殺りあつて勝てるわけがない。そう瞬時に感じたよ」

回頭が終わる頃には「雷」はほぼ沈んでいた。救助命令すら出せなかった。そう西園は言い、最後に付け加えた。

「時雨」には別命あるまで待機という命令が下りている。恐らくは、ほとぼりが冷めた頃に復帰させるのだろう」

どこかの主要基地に行った瞬間に記者の質問攻めにされたら困るからな。外に出るために冬服をきちんと着込んだ西園はそう言う。帰りもやはり艦内で西園以外の乗員と出くわすことはなく、棧橋のタラップまで見送りに来たのも西園だけだった。

「本日の協力に感謝します。艦長」

「いやなに、俺も話し相手に飢えていたんだ。助かったよ」

北の冷えた大気に白い息を吹く西園。今回の目的である観測データを飯田に渡してきた西園は……いつもどおりの西園先輩だった、そう飯田は思いたかった。

「では西園中佐、ご武運をお祈りします」

タラップを踏む前に飯田は振り返り素早く敬礼。それに木更津もならう。

「貴様らこそ、頼んだぞ」

答礼が返された。

「木更津。意見を言ってみろ」

飯田がそう口を開いたのは、「時雨」が窓先の木々に隠れてからだつた。運転手は沈黙を保ち、木更津は少し考える風を見せてから答え

る。

「……報告書以上のことはなにも」

「そうだろうか？」

「……」

飯田の問いかけに、木更津は押し黙るだけ。

「駆逐艦「時雨」は海軍の中で最も『やつら』に近づいた。『やつら』を知るには現場を知るのが最も効率的な方法だ」

まさかデータを受け取るためだけに来るはずがないだろう。そんなことなら暗号化して衛星経由で送ってもらえば済む話だ。とかそれ以前に、大半の情報は琉球諸島事変に対処するための資料として送信されてしまっている。飯田の目的は、あくまで現場を知るためだった。現場を知ることが必須ではないが、決して軽んじてはならない。

それに疑問を抱いたのだろう。木更津がどこか納得のいかない調子で言う。

「では、そのためだけにこんなところへ？」

そんな訳がない。

「いやまさか、西園中佐との話はいうなら行きがけの駄賃に過ぎない」

飯田のその言葉を証明するように自動車は止まる。降車するよう言われて、飯田と木更津は降車。出迎えるかのように歩哨が立っている。

「こちらです」

歩哨が指し示したのは道からそれて木々の中への道だ。道といっても、まだまだ降り積もったまま溶けない雪を踏み分けて作った獣道とも言えない代物だが……ともかく進む。

その先に待っていたのは、見間違うことのない中型回転翼機^{ヘリコプター}。どこかほのぼのとした操縦席を覆う窓ガラスにゆとりあるスライド式の

ドア。雪を踏み固めて作ったのであろう簡易なヘリポートに佇む真っ白なその機体は、この夕暮れの中ではいやによく映える。

「これは、まさか……」

木更津が驚いたように声を漏らす。わざわざ尾翼に刻まれた番号を読まずとも分かることだろう。こんな艦隊運用型ヘリコプターがこのような僻地にいるわけがない。

「そうだ、第二機動艦隊……二機艦の所属機だ」

琉球諸島事変にて奮戦し、多くの避難民を収容した第二機動艦隊。もちろん「時雨」も二機艦の所属ではあるが、実は「時雨」は『やつら』と戦ってはいない。「雷」の件では確かに生き残ったといえようが、その後の「時雨」は戦列を離れているのだ。

満州軍の輸送艦を安全域まで護衛するという名目こそあるが、「雷」の沈没に居合わせたという理由で外されたのは間違いないだろう。

つまりこれから赴く場所、このCH-60Kが連れて行ってくれる場所こそが……『やつら』と本当に渡り合った部隊、そして琉球諸島事変を余すことなく記録しきった部隊ということだ。

エンジン音が甲高く鳴り響き、回転翼機は空に舞う。夕暮れはいよいよ陰り、真っ暗な世界が訪れようとしていた。

西暦2022年3月6日。北海道沖

地球は球状だ。地球儀を見た織田信長がそれにさして疑問を抱かなかったと言ひ伝えられるように、それはとても合理的な考えだった。だから水平線があり、地平線がある。ひとりの人間に地球上のすべてを見通すことはできない。

だから遠くを見るためには塔を建てればいい。高ければ高いほど地平線は広がる。もちろん塔でなくなつていい。過去には気球が偵察目的で使用されたこともあつた。要は高度が重要なのである。

だから飯田を乗せる海軍所属の回転翼機CH—60Kには、まだ太陽の光が届いていた。水平線が広がって、まだ太陽が沈みきつていないのだ。しかし眼下の海は既に夜の扱いらしく、見渡す限りの真っ黒な世界が広がっていた。

そんな暗黒の海に、光が見えた。北方の海原を進んでゆく航空母艦の雄姿だ。恐らくはこの機体を迎え入れるためなのだろう。必要最低限の誘導灯が光ることで豪勢なカーペットを演出し、それに導かれて優雅に舞い降りる真っ白な回転翼機。トスンと音を立てて耐熱甲板に降りるのを感じるのと同時に、エンジンの音が変わっていく。回転数が落ちていつているのだ。

扉のロックが解除され、飯田はシートベルトと耳当てを外して外へ出た。優雅な見かけとは大違いに乱暴に振り回されるブレードが生み出した暴風が飯田の軍帽を吹き飛ばさんと襲い掛かるが、これしきに屈する海軍幕僚長補佐官ではない。黒い影となつた艦上構造物を
見ながら、飯田はぼそりと漏らす。

「……「榛名」よりずっと大きいな」

思えば、空母に乗り込むのなんて本当に久しぶりである。あの頃と

比べて飯田の肩書はずいぶんと上がったものだが、彼の目に映る空母特有の解放感ある景色は変わらない。かつて務めた初めての艦隊勤務を思い出して少し懐かしい。

だが強いて言うなら、その景色は思い出よりもやや解放感がありすぎた。

そう、甲板上に航空機が一機もないのである。回転翼機だって存在しない。「日向」の全艦載機は出払い、甲板上すらも琉球諸島事変では大量の避難民を収容するのに用いられたというのである。そして避難民を降ろした今、日向型航空母艦の一番艦「日向」はただの箱であつた。

海軍艦載機が撃墜されたという報告は上がっていないから、近いうちに全艦載機が再集結するだろうが……それにしても、異様な光景である。

飯田は耐熱加工の施された分厚い飛行甲板を歩いていく。暗がりの中にわずかに大寫しとなつた数字が見えた。艦の識別に用いられるこの数字、まだ自衛海軍が帝国海軍と名乗っていた頃は数字ではなく文字を甲板に書いていたのだが、同盟国との連携を考えるとこれは不便だという事情から今では数字に切り替えられているのだ。

そんな甲板上の飯田に向かって歩いて来る男が一人。いや二人……片方は大佐で、もうひとりとは将官。間違いない、二機艦の司令である。

その姿を視界に捉えた飯田はすぐさま直立不動の体勢をとり敬礼する。僅かにいる周りの整備兵たちも敬礼していた。

「ようこそ、二機艦へ、話は聞いています」

大佐が答礼後にそう言いながら笑みを浮かべる。

「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室、室長の飯田です。階級は中佐、よろしく願います」

「日向」艦長の向洋だ。むかいなだそしてこちらは――

艦長が隣の将官へと目をやる。将官が一步前に踏み出してきたのだ。

「第二機動艦隊司令、兼第二航空戦隊司令の片桐少将かたぎりである」

そう言いながら手を差し出してきた片桐。飯田は意外な対応に若干驚きつつも、顔には一切出さずにこやかに握り返す。

「長旅ご苦労だったな、海軍幕僚長は元気でやってるか」

と聞いてきた。なぜそんなことを聞くのだろう。確か海軍幕僚長である大迫と片桐は同期ではないし、派としての繋がりもはずだが……そう思いながら飯田は質問に当たり触りなく答える。

「そうか」

その答えに満足したのかどうかは分からないが、片桐少将は飯田に背を向けた。

「ついてきたまえ。貴官の仕事は理解している」

「はっ」

片桐の後ろから続く飯田、そして木更津。大迫と比べると僅かに若い海軍少将の顔つきは見えない。

ふと、片桐の影から声が聞こえた。

「……君は、どう考えているのかね? 『やつら』のことを」

「それは、どういった意味での質問でしょうか?」

質問が曖昧すぎるゆえ、飯田はそう返す。通常なら上官の意思を汲み取って——また同時に、上官も部下が自身の言葉を汲み取ることを前提として——発言するところなのだろうが、今回はことがことだ。片桐はそのまま、いらだつた様子もなく続ける。

『やつら』は何者か、それをどう考えているかだ」

「それを調査するのが、我々の任務です」

片桐が立ち止まる。飯田も止まった。

「個人的な見解を述べてみる」

「……回答を保留します」

個人的な質問ならば、問題はあるまい。

それを聞いた片桐が振り返る。陽が沈んで甲板の輪郭も夕闇に消えかけているが、片桐は笑っていた。それだけはよく分かった。

「流石は海軍幕僚長。保坂さんが一目置くのも頷ける」

それが飯田の上司への高評価なのか、それとも皮肉であるのかは判断しかねた。一海軍軍人としてはいくら片桐少将が艦隊司令とは言え、連合艦隊司令長官を保坂さん呼ばわりはどうかと思うが……そこは気にするべきではないのだろう。正確に言えば、飯田が気に留めるべき問題ではない。

軍組織というのは——いや軍に限らずどの国にも言えることであるが——見栄を好む。というよりか、見栄すら張れないほど困窮しているのならば端から負けたも同然だ。国の保有する軍事力は立派な外交手段であると同時に、他国と付き合うための外交そのものでもある。それを担う軍組織は国家の顔なのだ。

だからこそ、この威圧と破壊だけを想定して建造されたであろう七万七級航空母艦の艦内にも華がある。

「そうだ飯田君、君は吸うかね」

「日向」の艦長公室。様々な装飾が目立たぬように、だがしっかりと存在を主張するその部屋に入ると同時に片桐はふと思いついたように振り返り、それから手のひらサイズの箱を取り出した。もちろん煙草である。嗜まない飯田でもある程度の知識は揃えている手前、銘柄ぐらいはまあ分かる。

だが飯田は、煙草を吸わない人間だった。吸わない以上は断るしかない。

「いえ」

「そうか、最近は吸わない奴が増えたな……時代も変わったものだが、まあいい」

それから片桐は、ここまで連れてきた艦長のほうを見やる。

「艦長、平垣を呼んできてくれ。あれも持つてくるようにと」

「はっ」

航空母艦の艦長に任じられるほどのベテラン大佐が新兵のごとくせかせかと——まるで何かに追いかけられるようにして——退出し

てしまう。

「まあかけたまえ」

そう言いながら片桐が示したのは応接セットと思しきソファと椅子。

「失礼します」

片桐がかかるのを待つて飯田が、続いて木更津が座る。片桐が合図を送るでもなく従兵が現れると、目の前にティーカップを置き紅茶を注いだ。

「英印のセイロンティーだ、口に合うといいんだが」

「ありがとうございます」

それだけ言つてカップを持ち上げ、僅かな香りを楽しむ。それから小さく口に含んだ。上手い。なかなか慣れてるようだ。

しかしその感想は本題ではない。飯田は片桐が口を開くのを知らぬふりをして待った。

やがて片桐もティーカップを置くと、小さく言い放った。

「……海軍幕僚部はどこまで知っている」

どこか怒気を含んだ物言い。やはり、無駄話をする気などこの少将にはないらしい。

「残念ながら、閣下が送られた情報以外は何も」

飯田は自分の丈にあつた言葉を返す。もちろんその返事は想定済みだろう。片桐は表情一つ変えずに続けた。

「そうか」

そこで艦長公室は沈黙。片桐は座り直し、飯田は沈黙を守つたまま彼の言葉を待つ。その間にも、もう一度彼のことを思い返してみる。

片桐吉次。第二機動艦隊司令兼第二航空戦隊司令。階級は海軍少将。司令職を兼任している理由は、先月第二機動艦隊の艦隊司令である神塚中将が病氣療養のために予備役編入されたためとされている。

だからこそおかしかった。なんせ平時にも関わらず代役探しにか月近くもかかつて、そして未だに代役が見つかっていないというの

である。しかも前任が下りた理由は病氣療養、急病でもないようだから予備役にいくのは代役を見つけてからでもよかったことだろう。そもそも片桐は少将である。艦隊司令の職に充当されるのは中将以上であるはずだ。海軍少将を艦隊司令に任命するのは、機動艦隊の下部組織としてわざわざ航空戦隊という枠を設けている日本海軍のやり方に真つ向から反抗するものであった。

このふざけた人事は一時期話題を呼んだものだが——今になつてみれば、沖縄で機動艦隊が素早く動くための事前準備だったということがよく分かるというもの。

要するに、規定の上では地上勤務となる艦隊司令を海上、というか沖縄に居させたかったのだ。地上司令部にお伺いを立てる状況を作らせなかったとも言える。

「あれだけ露骨な事前準備を整えておきながら、そう言えるのか」

だから片桐もこうした口調をとれるのだろう。部下を失わされ、最悪責任まで押し付けられそうなのだ、彼が上層部に並々ならぬ感情を抱いていても仕方がない。

「幕僚部は把握していませんでした。これは、紛れもない事実です」

事実である。これに関する資料など存在しないし、会議で取り上げられたことももちろんない。片桐は黙ったままであったが、そのまま「そうか」とだけ付け足した。

そこで飯田は口を開く。彼の仕事は、ふたつあった。

「片桐閣下は事変発生の発端となつた我が軍哨戒機への砲撃の件をこちらに報告しながら、派遣した現場の駆逐隊にはその情報を秘匿されたとか。その理由をお聞かせ願いたい」

——ひとつ、本業とされている駆逐艦喪失に関する調査。

常識的に考えて、『魚群』に砲撃を受けてもそのことを伏せたうえで駆逐艦二隻を派遣させた片桐のやり方はおかしい。本来的に駆逐艦「雷」の喪失は避けられたのではないだろうか。それは飯田の元々の疑問であり、「時雨」艦長である西園から実際の話を書くことでより一

層強くなった。

「報告は不確かなものであり、可能な限り多角的な報告を必要としていた」

「閣下、このままでは。私は今回事変における駆逐艦喪失を閣下の判断能力が欠如していたために起こったものとして報告せざるを得ません」

ならば彼だって、誰かしらからの指示を受けていたに違いないと考えるのが妥当だ。少なくとも、片桐が本気で駆逐艦を派遣したという可能性よりは妥当だ。

では誰が？ 脳裏では鮮明に大迫海軍幕僚長の顔が浮かびつつあったが、その可能性は限りなく低いはずだった。

そしてそれは飯田がここへ来たもうひとつの目的へと直結する。これこそが彼の目的。

「海幕長補佐官」

片桐はゆつくり言葉を紡ぐ。

「我が第二機動艦隊、及び第二航空戦隊は二週間以内に事変以前の戦力を回復させる。「雷」の喪失は厳しいが、補充戦力なしでもやれない訳ではない」

そして彼は言い切るのである。

「次の機会に『やつら』を殲滅する機会があれば……是非我が二機艦を使ってくれたまえ」

——ふたつ。片桐吉次が『知っている人間』であることを確かめること。

さらに加えて、飯田と片桐の間に繋がりを設けること。

飯田の脅しともとれる問いにも答えることはなく。「次の機会」と司令職続投を前提として力強く返す片桐。もはや疑いようはない。第二機動艦隊は知っていた。沖縄でことが起きることを、そして……『やつら』の存在を。

「司令、こちらを」

まるで見計らったようなタイミングで戻ってくる艦長。封筒に入られた資料が片桐へと渡される。彼はそれを開くと、内容を確認した。

「沖縄沖における我が艦隊の交戦結果より導き出した『やつら』の基本スペックだ。哨戒機に攻撃を行った型を「仮称Ⅰ型」、沖縄本島を占拠したのを「仮称Ⅱ型」としてある」

「統幕部への提出は？」

「飯田君、初めに言っておく。これはとんでもない『仮説』に基づいた研究が多分に含まれている、扱いにはくれぐれも気を付け給え」

『仮説』。

「だからこそ……海軍幕僚長このわたしがこの仮説を表立って主張するわけにはいかないのだよ。」

「……」

「知っておいて損はないだろうが……私と貴官は同じ視点に立っている。覚えておき給え」

——西暦2022年3月6日。北海道——

自動車が止まる。運転手にご苦勞様と声を掛けつつ降りると、目の前にそびえ立つのは大建築物であった。ホテル・サナリゾート。2017年開業の択捉島最大ホテルにて、南関東にて絶大な影響力を持つ帝都急行グループの択捉における攻勢拠点。

照らすライトがこの択捉観光業のランドマークとも言うべき建物に光の化粧を纏わらせ、遙か遠くからでも見間違ふことのない美しさを備えている。

飯田は一瞬だけそれを見上げる。暗闇を照らす文明の光。今の彼には、人類の繁栄を象徴するようにも見えた。こんなことを考えてしまふあたり、やはり疲れてしまっているのだろう。

その実、「日向」にいた時間は長くなかった。踏み込んだロビーは閑散としていたものの人が居ないわけではなく、片手で数えるほどのワイシャツ姿が広げられた新聞や手元のタブレット端末などに目を落としている。そのままフロントにてチェックイン手続きを行い、部屋の鍵をもらうまで僅か十数秒。飯田と木更津が軍服ということもあり、かなり優先順位が高いのだろう。信頼と責任の重さを改めて感じる。

「部屋に入られますか？」

「いや、その前に食事にしよう」

木更津がそう聞いてくる。移動に移動を繰り返したこともあり、飯田としては今すぐ身体を休めたい気分ではあるのだが、まだやるべきことが残っている。食事すらそのついでだ。

「……失礼、食堂はどちらで？」

通りすがりの従業員に声をかける飯田。従業員はこちらですと彼らを先導し始める。ロビーは二階、いや三階部分までくり抜いた吹き抜けになっており、オレンジ色の照明器具が歩く彼らを照らしている。

「択捉島は如何ですか？」

不意に、前を歩く従業員がそう聞いてきた。

「……いやなに、ここのビュッフェはなかなかでしたよ。何より魚介類がいい」

馬鹿みたいな話だ、とは思う。自分は海軍幕僚長補佐官とはいえ、所詮はその程度の職員に過ぎない。わざわざ択捉行きの小型機を用意したり、迎えのへりが来たり、こうして防諜に関わる人間が平然と出てきたりはしないはずなのである。

飯田の考えを感じ取ることなど出来ないだろう目の前の従業員は、そのまま口を動かさず必要最低限かつ十分な声量で情報を紡ぐ。恐

らくは、真後ろの木更津にも聞こえていないはずだ。

清掃完了。

恐らくは穏便な清掃であっただろうと信じたいところではあるが、埃がなければ清掃は完了しない訳で。

しかしこれも、仕方のないことなのだ。

海軍幕僚長補佐官という要職にある飯田が駆逐艦「時雨」に、さらに第二機動艦隊司令に接触した事実。それ自体を隠せても、飯田が択捉へと向かった事実は隠しきれない。琉球諸島事変に対する日本海軍の動きを追っている人間なら簡単に気づくことができるはずだ。

忘れてはならない事実として、既に100万の民間人が沖繩で犠牲となった。襲い来るのは異形。

興味を持つのは民衆やオカルト好きだけではない。当然他国も興味を持ち、そして積極的に情報を得ようと迫って来ることだろう。友好国なら清掃など発展しないものなのだが……。

……まったくもってやれやれである。日本代表になったつもりなど全くないのだが。そう頭の中に思い描いた上司に文句を並べてみたところどころでどうにかなる訳がなく——まして、この件に関しては彼の管轄ですらない——飯田は導かれるままに食堂へと向かった。

いかにも食堂らしき場所が近づいてくると、案内役は役目を果たしたベテラン従業員のような笑みを浮かべて振り返る。

「こちらになります。お食事時間は25時までとなっておりますので、ご注意ください」

「なあ、木更津」

「はい」

飯田の一言に、木更津は食事の手を止めた。海軍中佐と海軍中尉と

いうのは同じ「中」といえど圧倒的な差があるわけで、忠実な部下は上司の言葉を一言一句漏らさずと聞く構えだった。

「いや、そんな肩を張らんでいい。食べながら聞いてくれ」
「はっ」

再び食事の手を動かし始めた木更津を見ながら飯田はしばし考えを巡らす。目の前の木更津はなかなか有能な武官だろう。それは出世コースを迷いなく進み、一度は大湊に飛ばされながらも舞い戻った彼の経歴から見ても明らかだ。

だからこそ、彼に琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室は似合っていないように感じたのだ。

今回の件。琉球諸島事変。

ことが起きて以来飯田はその推移をただ見守ってきたわけだが、今回の件はなかなか説明が難しいのである。沖縄で敗れたのは単純な数の差ではなかったということを知ってしまった。公にされていないレベルでの話は聞いていたが、話よりもとんでもない身体能力を『やつら』は持っている。それを今日、また新たな情報として得ることが出来た。

片桐が連合艦隊司令部を経由せずにこの情報を流したのは途中での漏洩を防ぐためだろう。片桐が「同じ視点」と言った通り、飯田はこの資料を大迫へと直接手渡せばよいのだろう。

そしてまた、琉球諸島事変の、『やつら』の全貌解明へと飯田は進む。我々で対処するしかないのはよく分かる。それが軍人の責務であり、なにもせずとも国民から賞賛の眼差しを受ける所以だ。
だが。

「……いや、なんでもない。忘れろ」
「はっ」

飯田は結局何も言わなかった。

考えてみれば、飯田だってこの件には向かないかも知れないのだ。それなのに、どうしてそれを飯田が彼に言えよう。加えて木更津は大海軍幕僚長が飯田幕僚長補佐官に貸し与えた人材に過ぎない。彼がこの後どうなるかなど、それに言及するのは常識を欠いた行動だ。

そして、既に命令は下されている。

だからただ進むのである。どんなに拙い字であっても、ただ書き足し、進むしかないのである。

個室というのは、意外とプライバシーのない空間である。出入りする人間が少ないゆえに警備は甘く、個々人の私物が配置できるがゆえに物品の管理がし辛い。加えて狭い空間ゆえに各種機器の精度もさほど高いものは要求されない。

ゆえに、何かを作業が残っているのであればそれはロビーで行うべきなのだ。パソコンを膝に置いて平時の文書をまとめる飯田に、ふと声がかけられた。

「飯田中佐」

そしてまた、ホテルの人間を介さずに連絡官とコンタクトが取れるのも利点である。飯田の視界に入る直立不動を保つ彼は、先ほどの単冠湾根拠地隊の人間だ。飯田が答礼、控えていた木更津が迎えるように立ち上がった。

「幕僚部よりの命令書です」

その木更津へと手渡される何か。

「命令書？」

飯田が訝し気な顔をするのは当然だ。なぜ命令伝達程度に単冠湾根拠地、すなわち末端の大湊鎮守府を介する必要があったのだろうか。

「失礼します」

それだけ言って去っていく士官。

「これは……どういうことでしょうか？」

木更津が自問のように呟く。飯田は命令書の収められたその封を開き……納得したように小さな笑みを浮かべた。

「……こりや命令書じゃない、豊原行の航空券だ」

その言葉に、僅かながら目を見開く木更津。

「樺太……でありますか？」

豊原。樺太南部に位置し樺太開発庁が置かれる都市。ここへ向かうなど本来の予定にはなかったものだ。

そして、その情報がわざわざ「大湊経由で」送られてきたことが意味すること。

誘い出す気か？ もしくは既に話を通っている？

「……とにもかくにも、予定を変更。この航空機で樺太に向かう」

「はっ」

「それと木更津」

どつちにせよ、一刻も早い人員増強が必要だ。飯田はメモ帳に素早く名前を書きなぐると、それを木更津に示した。

「明日までに樺太に寄越すよう大迫閣下に伝えてくれ。ソビエトロシア 赤露を相手取るなら……こいつが必要だとな」

——西暦2022年3月7日。樺太——

早朝の便で択捉国際空港より豊原国際空港へ。飯田がその豊原に設置されている第23軍——最果ての樺太地方を守る陸軍北部方面軍、その中でもさらに辺境にあたる樺太に配置されている軍——の司令部へと赴き、そこでとある書類を発行してもらおう。書類とは期限付きの入場許可証だ。何も伝えずとも書類が発行されるあたり、既に話は通っているらしい。

樺太南部の最大都市、豊原。雪解けの気配もない市街道路を分厚い外套に身を包んだ人影がせかせかと歩いていく大通り。そんな場所に面したレンガ造りの陸軍司令部を出る飯田と木更津の頭上には、ちらほらと雪が舞い始めていた。

「……こんな季節に雪が降るのか」

「まだ三月の上旬です。東北地方でも普通に降ります」

そう言ったのは木更津で、神戸生まれで基本は雪と関わりない生活を送ってきた飯田はそれもそうかと返すだけ。雪景色から地方を連想するのがよくないことは分かっているが、彼にとっての雪景色とは辺境の地という意味を持っていた。それとは別に、雪は彼にとって特別に悪い意味も持つのだが——

「雪はお嫌いですか」

「いや、そんなことはない。もう一枚着て来ればよかったと思っただけだ」

不思議がる木更津の様子を見るに、不快感が表れてしまったようだ。あいまいにはぐらかし、飯田は空港へと戻る自動車を探す。

樺太は不思議な場所だ。昔、この南北全長160kmに及ぶ巨大な島は、日露の雑居地帯だったという。それがいつしか南北に分割され、世界革命戦争では日本にとって唯一の本土戦が行われた場所でもある。

北部を獲得後は樺太全体としての開発が進められ、また中東やらアフリカやらに戦力を集中せねばならない海軍の代わりに北方を守る「不沈空母」としての役割もよくこなしてきた。60、70年代には体よい過剰人口の受け入れ先とされ、思わぬほど巨大な都市圏へと変貌した時期もあったものだが、今では往時の繁栄を感じることは出来ない。

それでも、不思議に潰えることなく維持されている地域。それが樺太なのである。

つまりそれだけ成熟した、つまり完結した——閉鎖的な側面を維持している地域でもあるわけだ。

飯田は第23軍の司令部で受け取った許可証の内容を思い返す。それは単に軍の管轄区域に立ち入ることを許可する入場許可証に過ぎない。だが受け取りようによつてはこの書類は北樺太という最果ての地を見るために必要な許可証。ビザのようなものにも感じられる。

「飯田準備室室長でありますか？」

と、彼に声をかける影が。準備室室長とは随分と略してくれた——正式名称は「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室」である——ものだが、しかし準備室室長なのはこの樺太では飯田ぐらいしかいないだろう。

振り返るとそこにいたのは陸軍の軍帽を被った男であった。この寒さだというのに、外套を身に着けていない。

「いかにも。そちらは？」

飯田が名乗るよう促せば、相手は直立不動の姿勢を取った。

「北方特別混成団所属、千鳥少尉であります。補佐官殿をご案内するようにと、団司令からの命を受けてまいりました」

飯田は答礼し、尉官から命令書を受け取る。電子印鑑による電子書類なのはやや驚いた——容易に流出しうる電子書類は、特にこう

いった状況ではまず用いることはない——が、思い直せば今回の命令は漏れていることが前提であった。内容を確認。

「確かに確認した。今日はよろしく頼むぞ、少尉」

「連絡機が空港の方に用意してあります。どうぞこちらへ」

案内されつつ、飯田は視線をすりと後ろに向けてみる。豊原の街は変わらぬ様子であったが、この町並みには彼を監視する目が潜んでいることだろう。

「……」

樺太は不思議な場所だ。このただっ広く完結した島には、地元住民の他には軍人と共産主義者しかない。

北方特別混成団。先日の琉球諸島事変で喪失された南西特別混成団と同様、方面軍の直接の指揮下に置かれ……そして国防上重要な要塞地帯の守備を担当している。

とはいえ、要塞地帯——要塞地帯法を根拠とし、民間人の立ち入りと活動が法的に厳しく制限される——は既にこの国には存在しない。知つての通り、それに関わる補助金などの支出が膨らんだことで2013年に廃止されてしまったのだ。

まあ、あまりに時代錯誤な政策であったことは事実であるから、むしろよく十年前まで維持していたものだと思心するが……ともかく、飯田がこれから向かうのはそういう場所だ。

飯田は窓の外を見る。陸軍がわざわざ用意してくれた連絡機の乗り心地はこの機が小型機であること、そして今日の気象条件が低気圧気味ということもあり決して良いとはなかったが……眼下にのんびりと敷き詰められた雲海の底に広がっているであろう猛吹雪を思えば、連絡機はありがたいものだった。

「……」

それにしても。

陸軍がわざわざ連絡機を寄越す——それも海軍将校のために——なんて珍しい話だ。この様子を見ると、現在飯田が率いている「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室」を海軍の組織から陸海空三軍の組織へと変えるための議論も大分進んでいるのかもしれない。

それは喜ばしいことだ。なんせ——我が国に繩張り争いをしている余裕はないのだから。

琉球諸島事変にて、この国は新たな国防リスクに直面した。

それは『やつら』であり、そしてこの国が誇る国軍がそんな『やつら』程度に瓦解するレベルであることが世界に立証されてしまったことだ。

対策は急を要する。一刻も早く状況を整理し、そして国民及び同盟諸国、即ち西側陣営に安寧を取り戻さねばならない。挙国一致の協力体制が求められるのだ。

たしかに準備室の設置は海軍による名目的なものだ。だが飯田はこれが国家的な存在へと昇華することを望んでいた。準備室が扱うのは海軍だけの話ではない。三軍全体に及ぶ問題だ。さらに先日、東南アジア条約機構が国防大臣級の緊急会議を開いたように、日本の同盟国たちも非常に琉球諸島事変へと興味を示している。大東亜の盟主としても、いい加減身内もめをしている訳にはいかないのだ。

それを理解していない上層部ではないはずだ。だからあとは議論の進展を待っていればいいだろう……待つしかないとも言える。

「準備室室長」

と、飯田をこの連絡機まで案内してくれた陸軍尉官が顔を出した。彼は前方の座席に座っているから、わざわざ顔を出したということは何か用があるのだろう。

「なにか？」

「こちらを」

そう言いながら渡される封筒。ごくありふれた、誰にでも手に入る紙製のそれは、厳重管理を促すいくつかの判子により特殊なものへと姿を変えていた。

「……これは？」

受け取り、そして内容をあらためるまでもなく飯田は顔を曇らせた。押されている北方特別混成団、そして第23軍の印は分かる。

だがどうしてまた、中央即応軍の承認印まで押されているのか。

「機上で渡すようにと命令を受けていたものです」

「……なんで中央即応軍が出てくる」

「それに関しては申し上げられません」

そう言われてしまっってはどうしようもない。飯田は千鳥に関する指揮権を有していないからだ。黙ったまま封を開ける。神奈川の座間に司令部を置く中央即応軍は陸軍大臣直轄の部隊。方面軍を飛び越えて寄越すくらいの案件ということだ。飯田に渡される案件は、もちろん琉球諸島事変に関すること。

樺太への移動命令——琉球諸島事変飯田は今回の事態に非常に興味を持っているであろう東側との接触役を命じられただけと思っていたが、どうやら用事はそれだけではないらしい。

念のため権限が足りることを確認してから、封を開ける。

「——特務実験大隊？」

樺太は重要な拠点だ。日本海への入り口である間宮海峡と宗谷海峡を抱えていることはもちろん、この国の北部に位置するという地理的特徴はこの地を核報復のための一大拠点に変えた——知って

の通りモスクワやパリへの最短ルートは北極海上空を通過することだ。成層圏まで飛ぶミサイルとなればなおさらである。

さらに帝都東京より遥かに離れた最果ての地という事実が防諜態勢をより確固たるものにする。監視すべき出入りする市民が少ないのはもちろん、閉鎖的であるが故に地域住民のネットワークによる民間防衛も大きな貢献をしているのである。

もつとも、それ故にソビエトの秘密都市と同等であると非難を受けることもしばしばなのだが……あれはそもそもソビエトが持つ秘密都市の存在を暴かれた故の半ばやけっぱちの非難といえ、そもそも北部樺太の現状は開発の結果もたらされたたまたまの結果である。元より秘密にすることを前提として開発された都市を引き合いに出されても困るというものだ……閑話休題。

まあそのようにして成立しているのが北の軍事都市尾羽という街なのだが、その市街地より少しばかり離れた陸軍演習場へと飯田を乗せた機は着陸しつつあった。飯田を出迎えるかのように風は収まっており、大きく揺れることもなく滑り降りる連絡機。普段のゴムタイヤとアスファルトが触れるのとは違う感触——なんでも、演習場に直接降りるとのこと第23軍名物の降雪地仕様着陸ざりことスキー下駄を履いているらしい——で大地を踏みしめると、直ちに逆噴射で停止した。

窓の外で飛び散る白い粉は重力など忘れたようで、機体の奏でる盛大なエンジン音さえなければ幻想的なことだろう。

「到着しました。尾羽東山演習場です」

そして飯田は千鳥に続くように機外へと。出てから気づいたが、どうやらここは氷の上だったらしい。足元がしっかりしていることを考えれば、雪が降り積もった平野に降りるよりは安全に違いなかった。

「……」

見回せば、あたり一面真っ白な世界。雪は音をよく吸収するといふ。そこら中に降り積もった雪は次々と音を吸い込み、そしていかなる生物も存在しないような無音の世界を作り出していた。たった今

連絡機が盛大に作ったそり跡も、いつか降り積もる雪の底に消えてなくなってしまうのだろう。

と、飯田はなにやら近づいてくる影を認めた。千鳥は既に気づいていて気に留める様子もないが、飯田の脇に控えていた木更津はそれを認めると同時に小さく呟いた。

「スノーモービル……ですか？」
「らしいな」

そのままスノーモービルは雪を噴き上げながら迫って来る。どうやら複数らしいそれらは、そして飯田の目の前で停車してみせる。恐らくこの仮設滑走路を保守している部隊に違いなかった。

「自分の任務はここまでであります」

千鳥が振り返る。それから足を揃え陸軍式の敬礼。軍靴の合わさる音も聞こえる、見事な敬礼だった。

「ご苦労だった千鳥少尉」
「はっ」

飯田は答礼し、それからスノーモービルからばらばらと降りた降雪地迷彩の兵士たちに先ほどの許可証を渡す。彼らの姿見はここが内地であることを忘れさせるかのような完全武装であり、この演習場が緊張に包まれていることは容易に想像がたった。

そして、スノーモービルの後を追うようにやって来る軍用車両。ヘッドライトが眩しく飯田たちを照らす。どうやらあれが正規の出迎えらしく、たちまち近づくと盛大なブレーキ音と共に停車。国防色の車体はその大部分が白に染まっただけで、しんしんと降る雪が余計に白を塗り重ねていた。

そして扉が開き、陸軍佐官服に身を包んだ男が降りてくる。慎重に雪へと足を降ろすあたり、彼が座間から来た中央即応軍の人間に違いない。

彼は姿勢を整えるように足踏みすると、敬礼。

「特務実験大隊、大隊長の三鷹みたかであります————お久しぶりです。

飯田中佐殿」

飯田は軍人として敬礼を返すと、それから歩み寄るように陸軍佐官の手を取った。握手である。

「本当に久しぶりだな、千駄ヶ谷閣下は変わりないか？」

「ええそれはもう変わりありません。今回の中佐殿の大抜擢にもたいそう喜ばれておりましたよ、ええと、あの……」

「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室、だな。近いうちに名前は変わるだろうから長いのは勘弁してやってくれ」

飯田の苦笑いに、三鷹は満面の笑みを浮かべる。

「ええ、それですともそれですとも」

まあ実際、何度も使っていないければ飯田も忘れてしまいそうになる名称の長さなのは事実。そして長さは活動の対象が非常に限定的なものとされている証拠でもある。早く海軍駆逐艦「雷」という限定的な守備範囲を脱して、もっと広い範囲を扱う簡単な部署になってほしいものである。

「それにしても、貴様がこんな場所にいるとはな」

「私としても驚きでありましたが、なかなかこれはとんでもない任務でありますよ」

——ともかく、細かい話は車中でお話しますのです。

指揮官の乗車を想定しているだけあり、車内には適当な空間が広がっていた。まあ広いといっても歩兵運用を想定した無反動砲収納ラックがあつたりするのだが、まあそれはいいのだ。

「なるほど、つまり座間から一個中隊も来たのか」

「はい。そういうことになります」

飯田が領けば、三鷹は笑みを浮かべつつ肯定する。

特務実験大隊は先日編成されたばかりの部隊だそうで、そのうちの一個中隊を中央即応軍が、残り三中隊を北方方面軍が供出することで編成されているらしい。

「で、目的は……」

飯田がそう零せば、途端に三鷹の顔も仕事のそれになる。特務実験

大隊という奇妙な名称。そこに呼ばれた飯田という海軍軍人。考えられる可能性は一つだ。

「……やはり『サンプル』は捕獲されていたんだな？」

「はい、そういうことになります」

琉球諸島事変。海軍の駆逐艦を沈没せしめ、それから展開する陸軍第53軍を打ち破りつつ沖縄本島を占拠した謎の勢力。いずれの国も関与を認めず、いかなる日本政府の接触にも応じようとしなない。

それを成した存在。それが『やつら』だった。

「よく確保できたものだな」

「歴戦の第53軍が、ましてやホームである沖縄にてタダでやられるとお思いでしたか？」

「まさか、陸軍の優秀さはよく理解している」

よくやった。その言葉は寸前で飲み込む。それは陸軍への慰みにはならない。海軍にとつての駆逐艦「雷」同様、陸軍第53軍は帰ってこないのである。人員のほぼ全てを失った第53軍がその全身全霊をかけて残した土産、それが尾羽こはに集められた『サンプル』なのだ。一人の日本人としてそんなよくやったなどと無関心な言葉が放てようか。

窓の外をどこまでも流れていく雪景色。雪に化粧を施された木々が次々と流れていく。遙か彼方に小さな堤防らしき盛り土が見え……そこを走っていくデューゼル機関車と、それに連れられた貨物数両を認める。どうやら、演習場も間近に迫っているようだった。

それを見計らったかのように三鷹が口を開く。

「特務実験大隊わは、中央即応軍と北方特別混成団により構成されています。北方は主に砲兵と機械化歩兵部隊で、陸軍尾羽東山演習場の周囲を固めています」

重火砲の有効性は、沖縄において既に証明済みですからね。そう言ってみせる三鷹。

「そして中央即応軍からの一個中隊。これが自分の率いてきた部隊な訳ですが、昨日より活動を開始しています」

「昨日から?」

「ええ、届いたのが昨日だったもので」

三鷹はそう答える。

「運搬方法は」

「海上輸送です。海軍にも手伝ってもらっています」

まあ沖繩から樺太まで不審がられずに荷物を運ぶならば、多数の輸送艦を保有している海軍に任せるのが妥当な線だ。択捉には強襲揚陸艦付の海軍特設陸戦隊も展開していた。だからこそ飯田かいくんが呼ばれたとも言えるだろう。

だが海上輸送となると気になることがひとつ。

「……暴れなかったのか?」

「ええ、ここからが面白い話なのですが——」

信じられない光景だった。

数日前に駆逐艦「雷」を屠り、陸軍を蹴散らし、そして百万を超える屍を沖繩に積み上げた『やつら』。それが今——目の前に横たわっている。

無論、その目の前というのは飯田の手前に置かれた国内有名メーカーの生産した液晶画面のことなのだが。それでもこれまで見たどんな資料以上に正確で、そして最も解像度の高いものがそこにあった。

「これはすごいな……眠っているのか?」

演習場に設けられた特務実験大隊の仮設指揮所。ストーブが焚かれた塹壕司令部風の施設の中で飯田が信じられないという様子でそう言うと、三鷹は煙草に火をつけながら答えた。

「ええ。『やつら』には、麻酔が効くんですよ」

麻酔。

様々な化学式で構成されるこの麻酔という物質がなぜ効くか、それ

は実際には解明されていない。だがそれでも麻酔は効く。これだけが人類にとつて重要な要素だった。

「我々は『やつら』が生物であるという仮説を立てています」

三鷹はまだ煙草を切り上げるようにして灰皿に押し付けた。

「生物か」

「はい、生物です。見ての通り未発達な足も確認されますし、生物に似ています」

「……麻酔はともかく、足は判断の基準にはならないだろう」

怪訝そうに言う飯田。木更津も納得していない表情だ。

「まあ、それは確かにそうなんです……専門家もそう言ってますし」
「ごもりながら言う三鷹。とはいうが、説得力があるかと言えばそんなことはない。いきなり生物と言われても、とてもじゃないがアレに似た生物などいるものだろうか。」

しかし『やつら』に関して常識を当てはめるのは不適當な行為である。飯田はともかくも話を進める。

「その専門家というのは？」

「運輸省派遣の研究チームです」

予想外の答えだった。飯田は思わず振り返る。

「運輸？　なんで運輸が出てくる」

「というか生物という仮説を立てるなら生物学者ではないのか。」

「さ、さあ……そう言われましても。なんでも、運輸事故調査だとか」
まさかとは思うが、今回の件を単なる海上事故として政府は考えているつもりなのだろうか。そんな考えが一度は飯田を不機嫌へと引きずり込もうとするが、よくよく考えてみれば沖繩の件で海上保安庁は航行警報を出していた。知つての通り海上保安庁は運輸省組織……この案件の消極的縄張り争いに運輸省が敗れただけに違いない。

「こちらが現在の調査結果です」

そう手渡される紙媒体。開いてみればなんと手書きの文章であった。ともかく順繰りに確認していく。実験の内容は今のところ初歩中の初歩といったところで、誰でも思いつく、だからこそ重要な確認がほとんどであった。光や音への反応といった確認を、リスクが限り

なく少なくなるように——特に、サンプルが傷つくりリスクがないように——工夫された実験にて証明していつている。意思疎通の実験に相当な時間を割いているあたり、なるほど軍のやり方ではなかった。

「この意思疎通関連の実験は成果が出ているのか？　結果が書かれていないが」

「白紙の段階でお察してください中佐殿」

「それもそうだな」

しかし捲るたびに嫌な予感が湧き上がってくる。この実験とやら、随分と簡単なものばかりではないか。この程度の観察では得られる情報など既知の生物を調査する小学生のようなレポート程度だろうに。

端から結論は生物と決まっている？

あり得なくはない話だった。海軍としては海洋生物ごときに駆逐艦を喪失したのはあまりに痛い話であるが、政府の視点としてはむしろ生物という仮説の方が助かる。生物ならばそれは災害だ。災害に人間は勝てない。

また法律においても、害獣駆除で話を進めた方が対処が楽なのは事実なのだろう。

——で、陸軍としてもその方が都合がいいわけだ。海軍と異なり陸軍の主流は沖縄の即時奪還。生物なら勝てる。

そんなことは言わずに押し黙る飯田。渡された資料に一通り目を通すと、それを返す。

「だがここまで結論を急ぐこともないだろうに」

そういう飯田に、三鷹は顔を曇らせた。

「いえ、実は面倒事がありました」

「面倒事？」

「ひとまずお越しく下さい」

三鷹はそれだけ言って簡易指揮所を出る。飯田は木更津に資料を持つよう指示を出しつつ後を追った。

仮設指揮所の外は未だ雪が降っていた。塹壕を思わせる——
演習場なのだからこれは本物の塹壕だろうが——細くて曲がり
くねった道を進んでいく。

「実はですね、この演習場にいるのは我々だけではないんですよ」
「とうとうと。」

先を行く三鷹が振り返る。前から目を離すので僅かにつんのめつ
たが、流石に転ぶことはなく歩き続ける。

「実は他国も来ているんですよ。ほら、アメリカとかイギリスとか」
また聞いていない話を。飯田は顔に出ぬよう表情を歪める。

「いや、出来ることなら中佐殿にも事前にお伝えしたかったのであり
ますが、いかんせん機密中の機密となっていました」

「他にはどこが？」

「主要国は大分来ているはずですよ……ほら、あそこに」

それは塹壕線に設けられた砲兵陣地にも見えた。狭い通路に複数
の人と資材がとどまれるよう幅が広くなり、そこに幾人も人が詰め
かけている。そのうちの一人が飯田たちに気付き、米語で声をかけて
きた。三鷹がまず応じ、飯田もそれに続くように応対する。ここは研
究チームというより観戦武官の詰所のように、並ぶ多種多様な軍服は
まるで何かの展覧会のようだ。

そして彼らも、飯田のように『やつら』を調査すべく送り込まれて
きたのである。軽い挨拶をそれぞれと交わしつつ、彼らの名と顔を把
握していく。もちろん誰もかもが同盟国より派遣されてきていた。
それにしても、ここまで即座に将校が派遣されてくるとは……やはり
国防大臣級の会議は大きな効果があるらしい。

その時——銃声が聞こえた。三点射撃だろうか、鋭い射撃音が
断続的に続く。切羽詰まった様子ではないし、演習場なら銃声どころ
か砲声も日常だが……何のために？

「お、始まったか。ちょうどいいタイミングでした」

三鷹がそう言いながら双眼鏡を取り出して覗く。ぎつと周りを見

れば彼らも似たような様子だ。飯田も支給品である小型双眼鏡を取り出す。

それはすぐに見つかった。なだらかな丘を走っていく四輪駆動車。屋根のないタイプで、運転手と助手席、その後ろにもう一人の三人が乗っている。まず間違いなく陸軍兵士だろうが、なにをしているのだろうか。

「……」

とそこで後ろの陸軍兵士が発砲。水平射撃というよりは空に向かっての威嚇射撃。すると四里駆動車は急に速度を上げ、雪の丘を速度を上げながら駆け降りる。

刹那、雪の丘が爆ぜた。

「――！」

いや違う、爆ぜたのではない。あまりに勢いよく激突したがゆえに雪が無駄に大きく舞ったのである。地形を扶らんほどに激しくその巨体を打ち付けた影が、雪の丘を滑り降りる。

『やつら』だ。いや一個体しかないのだから『やつ』というべきか。砲撃をしないタイプ、「仮称Ⅱ型」に違いない。

四輪駆動車は時折速度を速めながらもしくは小馬鹿にするように緩めながら『やつ』からつかず離れずの距離を取りつつ逃げていく。『やつ』の注意が車より逸れるとすかさず兵士が引き付けるように発砲する。あの四輪駆動車は悪路でも十二分な快速を誇るタフな自動車だ、『やつ』がどんなに精を出してその不格好な対の足を動かしても追いつくことなど叶わないだろう。

それでも追いかけるしか能のない『やつ』。本当に愚かしいものだ。アレが群れとなった途端沖縄が占拠されてしまうのだから、それを許したこの国はさらに残念な目で見られているのだろう。

「陸軍^{われわれ}としても、アレの基本スペックは知っておきたいのです。実験はこれからが本番ですよ」

なるほどデータとは採りようである。音や光への反応を確認するよりも、軍にとってはこの実験^{おいかげっ}により手に入るデータの方がよほど貴重だろう。

最果ての演習場に、雪は降り続ける。

西暦2022年3月7日。樺太

日本最北の市である樺太庁尾羽市。人口三十万人弱を抱えるこの街は、いうなら軍事物資の集積地のような場所だ。もともと北樺太開発は軍事インフラ整備が目的であったし、「満州防衛のための樺太空母」という考え方は1950年代初頭、世界革命戦争の後期には既に登場していた。この地には先ほどまで飯田がいた演習場の他にも、^レ空軍警戒隊や二個飛行隊を擁する空港、¹戦略^C航空群^Bなどがある。ソビエトの侵攻が実際に過去あったことから、樺太^こに張り付けられている兵力も辺境にしては多かった。

ともかくも、そういった非常に整った警備体制の下で存分に各種観測を終えた特務実験大隊は、ひとまず実験を小休止とする。まあ終えたというより、今日使われる予定のサンプルが全て使い物にならなくなったため終えざるを得なかったともいえるのだが……ともかく飯田たちは北方特別混成団の司令部が置かれる尾羽市街へと入った。

『しかしこれで、大変興味深いことが分かりました。アレにも限界があるということですよ』

オーストラリア海軍の士官がそう口を開いたのは夕食の準備中なのでと通されたホテルの一室であった。さらさらと流れていく流暢な英語。クイーンズイングリスシュといえは英国なのだが、欧州そしてブリテン島が陥落した現在では西側でそれを脈々と受け継ぐのは彼らとニュージールランドぐらいであろう。英国印度に落ち延びた英国王室と英印英国市民は当然それを保つてはいるだろうが、人口の大半がインド人である英国印度をいくら英語教育が進んでいるからと言ってクイーンズイングリスシュの国と呼んでいいのかは微妙なところだ。

『確かに。なぜあの巨体で二足歩行できるのか、またそのエネルギーがどこから来るのかはまったくもって謎ではあります。限界がある

のは間違いないようです』

返すのはアメリカ陸軍の佐官。二人のやり取りを聞いていると所々で米語と英語のぶつかり合いがあるのだが、それをものともせず会話は進んでいた。

『やつら』の身体能力が如何ほどなのかを測る。それを目的として行われた実験が導き出した結論や仮設は初日にして既に多く、首尾は上々と言えた。そしてその多くの成果の中でも目を引くのは『やつら』の行動限界に関する仮説だ。

『やつら』はいつまでも活動し続ける訳ではない。その限界はおおよそ一時間。

ちなみにこの仮説は意図して行った実験によるものではなく、他の実験に用いられたいづれの被検体も一時間と待たずに活動を停止してしまったことから導き出されたものだ。まあ偶然であったにせよ、一時間というある程度信頼性のある数字を得られたのは大きい。

一時間、継続戦闘能力として考えるなら致命的なほど短い時間。

さらにその直前に急激に『やつら』は活動を活発化させたことから、『やつら』はその限界を明確に把握しているようにも感じられる。

それはつまり、活動限界を過ぎると『やつら』は死に至る……かも知れないと言うことだ。まああんな得体の知れないものが生物である可能性が高まったのは気分が悪い話だが、『やつら』が満州の奥地までも進撃してくる可能性を否定する要素が見つかったのは嬉しい話である。

ともかく活動を停止してしまったサンプルに関してはそのまま放置したり暖かい屋根の下に運び込んだり、ともかく条件を変えつつ経過を見ることとしている。海水で満たした槽に沈めた個体なら回復するのではないかなどと予想が立てられたが、実際にどうなるかは明日——もしくはさらに先——になるまで分からないだろう。

ちなみに『やつら』の活動がどのような内部器官によって支えられ

ているかに関しては、現在別の施設で調査中だそうだ。解剖のより『やつら』の致命的な弱点などが見つかればいいものだが、まあ期待しすぎるのは良くないだろう。

『しかし信じられないのは、なぜ日本の駆逐艦が犠牲とならねばならなかったのか、ですな』

『ええ、たかだか生物、しかもこんなにも知性を感じられない生物に』

聞きようによつては悪意すら感じる言葉の列。当事者である日本海軍将校の飯田が聞こえる位置にいくつくらいは彼らも承知だろうに、よくもまあ堂々と言ってくれたものであるが、まあ結局彼らに言わせればそうなるのだろう。

「……」

飯田は顔色を変えつつある木更津を目で制して、自身は沈黙を保つ。政府が琉球諸島事変と呼称する今回の『敗北』。それが同盟諸国を失望させているのは紛れもない事実なのだ。

かつて日本という国は第二次世界大戦の前半戦で今では同盟国である英国や米国、中華民国と刃を交えた。先進国としての認識の欠如、数々の外交における判断ミス、熱されやすくどこか物事を都合よくとらえようとする国民性。この国の持ついくつかの悪い側面が組み合わさった結果が国力にして数十倍はあろうかという連合国との戦争状態であり、それが対米宣戦布告で明確なものとなった。

しかし即座に敗北するだろうという連合の予想を裏切り、この極東の小国はただでは負けなかった。身をすり減らしながらも辛うじて連合の猛攻を耐え、第二次世界大戦が本来の姿、即ち対共産主義戦争へと羽化するまで陥落しなかったのである。

こういった粘り強さを期待されたからこそ軍国日本の存続なのである。米国の気分次第では対共産戦争へと突入する前に日本を屈服させることは——それこそ米国単独でも——容易であったであろう。

それを成さなかつたのは連合が注力すべきは欧州大陸であり、そのために亜細亜せなを固める適当な番犬が欲しかったからである。それと後々問題になりそうなドイツ亡命政府の管理を日本に任せることで後々自国民から「なぜあの悪の政府を保護したのか」などと批判を受けぬようにし、来るべき第二次英国防衛戦バトルオブブリテンに備え得られるものは得ようとした英国の思惑もあつただろう。

そう言った他国の思惑で生き残つたからこそ、それに流されることがないように日本は国家たり続けようとしてきた。その柱の一つである軍事力に明らかな亀裂が走つたのである。

『まあ何も分かつてはいなかつたのです。我々は二の轍を踏まぬようにいたしましょう』

『ああまったくその通りです』

日本が「たかだが生物ごとき」に大敗を喫した。その亀裂は表面だけなのか、それとも内側まで続く致命傷なのか、それは誰にも分からない。だが彼らは後者であると認識し、かつて勇敢に戦つてみせそしてそれから半世紀もの間西側同盟軍の一翼を担つた日本軍の末裔はこんなものかと、ある意味では勝手に失望しているのである。

残念なことに、悪印象とはそう簡単に払拭できるものではないのだ。もちろん飯田はそれを成すために琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室の室長となりここ樺太へと赴いてきているのだが、少なくとも今は言葉でどうこうできるわけではない。だから沈黙を保っている。

「飯田中佐」

と、北方特別混成団の士官が。何かを伝えに来たようだ。

「どうした」

振り返ると同時に、飯田はある人物を認める。それは士官の後ろから付いてくる、畳んだ外套と書類鞆を携えた海軍尉官であつた。混成団の尉官は彼を案内してきたらしい。

「……来たか」

それから海軍尉官が飯田の目の前まで来ると、直立。

「軍務局より参りました。小河原海軍大尉おがわらであります」

陸軍軍人ばかりの尾羽にて、今日初めて見る海軍式敬礼であった。それから小河原という尉官は書類鞆より書類を取り出す。

「本日付で琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室付となります。こちら辞令です」

受け取る。官職の任免などに用いられる辞令に刻まれた文字列は目の前にいる尉官を飯田の室の配置とすることが記されていた。僅かに二名という人員の少なさが形式的編成であることを印象付ける準備室であったが、これで三人目。彼が三人目の室員ということである。

「確認した。歓迎しよう大尉……よく来てくれた。同じ部署になるのは対テロ室以来だな、よろしく頼むぞ」

「こちらこそよろしくお願いします。しかし驚きました、朝出たらいきなり軍務局の机が消えているうえ、北に飛べと言われたのですから」

懲罰人事かと思ひやひやしましたよ。そう笑ってみせる小河原。確かに、いきなり何も言われずに北方行きを命じられたなら、もう二度と東京には戻って来ることのない左遷人事だと感じるに違いなかった。

「中佐、彼は……？」

戸惑った様子の木更津。いきなり海軍大尉が現れ小河原と名乗り、それどころか新しい室の人員だと辞令など出されたものだから話に付いていけないのだ。飯田は体の向きを変え、さも今気付いたように言った。

「ああそうか、木更津と小河原は初めてだったな。小河原、紹介しよう。海軍幕僚部の木更津だ。階級は中尉」

「木更津です。よろしくお願いします」

「小河原だ。よろしく」

二人が握手を交わす中、飯田は木更津に捕捉するよう説明する。

「小河原は去年まで赤ソビエト・ヨーロッパ 欧の海軍駐在武官補佐官としてロンドンに

出向いていた。今回の件でも存分に力を発揮してくれるだろう」

だからこそ彼を呼んだのである。大使や領事の次にいい待遇を受けるとされる駐在武官。その補佐官として小河原は欧州に留学していた。彼は仮想敵国を知り、技術を学び、そして人々と交流を持つことにより肌で彼の地を感じてきたのである。しかも小河原は元々仏語や露語も話せる。信頼出来る通訳、しかも相手の事情に通じているとなれば、飯田が小河原を呼ぶのは至極当然の判断であった。

「それにしても中佐、呼ぶなら先に一声かけてくださればいいものを」「いやすまない。なんせこちらも樺太行きが決まったのが真夜中だな、それにことがことだ」

「まあ相手がソビエトとなれば仕方ないです。中佐の下なら軍務局の椅子も消えたわけではなさそうですし、存分に働かせていただきますよ」

そんなことを話していると、視界の端より寄ってくる影が。

『アツシ、来ていたのか！』

かけられたのは英語。先ほどのオーストラリア海軍士官だ。小河原に向けられた言葉であることに違いなく、彼もすぐさま英語で応じる。流石はロンドン帰りというべきか、訛りのない流暢な英語だった。

『ジョンじゃないか、こんなところで会えるとは』

それから小河原は飯田に一瞬視線を投げる。迷うことなく「行け」のサインを出せば、小河原はそのまま豪州人に歩み寄って再会の抱擁を交わす。

「……すっかりやってるようだな」

その様子を見ていた飯田は、どこか満足げに呟いたのであった。

「食事の時から随分腰を気にしていたようだが、何かあったのか？」

「ああいえ、大したことではないんです。ただここまで来る際に酷い目にあいましたね」

「酷い目？」

食事も終わり、今日の実験大隊が得た成果の最終報告も終わった。今日こなすべき全ての仕事を終えた今という瞬間は言うなら就寝前に気を落ち着かせるための時間であり、一日の出来事を整理する時間である。ホテルのロビーにて適当な酒類を頼んだ飯田は、それを小河原の杯にも注いだ。巨大な氷を伝うようにして液体が流れていく。

「ありがとうございます……実はですね、豊原―尾羽の定期便がこの吹雪のせいで止まりましたね」

「私の機はそんなことはなかったぞ？」

そう言う飯田に対し、小河原は嘆くようにかぶりを振って見せた。「それは中佐のが軍用機だからですよ。生憎こちらは民間便、連中は保険と安全のことしか考えません。まあともかく、豊原から農^ノグ^リキ^キまでは飛行機で行けたんですが、まあそこからは酷いものでしたね。雪は吹雪くし代わりに乗った列車はひどく揺れる、とても立つても座つてもいられない。おかげで尻周りがまだ痛みます。新聞も売り切れてますし……」

「分かった分かった。確かにそれは災難だったな」

なんだかどこまでも続きそうなのでこの辺で止めておく。いきなり千キロ以上移動させられた挙句に新部署への配属だ。相当にストレスも疲れも溜まっているだろうが、今は仕事の話を進めねばならない。

「ともかく、中佐にも迷惑をかけてしまい申し訳ありません」

「いやそれはいい。それよりどうだ、お前は実験の結果をどう思う？」
それを言えば、既に一通りの結果に目を通した小河原は考えるそぶり。

「確かに、『やつら』の表皮が予想以上に柔いという結果には驚きました。どの軍でも戦車レベルの装甲はあると考えられているようです……発表されれば相当な驚きをもって迎えられるでしょうね」

実際、『やつら』の装甲は厚いものとして考えられていた。それは

『やつら』と一番初めに交戦した機動戦闘車中隊が「榴弾より徹甲弾が有効である」という報告を上げているからであり、実際そちらの方が迫ってくる群れに対して有効であったからだ。

しかし実際には徹甲弾が有効だったのは遅発信管が作動するまでに複数の『やつら』を貫通していたからであり、むしろ単体に対しては榴弾、いやむしろ命中精度の点で軟目標や軽車両を想定するキャニスター弾の方が有効という結論が出ている。

「まあ結局、大々的に報じられることはないだろうがな」

「まあそりゃ、間接的に我が軍が保有する装備品の性能を公表することになりますからねえ」

そこで沈黙。ロビー周辺を軽く見回すと人はほとんどおらず、インドネシアから派遣されてきた陸軍服数名がいるだけだ。

「そう言えば今回の派遣団はインドネシア8人にフィリピンが7人と随分多いですよ」

「いや、確かに軍属の数はそうなんだが学者自体はアメリカが一番多い。あの国からの軍属が少ないのはことが遠い異郷の地で起きていることだと危機感がないからだろう」

「まあSEATOアジアの抱える問題はアメリカにとっては太平洋を挟んで対岸の火事ですからねえ……でも研究対象としては興味がある、と」

SEATO、South East Asia Treaty Organization 東南アジア条約機構は反共産主義を掲

げる軍事同盟である。その中でも発足時の加盟国をSEATOアジアというのだが——なんせ後々の参加国はアジア以外の国なのである——その中でもアメリカだけはアジアに存在しない国である。しかし流石は西側の盟主と呼ばれるだけありアメリカはアジア方面にも軍を派遣しているし、そもそもSEATOがアメリカ主導で作られた組織ということもあり彼の国の発言力は大きいのである。実験大隊に参加する調査チームの規模も、アメリカが一番に大きかった。

「それにしても、アメリカ以上に納得できないのは共産主義者どもで

すよ」

小河原はそう言うのと先ほどの液体をぐつと煽るようにして喉に押し込む。

「まあ、こればかりは高度な政治問題だ。この前の満州—モンゴル国境問題といい、何らかの取引があつたんだらう」

「あれは単に交渉を再開するという宣言だけですよ？ あんなので『やつら』の情報をくれてやっていいものですかね」

今日の最終報告でついに正式に告げられたことがある。それは明日より赤ソビエトヨーロッパの調査団が合流するという事実。極秘派遣だの云々とは言うが、それはつまり向こうにも情報をくれてやるということであり……これまでのことから察していた飯田はともかく、周りの反応は何とも複雑なものだった。

「裏取引はあるだろうさ、そう考えるしかない」

「沖繩を払わされたのは日本です。同盟諸国との情報共有は致し方ないにしろ……」

小河原は苦々しい表情だ。もちろんそれは飯田にとっても同じだ。沖繩で百万の屍を積みされたのは日本だ。積みまれているのは日本国民だ。その代償をもって掴まされたのがこの程度の情報であり、しかもそれを同盟国と共有すると来た。飯田の鞆には同盟国にも漏らされないであろう情報が眠ってはいるが、それがなければ日本が情報をただ売りしている様にはしか見えないだろう。

「ともかく共産が絡むからこそお前を呼んだんだ、しっかりと頼むぞ」
「当然です。やるからにはしっかりとやりますよ。明日の実験は市街地で行うのでしたよね？」

「ああ、郊外の市街戦演習場で行うらしい。集合住宅の廃墟もあるとかでコンクリートの構造物がある程度密集しているから、那覇での戦闘を再現するには丁度いいと判断されたのだらう。もつとも火器の使用は行わず都市インフラに対する『やつら』の攻撃力を見るのが目的のようだ」

「東側に恩を売りつつ情報流出を最低限に防ぐなら、そりゃあ暴れる『やつら』を見せてやった方がいいでしょうね」

まあつまり、チームの派遣を許しつつも東側に教えるのは『やつら』がどういった動きをしているのかだけということだ。言うまでもないが『やつら』が東側の兵器である可能性は非常に高い。なんせ実験の結果分かったのは『やつら』に個体としての知能がないことだ。とすると『やつら』が沖縄をわざわざ襲撃目標に選ぶ理由がない訳で……入れ知恵をした陣営がいると疑ってしまうのは仕方のないことだろう。

だから見せるだけなのだ。東側が本当に『やつら』を知らないのであれば明日の受け入れは単純に東側に恩を売ることとなるし、もしも知っていたとしてもそれだけでこちらの解析の進捗や西側兵器の有効性を確かめられずに済む。

ともかく、明日は忙しくなりそうだ。飯田も目の前の杯に手を付けると、ゆっくりと冷やされて熱いそれを喉に流す。

「失礼しますー！」

とその時、にわかに騒がしくなり始めるロビー。数名の下士官が駆け込んできたのだ。それも外套にまとわりついた雪も払わずにだ。ホテルの従業員一同が困惑した表情を浮かべる中、構うことなくずかずかと飯田のところにもやって来る陸軍服。

「いったいどうした」

聞けば下士官は一瞬躊躇する。どうやら相当な問題らしいとすぐさま判断した飯田は、僅かに身を傾けて耳を貸した。下士官は小河原にも聞こえないような小さな声でその報告を告げる。それを半分も聞き終わらないうちに、飯田の表情は曇る。

「……なんだと？ 間違いないのか」

「はい、三鷹少佐が伝えてくれと」

「分かった。報告感謝する」

下士官は一礼して下がる。そのまま出口へと戻っていった。それ

よりも早く動いたのは飯田である。彼は素早く立ち上がった。

「行くぞ小河原」

「え……ですが」

「とにかく移動だ、大変なことになった。運転できる奴を連れてこい」

完全武装の封鎖線の先。飯田を乗せた車両がたどり着く頃には何両もの車両が到着しており、背後の燦々たる光景を覆い隠そうとしていた。とはいえこの闇夜では何がどうなっているかも分かるはずがなく、救護車の警戒灯やハーフトラックのやけに眩い灯りが異様な光景を浮かび上がらせていた。

「そうだ、なんとしても樺^庁太^警警察は近寄らせるな、病院にも不発弾の処理に失敗したと報告しておけ！ ……ああ、飯田中佐殿」

仮ごしらえのせいで微妙に傾いているテントに入ってきた飯田を認めると、今回の『やつら』に関する一連の実験を主導している中央即応軍所属の三鷹少佐は立ち上がって敬礼で迎えた。

「三鷹、話は聞いたぞ。何があった」

返礼しつつ飯田が問えば、三鷹はどこか困ったような顔つきになる。

「何がと言われましても、現在お伝えした以上のことは判明していません。アレの解剖^{かいたい}を行っている最中に爆発事故が起きまして、現在は怪我人の回収と手当てを最優先で行っております」

「原因は」

「並行して調査中であります。ですが現状、人手が足りていないのでして……なんせ解剖は地下で行っていたもので、施設全体が崩落しかねない状況なのです」

「とりあえず状況が見たい、案内してくれないか」

「分かりました」

それから三鷹はこの場を尉官に預けるなどと言い、それから飯田を

先導するように歩き出す。ガソリンランプの吊るされたテントの外はもちろん闇だ。いくつかの照明を頼りに歩いていく。

「で、なんでまた地下施設などで」

「ええ、運輸省が汚染のリスクを避けたいと言ってきました。人目に付きづらいという意味でも外との繋がりは減らすべきという判断です」

ぼやくように三鷹は言う。確かに、地下施設で実験を行うとなれば資材の搬入にも一苦勞することだろう。

「で、その結果がこれか」

「ええまあ、爆発の規模はそこまで大きくなかったようですし、内部に生存者がいるといいのですが……」

爆発の影響だろうか、一部が歪んで収まりきらなくなった扉が閉まり切らずにぶらりと蝶番が揺れている。

「酷いものだな」

飯田はそう漏らした。爆発の規模はそこまで大きくないとは何だったのか。暗闇の中で破損個所がライトで照らされているせいで余計に目立ってしまったとはいえ、本当に酷い。ストレッチャーを担ぐ衛生兵とすれ違うが、そこに乗せられている毛布にくるまれたものは人間大ではなかった。潰れるか千切れたかしてしまっただろう。

「少佐、ここから先は崩落の危険があります」

と、三鷹の前に立ちほだかる影。状況から言って工兵隊の人間だろう。三鷹は振り返ると口を開く。

「と言っていますけど……どうしますか？」

今の聞いていましたよねと言わんばかりの表情。なるほど三鷹としてもこれ以上奥へは入りたくないらしい。飯田も爆発の専門家ではない以上、これより先に進んでも意味はなさそうだと判断した。

「分かった。ところで君、内部の爆発か感じた印象を聞かせてもらってもいいかね？」

「印象……でありますか？」

いきなりそんなこと言われればそりゃあ困惑するだろう。とにかく

く言ってみてくれと飯田がもう一度言えば、首を傾げながらひねり出すように言い出した。

「そうですね……爆発の衝撃は実験室中に反響し、複数回にわたって内部の機器に重大な損害を与えています。それこそ、磁気テープの復旧がやつとなぐらいです。爆弾は生半可なものではありません……十や二十キロどころではないかも」

それを聞いた飯田は三鷹に視線を戻す。飯田が言わんとすることはすぐ理解したようで、三鷹は困惑気味にかぶりを振って見せる。

「そんなバカな、ここは研究施設です。必要以上の爆薬は運び込んでいません」

とはいえ、破壊の様子から見るとこれを火災だとかで片付けることは出来なさそうだ。爆発の規模が大きすぎるのである。一瞬破壊工作の可能性が頭をよぎるが、これはどう考えても犠牲者が出てしまう規模だ。戦時でもないのにそんなことをする必要、というか意味があるものだろうか。すぐに打ち消した。

「中佐、この施設では『やつら』の解剖を行っていたんでしたよね」

小河原が耳元で小さく言う。飯田は顔を動かさずに強くそれを否定した。

「その可能性を今は考えるな、余計な混乱を招くだけだ」

「……はい」

何か言いたげな様子の小河原の気持ちはよく分かる。だがあり得ない、というよりかあり得てはならない。なんせ鹵獲したのは砲撃を行わないタイプのはずだ。それを切り刻もうとしたところで、爆発するものが存在しない。しかもその爆発は確かな衝撃を持って機材や人員を破壊しているのだ。地下という環境に増幅されたにしろ軍の施設に大きなダメージを与えるほどの爆発。

飯田の脳裏にも『その可能性』は浮かんでいた。大迫海軍幕僚長の言葉も蘇る——『やつら』は進化している。もしも解剖に抵抗する最後の手段として、それを選んだのであれば？

いや、どう考えてもあり得ない。妄想は振り払わねばならない。現代科学は証明に照明を積み重ねた結果なのだ。明確なデータが、証拠で出そうまでは認めるわけにはいかないのである。

現代科学の限界——科学者でもないのにそんな言葉が脳裏に浮かんだ飯田は、それを振り払うように踵を返し、現場から引き上げた。

——西暦2022年3月8日。樺太——

春分の日に近いこともあり、太陽はきつかり東の方向から昇ってくる。北樺太を守る第23軍隷下の北方特別混成団の司令部庁舎。普段なら当直士官ぐらいしか起きていない時間であるが、今日はどうしたことか団備品のキーボードを叩く音が聞こえてくる。こんな朝早くから庁舎の一区画に集まっているのは陸海軍の将校たちで、よくよく注意してみると制服の異なる日本人らしくない顔立ちの軍人——

——他国軍の将校も混じっていた。

そんな庁舎の、別の場所。琉球諸島事変における駆逐艦沈没に関する調査委員会準備室という嫌がらせの如く長い名前の部署の長である飯田は、まだぼんやりとする意識のまま呟いた。

「……もうこんな時間か」

第一声がそれだった。もちろん誰かいるならこんなことは言わない。ブラインドから差し込む朝日で目が覚めて、きちんと上着がハンガーにかけられているかを確認して、最後に腕時計を見た時に気付いたのだ。

現在時刻は既に7時を回っている。尾羽^{ここ}は北緯53度と相当北に位置しているため、日照時間がたいへん短いのである。その代わり夏至となれば非常に長い昼が訪れるのであるが……まあとりあえず、総員起こしからはずいぶん時間が経ってしまった。ついでに言えば、普段の起床時間にも遅れている。もしもここが庁舎の仮眠室でなかったのなら、大遅刻であった。

まあもちろん、それで何か問題がある訳ではない。むしろ取り乱したら問題だ。さも狙い通りの時間に起きたように背伸びをし、慣れた手つきでネクタイを締め、正装であるダブルの制服に袖を通す。申し訳程度に置かれた小さな鏡に自分の身を映せば、そろそろ眠気の抜けてきた海軍中佐の顔がそこにあった。

肩章や略綬やらに彩られた軍装。こうやって鏡を見続けていると妻も娘も彼のことを茶化すものだが、幸いにも今日は誰もいない。洗面所がないので髭は持つてきた電動式で目立たぬよう刈るに留め、仮眠室の扉を開けた。

暖房を使用していない廊下はやけに冷たい。いくら三月上旬とはいえここは北の果て。氷点下の世界である。温もりが流れぬうちにさっさと進む。

目指す部屋の入口が見えてきた。光が漏れているということは未だに作業が続いているということだろう。仕事を任せて寝るとはなかなか大層な身分になったものだが、飯田がいればいいというものでもないのだ。

扉を開ける。

即座に飯田に気付いた室内の全員が意識を向けてくる。無言のまま敬礼——もつとも、互いに脱帽時のそれだが——それに飯田が返礼する。

東南アジア条約機構軍において、複数国籍の参加する部隊の指揮権は、上位司令部の命令がない限り最上位の士官が執るものとされている。この場における最高位とは海軍中佐である飯田がこれにあたり、故に飯田は返礼なのである。

室内の様子をひとしきり見る。基本無言で、何か必要であれば僅かに言葉を交わすといった様子で作業を進めるその集団。その一角に座り作業を進める日本の陸軍佐官を認めた飯田は、落ち着き払って口を開いた。

「三鷹少佐、進捗はどうなっている」

いったい何杯目なのだろうか。珈琲を片手に三鷹が答える。中央即応軍より派遣された三鷹はこの中ではかなり前線寄りの人間といえるだろうが、少し脂汗が出ているあたり夜更かしは苦手なようだ。「大筋はまとまりました。ご確認ください」

そう言いながら三鷹は記録媒体をコンピューターより取り出した。容量が少ないのでウイルス混入のリスクが低く、管理がしやすい

フロツピーディスクだ。本当ならこれだって使いたくないところだが、作業効率を考えるとどうしても電子媒体に頼らざるを得ない。

持ち出し厳禁とでかでかと言われたそれを差し込み口へと入れるため、飯田はコンピュータの電源を入れる。その視界の端で三鷹が珈琲を一気に飲み干した。

……眠気覚ましと珈琲を飲みたがるのは結構だが、彼ほど中毒となるのは避けたいものだ、なんせあれに含まれるカフェインは、世間一般が思うよりも僅かな量で致死量に達してしまうのだから。

まあ、三鷹を始めとするこの場にいる者たちは休まずに作業を続けていたわけで、それに比べれば珈琲などなんでもないか。そう思い直し飯田は起動中と書かれた画面を睨む。

そもそも徹夜というのは時間を無駄に消費するものである。人間夜は休むものとして設計されているし、それは脳味噌において特に顕著である。脳は人間が意識を持ち、視覚情報や聴覚情報を処理するだけで疲れていく。再起動せずに動かし続けるコンピュータの能力が落ちるのと同じようなものだ。

だがそうであっても、今回はそれ以上に報告に速さが求められる案件だった。しかも事が事なので事態が複雑、手数がある。三鷹すら駆り出されていることを見ればそれは明らかだ。

いくら機密を保つためとはいえ人員だけでなくスケジュールまでも余裕なく組んだのが招いた事態と言えるだろう。得體も知れない存在である『やつら』を調査する以上、予備日くらい設けてくれればいいものを……地平線の下に隠れた東京には口には出さず心の中で文句を垂れておく。飯田は徹夜をしなかったが、どうせこの皺は指揮官すなわち管理職である飯田に回ってくるのだ。

まあそんなことはどうでもいい。報告書の内容を確認しつつ、飯田は今日のスケジュールを確認。

「……三鷹、赤ソビエトヨーロッパのチームが到着するのはいつだ」

「正午の予定です」

正午に到着ということとは五時間もないといったところか。正直足りないが、ここまで来ればそれで何とかするしかない。

「迎えの手配はどうなっている?」

「橘中尉に任せてはありますが……申し訳ないが中佐、そちらの方お願いできますか?」

やはりと言うべきか皺が回ってきた。飯田は確認作業を続けつつそれに間髪入れずに返す。

「よし分かった」

まあ仕方のない話なのだ。先日の締めくくりとして起きた爆発事故。『やつら』がいかなる存在なのかをあぶり出すために編成された特務実験大隊及び多国籍チームは、その事故により「死者が出た」という事実^{じじつ}に直面していた。

これは非常に厄介なことだ。なんせ政府は当面『やつら』のことを「正体不明」で押し通す計画^{けい画}なのだから。余計な事故で支障が出るのは困る。

ともかくやるべき事を確実に、だ。飯田はひとしきりの確認を終えると、英語で全体に軽い指示——疲労気味の部下に訓示という形式を取ると間違^{まちが}いなく響^{ひび}き^{ゆく}をかう^うのでそれは避ける——を出してから、部屋を立ち去った。

「ああ、おはようございます中佐。よく眠れました?」

部屋を出ると、まるで入れ違うかのように小河原大尉が廊下の先からやって来ていた。抱えた段ボール箱と小脇に挟んだ新聞紙。今日の赤欧を迎え撃つ準備をいろいろしているようだ。

「おはよう。お前こそしっかりと眠れたのか?」

「もちろんです。これからどちらに」

「空港だ」

そう答えると、小河原は楽しげな表情になる。

「陣頭指揮とは、いやあ流石です」

「なんだその言い草は」

「いや中佐、自分はあまり無理なさらなくてください、という意味で言っているのです」

「……気遣い感謝する」

相変わらずな奴だ。飯田はため息の一つも吐いてやりたいところだが、小河原の態度はいつものことなので放って置く。

「いえいえ……それで、結局爆発の原因は？」

すると小河原は、先ほどとは態度を一転し小河原は急に周りを憚るような——もつとも、周りには誰もいないのだが——調子になる。

「いや全く不明だ。死者4怪我人9で施設は一区画が全壊、周囲のブロックも壁が歪んだりはしているそう。いい知らせと言えば、米国の学者が怪我だけで済んだことぐらいだな」

「そうですか、それにしても……『やつら』の研究を共同で進められるのは信頼と利害の調整を経たおかげであるでしょうに、よくもまあ米国は躊躇いもなく民間を送り込んでくるものですね」

小河原はやれやれと首を振って見せる。言うまでもないが人命は官民間わず等しく尊い。ではなぜ飯田と小河原が米国研究者に死なれると困ると言っているのかと言えば簡単な話で、米国^{あそこ}だけは民間からの派遣なのだ。

死者が出れば話題になる。そうなれば何らかのルートで情報が洩れるのは必須。官よりかは民間の方が問題は大きくなりやすい……そう考えるのは今の日本人に少なからずこびり付いている偏見だ。飯田と小河原に関しては彼ら自身が官の立場にあることもあって余計にその傾向が強い。

ちなみに、米国には官民統一の情報保持資格が存在しており通常の機密保持においてはなんの問題もないことだけは忘れてはならない。むしろ民間に委託するたびに情報漏洩のリスクを負わねばならない日本とは大違いなのである。

とはいえ、それを知ってはいいても不信感を抱かずにはいられないのだ。

反社会運動、特に共産主義関連の騒動は、当然ながら民間から起こ

る。軍が部隊単位で蜂起したりすることもあるが、それは稀なケースだし、民衆の感情を汲んでいない以上長続きはしない。結局の敵は反社会分子に煽られた民衆だ。

この混迷の時代において、日本国の秩序を守っているのは旧時代的なムラ社会の概念だけ、そんな風に言っても言い過ぎではないかもしれない。国民の命そして財産を護るためにある軍にあるまじきことだが、誰しも背後からだけは刺されたくないものである。

閑話休題。

「……ああそうだ、赤欧が派遣してくる相手の情報はるか？ 出迎えの前に軽く確認しておきたい」

そう飯田は話を変えるように聞く。すると小河原は、段ボールに詰められた資料の一つを器用に取り出し、片手でぶらりと広げて見せる。

「彼です」

広げられた資料には正装の男性の写真。見た目になかなか若そうである。A4綴じのファイルを片手で持っているので写真は90度傾いて見えるが、まあそれはいい。小河原は続ける。

「ソビエトヨーロッパ海軍の少佐。シユナイダーとかいうらしいです。海外への駐在経験とか、そういう外交絡みの公式で名前は出てきませんでした。一見外交素人ですが……」

そこで小河原は言葉を詰まらせる。外への露出が少ない人間ということは「隠しカード」である可能性も考慮せねばならない。秘密主義が横行するソビエトならなおさらのこと。それは即ち、事前に立てられる対策がないことを示していた。

「そうか、ありがとう。今日は頼むぞ」

「はっ」

両手が塞がっているので敬礼は省略。小河原は段ボールを抱えなおして部屋へと入っていき、飯田は階段を目指す。あそこまで進んでいるのだ、報告はほどなく完成することだろう。後はそれをもとに動

く別の部署で何か厄介ごとが起きないかを祈るだけ。

「空港に向かってくれ」

「はっ」

待機していたのだろう。すぐに車両は雪と氷の世界を走り出す。サスペンションを通じて氷が砕かれる振動が伝わってきて、それがエンジン本来の振動と混じり合う。

「……」

空港までの暫しの休息。しかし思考を止めれば、すぐに今回の爆発事故が頭をよぎる。

それは琉球諸島事変で我が国にとんでもない損害を与えた『やつら』を生きたままに解剖していた最中に起こった。解剖の対象は砲撃を行わずに突撃してくる仮称Ⅱ型。爆発する要因なんてなかったはずなのだ。

だがそれでも、爆発は起きた。何が起こっているかも、これをどう解釈するべきなのかも見えない。

ただ今分かっているのは、飯田が、いや日本国このそしきがこの事実を飲み込めずにいるという現実だけだ。

「ほお……」

日本語が聞こえた。そう、飯田たちの母国語である日本語だ。

「いやはや、これは立派な演習場だ。我が故郷にもひとつは欲しいものです」

気持ち悪いほどの流暢な日本語でそう言ってみせるのは猛吹雪にも負けなさそうな分厚い服に身を包んだ男。赤に縁どられたそのカーキ色の制服は、飾り気はないが威圧感なら十分だ。

「最も、ここが放棄された街でなければ……の話ですがね。いつ見て

も捨てられた街ほど悲しいものはない」

その言葉にソビエトヨーロッパ海軍より派遣された尉官がまるで同意を促すかのようにこちらを見やり含み笑いを——そう、勝ち誇った笑みを浮かべて見せる。

「我が国において建築物、特に民家は消耗品です。欧州とは事情が違うのです」

そう返すのは小河原だ。今日の天気は幸いにも晴れ。雪の降り積もる北の世界では、第一種軍装の無装飾な紺はよく目立つ。

その会話を横で黙って聞きつつ、飯田は軍人を横目で見る。ソビエトヨーロッパでは管区軍ごとに制服が違っていると聞いているが、彼の制服は襟と言い勲章のつけ方といい明らかな本^{ソビエトロシア}国式だ。

背後には東側の盟主が居るのだぞと、彼の制服はそう語っているのだ。重厚な軍服はすつと細めの輪郭に高い鼻を添えるいかにも欧州人らしい顔立ちには全く似合っていない……まさに虎の威を借りる狐とはこのこと。いや、背後にいるのはロシアなのだからここは熊の威を借りる狐と言うべきか。

それが半世紀以上続く欧州の現実なのだ。

ソビエトヨーロッパより派遣された調査チーム。それはたった二人というチームと呼ぶに相応しくない人数ではあったが、しかし我が物顔で監視台に立つ彼らほど挑発的な存在はいないことだろう。

そもそも、いくら国境近くとはいえ西側の軍事拠点である樺太に、それも陸軍演習場の中にまで安々と入られてしまっているこの現状。政府は何をやっているのかとも言いたくなる。恐らくは『やつら』に関する情報提供の見返りとして何らかの要求——例えば、先日発表された満州——蒙古国境線交渉の再開——はあったのだろうか、それにしても応接を命じられる現場^{こちちら}としてはたまったものではないというものだ。

「いやいや、こういった住宅の価値は理解していますよ。故郷では再利用されますがね」

原子力空母も複数所有する赤欧海軍の軍人^{つわもの}は、そう言つてのける。恐らくはソビエト圏を代表する建築物である鉄筋コンクリート造りの集合住宅のことを言っているのだろう。ソビエト^あ連合^れの幹部は中世から残っているような城や屋敷に住みたがるくせして、国民にはやけに効率的な生活を求める傾向にある。

ソビエト圏を作り上げた過去の人物たちが見たらなんと言うのだろうか。いや、そんなことは日本人である飯田にとってはどうでもいいのだが。

《状況開始十分前、工兵隊退避せよ》

無線機が指揮所の声を電波に変換し、演習開始を告げるサイレンが鳴り響く。電気の通っていない信号機に取りついていた工兵たちが定められた退避エリアへと駆けていく様子が屋上からはよく見えた。

ここは陸軍第23軍が所有する市街演習場。70年代に整備されたニュータウンをそのまま流用したもので、一つの町が丸ごと演習場となっている。まだ干拓事業が国内の人口爆発に対応できていなかったころ、膨れ上がった満州の人口を吸収するために作られたのがこの尾羽という都市だった。

樺太の西にある満州は建国以来東北アジア大陸において突出して治安の安定した国だ。公共サービスはともかくとしてインフラは発展しているし、なにより欧州様式の建築物が立ち並ぶ都市部は憧れの的だ。

故に満州は膨張し、そしてその人口の重みに耐えきれなくなった。それが生み出したのが、満蒙開拓団の二世、特にその中の次男三男が追い出されることによるUターン移民である。大陸からやって来た人間は国境線の向こうに追い出せばいい話だが、日本生まれとなると話は変わってくる。彼らは当然日本に住みたがり、しかし日本においても第一次ベビーブームが過ぎ去ったばかりで、食料供給は追いついていないのが現状だった。

そのため60年代後半の樺太、そして朝鮮には大量の人間が流れ込

んだ。開発が進んでいかなかったところに人間が流れ込んでくるのだ。労働力的に発展する余地を得た樺太などは大いに発展した。この樺太最北の街である尾羽も一時期は二百万に達するほど膨れ上がった。

石油の産出も確認されていたこの街は、当時は黄金に輝いていたことだろう。

だが所詮は大量のUターン移民と国内の人口爆発に支えられた「人口の流刑地」。

国内でより生産性の高い干拓地が次々完成するにつれ国民は南へと去り、今や基幹産業であった労働力集中型の工業は瓦解し、虚しく残された工場街の廃墟のみが往時の繁栄を伝える。基礎から崩れるように倒れる廃墟たちは、もはや撤去する予算すら出せない状況らしく、書類上だけでの所有主の名が刻まれた「立入禁止」の四文字が雪に埋もれていた。あの様子では、屋根もとうの昔に抜け落ちてしまっていることだろう。

現在の経済は農業と軍の研究施設、それと周辺住民向けのサービス業によって成り立っている。稀に物好きが観光に来たりもするが、地域を支えるほどではない。それがこの最北の市の現実。こういった場所は軍にとっても都合がいい。

だからこそ、ここで『やつら』を調べ尽くす。第53軍がその全力をもって得た唯一の戦果、沖繩の百何十万人もの屍の上に置かれた欠片のような戦果。それを調べ尽くさねばならないのだ。

「工兵隊退避完了！ 大隊長、いつでも行けます」

通信兵が報告し、特務実験大隊の隊長を務める三鷹が飯田に目配せ。飯田に大隊の指揮権などないが、一応の確認だろう。眼だけで答えておく。

「よし、始めろ」

それは演習場全体に広がり、やがて地響きが変わる。それは小さな

響きだ。折り畳み式の卓上に置かれたマグカップが僅かに震える程度だ。

だが、確かに揺れている。

「イイダ中佐。あなたは、オキナワに関する責任者だ。そうでしょう？」

隣から聞こえる日本語。隣にいるのはもちろん、ソビエトヨーロッパ海軍、シュナイダー少佐である。

「私は海軍の駆逐艦に関する調査を命じられただけです」

飯田がそう返すと、彼は僅かに軍帽に手をかけた。

「だがいずれはそうでは無くなる、違いますかね？」

何を言わんとしているのかが分からない。いや意味は通じる。飯田に「琉球諸島事変における駆逐艦喪失に関する調査委員会準備室」の設置を命じた大迫海軍幕僚長の魂胆はそうだろう。しかしそんな内部事情をシュナイダー少佐が知っているなど考えられない。というかあり得ないはずだ。

間諜からの情報か？ それともただ鎌をかけているだけか？ ともなく飯田は眉を潜めるだけに留める。

そんな飯田を気にも留めず、シュナイダーは続けた。

「我が国はこの件に大変興味を持っている。そしてそれは連合の総意なのです……加えて」

シュナイダーの言葉が続く中、視界に収まっている集合住宅地で土煙が舞う。まるで爆破解体のようなそれは、疑うまでもなく『やつら』が巻き起こしたものだ。

今回の実験は要約するなら破壊力を測るもの。沖縄では203mmを備える砲兵大隊の効力射すらものともせず突っ込んでくる『やつら』に対し、第56師団が市街を盾にするように遅延戦術を行った。だが実際には数時間も持たずに突破される。

その原因は、『やつら』の衝撃力だ。『やつら』には木造家屋は当然のこと、鉄筋コンクリートすらも突き崩す力があるかも知れないのである。

引き寄せるための機関銃が遠隔操作で発砲開始。一丁だけでは頼

りない5・65mm SEATO弾の発砲音が響く。そして引き寄せられたのだろう『やつら』が再び土煙を上げる。機関銃を固定している建物が崩れればその音は止むだろうが、すぐに鳴りやむ様子はない。その音に紛れ込ませるかのように、シュナイダーは言った。

「我々も興味があるのです。あれを——モスクワで使ったらどうなるか」

「……」

飯田は、赤欧海軍少佐を無表情で見据えるに留めた。

「いやはや、お見送り頂きありがとうございます」

ソビエトを象徴する赤い星が垂直尾翼に描かれた小型機を背後に、シュナイダー少佐は笑ってみせる。非公式とはいえ他国を代表する人間の見送りだ。滑走路には見送りのため飯田や、三鷹を始めとする特務大隊の人員が控えていた。

「特にオガワラ大尉、あなたとはなかなか楽しいお話が出来ました」

「そう言って頂き光栄であります。少佐」

小河原は笑ってみせるが、それは当然張り付けたような笑み。シュナイダーはあれ以降飯田とは言葉を交わさず、小河原にばかり会話を仕掛けていた。まるで飯田に伝えたかったのはあれだけだと言わんばかりに。

「では、我々はこれで」

シュナイダーはそれだけ言い、小型機へと乗り込む。与圧扉が閉まればその白い機体はすぐさま動き出し、滑走路より飛び立つ。分隊長の号令の下、見送りの兵もそそくさと退場していく。

「小河原、ご苦労だったな」

「いえ、この程度は」

そう言ってみせる小河原。もちろん疲労がない訳ではないだろう。なんせ半日以上は相手をさせられていたのだ。もちろん態度に出ることなどないだろうが、ともかくよくやったものだ。そしてそれはこの部隊全体にも当てはまる。様々なトラブルこそあったが全ての日程をこなすことが出来たのだ。人員の足りない中でよくやったものだ。

ここで得た情報は疑いようもない価値がある。だが残った疑問、さらには新たに沸いた問題も多い。

「……なあ、小河原」

「はい？」

『やつら』を兵器転用できると考えるか？」

「沖繩でこそインパクトはありましたが、今回の結果を見る限りでは現実的でないかと」

小河原は即答。なんせその問はここにいる誰もが頭の隅で考えていることだ。

「だろうな」

今回の実験の最大の成果、それは『やつら』の脆弱性であろう。

『やつら』は海から沖繩へと「上陸」した。そして陸上も移動した。水棲生物が陸に上がったなら普通は自重に耐えきれずその場で死に至るはずだから、この時点で体格が強固なのは分かる。

だがそれは、鉄筋コンクリートを破壊するほどではない。厳密には、『やつ』一体では鉄筋コンクリートを破壊するほどではない。あれだけの重量物がぶつかるのだ。『やつら』が体当たりを受け続けられれば、いずれはどんな建物も倒壊するだろうが、それはどんな動物にだって当てはまる。像が万頭乗れば、さしもの金門橋も落ちることだろう。そりゃそういうものだ。

つまりどういふことかと言えば、『やつら』の脅威はただひたすらに数なのである。沖繩全土を覆いつくすかのような『やつら』の波。それが衝撃力を生み出し、陸軍の防御陣地を突き崩したのである。

まるで中世の攻城戦だ。数に物を言わせ、力づくで城門を蹴破る。

陸軍は散兵戦術を基本としていて、防御陣地も横の連携により構成される見えないネットワークを要とするものだ。数で来られた日には勝てるわけがない。

では、それに合わせた防御をすればいいだけの話。『やつら』は偵察衛星や近接支援機C O I Nを使ってこないのだ。勝手さえ知ってしまえばここ半世紀でもっとも戦いやすい相手かもしれない。

それを示せただけでも、今日は良しとするべきか。

頭に浮かぶのは先ほどの赤欧海軍少佐のシユナイダー。どこか飯田たちを見下すような彼が、そしてその背後に控えるソビエト連合ユが、西側による『やつら』の兵器転用を恐れているのは事実だろう。

『やつら』を開発したのが連中であろうとなかろうと、西側は『やつら』を手に入れてしまった。もし『やつら』が東側の新兵器なら西側に開発・生産できない理由はないし、そうでないなら西側が新兵器を手に入れるだけだからだ。

だが、こんなもの兵器であるものか、ここまで効率の悪い破壊装置もなかなかないだろう。それは今回ハッキリと示された。

飯田は頭の中に沖縄本島を描く。そこに上陸したあとの『やつら』の動きを描く。美しい動き、統制された動きで祖国の領土を蹂躪する『やつら』。

「……よく出来た作戦だ」

これだけの組織的行動を取れる敵。数世紀も劣った戦術で我が国を圧倒する敵。しかし飯田がその目で見た敵の姿は、あまりに醜く、知性などを感じることはできない。しかし戦略は立派だった。どこで習ったのか知らないが、沖縄を分断、そのままの勢いで見事に二個師団以上の戦力を撃破してみせた。

——こいつらは進化している。目的別にな。

大迫閣下は仮説を立てている。『やつら』には目的がある。そのために進化した、と。そして今回は、過去にアメリカ合衆国が本気で計画した沖繩上陸作戦をもとにしている、とまで言ってみせた。それはあまりに根拠が足りない、とんでもない仮説と呼ぶのも憚られるものだ。

それでも大迫閣下はそれを飯田に伝えた。飯田はその可能性を本気で検討しなければならない。それが仕事というものだ。

では仮説に基づいて考える。結果たどり着くのは『やつら』がこれほどの作戦を完遂するためには、明確な意志を持ち、そして『やつら』を沖繩に、それも読谷という一箇所に上陸させた上位個体が存在しなければならぬということだ。

この沖繩を踏み潰した『やつら』の行動を群意識や習性といった適当極まりない仮説で説明することは出来ない。『やつら』を完璧に統括する存在が必要なのだ。『やつら』を指揮する上位個体があると考えるのが妥当なのだ。

そんな存在など、いるものだろうか？

今の話では実行個体と指揮個体を区別した。それは分業の考え方だ。進化と分業は全くもって違う。分業は同じ個体で行うもの。では『やつら』の一部が全体を統括する長になりうるか？ そんな社会性を備えるほど『やつら』に知能があるとは思えないし、仮にそう言った社会性を持っていてもそれが沖繩を蹂躪できるとは到底思えない。『やつら』が群れを成し、それが完璧に制御された時に——即ち、完璧な縦方向の支配体制が確立された時に——初めて『やつら』は戦略兵器級の威力を発揮するのである。

……ではやはり東側が？

それは違うだろう。可能性としては絶対に捨て置いてはならないが、それに固執することは思考停止を招く。

飯田が見る北樺太の空は、嫌味なほど晴れ渡っていた。

西暦2022年、この年を境に——いや、それ以前からかもしれないが——母なる海は人類に牙を向いた。初めは何の目的があるとも知れず、それらはただ海をゆく船を沈めた。しかしある時から、やつらは陸地にその悪意を伸ばし始めていた。それに気づいた者は少なく、気づいた者も大半はなにもせずに傍観していた。一般的に見れば合理性も経済性も存在しない悪意が、いったいどこへその矛先を向けているのかを測りかねたからだ。故に傍観を続けた。その意味では当事者はまだ誰もいなかった。

そしてなお、やつらが陸地に足がかりを作り始めた今でさえ、誰もやつらの本質を、見抜けていない——。

協調へは程遠く

H34. 3. 11 《X—234 days》

——西暦2022年3月11日。東京——

どんな時でも、朝は平等に訪れる。

琉球諸島事変より既に一週間以上が経過した。避難民は避難所に一通り分配され、鹿児島に移された臨時沖縄県庁もようやく犠牲者の数を把握し始めている。沖縄本島にほど近い島々の避難は多少の混乱を伴いつつも順調に進んでおり、今ごろ内務省などでは離島への避難命令をどこまで拡大するかで会議が煮詰まっていることだろう。

しかし国民が気にするのはそんなことではない。彼らは目に見える形だけの成果を欲するものだ。つまりどういふことかといえ、沖縄奪還は急務である。とにかくそれしか言わないのである……もちろんただ沖縄奪還を求める世論というわけではない。慎重論は存在するし、避難民への支援物資も集まってはいる。戦災であれ天災であれ、同胞を支えるのは当然のことだ。

とはいえ、そんな人々ですら奪還作戦を未だに発表すらしない政府に少なからずの憤りを感じている。政府はそんな体たらくを晒していた。

まあ、勇み足で若い兵士たちを死地へ送り込むよりは幾分マシなのだが。

「ようやく海軍大臣が頷いたよ」

そんな帝都東京。赤煉瓦造りの海軍省に存在する海軍幕僚部。2. 26事件以来テロ対策として設置された非常ドアが存在する幕僚長執務室。その部屋の主である大迫善光海軍大將はやれやれと言わんばかりの表情で微妙な笑みを浮かべる。

それを聞くは幕僚長補佐官を務める飯田孝介海軍中佐。沖縄の件

であちこち飛び回らされている彼は直立を保ったまま上司の言葉を待つ。

「貴様を補佐官の任から解く時が来た。今日までよくやってくれた……と言いたいところだが、ここからが正念場だ」

「はい」

今日まで飯田は「琉球諸島事変における駆逐艦沈没に関する調査委員会準備室」などという実体のほぼない組織の長を兼任させられていたのだが、そんな歪な体制もこれで終わりだ。

準備室はあくまで準備室。飯田がこれより新設される部署の長に任じられることで、ようやく体裁を整えて『やつら』へと対処できる。「当然理解しているだろうが、今回の件の主導権を取るのは海軍だ。陸軍や空軍を議論に交えるのは前提として、会議は必ず海軍施設で行え」

大迫が関節の凝りを解す様に重心を動かすと、その椅子もそれに合わせて僅かに軋んだ。背後に立てかけてある日章旗と旭日旗は今日も無言で項垂れたまま。

「はっ」

短く返答。大迫な満足げな深い頷きをもって締めとする。

「失礼します」

飯田は踵を返し、新たな部署へと向かう。

その名は沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室。

海軍幕僚長の直属として初めて正式に設置された、『やつら』専門の対策部署である。

「——知つての通りであろうが、軍には我が国固有の主権線の早急な回復が求められている。しかしそれ以前の問題として、これ以上国民の財産と命が侵される事態も防がねばならない。我々はまず国民が抱える目の前の不安を取り除く。諸君らの奮闘に期待する」

飯田の言葉に敬礼をもって答える室の人員たち。その数僅か8人、さらにほとんどが幕僚部のメンバーを集めた関係で顔見知りばかり。

幕僚部でなにかのチームを作るとしたらこんな感じの顔揃えになるだろうといった感じた。急ぐしらえ感は否めない。

それでも能力としては十二分に強化されたと言っている。一応横須賀の連合艦隊司令部からの派遣士官を受け入れることで実働部隊との繋がりを持たせ対策部署らしい体裁も整えられている。それに大迫海軍幕僚長が描くのは三軍を巻き込む統幕本部付の部署なのだ。海軍主導とするため呼び水としての室と考えれば、このくらいの規模から始めて大きくしていくのが妥当であろう。

「では、早速だが始めよう。木更津きさらづ」
「はっ」

準備室から続いて編入された木更津海軍中尉がホワイトボードを部屋の中央へと動かす。それから飯田が目配せをすると木更津は部屋に置かれたプロジェクターを起動、ホワイトボードに『やつら』の姿が映し出された。

「これが現在確認されている正体不明の生物だ」

その言葉を聞いた数名が顔を見合わせる。政府は『やつら』のことを正体不明の武装組織としており、幕僚部でもその見解に従っているのだからこの反応は当然だ。

もちろん『やつら』には「武装勢力」というより「生物」という表現が似合うというのは皆思うところであるだろうし、そのうえで武装組織と呼称するのは迅速な対応を後押しする方便だということは承知している——なんせ、新種の生物とか言ってしまうと事態はなしがややこしくなってしまう——。

それでも『やつら』を生物だと言い切った自身の上司に違和感を抱いたのだ。軍が生物相手に苦戦するのは特撮映画ぐらいだから、まあ仕方がないとして……飯田は構わず続ける。

「さして驚くことでもないだろうが、これらが生物であることは既に証明されている。近々政府も公式にそれを認める予定だ。よって我々はそれを前提として議論を進めたいと思う。現在確認されているのは仮称Ⅰ型とⅡ型。それぞれの現在確認されているスペックはこれだ」

飯田は紙媒体を取り出し、それをプロジェクターの置かれた机の上に置いた。ちなみに割り当てられた部屋が多目的室だったため、プロジェクター以外の機材と机椅子は全て無造作に部屋の隅に追いやられている。後でちよつとした肉体労働をする羽目になりそうだ。

「仮称Ⅰ型が我が軍の哨戒機に対して発砲してきたタイプで、仮称Ⅱ型が実際に沖繩に『上陸』してきたタイプだ。こちらに関しては鹵獲個体が多数確保されてはいるが……」

「全長四〇七メートル……随分とアバウトですね」

それを手に取り、一瞥してから不満げに言う室員。彼が連合艦隊司令部よりの派遣だったか。確かにこんな全長全幅全高やら移動速度やら防御性能やら見せられても、なにとどう比較すればいいのかわかったものではない。

「その通りだ。情報が不足している。特に仮称Ⅰ型に関しては鹵獲個体がなく写真観測による推定であるため、ほとんど何も分かっていない。我々はこれらの情報収集も行わなければならない」

飯田の言葉を聞いてどことなく不満げな表情になる士官。情報が揃った状態で作戦を作り、そして戦うのが海軍だ。連合艦隊司令部からの派遣となれば、まあ情報収集は自分らの仕事ではないだろうと感じるのも仕方がない。

「まあ、艦政本部が協力してくれている。ある程度の情報は今後も回ってくるはずだ。ともかく、当面はこれら二種類を仮想敵として計画を策定することになるが……なにか質問は？」

「飯田室長」

すると別の室員が進み出た。

「やはり室長は陸上戦力を主軸とした作戦立案を考えているのですか？」

その質問は、手順としてとても大切なものだった。

飯田は琉球諸島事変の発生直後——つまり沖繩が『やつら』に蹂躪された翌日——に大迫の命に従い防衛計画の草案を提出している。

それは飯田の成果であり、もちろん今回の室設立に当たって飯田が

室長を任される根拠なのであるが、その草案には問題があった。

そもそも、あれの提出は西南方面軍が少数精鋭での沖繩奪還作戦を実施しないように釘を差すためだ。故に陸上での被害、陸上での戦闘ばかりを扱っており、対処は——扱われる想定が佐世保周辺に『やつら』が来襲するというものであったにも関わらず——陸軍を主体行うこととなっている。海軍にも関わらず水際防衛の計画ですらないのだ。

沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室は陸軍組織だ、飯田は陸軍だ——その実、彼の叔父と従兄弟はホントに陸軍将校と来たから洒落にならない——などと言われては困るのである。

だからこそ、飯田ははつきりと否定しなければならない。ここは海軍だ。

「いや、海上での戦闘は前提だ。だが計画には組み込まない、それは海上におけるアレの能力が未知数であるからだ。知つての通り海軍とアレの交戦経験はないからな」

実際には哨戒機への砲撃。駆逐艦「雷」が被撃沈、さらに二航戦「日向」航空隊による陸軍への近接航空支援となかなか交戦しているのだが、それは幕僚部ではタブーに等しい事象である。沖繩は対地上戦だからもちろんのこと、哨戒機や「雷」の被撃沈は奇襲攻撃であり、海軍は『やつら』との戦いにおいて全力を出せていない……それが海軍省での考えなのである。

……そしてとても声を大にしては言えないが、海中を進む『やつら』への対処は不可能だ。計画に組み込まないというか、組み込む意味がないというのが正しい。なんせ『やつら』への対処に「水際」などは存在しないのだから。

「なるほど、では海上戦闘は」

そう質問を続ける士官。

「当然考えている。上陸を許せば社会資本への被害は甚大だ。それを

防ぐのが我々海軍だろう」

飯田の言葉に、その通りだと頷く部下たち。

もちろん飯田の言葉に嘘はない。とはいえ防ぐための具体的な手段がある訳ではない。だから誰も何も言わない。対策が上がってからでいいのだ。そういうことになっておけ。それでいい。

なにせ今は、それ以上に早く為さねばならないことがあるのだから。

飯田は全体を見渡しながら告げる。

「海上でのアレの戦闘能力は後々検討するとして、大迫閣下はまず沿岸部での具体的な防備案を立案せよとのことだ。それを叩き台に次の統合幕僚会議に提出する作戦要綱を作成する。無論、これは海軍根拠地の防衛にも直結する。しっかりと取り組んでほしい」

「はっ」

海上戦闘を棚上げしていると言われればその通りだろう。ここは『やつら』への対策最前線。だがここは決して全ての判断を下す部署ではない。

重要なのは『やつら』への対処において海軍が主導権を確保すること。

海軍が陸上での作戦案を出すのはお門違い？ それを押し通すために統合幕僚本部、そして統合運用のシステムが存在するのではないか。なにはともかく、これは海軍の案件だ。他の連中に口出しなどはさせない。その気概が肝要なのだ。

「既に来年度予算は確定しているが、予算度外視で想定しうる事態への対策を考えてほしい」

そこで、だ。飯田は言葉を切って部屋を見渡す。そしてあるところで止まった。そこに8人の海軍軍人は目を向ける。もちろん彼らも気付いていたが、ここには飯田含め9人の室員以外の人間がいるのだ。

「多方面より事態を想定するため、室は各省よりのオブザーバーを受

け入れることにした。各々の立場より、的確な助言を求めるものである」

総勢14人。ひとまずこれが、記念すべき第一回会議のメンバーとなる。

防衛案というのは戦場——つまり、仮想敵が攻めてきそうな場所——を定めてから策定するものだ。

軍事活動において地形というのは天使にも悪魔にもなり得る存在で、あらゆる計画というのはその地域にしかない地形に沿って展開される。それは仮想敵が『やつら』という酷くヒトから離れた存在であっても変わらない。

と言つてはみても、『やつら』が攻めてきそうなのは海岸線だ。そして海岸線は日本中に存在する。

つまり、敵さんはそこら中に攻めてくるということ。計画立て放題。全くもって嬉しくない悲鳴だ。

「やはり東京は広いですね」

東京なら政府はもちろん国民にとっても大きな関心事であるし、なにより分かりやすいだろう。という訳で会議は東京防衛を主軸に進むこととなる。しかし一口に東京と言っても対象が広すぎるのが問題だ。とりあえず皆で東京都市圏がすっぽり入った大判の地図を囲む。

地図には中央に東京特別区²が置かれ、その周囲に神奈川、千葉、埼玉の一部分が描かれている。帝都防備いや日本の国防を語るうえで欠かせない航空総軍司令部³、内地総軍司令部⁴、連合艦隊司令部⁵の三拠点をギリギリ収めたこの地図は、まさに日本の安全保障が詰まった地図と言えるだろう。

「とりあえず、東京中枢を直指すとして採りうる経路はどこだ？」

飯田の言葉に、陸軍省——正確には陸軍大臣直轄の中央即応軍——より派遣されてきた橘が答える。海軍省における陸軍中尉の制服は変に目立つが、仮想敵がソビエトで一致している現代ならばそこまで波風が立つこともない。

「浦賀水道を突破され、東京湾を素通りされるのでなければ……相模湾に上陸した後、多摩丘陵へと北上する形でしょうか」

橘が東京湾と相模湾に『やつら』に見立てた駒をいくつか置く。海軍の図番演習用駒を持ってきている都合上それは船の形をしていて、まるで黒船来航のようだ。

もつとも、駒は赤かったが。

「千葉や茨城に上陸される可能性は？」

「仮に上陸されても房総半島に関しては急峻な山岳も多いですから進撃は困難かと思われまます。また確かに茨城の東部に上陸される可能性はあるでしょうが、東京までは100km近くありますし、住宅地が少ないため迎撃は容易かと」

そう言う橘。茨城南部と千葉北部は近郊農業が盛んな地域。そこまで住民の数は都市部と比べればはるかに少ない。それ故に迎撃は容易だろうというのだ。

それはもちろん、神奈川で『やつら』を防ぐのがいかに難しいかを示してもいた。

知つての通り市街地での戦闘は民間人の犠牲者を生む。

半世紀前ならいざ知らず、現代における最上の存在は人間の命。今や徴兵制すら批判の対象となる時代だ。街で発砲することがそう簡単に許されるわけがないのだ。仮に許されたとしても使用兵器の制限や車両重量に耐えられないいくつかの道路。果ては特殊車両の通行許可、土地徴用について地権者とのあれやこれや……いざ戦闘となれば基本文句を言われることがない海上での戦闘と異なり、陸上での戦闘、特に自国本土での戦闘は制約が多いのである。

とはいえ、なら千葉茨城なら大丈夫という訳ではない。

木更津が東関東の地図を出す。地上での作戦を想定していない海軍は一般向けの地図しか持っていない訳だが、利根川沿いに開けた土地が東京まで続いていることぐらいは分かる。

「ふむ……利根川を遡上される可能性はないだろうか？」

「遡上ですか、なるほど」

『やつら』の機動力には目を見張るものがある。実際、沖縄での『やつら』は海中を平均15ノットという高速で移動してみせた。海中である。水上における移動速度は不明ではあるが、抵抗しかない海中でこの速度なのだ。それ相応のものだと考えねばなるまい。

「まあ、これに関してはアレの詳細な移動能力が判明してからだ。今はいいだろう。他に何かあるか」

「いえ」

「では、東京湾から直接上陸する甲経路、相模湾より上陸し陸路をもつて北上する乙経路、利根川流域を通過する丙経路。以上三経路を東京防衛では想定するものとする」

飯田はそれらの経路を迷うことなく脅威度順に命名する。地図にしてみると意外と攻撃方法は限られているように見えた。

「甲経路ですと浦賀水道を封鎖する以外に防ぐ方法がなさそうですね」

誰かがそう言う。『やつら』が山岳踏破能力に乏しいことは既に沖繩の恩納で証明済みだ。房総半島や三浦半島を乗り越えて東京湾に侵入される心配はないだろうから、確かに浦賀水道を塞ぐだけで甲経路を防ぐことが出来るだろう。東京が曲がりなりにも内湾の奥に位置しているということが幸いした。

ちなみに浦賀水道を封鎖するとなれば海軍の担当となるだろうが、先ほども確認した通り海上における『やつら』との戦闘は議論の対象ではないので省く。東京湾内の民間船をどうするかなどの解決すべ

き問題はありそうだが、飯田はひとまず甲経路に関しては議論を切り上げることとした。

もちろん、現実には浦賀水道封鎖なんて政治的に不可能だろう。だがそれは柵に上げる。

「甲経路に関しては後日でいいだろう。次に——」

なんせ、会議が論じたいのは甲経路ではないのだから。

「——このようにして、この地区を失うと南関東沿岸部の交通は事実上ストップします。ここを失うことだけは避けねばなりません」
地図の一点を指し示すのは運輸省の石川という男。そこには「横浜」と書かれている。

現在、会議は相模湾に上陸される乙経路の防衛を検討中である。乙経路は上陸後の進路が住宅地を横切る形となっており、もちろん初めの議論はどのようにして戦場を作るのか——つまり住民をどのようにして避難させるのか——となっているのだ。

いや、なっていた。というべきか。一体全体なぜ横浜の話になっているのか。

飯田は小河原に目配せ。小河原は短く頷いて、それから口を開く。「失礼、石川係長。確かに横浜も乙経路上にはありますが、その前に茅ヶ崎方面の住民避難を考えませんか」

「お言葉ですが小河原大尉。私は今その茅ヶ崎の避難民を移動させるうえで必要な話をしているのです。横浜、厳密にいうなら横浜Ⅱ川崎区間を失えば南北の移動が出来なくなります。先ほど言った通りここに關しては代替経路がないので、三浦半島と茅ヶ崎方面に多数の民間人が取り残されることになりかねません」

「いや、まず横浜を喪失する状況では茅ヶ崎方面の防護は困難かと思われませんが……」

実際その通りだろう、乙経路においての横浜は上陸想定地点より相
当に遠いはずだ。

「果たしてそうでしょうか？ 資料によれば仮称Ⅰ型は砲撃を行うとのことでした。問題なのはこの区間にその砲弾が着弾することです」
「……つまり、流れ弾の話をしていると？」

要領を得ないといった様子で橘が聞く。

「ええそうです」

「待ってください、現在の我が軍の装備では高速で弾道飛翔する砲弾を防ぐことは出来ません。そもそも、沖縄では仮称Ⅰ型による対地攻撃は確認されていません」

「ともかくです、ここが一番重要なのです。東海道線が不通となれば最悪の場合相模湾沿岸部全ての交通に混乱をきたします。もちろん、軍の補給にも影響が出るでしょう」

石川は一步も引く気配がない。それは橘も同様だ。

「石川係長のご意見は陸軍の継戦能力としての補給という意味なのでしようが、そもそも神奈川県に即時展開できるのは座間の中央即応軍だけです。相模沿岸全てを守るだけの兵力はありませんので、基本的には遅滞戦術による撤退戦を主軸とします。事前に物資を用意することが出来ますので、補給面に関しては問題ないかと。また遅滞戦術ですので、いずれ東海道線は使えなくなります」

「ちよつと待ってください、じゃあ茅ヶ崎都市圏、小田原都市圏の防衛はどうなるんです？ 東海道線は神奈川を繋ぐ重要な路線です。失えば神奈川県交通が麻痺しかねません」

神奈川県民を見捨てるつもりですか。そう噛みつく石川。橘中尉は「いや、そういう意味ではなくてですね」と手を振りながら答える。
「もちろん茅ヶ崎都市圏にも部隊は展開します。ですが中央即応軍の戦力は民間人を防護するものであって、鉄道線を保護するものではありません。東海道線の全線防護は不可能かと」

「いえ、違うんです。鉄道が混乱することによってその民間人が避難

すら出来なくなるんです」

石川はそう強く主張した。

「これは南関東全域に言えることですが、自動車道路が貧弱すぎます。よって住民が自主避難を始めれば直ちに道路交通網は麻痺します。運輸省は、鉄道線による迅速な避難こそが唯一の避難手段と確信します」

「——とは言うが、実際どうなんだ？」

「さあ、そう言われなくても」

飯田の問いに、曖昧に答えるのは小河原だ。準備室より引き続き飯田の指揮下に残っている彼と飯田は、現在小休憩中である。懐中時計を取り出してみれば既に十一時を回っている。そろそろ昼食時だ。

さて他の室員は煙草だろうか、赤絨毯のひかれる省の廊下には飯田と小河原の他に誰もいない。先ほどのまでの会議を思い返し、どうしても引つかかるところがあつた。それを小河原へと聞いてみる。

「……正直、私は鉄道がよく分らん。石川係長はああ言うが、鉄道はそこまですごいのか。自動車は使わなくていいのか？」

彼に言わせれば半日もあれば沿岸部の住民を避難させることが出来るそうだが、ベッドタウン化が進み多くの人口を抱える神奈川県南部からそう簡単に避難が出来るとは思えなかつたのである。加えて言えば、東海道線は避難に使えない。

「まあ、鉄道への思い入れが強いですよ。道路は運輸省というより陸軍省と建設庁でやってきましたからねえ……正直、こんなところで論争が始まるとは思いませんでした」

小河原はため息交じりにそう言う。飯田も頷くことで肯定。石川がおおっぴらに論点をずらしているのは明らかだ。

「彼は何が不満なのかね、私としては、もう少し建設的な話し合いを期待しているのだが。なんとかならないか？」

小河原は躊躇うように目線を泳がせる。周囲の目を気にするようなその仕草。廊下に目立つた人影はない。

「……中佐、自分は石川係長「殿」が運輸省の答えだと思うのですが」「こちらで好きなようにやらせてもらう、か？」

「なんせつい最近まで貨客船破壊は運輸省の担当でしたし」

それに。小河原は一問置いてから付け加える。

「海軍と運輸の不仲は旧海上護衛総隊以来です」

皆まで言われなくとも分かってている。運輸省と海軍は、対米戦争以来の不仲を未だに引きずり続けているのだ。

「まあ、だからって鉄道万能論を持ち出されても困るんですがねえ……」

ぼやくように小河原。ポケットよりICカードを取り出し自動販売機に当てる。音を立ててペットボトルが転がり落ちてくる。

運輸省の石川はとかく交通の便、一時間に何人の民間人を輸送できるかばかり考えるが、現実の街には多くの要介護者が住んでいる訳で、単に鉄道があれば解決する問題ではない。かといって道路があれば解決するわけでもなく、そもそも交通インフラの話に拘るのがおかしいというもの。

「内務省の野原さんも言っていましたけど、避難が完了したことが確認されないとなんか軍が発砲できないという事情は鉄道なんかじゃ解決できないですよ。要介護者とかは列車じゃ逃がせない訳ですし」

「問題は、限りある輸送手段をいかに適当に振り分けるか。そして避難完了を確実に確認する方法か……まあ、避難の際は中央省庁ではなく地方自治体にやらせた方が良いのは疑いようがないな」

運輸たちがそれを許すかどうかはともかく。そう飯田が言えば、小河原はどこか諦めた表情で返す。

「別に運輸が非協力的なだけかと思いますが……まあ地方自治体の協力は不可欠ですよ」

避難に話を絞るのであれば、なにより重要なのは地方自治体の活動、要は「地元のヒト」だ。避難はその土地の専門家にやらせるに限る。「経路確保に並んで重要なのは南関東における常設自警団の増強」というのは聞きに徹していた内務省の野原が言った唯一の意見らしい意見で、飯田はそれに大いに賛成だった。

「自警・消防団レベルで綿密な避難計画が立てられれば、だいぶ変わるのだからなあ」

「自分もそう思います。民間防衛なくして乙経路を防ぐことは不可能です」

小河原も頷く。実際、沖縄に設置されていた自警団は、戦闘はともかく避難誘導には大変役に立った。

しかし忘れてはならないのは、沖縄では仮想敵国ひがしがわの直接侵攻が本気で考えられていた。そして沖縄の閉鎖的な地理条件が強力なつながりを持つ自警団を形作る上で役立っていたのだ。それを関東に再現するなどそうそう簡単なことではない。

「さて、どうしたものかな」

飯田が呟く。小河原は答えがなかったようで、ペットボトルのお茶を口に含むのみ。

「いずれにせよ人員が足りない。99年の東西宥和以来、陸軍も海軍も常に近代縮小化を目指してきたからなあ、ここでいきなり増員に持つていくのは難しいだろうが……」

結局のところ、出来るものなら避難誘導まで全て官主導でやればそれでいいのだ。結局のところ民間人まで駆り出されるのは人手が足りないからだ。人口当たり予備役員数が平均より多い沖縄でも人手が足りない——それ以上に機材も足りなかったが——のだから、人員不足は深刻である。

小河原は少し考えてからやがて口を開いた。

「中佐、過去の制度を復活させるのは如何でしょう？」

その意味を即座に理解できず、飯田はとりあえず聞き返すことにする。

「というっ？」

「隣組とか、戦時体制ほど厳しくなくとも冷戦黎明期まで逆戻りさせればいいんですよ」

あっけらかんと言ってみせる小河原。まったくとんでもない暴論だ。そもそも隣組が瓦解したのは世帯構成が変化したからだ。もちろん復活なんて無理に決まっている。

飯田が顔をしかめたのは小河原にも見えただろう。彼は慌てるでもなく淡々と続ける。

「それが現実可能かは置いておいて、乙経路の犠牲者を減らすためにはそういうレベルでの民間防衛が必要かと」

「まるで総力戦だな」

「未だに冷戦時代ってことじゃないですか？ 実際、沖縄でもそういう状況だったと聞きます。軍民運命共同体です」

未だに冷戦。その通りだ。東西宥和から間もなく四半世紀。しかし核戦争のリスクは消え去っていないし、核の均衡は未だに有効だ。陸軍が平時の部隊単位として本来戦時単位であるはずの「軍」を用いていることから、日本が核戦争を想定し続けていることは一目瞭然である。

しかし世論は素直だ。実際核戦争のリスクは幾分どころか相当に減った。イデオロギーの戦いだなどと言っても世論はタダでは軍事予算を許さない。世論がそうなら社会も同じ。国民は総力戦といった全体主義からは程遠い場所を目指しているのだ。

「厳しいな」

たった一言。だが改めて呟いてみると、なるほど余計に実感が湧くというものだ。我が国がいかに重大な国防問題に直面しているかがよく分かる。

組織、法律、世論。どの側面から見ても今の日本は『やつら』に対抗できない。出来ないからこそ沖繩が落ちたのだ。

似たような思考を頭の中で何度もしていると、小河原は少しかしまった様子で切り出してきた。

「中佐、失礼ですが……」

飯田は無言で続きを促す。

「この会議に意味はありますかね？」

「意味があるかないかではなく、意味は見出さねばならない。違うか？」

「いや、確かにその通りではありませんが……自分にはどうにも、時間の無駄以外の何物でもないように感じられるのです。自分で言ってお

きながらアレですが、隣組なんて軍が作るものじゃないですし」

その通りである。そもそも軍とは戦う存在ではなかったか。避難計画など内務省が担当すればいい話である。

「とはいえ、琉球諸島事変が攻撃と解釈されている以上は『やつら』への対処は軍の管轄であるし、そうでなくともこれが各省庁の手に余る問題であることには変わりがない」

「ええそうでしょうとも。中佐のおっしゃる通りです」

この件は間違いなく軍主導の対策となるだろう、いやそうでなければならぬ。だからこそ小河原が抱いているであろう違和感が正確に真実まことを射ていること、それを飯田は知っていた。

「大迫閣下は、どうも焦っているらしい」

大迫海軍幕僚長が対策の中核をこの「沖縄県駆逐艦沈没事故調査室」を発展させた組織に託したいと考えているのは間違いない。だがやろうとしているのは海軍の一組織が軍の枠組みすら超えた発言権を得るという非常に不健康な状況。まあ必要ならそれを成すことは厭われないが、反発を招くのは明白なのだからもつとゆつくりやるべきだろう。

だから飯田は確信を持って言えるのだ。彼は焦っている。

「……何に対してでしょうか？」

それは分からない。

「さあ、だが閣下は「室」を発足させることをここまで急いでいた。今はまだ情報が足りない状況だ。必要なのは室ではなく、情報だろう」

今日の会議だって仮定の数字が多すぎる。「仮定」などでは軍は動けない。「仮定」は樂觀を産み、そして勇敢な軍人たちの首を絞めるのだ。

「室を作ること、ですか……まあ、自分としては情報求めてあちこち飛び回るよりか東京に落ち着くほうが嬉しいのですけれども」

「お前なあ……」

そこまで言いかけて、飯田は口を噤む。廊下の向こうに人影が見えたからだ。遅れて気づいた小河原もそれとなく身構える。

「――失礼、飯田室長」

清潔な紺のスーツに身を包んだ石川は、会議の時よりか幾分柔らかい口調だ。

「石川係長、なにかね」

「いえ、少々室長に見ていただきたいものがありました」

石川はいつの間にか小脇に抱えていた資料を手渡す。紐で留められたその資料、数十ページはあるだろうか。

「これは？」

「運輸省の方で既にまとめられているものです。まだ草案ですので……お渡しすることは出来ませんが」

ならなぜ見せたいと言いたいところだが、まあ目を通してゆく。どこにでもありそうなタイトルに飾られたその文書は、捲れば簡易な地図や数字が添えられており――。

「なんだこれは」

石川は勝ち誇った様子もなく、だがどこことなく雰囲気ですべてみせる。

「避難計画です」

「……」

なぜ。などと分かり切ったことは聞くまい。彼は海軍幕僚部がオプザーバーとして呼集しただけであり、その呼びかけに応じてくれたに過ぎない。そもそも『やつら』への対処を望み、さらに主導権獲得を目論むのであれば計画を率先して立てるのは当然。飯田も全く同じことをしようとしているのだから、文句が言えることではない。「ところで、自動車を使うのか。先ほどはそんなこと口にすらしていなかったと記憶しているが」

精々反撃するならこのくらいであろう。会議では横須賀自動車道なんて話にも出てこなかった。

「道路も飽和しますが、完全避難を目指す以上鉄道もいずれは飽和します。横須賀線は決して強力な路線ではありませんので」

「なら会議でもそう言ってくれ。海軍幕僚部として、運輸省に誠実な

態度を求めたい」

「では運輸省としては先ほど仰っていた「海上における遅滞戦闘」とやらにどの程度の戦力を投入するかを教えてくださいだきたいものです」

飯田と石川の間で、静かに言葉が交わされていく。

「相模湾防衛と浦賀水道封鎖は最重要事項である。可能な限り投入するとしか今は答えられない」

それを言った途端、石川の声が冷えた。

「また船団護衛軽視でありますか」

「国民防護重視だ。そして石川係長、南西諸島の海上交通事情は把握しているつもりだが、今回の議論は襲撃への対処であって航路の防護ではない。それに関しては後日検討する」

目の前の男が話を逸らそうとしているのは明らかである。彼が言いたいのは沿岸防衛に多大な戦力を割くことによつて海軍の本来の存在意義である制海権の確保——即ち、シーレーン防衛——が疎かになるということなのだろうが、物資が潤沢にあつたところで国民がいなければ意味がない。

だが、そのどちらが重要かを決めるのは飯田ではない。ましてや石川でもない。

「なるほど、出過ぎた真似でした」

石川はあつさり引き下がった。

「中佐……あれって」

バレてますよね？ 部屋へと戻っていく石川の背を見ながら、小河

原はぼそりと言う。

「何をいませら、それは前提だろう」

この「沖縄県駆逐艦沈没事故調査室」が意図的に海上での戦闘想定を避けていること。それは当たり前前の話だ。なんせ勝てるわけがないのだから。だからこそ室は陸上戦を論じようとするのである。海軍の重要性を説くには陸の脆弱性を説けばいい。国土の保持のためには冗長は何重あつても足りないのだから。間違つたことは言つ

ていない。

「石川氏もあんな宣戦布告まがいの言い方をしなくともいいでしょうに……」

困惑気味の小河原。縄張り争いは非常に大事だが、そもそも省庁と
いうのは分業制故に複数存在するのだ。お互いなくてはやっていけ
ないはずなのに。

「……どうも、ことを急いでいるのは大迫閣下だけではないらしいな」

標準^E時¹子午線³以東⁵に存在する東京では既に太陽は南中済み。省の
廊下に日は差し込まない。

——西暦2022年3月11日。東京——

レンガ造りの衛兵詰所——といつても、ヒト一人が風雨を防げるような丸っこく小さな設備——に待機する水兵が捧げ銃。それに返礼しつつ飯田はレンガ舗装の道を進み、そして鉄柵のガイドを踏み越える。海軍省の敷地はこのレンガが続くところまでで、千代田の官庁街は現代らしいコンクリートの歩道と車道だ。ガス灯を模した街灯が等間隔に並ぶ。

収められたLEDライトはまだ街を照らしていなかった。こんもりと茂った木々の向こうには国会議事堂の一部と思しき構造物が見え、その向こうに橙色に染まった太陽が沈んでいく。

既に午後五時を回ったとなれば、あの大仰な建物に詰める政治家たちも帰路についていることだろう。

飯田は振り返りもせずとその道を歩いてゆく。警邏の近衛兵が列をなして彼とすれ違えば、堀の向こうには旧江戸城が見える。この国の中枢をなす千代田区、その一番地だ。その向こうに見える東の空はもう夜を迎えており、東京駅方面の高層ビルには煌々と灯がともっていた。そう言えば、定時退庁なんて久しぶりだ。ここ二週間どれだけ忙しかったかを改めて感じる。

しかし飯田は海軍中佐である。海軍軍人は即ち国家公務員であり、この国家の非常事態において定時に仕事が終わる訳がない。先ほどまで行われていた各省からのオプザーバーを招いての対策会議はもちろん恙無く終わった訳だが、本当の戦いというのはこれからである。

「皆、今日はご苦勞だった」

挨拶もそこそこに掌サイズの陶器を掲げ、それに全員——沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室の部下8名——が習う。畳に座布団、先ほど運ばれてきたばかりの膳。別に将官の接待という訳でもないのだが、こ

んだ話をするのならばと選ばれたのは座敷であった。もちろん室の長である飯田は上座に座っており、そこからなら全員の表情を一度に見ることが出来る。

「それにしても、結局あの運輸の石川とやらは何がしたかったんでしような」

「さあ？ 触れるかと思っていた海上保安庁ほあんちやうの話もしませんでしたしね」

思い思いの言葉を口にする室員たち。その顔は総じて明るい。

午前こそはひやりとする場面もあつたが、石川も飯田と直接会話して以降は表立っての対立はなく、午後の会議は当たり触りなく進行。海軍省としては本気を見せられただろうし、オブザーバーを招くことで各省の顔も立てることが出来た。話の内容が上辺だけに見えるのは第一回だからということにして、一通りの目的は達成出来たと言えるだろう。皆がひと仕事終わったという様子なのはそのためだ。襖に囲まれた空間には都会の喧騒を打ち消すための音楽が流れ、そのまま時間も穏やかに流れていく。

「——さて」

しかし、そんな雰囲気も飯田が箸をおけばすぐに吹き飛ぶ。飯田がそう呟くや否や、彼が率いる尉官8名は無言で臨戦態勢へと移行する。流石は中央勤務というべきか。

「甲経路についてだが、実際作戦課課としてはどうなんだ？」

結局のところここに居る彼らは海軍な訳で、専門は海。会議では必要に駆られて上陸された後の話ばかりしていたわけだが、そもそも肝心なのは「上陸されないこと」だ。しかし会議では海上戦闘を前提としながら海軍の活動に関しては一切触れなかった。

そしてその理由ワケは、飯田の問いに答える作戦課士官の歪んだ顔が物語っていた。

「作戦課としては、浦賀水道の封鎖も難しいかと」

「やはりか」

正直、それ以外の感想はない。

「機雷封鎖、もしくは核弾頭の使用が可能なら話は違いますが……」

皆まで言う必要もない。自国領海内での核弾頭の使用など論外であるし、機雷だつて設置できるわけがなかった。浦賀水道という東京湾の入口を塞ぐ。その行為は東京湾を殺すものであり、ひいては東京という人口数千万の巨大都市を世界と切り離す行為だ。

人口が膨らみ切った現代において重要なのは世界中と繋がること、つまり貿易を行うことである。国土のほとんどが島嶼により構成されている日本という国の貿易は、もちろん海運なくして成り立たない。そして浦賀水道とは、即ち東京の海運であった。

「……」

半刻は過ぎただろうか。省での会議は机の上に資料が所狭しと並べられた——なんせ、話が転がるたびに基礎的な資料を印刷していたのだ——ものだが、この場で必要なのはほんんのわずかな資料だ。鹵獲個体により研究の下地こそあったが『やつら』については何もわかっていないも同然だ。座敷であつても広げられる程度の情報が全てであり、それ以上には何も存在しない。

「二度補足してしまえば追跡はそこまで難しくないと。ですけどやはり、水中への攻撃能力の不足が……」

「127に對潜弾頭を装填するのはどうですか。昔駆逐艦に載せられていた奴です」

「あんなのもう残っていないから一からの開発になるぞ。艦本がやるのか。仮にそうだとしても、時間はどれほどかかる」

交わされる会話は会議で一度も論じられることのなかった海上戦闘に関するもの。信州の四方を護ると謳われる海軍が十八番であるはずの海上戦闘をコソコソ話するなど大變滑稽な姿であるが、それは打撃がないからこそであった。対処をせねばならない。ならば盛大に会議を開き各省からも意見を聞く。だが海軍のことは海軍が一番よく分かっている。

勝つための要因がまったくもって見当たらない。いや存在しないのだ。

なんせ『やつら』は海底をうごめく化け物だ。砲戦、航空戦、雷撃

戦、果ては衝角戦に白兵戦。幾多の戦術を試してきた海軍といえど、海中との戦いなどは対潜水艦戦のみだ。しかも潜水艦はかねてより補助戦力。そもそもその潜航という特殊な能力にリソースの大半を割かねばならない潜水艦は武装において相当な制約を受ける。通商破壊戦ならば主役になれるかもしれないが、決して戦場の、ひいては国防の主役にはなりえない存在なのだ。

と、そこまで考えが回った飯田にふと閃くものが。

「そうだ、あれが使えないか。三年前、研究会の凶版演習でやった潜水艦の集中運用によるソビエト空母艦隊の撃滅作戦」

「ああ、あの三隻潜水艦を用いて行ったアレですか？」

飯田の言葉に応じるのは作戦課の大宮中尉。研究会というのは飯田が参加する有志による「新時代水雷戦の研究会」のことで、大宮もこの研究会に参加しているのだ。三年前となると大分前の話だが、三隻潜水艦全力出撃で9隻の蒼龍型潜水艦。凶版上での演習とは言え、あの斬新な攻勢法は飯田や大宮といった研究会の面々の記憶によく焼き付いている。

もつとも、大洋で行われる海戦でそんなこと出来るわけがなく。まあ逆に言えばそんな数の潜水艦を集中運用することなんて考えられない——というか、攻撃のタイミングをそろえるのが至難の業だ——のだが……まあともかく、そういう研究があつたのだ。

「そうだ。凶版演習で検討したのは潜水艦の集中運用による艦対艦ミサイル斉射の有効性についてだったんだが……その後、複数の潜水艦が奇襲を仕掛けてきた際の対処法を検討することになったな。大宮、あの時の資料出せるか？」

「分かりました、纏めておきます」

「よし頼んだ」

三年前とは言え、あの時ほど対潜水艦戦闘が熱く論じられたことは——対潜水艦戦闘は発見までが肝心であり、攻撃方法について論じられることは少ないのだ——飯田の記憶では他にない。一連の資料がきつと役に立ってくれるはずだ。

となればこの話は持ち越しである。誰かが話題を変えるように口

を開いた。

『やつら』への攻撃もそうですが、索敵についてももう少し検討が必要ですね」

「確かにそうです。沖繩ではたまたま第二機動艦隊が展開していたからかなり早期に発見できたものの……」

たまたま、か。まあそれは事実ではあるのだが、事前の派遣があったという意味ではたまたまとは言えないだろう。大迫閣下は沖繩を知っていた。なぜかは分からないが、知っていたものは知っていたのだ。そしてその先も知っているに違いない。だから焦っている。

なぜ焦っているのだろう。

それは分からない。という大迫が焦る理由を飯田に教えていないのだから、分かるはずがない。しかしそれは飯田が知る必要のない情報なのだということの意味している。現に飯田は『やつら』に対しての対処を命じられているわけだし、それは現状の情報だけで十二分に実行できている。飯田は海軍中佐であるが、所詮佐官なのだ。身分相応の情報しか回ってこないのは当然である。

なら、目の前のことだけに専念すればよい。彼は口を開くと、目の前で展開される議論に突入する。

「確か、沖繩では海底の振動が確認されていただろう。アレが本当に海底を移動するのならば、海底火山の観測技術などは使えないだろうか」

「……どうなんでしょう。誰か海洋機構とかに繋がりのあるやつはいないか？」

範囲を狭めても、論ずべき情報が少なくとも。論ずべきことは尽きない。

結局、飯田孝介が家に帰ったのは深夜の寸前といったような時間に

なつてしまった。路面電は既に終電を過ぎており、とはいえタクシーを呼ぶほどでもないので歩いて帰る。街灯の照らす道に人影はなく、駅前のコンビニの目映い輝き以外はなんの飾り気もない静かな住宅地。

「ただいま」

「おかえりー」

今日も変わることない定型文。遅くなることを伝えてあるゆえか、なんの感動もない娘の声が返ってくる。それは大変喜ばしいことだ。今日も今日とて東京都民は平然と生活を送っている。軍隊とは外交手段であるが、同時に治安維持組織としての役割も持っている。日本で感じることはまずないが、多民族国家のインドネシアなどでは未だに軍が治安維持に駆り出されることもあるそうだ。東南アジア条約機構^{S A T}の議長国——形だけとはいえ——なのだから、もつとしっかりして欲しいところであるが……まあそれはともかく。ともかくにも、国内の安定が保たれていることは喜ばしいことであつた。

鞆を置き、靴を脱いでいる頃に廊下からぱたぱたとやってくる孝介の妻。英国と日本のハーフである彼女と、玄関の高低差を利用して自然にただいまのキスを交わす。

それから彼女は、孝介の鞆を持ちながらゆっくり

「今日からまた省の勤務だったのデスヨネ？ どうでしタ？」

まだ片言の匂いこそあるが、それは間違いなく日本語だ。別に二人の会話の時は英語で構わない。そう言ったのが遙か昔で、無理をしても日本語で話すと彼女が譲らなかつたのがその時。今では一人で与那国^ににも占守^{ひがし}へも行けるだろう。

「ああ。些細な配置換えこそあつたが、やること自体は変わらんよ」

そう答えてやりながら軍帽を取り、制服を脱ぐ。それを受け取りながら彼女は言う。

「お夕飯、温めまシヨウカ？」

「いや……」

今日はもう遅いし、少しとはいえ食べてきたからいいよ。そう言うとうとした時、そつと彼の妻は耳打ち。

「今日は、ノゾミが作ったのデス。出来たら食べてあげてクダサイ」
「望のぞみが？ なんだってあいつが……」

「うわっ、ちよつとお母さん！ そういうの言わなくていいから！」

そう言いながら飛び出してきたのは娘の望だ。高校二年にあたる彼女は、これでも来年度の受験生である。別にここは書齋でもないし、別に飛び込んでくるのは構わないのだが、この様子を見るに恐らく盗み聞きしていたのだろう。

「なんだ、お前が作ったのか」

「えーああ、うん。私が作った。あーでも食べちゃったんでしょ？」

だったらいいよ、遅くなること考えなかった私が悪いんだし」

さて、どうしたものか。時計を見やれば遅くなったといえ十時前。まあ、多少は問題ないだろう。

「いやなに、まだ幸いにもメは食べていなくてな。小皿一杯分でももらおうかな」

「え、ホント？ よーし、ちつと待っててね！」

そう言つてさつさと踵を返す望。母親似の茶髪を最後に壁の向こうに消える。

「いい加減、父親離れして欲しいものだな」

「ノゾミもDarlingのこと心配してたんデスヨ？」

「心配？ 私は内地を飛び回ってるだけだぞ」

帰れないことはよくあることじゃないか。今回ばかりが特別というわけでもあるまいに。

すると相手は、孝介の注意を引き付けるだけの沈黙をもってから口を開いた。

「ワタシだって、心配していたんですからね？」

その言葉で少なからず胸中に鈍いものが広がる。やはり東京ここでも感じられるのだ。有事だと否応なく感じてしまうのだ。それは孝介が実際に危険な戦地に行っているかどうかではなく、ただただ父や夫の属する組織が危機に直面していると知るだけで広がる漠然とした

不安なのだ。

「……そうか、すまないな」

それからそつと頭に手を乗せてやる。見た目よりもずっと小さく柔らかく感じる頭。相手の反応を見ないうちに孝介は食卓へと向かう。既に室内着に着替えているので何の問題もない。

「じゃーん！ カツカレーだよ！ これで勝つるってね！」

出されたのはカツカレー、というよりカツだ。カツが普通に大きかったのだ。小皿に載せれば、まあ蓋をするような形になってしまふ。半分にするという選択肢はなかったのだろうか。

「カレーか」

「そうそう、金曜といえばこれだと思って」

そう、本日3月11日は金曜日。

こんなことなら昼食を金曜カレーなどと洒落込むべきなどの部下たちの提案に乗るべきではなかった。しかし時すでに遅し、流石に昼の段階でそこまで予想はできない。出来るわけがない。

「ありがとう。頂くよ」

とその時振動音。孝介の携帯が震えたのだ。食事中の携帯使用はマナー上よくはないが、まだ食べ始めていないのでセーフとする。

「すまん、出るぞ」

「あいあい」

一応承認らしきものをもらってから通話ボタンを押す。画面の表示は見知ったものだ。

「孝介です」

『久しぶりだな。孝介』

電話口の向こうから聞こえる声。その勢いは慣れた孝介にしてみれば大分老いたなと感じてしまうほどだが、赤の他人が聞けばまだまだ威勢のよい声に聞こえるだろう。

「こんな時間にどうされましたか？」

そう言えば、呆れたように返す相手。

『なにがどうされましたか、だ。お前のメールを読んだんだよ』

「ああ。ありがとうございます」

『それにしても原発とは、随分とまあ厄介な話題を持ち込んでくれたな』

原子力、核といえば軍事利用ばかりを連想してしまうが、実際に地球上で起こる核分裂というのは爆弾のために使われるものではない。新型の核爆弾でも完成しない限り核実験など行われなし、その新型の核爆弾は財政難などの都合もありここ十年ほどは登場していない。

しかし今この瞬間も地上では次々に核分裂が起こっている。別にどこかで核戦争が起きているわけではない。原子力発電所だ。分厚い格納容器の中で引き起こされる制御された核爆発。

いくら政府が平和利用と喧伝しようと、やっていることは核爆弾と変わらない。単にその膨大なエネルギーを敵地を焼き払うことに使うか、それとも水を沸騰させてタービンを回すかの違いである。

そして、核といえばお決まりの放射能汚染だ。福島は未だ国民の頭の中にこびり付いているし、なにより原子力発電所には水が欠かせない。

水は冷却に使われる。水が蒸発すればその蒸気が巨大な発電機を回して電力を生み出す。そして何より、水はどんな物体よりも放射線を防ぐ防壁として優れていた。

故に、日本の原子力発電所は全て沿岸に存在する。

『一応技術者連中が軽くまとめた資料をそつちに送った。あくまで常識的なことしか書いてないそうだが……』

「いえ、それで結構です。中立の意見が欲しかったのです……おい望、書斎においてあるパソコンを取ってきてくれ」

「はい」

望にパソコンを取りに行かせ、孝介は壁に飾られた日本地図を睨む。『やつら』が海から陸へと襲い掛かる以上、必ず沿岸に立地する原発を不安がるのは当然だ。だが飯田孝介は海軍軍人であり、原子力技術者ではない。つまりどういふことかといえば「よくわからない」の

である。しかしよく分らないでは済まされない。なら誰かに聞けばいい……とまあ、言うだけなら簡単だが、果たして経産省に聞いて中立的な意見が得られるだろうか？

それは否だ。飯田としては単に技術的な話がしたいだけでも、相手にしてみれば飯田の動きようで仕事が脅かされるかもしれないのだ。それに自分の分野に口を出されるのを組織は嫌う。海軍はドンパチ、経産はゲンパツ。棲み分けは縄張り争いだ。

だからこそ、飯田孝介は別方面の繋がりを頼ったのである。望がパソコンを持つてやつてくる。礼を言ってから起動、パスワードに指紋認証。家庭設置型Wi-Fiへの接続を確認して——よく勘違いされるのだが、孝介が使っているのは政府専用回線ではなく普通の一般的な回線だ——からメールボックスを確認する。仕事にはなんの関係もないメールがずらりと並んだ受信ボックスに、未開封のメールが届いている。

送り主は——いいだけいすけ飯田啓介。海軍中佐である飯田孝介の実の父である。

『それでだ孝介。お前、明日は暇か？』

「明日ですか？ 大丈夫ですが……」

月月火水木金金などと言われるが、地上勤務なら営業日は基本平日だ。飯田の室はそもそも海軍幕僚部がことの主導権を握るための組織なので、まだ休日返上で働かねばならないわけではない。

『よし、なら家に来い。見せたいものがある』

「見せたいもの、ですか？」

豊は日本人の魂だ。とは孝介の父である飯田啓介の言葉。まあ魂なんて様々な要素が絡んで作られるものだからそんな断定的な言い方はともかくとして、まあ豊が日本特有の文化であるのは事実だろう。そこは否定するつもりはないし、一人の日本人として孝介も豊には愛着がある。だからこそ家を建てたときに豊を排するようなことはしなかったのだ。

と、ふと妻の声が聞こえる。読んでいた本から顔を上げれば、寝間着に着替えて布団の上にちょこんと座っている。寝る準備は済んでいるらしい。もちろん急ぎでもない本に目を通して孝介も寝る準備は一通り済ませているわけ。

時計を見る。日付が変わるまであと一時間ほど。丁度よい時間だろう。

「明日は実家に顔を出してくるよ」

事務的な連絡に、事務的な相槌。外はまだまだ暖かいとは言えないが、風呂上がりに加えて暖房も効いているとなれば体感温度は適温だ。孝介も布団の上に進み、寝る前の儀式である手帳の確認を行う。まあいろいろあったが、今日の仕事は上々だったといえよう。室の滑り出しとしてはいい方だ。

「Darling……?」

「ん、どうした」

そう言えば、ゆっくりかぶりを振って見せる彼女。孝介と彼女を照らす照明はその性能をいかに発揮しているはずだが、どうにもはかなげに見えてしまう。

「そんな顔をするな。上海の時じゃないんだから」

でも……そう言いかけたのだろうか。だがはつきりとは口にしない。

孝介が戦地に行くわけでもないというのに。戦火が目に見えて迫っているわけでもないのに。

まあ、それでも心配なものは心配なのだ。ただそれだけなのだ。それ以上でも以下でもないのである。

その気持ちが分からないとは言わない。

だが、答えることはできない。飯田孝介は軍人である。その前提が存在する以上は、彼の妻や、彼の娘の不安が払しょくされることはあり得ないだろう。国家のためと言われれば、たとえ家族であろうと見捨てるのが軍人なのであり、飯田孝介である。

とはいえ、社会の最小単位たる家族を複雑に組み合わせることに
よって築かれる国家を護ることが、最終的には家を守ることに繋がる
のだ。

「よし、そろそろ寝ようか」

そう言えば、頷いて照明と結ばれる紐に手を伸ばす彼女。無線式の
リモコンが最近の主流らしいが、そんなことで一々電気を使う必要は
なからうと古典的な方式のものを孝介は購入しているのである。

と、電気が消える前に大変分かりにくい合図。

これで不安が少しでも消せるなら応じよう。琉球諸島事変以来ご
無沙汰であったから、それは孝介としても好都合であった。

——西暦2022年3月12日。東京——

地価が高くなる一方の都心において、建造物は高層化の一途を辿る。それは当然のことであり、そもそも地価の高まりは需要の多さに起因するものなのだから褒められるべきことだろう。高層化によってより多くのヒトやモノを収納できるのだから、当然だ。

帝都の地下を縦断する地下鉄を降り、駅前という立地を知らない幹線道路の脇から地上へ。高層ビルの連なるオフィス街は土曜日ということもあり人影はまばらだ。だが数分も歩けば高層ビルはすぐさまばらになり、幹線道路から逃れるように街路へと進む。

舗装された歩道を歩いていく飯田孝介は、普段のような軍装ではない。一般的な紺のジャケットにスラックス、ネクタイ。靴すらも私用のそれに変え、傍から見ればただのホワイトカラーにしか見えないことだろう。まあ待遇や組織で見れば軍人は官僚的な存在、いや官僚そのものだからスーツを着込んだ飯田がそう見えるのは当たり前前なのだ。

それにしても……実家帰りとは家内には説明したが、そう考えてみると滑稽なものだ。自身はこうして戦闘服のごとくスーツを着込み。そして戦場に向かうように歩いている。実家帰りとは何だったのか。いやしかし、それは仕方ないのだ。

なんせ目の前に立ちふさがる邸宅こそが、飯田孝介という新米海軍幕僚を支える最大の後ろ盾なのだから。

「孝介様。お待ちしております」

彼を呼ぶ声。ふと見てみれば、洋風と和風をごちゃ混ぜにしてしまったような出入り口の前に人影。どうやら孝介のことを待っていたらしい。それを見た孝介はどこか安心したような笑みを浮かべる。なんせ彼にとっては家族同等に気が置けない存在だ。

「鎌村さん、お久しぶりです」

「孝介様こそ、お元気そうで何よりです」

旦那様がお待ちです。それだけ言つて敷地内へと先導するように踵を返す鎌村。彼のいう「旦那様」とは、もちろん孝介の父である飯田啓介である。

敷地内にはキチンと刈りそろえられた芝、その向こうには相変わらず奇妙な形をした松——あまり興味はないが価値はある、そうだ——が植えてある。そしてその向こうには「いかにも」な雰囲気を目指したのであろう池。伝統やら流行やらをとにかく突っ込んだようなこの空間。飯田家を庭園で表現しろと言われたのならばこれが模範解答となるのであろう。

海軍省にいれば目立つこともないが、孝介の家は富裕層にあたる。それも、東側に言わせるところの搾取階級だ。日本でいうなら財閥というやつだ。

といつても経済界では新参者。そう、所謂戦争特需で頭角を現し、その後の経済成長で存分に発展した部類にあたる。

玄関に入り、靴を脱ぐ。実家という事実があり、それを認識しているからこそ気が緩みそうになる、がもちろん気を抜いたりなどはしない。スーツを着込んでいる時点で仕事の話だ。

「父は元気にしていますか？ 昨日声を聴いた限りでは大分元気そうでしたが」

「ええ。もちろん元気にしておられます」

明日も伊豆に出かける予定です。縁側にあたる木張りの床を歩きながらそう返す鎌村。伊豆には彼がいつも行くゴルフコースがあるのだ。そこまで趣味に精が出るようならよほど元気なようだ。

「それはよかった」

「孝介様も無理はしておられませんか？ 旦那様も心配なさっています」

「やめてください鎌村さん。私は軍人です」

有事において無理をしない軍人などはいない。そう含める孝介。もちろん多忙な日々を過ごしているのは事実だ。事実だが、昨日の対

策会議含めて軍としてはまだまだ動けていないのが現実。

「おう孝介。来たな、入れ」

噂をすればなんとやら。襖越しに声が聞こえる。鎌村は恭しく頭を下げ、それから襖の脇に控えた。孝介はネクタイを締め直すと、小さく息を吸う。

「入ります」

「よし、まずは座れ」

そう言いながら座布団を指し示すのは和服に身を包んだ男。孝介が知るかつての姿からは程遠く、昔は白髪交じりだった髪はほとんど白一色に埋め尽くされてしまった。量自体も減ってきているような気がするのはい気のせいだろうか。

それでもなお老いを感じさせない老人——矛盾しているが、孝介にとっては矛盾していい——は、事前に準備してあったのであろう湯呑に電気ポッドからお湯を注いだ。

そして差し出す。ティーパックがそのままなのは、まあ気にすべきではないので無言で受け取る。今飲むと恐らく薄いので孝介はそつと湯呑をお盆に戻した。

「孝介。先月新車を買ったんだが、見てくれたか」

「と言われましたも、車庫は裏ですのぞ」

「ふむ、それもそうだな。なら後で見ればいい。アレはいいぞ、今は亡き飯田自動車の面影が残っている」

そうひとりで満足げに頷く孝介の父。彼、啓介はそういう人間なのだ。だから庭をあんな和洋入り乱れた状態にしまつても平気でいられるのだ。ちなみに飯田自動車とは40年ほど前に孝介の祖父が立ち上げた会社で、最終的には……いや、それはいい。孝介は鞆よりノートパソコンを取り出す。父親に目配せすれば、啓介はやれやれといったように口元を緩めた。

「お前は変わらずせっかちなな、私を接待したらどうなんだ」

「いえ……今日は飯田としてですので」

それだけ言えば、もう伝わるだろう。というかもう伝わっていないとおかしいはずである。

今日の目的は原発、原子力発電所だ。膨大な電力を生み出すそれは、しかし等しく膨大な建造費、維持費を要求される。しかし建造費や維持費は単なるマイナスではない、それを電力会社が支払うことによる経済効果は莫大なものだ。即ち、利権である。利権となった途端急にややこしくなるのが物事で、孝介にとって原発はその最たるものといつてよかった。

ヒトが、企業が、省庁が、その労働力と資本と権力が入り乱れているのだ。

故に、飯田が頼れる人間は限られてくる。少なくとも海軍ではだめだ。大迫海軍幕僚長は確かに艦政本部で部長職をやっていた時期もあるが、それは水雷部、つまり魚雷と誘導弾ミサイルなので原子力に関してはさっぱりだろう。ツテもないに違いない。そして、その大迫についていく飯田も同様なわけで。

だから、頼るべきは家族ということになる。孝介はスリープ状態から回復したパソコンを啓介へと向ける。

「昨日の資料、見させていただきました」

「ん、どうだった？」

送られてきたメールに添付されていたのは日本に建てられている原発の場所、その種類と現在の稼働状況、そして原子力発電所に関する基礎的な情報だった。その内容はどちらかといえば広報部に作らせたような資料で、まあ原発といえは有名な原発事故ぐらいしか把握していない孝介にとってはいい復習になったところ……要するに、あまり参考にはならなかった。

「よく纏まっている資料でした」

「だから常識的なことしか書いていないといったらう？」

そう言う啓介は、やはり全てを把握しているらしかった。

「……やはり、厳しいですか」

「ああ。技術者連中には話してみたが、正直手段はそれしかないぞ」

芝生のど真ん中に置かれた竹筒のインターアが乾いた音を立てながら倒れる。その後元に戻る。

一方お盆に置かれた湯？は既に冷え切ってしまった。その横には男性二人と大量の紙束。それらに書かれているのはスケッチで、知っている者が見ればそれが原子力発電所の見取り図や格納容器の形状を示していることが分かるだろう。書類の散乱を防ぐためのバインダーが何冊も無造作に放り出され、畳の上に置かれている。

「ですが、原子力発電は我が国においては……」

「孝介」

啓介が小さく言葉を落とす。

「なあ、孝介。沖繩にはたまたまなかつただけだぞ」

啓介は、バインダーの一冊を手に取り、はらはらと捲る。

「だがもし鹿児島だったらどうだった？ 愛媛だったら？」

孝介の脳裏に昨日電話越しに聞いた啓介の声が蘇る。明日は空いているか。その台詞を放った時点で目の前の男の腹は固まっていたのだ。わざわざ邸宅に招いたのもそれを紙媒体や電子媒体といった媒介手段で伝えたくなかったからなのだろう。

孝介の父親は、飯田啓介は直接伝えるのを好むのだ。それが重要なことであればあるほど。

「私の結論はこうだ、原発は封鎖するしかない。一刻も早く、最優先事項だ」

やはり、その結論にたどり着くのか。

原子力。その言葉が核兵器以外の意味で使われ始めたのは、核兵器が戦術兵器としてよりも戦略兵器、つまり「抑止力」として機能し始めたころの話であった。世界革命戦争の頃、軍事的要求から工業力を必死に伸ばしていた日本は慢性的な電力不足であった。火力発電所は東京湾の沿岸に立ち並んだが、戦後の爆発と言っていい発展による需要の拡大には対処しきれなかった。全国で同様の状況だった。1950年代後半の国民生活は電気がつかない時間の方が長かったくらいだそうだ。

そして、その解決を期待されたのが原子力であったことは言うま

でもない。わずかな原料で生み出すことが出来る大量の熱とそれによる蒸気、そしてタービンを回すことで得られる電力。それらは高圧電線により全国へと行き渡っていった。冷戦という時代は核の時代などとはよく言われるが、それは軍事的な意味でもあれば国民生活的な意味でもあった。世界は核により国防を成立させ、原発により経済を成立させた。

しかし、その幻想はある時打ち破られた。

原発事故の心配をするのは隕石がスタジアムに落ちる確率を心配するようなものだ、そんなことを言ったのは誰だったろうか。だが原発事故は起きた。スタジアムに隕石が落ちたのだ。そして原発という夢と見ていた観客は吹き飛ばされた。

初めに事が起きたのは孝介たち日本人にとっては正義である西側であった。東側はそんな西側を嗤った。彼らは人類史上初めて人工衛星を打ち上げただけのこともあり、科学技術には自信があった。その後を知る日本人からしてみれば大変滑稽なことだが、しかし日本人も笑えない。結局、どこの国でも核兵器を夢のエンジンにすることは叶わなかったのだ。

そして今、目の前に『やつら』がいる。沖縄の万単位の陸軍を撃破し、百万人を蹂躪した『やつら』が。

「言っておくが、石棺以外の方法はないぞ」

そう言う啓介。正直なところ、それは孝介も分かってはいたのだ。

「何日かかりますか？」

「場所によつてだが……数日とはいかん。数か月だ。新電力開発の幹部連中もいい顔はしないだろう。それ以上に」

啓介はそこでいったん言葉を切る。今更ながら湯呑に手を伸ばす。孝介もつられるようにして手を伸ばした。湯呑の感触は固く、思った通り冷たい。

「友民党は原発推進派だ、言うまでもなくな」

政権与党、立憲友民党。極右政党である勤皇党と連立政権を組んでいるこの党は、2010年代初頭の国家財政破綻とそれにより誘発し

た第十次上海事変——上海戦役とも——への初期対応に失敗した現在の最大野党に代わって政権を握っている。それ以前からも現代日本を形作る社会資本インフラを開発してきたこの政党は、もちろんその功績に自信を持っていて、その一つが原子力発電所だ。彼らが石棺を許すはずがない。

石棺——原子炉建屋のコンクリートによる埋め立て事業は、その地に永遠の負の遺産を築く行為だ。

「ですが、必要なことです」

「私はただの会長に過ぎない。友民とは戦えん」

そうため息をついて見せる啓介。中規模の鉄鋼・石油化学工場を持ち、軍需向け生産では野戦砲や攻撃ヘリも製作する飯田インダストリーグループの会長が「ただの会長」に過ぎないかどうかはともかくとして、少なくとも友民党と戦うには力不足だ。

だが、出来ることがないわけではない。孝介はお茶を少しだけ含んでから、湯呑をお盆へと戻した。

「お願いがあります」

「言ってみたまえ」

その言葉で孝介は前へと。

「原子力安全規制院とのパイプを作っていたください」

原子力安全規制院。2011年に発生した原発事故の際、原子力関連を取り仕切る機関が分散していたため初動が遅れたのは知つての通りである。それを解決するべく組織されたのが原子力安全規制院だ。

「ほお、そう来たか」

啓介は口角を吊り上げる。微笑んだのだ。孝介は続ける。

「格納容器が破損さえしなければ放射能汚染物質の飛散を防げるといふわけではありません。使用済み核燃料や、燃料保存プールに保管されている未使用の核燃料も移送しなければなりませんし、それらは格納容器以上に無防備な状態で保管されています。それらへの対策は今すぐにでも講じることが出来るはずです」

「だがそれだけなら軍と繋がんでもいいだろう。私が直接助言すれば

いい」

「いえ、結局『やつら』から原発を守れるのは軍だけです。その上で、原発に石棺を施す方策を練る必要があります」

「……」

音を立てながらお茶をすすする啓介。そのまま湯呑を盆に戻せば、それは孝介の湯？の横に置かれた。

「いいだろう、紹介はする。そこからは出来るな」

「はい」

「よし。ではやっておこう」

「それと、実際にコンクリートによる埋め立てを行う場合の計画を立ててほしいのですが」

「分かった。想定する機材は無制限で構わんな？」

それは即ち、無制限に機材を用意する、そのための取次ぎを孝介に任せるという意味であった。もちろん孝介では能力不足だ。

だが、もし海軍がこの件における主導権獲得に成功したならば、いや実行のためにはそれが必要なのだ。

「構いません。それでお願いします」

「うむ。では昼食にでもしよう、鎌村！」

「はい旦那様」

啓介の呼びかけに隣の部屋からだろうか、鎌村の声が返される。それが会話の打ち切りを示していた。

「ところで孝介」

啓介は広がった書類を片付けながら、孝介もそれを手伝いながら耳を傾ける。

「E1023は知ってるか？」

「なんですか、それ」

聞いたことのない番号だ。孝介がそう返すと、啓介は目を手元から離さずに続ける。

「我が飯田製造の開発番号だ」

「……」

いまいち要領が掴めず、孝介はそのまま啓介の言葉を待つ。飯田製造というのは基本的には軍用の製品を作っているはずなので、彼が使用しているのは試作兵器の話だろうか。

「EL023——第三次国家防空大綱。我が国が核ミサイルによる大陸間弾道弾^Iミサイル^Bの迎撃から通常誘導弾による迎撃に基本方針を切り替えたこの決定で、飯田製造が陸軍に提案した弾道ミサイル迎撃用砲煩兵器」

「ああ、アレですか」

それなら孝介も知っている。

昭和中期から後期にかけて、陸軍の地位は低下の一途をたどっていた。その理由は言うまでもなく空軍の台頭、即ち陸軍航空隊の縮小である。立川飛行場が空軍の立川空軍基地に変わるなど、陸軍はその多くの資産と業務を空軍に引き渡してした。それはつまり空を空軍に譲るということ。陸軍は空から追い出されてしまったのだ。

固定翼機部隊は空軍に編入されてしまい、残されたものといえば連絡機や偵察機、それと回転翼機ぐらい。本土防空を指導する立場にあるはずの防空司令部は高射部隊こそ管轄にあれど使用している誘導弾は空軍の管轄。

陸軍にしてみれば核兵器の運用のみを任されるはずであった空軍——核は今でこそ三軍がそれぞれ保有しているが、元々は空軍のみが運用を許されていたのだ——が、気づけば防空まで仕切っているのだから溜まったものではなかっただろう。

そんな状況に付け込もうとしたのが先代社長——つまり、孝介の祖父——だ。彼は大砲の延長線として高出力の砲煩兵器の運用を提案。アメリカのスターウォーズ計画——核ミサイルを宇宙空間からのレーザーで撃ち落とす計画——の地上配備版と思ってもらえればいい。地上配備なら軌道周回する衛星と違って常に本土を守ることが出来るし、なにより砲煩兵器なので空軍に横取りされる心配もない。大気中でのレーザーの使用は絶望的なので実体弾が採用されることとなり、陸軍と共同での研究チームさえ発足した。

とはいえ……火薬の爆発速度に依存する通常の火砲で、高高度から

落下してくる飛翔体を撃破するのは非常に難しい。というか不可能だ。

高威力で、長射程。そして火薬を超える弾速。それを実現したうえで超精密射撃。それを達成するべく飯田製造が提示した選択肢、それがEL023。電磁投射装置を用いた兵器である。果たしてこれが砲熯兵器なのかは微妙なところだが、ともかくその開発がすすめられたのだ。

——そして、外野の予想通り失敗した。現在でも防空司令部と陸軍高射部隊は空軍管轄の高高度誘導弾を運用している。

「あれの研究を私が再開されたのはお前も知っているだろうか？」
「はい」

そう孝介が領けば、啓介はくるりと身体を回して床の間に無造作に置かれている布をとった。話がここまで進んだ時点で孝介にも予想はついていたが、それはEL023——電磁投射砲の模型であった。丘陵地帯に設置することを想定しているのだろうその模型は、関連機材や掩体壕まで作られており、計画の概要が一目で見取れるよう工夫されていた。

「ようやく今年度から試験運用が始まった試作一号機だ。まさに飯田家半世紀の夢だな」

飯田家というか亡き祖父と父、親子二代の夢といった方が正しいのではないだろうか。そうは思うがいうだけ無駄なので孝介はなにもしゃべらずに神妙に頷いておく。

「それでだ、ここまでならお前に話す必要もないんだ。ここらの事情はよく知っているだろうからな」

そう言いつつ啓介は座り直す。孝介もそれに対して身構える。何が告げられるというのだろうか。

「持ちかけがあつてな、新規の納品先が決まりそうなんだ」

「……？ よかったではありませんか」

しかし啓介の表情は暗いまま、微妙な沈黙を保つ。

何が悪いというのだろう。しかしその疑問も、次の言葉で氷解、いや音を立てて瓦解することとなる。

「海軍だ」

「は？」

「海軍だよ、お前の海軍だ」

昼食を済ませ、飯田孝介は実家を後にする。スーツを着込み、鞆を持った彼はやはり休日出勤と間違われそうな格好で、そのまま街路を歩いてゆく。今日は晴天、雲量は5ほど。風さえなければ心地よい昼下がりとあったところだ。

しかし飯田の心持ちは重い。彼の父である飯田啓介が伝えた言葉が、喉に刺さった魚の小骨のように嫌なとっかかりを残しているのだ。

海軍が電磁投射砲を欲しがっている？ それも、地上配備型を？ 確かにアメリカでは試験的とはいえ実戦配備されている。だがまだまだ問題も多く、一線級の艦艇に搭載する用途がようやくつきそうなどころだ。日本だってそのくらいしか進んでいないし、なにより日本海軍が抱える喫緊の課題は陳腐化した護衛艦艇の更新。どちらかといえば対地攻撃向きの電磁投射砲搭載艦を作っている予算はない。もちろん設計の際にそれを想定して余裕を持たせた設計にするのは大切だが、そうであっても搭載されるのは当面先の話になるはずなのだ。

なのになぜ、今その話をするのか。いや、もう少し表現を変えよう。なぜ飯田会長は息子にその情報を流したのか。

考えるが、問題がぐるりと回って初めに戻るだけだ。考えただけで解決する問題ではない。

と、ふと声が聞こえた。

「いやー中佐、今日はいいい土曜日ですねえ」

その声を聴いた飯田は足を止める。振り返れば、紙袋を引つ提げたコート姿。紙袋に印刷されたロゴは西側一のハンバーガーチェーン店のそれで、どうやら持ち帰り袋らしい。

「いやあそれにしても飯田インダストリーグループの御曹司さまが帰省なんて、本当に珍しいですね？ なにかあったんですかあ？」

楽しげに、抑揚も元気よく。同じ文字列でもその調子で受け取り手の感じ方は変わるものだ。しかし、御曹司云々は事実であるから否定するつもりはない。

「なぜお前がここにいる」

飯田が返すと、相手は口を尖らせながら言う。

「いやいや、それはこつちのセリフですよ中佐、なんでだって昼食まで食べてきちやんですか？ ジャンクフードなんか食べてたらお肌が荒れちゃいますよお……」

「それを食べたのはお前だろう」

そうは言いつつも、その紙袋は膨らんだまま。中身に手を付けていないのは明らかだった。肌が荒れるのを気にしているのは本当らしい。

「待たせたのは中佐じゃないですかあ」

「私の記憶では待ち合わせたつもりもないんだが？」

しかし正直、ここで彼女が出てくるとは思わなかった。飯田は軽い足取りでこちらへと寄ってくるコート姿を半ば睨むように見つめる。

「せっかく銀座でランチと洒落込もうと思ったのになー」

彼女はそう言いながら飯田の前に。近づいた分だけ顔一つ分低い背の高さがよく目立つ。

「——青葉、残念ですう」

どこか演出されたような上目づかい。黒髪はバックにシュシュで一括りに纏められていた。

構うだけ無駄だ。彼女はこうして遊びたがるのだ。飯田は構うことなく踵を返す。

「ちよつとちよつと、待ってくださいよお」

「待つとはなんだ、お前がここまで露骨に動くとは思わなかったぞ」

「いやあ『会いたい』に理由はないってお天道様が」

「どの口が言う」

というか、どうせ明日の朝ジョギングコースでばったり出会う予定なのだ。なぜこのタイミングで接触してくるというのだ。飯田は全く理解できんと切り捨てつつ、一方で腹の底から得体のしれない物体がにじりあがってくるような、そんな感覚に襲われていた。

そんな間にもせかせかと歩く飯田。それを青葉はすいっと抜かすと、どこかふやけた表情で口を開く。

「まあ冗談は置いといてですね……青葉、ちよつぴり面白い話を入手しまして」

「……」

一瞬、頭の中で思考回路を回す。脳みそだけで身構える。街路には見計らったように誰もいない。

「先日、大迫大將が藤巻大將との食事の席を設けたのはご存知ですか？」

相手にこちらの反応を待つ気はない。そのまま続ける。

「海軍幕僚長たる海軍大將の^{おおきこ}大迫さん。統合幕僚長たる陸軍大將である^{ふしまき}藤巻さん。二人は基本的には不仲だって、以前中佐は仰ってましたよね？」

「……」

その通りだ。この二人はどちらかと言えば協調性を欠く方だ。もちろん三軍統合運用には指揮官の連携が欠かせない故、対立は致命的なそれではないが……しかし、大迫大將についてゆく海軍将校たちのグループ——いわゆる大迫派——がそれを知ればあまりいい顔はしないだろう。大迫の率いる研究会に所属する飯田も、接触の意味は理解できるが大迫が進んで設けたというのは少し意外に感じた。

「で、それがどうした」

「それですなえ、ここからが面白いんですけど。その後満州で試験中の例のアレ、電磁投射砲でしたっけ？ その実験部隊が日程を繰

り上げたらしくて」

「どうやら彼女が欲しいのは確証らしい。となると飯田製造の件は知っていないのかもしれない。実家の前で張っていたのだから啓介から情報を貰った可能性も考慮に入れていたのだが……。」

「あ、青葉がここに居るのは娘さんが呟いてたからですよ？ 別に中佐が考えるような深い意味はありません」

うん、望。お前馬鹿じゃないの。

のんのん@国防大第一志望！ (@IdaNozomi) フォロワー
されています

4時間前

親がみんな出かけてしまったので今日は静か。

そう言えば定期も終わったし、そろそろ進級祝いが欲しいかな〜

携帯を開き、作れ作れとせがまれて作ったアカウントを覗くと、確かに呟かれてはいる。しかし直接の記述ではなかった。ネットリテラシーがなっていないと言おうと思ったが、残念ながらこれはこの女が完全に悪いらしい。

そもそも望は鍵アカウント——つまり、基本未公開の——アカウントを使ってるんじゃないのか。どんな手を使ったというのだ。

「奥さんはいつも通り買い物でしょうし、となると三月中旬なのに進級祝い早いですよ？ すると進級祝いをくれそうな太っ腹は彼女のおじいちゃんに当たる飯田啓介氏しかいない訳です」

「……」

「ちよつとお、そんな人を悪魔みたいな目で見ないでくださいよ。手の内さらしてるだけ信頼の証ですって」

よかったですねー青葉がホワイトハッカーで。そう笑って見せる

彼女は、心底楽しそうで、食えないやつだと飯田は内心で苦笑い。こんな付き合いも気づけば本当に長く、少なくとも現状は協力体制が成り立っている。

「ともかく、セキュリティについて抜本的な見直しが必要そうだな」「ええそうでしょうとも、青葉もお手伝いしますよ?。」

でも、その前にちよっぴり寄りましょっか。そう言う彼女は、さすが孝介の腕を取った。

「やめなさい」

「やだなあ、このくらいの方がいいでしょう?。」

彼女。青葉というのは——飯田孝介の便利屋であった。

飯田家は大きい。そしてその後光に照らされる飯田孝介はその家の長男坊。海軍でのし上がるつもりの際は会社を継ぐ気こそないが、軍組織の中で飯田家の人間として生きる義務はある。

彼の地位を支えているのは、彼の純粋な海軍軍人としての能力によるものではないのだ。

それでも構わない。飯田孝介は飯田家の人間として、祖国を愛する一員として、国家に尽くす。それで進むべき道を切り開くのだ。

今日という日の午後は、まだまだ続くらしい。

——西暦2022年3月12日。東京——

市民生活に花を添えるべく建設された公園というのは、言うならば都市の中に作り出された都合の良い自然環境である。噴水からちよろちよると水が噴き出している。

だがそれは湧き水ではない。どこかしらから引つ張ってきたもので、等間隔に植えられた木々は何十年も昔に誰かが植えたものだ。「芝生養生中 立ち入り禁止」などと書かれた看板の向こうには茶色ばかりの芝生が広がる。

そんななか、敷き詰められた敷石の間からわずかに生える雑草。これだけが公園において唯一「ホンモノの自然」と呼べるそれであった。

そんな敷石の上にはばらまかれるパン。たちまち灰色の鳥が群がり、それらをつついてゆく。大量生産されたバーガー用のバンズが、彼らのくちばしにつつかれて崩されて消えていく。

「くっくるー。くるくるくるっくー」

それをちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返すのはまだ肌寒い東京の空気に合わせた上着に身を包んだ影。デザインはどちらかといえど男性向けの色があるが、そこはブーツにポシエツト、最後に黒色の髪の毛を止めるシュシュで性をピンポイントに強調することで決してセクスがないとは言わせない。

その様子を見ていた皮の上着を着込んだ飯田は、やれやれと言わんばかりにベンチへと座り込んだ。昼下がりの日差しは柔らかく、無差別に公園を温めている。

「で……お前は何をやっているんだ」

「鳩と話せるかと思いました」

なんだそれは。どうせ伝わるだろうからため息だけに留める飯田。いきなり何を始めるかと思えば、鳩に餌をやり始めるのだから、まったく意味が分からない。

「ところで中佐、スポーツ鳩は餌の種類を分けることで往復出来るようになるつてご存知です？」

「スポーツ鳩……ああ、伝書鳩のことか」

「バーガーでもそれは可能なんでしょうか？」

知るはずがない。そもそも、伝書鳩という概念なんてとうの昔に崩壊している。

確かに昔から、鳩は優秀な情報伝達手段ではあった。鳩の帰巢本能を利用し、足に括り付けた物資を輸送する。当然鳩を飼うだけでも大変だし、それを運用するのはもつと大変だ。しかも輸送できる物資はごく僅か。だから昔は高価な物資——情報——が運ばれたのだ。

しかし、もはや世界で最も早いのは光だ、電波だ。全天候型という意味ではまだ小型無人航空機ドローンに勝るが、いずれは小荷物の運搬についての地位も奪われることだろう。

「で、お前は伝書鳩も使うのか」

「さあ？」

振り返って笑い顔を見せつける青葉。それからどこか遠くを見て、言った。噴水でも見ているのだろうか。休日ともなれば噴水は大盛況。親子連れがシャボン玉を飛ばしている。

「正直、核戦争下では磁気が狂いますから、鳩なんて役に立ちません。だからスポーツ鳩そんなふなどと呼ばれるのです」

だが、平時では違うだろう。飯田の目に映るのは彼女の背中だけ。その視線の先に広がるのはただの空。この空に伝書鳩がまだ飛んでいるのかなんて飯田は知らない。

「そんなことより、張っていたのは大迫閣下か藤巻統幕長、どちらだ」
「もお、中佐はせっかちなんですから」

ケタケタと笑いつつ青葉がパンをひとときわ高く投げ上げる。鳩が驚く様子もなく落下してきたパンをつつく。

「教える必要があるんで？」

「いや、ないな」

「まあ、関心があるのは当然ですよ。なんせ中佐は大迫派の懐刀な訳ですし」

「ご安心ください、別にあなたの損にはなりませんよ。振り返ってやらんわりと笑ってみせる青葉。損得は飯田が決めるものだ。青葉に飯田の得も損も分かるまい。それは逆もまた然り。」

「私は懐刀そんなものではないよ」

「よく言いますよお、中佐が懐刀じゃなかったら誰がそうだつていうんです?」

「お前の言う通りなら、私は藤巻統幕長と大迫閣下の接触を既に知っていないとおかしいことになるが?」

「なるほど、それは道理ですね」

青葉、気づきませんでした。そう目を丸めて見せる青葉。さもうっかり秘密を漏らしてしまったかのような言いかただ。

しかし飯田はまだ佐官。大迫海軍幕僚長の全てを知りえているわけではないのだ。となるとそんな事実はどうでもいいのだ。肝心なのは中身。

「それで? 二人の間を考えれば意義は大きいかもしれんが、直ちに影響が表れるような話ではないだろう」

「そうなんですよねえ……お二人の会談は二時間にも満たないものでした。青葉としては中佐の見解を聞きたいのですが」

「それは何時いつだ」

「一昨日ですかね」

大迫海軍幕僚長と藤巻統合幕僚長の関係が良好でないのは知っての通りである。

「沖縄県沖沖駆逐艦事沈没事故調査室の発足直前だな。となると、それについての根回しと考えるのが妥当だろうな」

すぐさま思いついたのはその可能性。大迫海軍幕僚長はどちらかと言うと周りを見ずに突き進むタイプだが、それでも節度がなければ幕僚長にはなれない。最低限の礼儀を統合幕僚長に払ったという可能性だ。

「とはいえ……統合幕僚長をそこまで重視する必要があるだろうか。」

「青葉もそう思うのですけどねえ……どーも引っかけかりまして。これまで大迫大将と藤巻大将が会談したことなんてなかったもので」

「そうだろうな」

なんせ統合幕僚長なんて形式的に過ぎる地位だ。三軍の力関係を維持するため、統合幕僚長は規定こそないがほぼ二年おき各軍から順番に選出されるのが慣例。それに対して各幕僚長はかなり長い期間——実際、大迫海軍幕僚長は今年度が四年目だ——務めることが出来る。そして基本的に統合幕僚長と各軍幕僚長は兼任しない。つまり藤巻統合幕僚長は陸軍の所属だが陸軍幕僚長としては別に神崎陸軍幕僚長がいるのだ。陸軍に特段の影響力があるわけでもない。

「これは確証がないのでビミョーな線ではありますが、永田町向けの動きとかでは？」

「大迫閣下は政治に口を出されるような方ではないと思うが……」

「あれえ？　でも目標は海軍が今回の件を独占することなんですよね？」

「いや、大迫閣下の考えは統幕本部に対策部署を設置することだ。断じて独占ではない」

「でも海軍主導にはしたいと」

「……まあ、藤巻統合幕僚長と話をつけたと見ることも出来るだろうが」

「それはない？」

その線がないとは言わない。

統合幕僚長が置かれるのにはもちろん理由がある。軍隊が統帥権に属する以上、軍隊は統帥権の被委任者たる内閣総理大臣に従わねばならない。総理大臣の下には各軍大臣（陸軍大臣・海軍大臣・空軍長官）が置かれ、各軍はその麾下に存在する。つまりこのままでは各軍の統合運用は総理大臣直属の部隊を作りでもしない限り難しくなってしまうのだ。

それを解決するために設けられたのが統合幕僚本部であり、統合幕僚長である。『やつら』への対策はどこかの軍が単独でやるようなものではない。三軍を統合運用してこそ成し遂げられるもの。だから統幕本部に対策室を設置しなければならないのである。

だが。

「大迫閣下はそれを交渉でやるような方ではないよ」

そもそも、沖繩諸島における駆逐艦沈没に関する調査室自体が対策部署設置に向けた布石だ。海軍省がどんな省庁よりも早く『やつら』への対策について実績を作っておくことにより発言権を獲得し、それをベースにして三軍への発言権を持つ統幕本部に海軍色の強い組織を設立する。見方によればかなり乱暴な手段だ。だからこそ交渉によつて得られたものよりも強い。

その作業の最中で藤巻統合幕僚長に接触などするだろうか。否だ。交渉による妥協案は基本として目指さない。大迫善光とはそういう男なのである。一方の藤巻統合幕僚長も、そう簡単に形式上の格下である海軍幕僚長にへりくだるような真似はしないだろう。

では何のために？ 統合幕僚長であるなら陸軍とのパイプ構築でもない。

「……」

——持ちかけがあつてな、新規の納品先が決まりそうなんだ。

飯田の父、飯田啓介から伝えられた情報^{ことば}。飯田製造の作る電磁投射砲に海軍からの発注がかかるかもしれないという話。

大迫閣下の藤巻統合幕僚長への接触の目的は電磁投射砲だ。

「……飯田製造^{ウチ}が開発している陸軍向けの新型兵器のことは知っているな？」

「電磁投射砲、ですか」

その呟きと共に青葉はすとんとベンチに座る。

「そうだ。既に試作型は納入済み。誘導弾に頼らない防空兵器としての活躍を期待されている」

「あれって防空兵器でしたっけ？」

「……防空兵器だ」

まあ、世間の認識なんてそんなものだろう。米国でのレールガンが対地上陣地攻撃を想定しているのに対して飯田製造の電磁投射砲は元々弾道ミサイルの迎撃を目的として開発がなされていた「陸軍兵

器」なのだが、どうも米国が初めて試験投入に成功したこともあり電磁兵器Ⅱ艦対地兵器のイメージが浸透してしまっている。

「アレの追加発注が入った」

「なるほど」

そう言いながら青葉はペンを取り出しくりと回す。

「発注は海軍によるものだ。しかも注文は陸軍仕様で防備隊向けと来た」

その言葉を聞いた青葉は、しばし沈黙。それから舐めるように言葉を放り出していく。

「……大迫善光はミサイル艇整備を主軸に幕僚部を回してきた。電磁投射砲搭載型巡洋艦の計画もコストの観点から潰している。でしたよね?」

「基本的にはそうだ」

大迫善光。長引いた冷戦が当然の如くもたらした財政危機。部隊規模の縮小やらそれに乗じた中華大陸動乱への対処に追われた前海軍幕僚長の後任である彼が主軸に据えたのは「低コスト高火力」を極めようとする小型艦艇・沿岸防衛装備の大増備であった。

それは隼級ミサイル艇の増備に加え3000t級ポスト阿武隈型の整備、部隊再編により廃止されていた防備隊の根拠地隊傘下としての復活……とにかく沿岸防衛への装備・部隊シフトであり、それによって長距離航行が可能な艦艇のほとんどを鎮守府直轄から連合艦隊へと編入。「攻勢連合、守勢鎮守府」の体制を確立したのだ。

「そういう意味では、陸上での試験運用の意味も兼ねて導入するのは分からなくもない、と?」

そういうことだ。無言で肯定とする。

「うーん。それは……沖繩奪還に必要なんですかね?」

「沖繩のためではないかと思うが……」

厳密には、思いたくないといったところ。

「でもこのタイミングですよ?」

「……」

その通りである。そもそも沿岸防備については整備したばかりで、

むしろ現在進めるべきは鎮守府所属の艦艇を次々と連合艦隊に編入したことによる平均艦齢の向上——もちろんそれは装備の旧式化を意味している——への対処のはずではなかったのか。

第一、沖繩で失われた装備、消費した弾薬の補充にいくらかかるというのだ。そんな状況で新装備、しかも陸の備品を拡張するとは。『やつら』の上陸は許してはならないのだ。海上で止める止められないは関係ない。海で防がねばならないのだ。

『やつら』を倒すのに必要と？

全く分らない。『やつら』の装甲は装甲と呼べるものでもないのだ。105mmで易々と、小銃弾だって数撃ち込めば有効だとなるほどに薄いそれを討つのに、なぜ戦艦の装甲を抜くことも想定している電磁投射砲などを投入しなければならぬのか。全くもって不可解である。

だが、そうであっても。それが大迫善光の意志であることを否定するのは難しいように思えた。

「大迫閣下が必要というのだ。何か必要な事情があるのだろうか」

「で、ご注文は裏取りと？」

「いや。その必要はない」

その言葉を放てば、視界の外の青葉が首を傾げるのが見えた気がした。そのまま飯田は続ける。

「大迫閣下が何かを掴んでいるのは明らかだ。私は彼の命令に従っていればいい。それで万事解決だろう」

「あなたは闇雲に生きるような方ではないと存じますが？」

青葉がそう言うのだから、飯田は小さく笑う。

「闇雲に？ 馬鹿なことを。私は耳と目を閉じ口を噤んだ人間だ。脳味噌に打ち込まれた情報の通りに動くのみ」

耳と目を閉じ口を噤んだ人間ね。青葉はその言葉を反復する。それからさも楽しそうに口角を吊り上げた。

「よく言いますよ、飯田製造グループの御曹司で主席でもないのに幕僚長補佐官、拳句の果てには今回の件の陣頭に立とうとしている、そんな人間がですかあ？」

「それはお前の判断することではあるまい。私はただ義務としてこのポストを務めぬくまでだ」

そこまで言い切れば、青葉はベンチよりひよいと立ち上がる。

「ま、青葉そういう姿勢は嫌いじゃないですけどね」

その言葉が嘘なところとか、特にね。振り返らずに彼女は嗤う。

「いいでしょう、気が向いたら調べておきますよ。気が向いたらね」

彼女が見据える先には植えられた観賞用の落葉樹。飯田は笑い返すつもりにもならず、懐から取り出した小箱を取り出す。両目の眼球で三角測量、諸元を導き出して砲撃^{なげつける}。

「つと……なんですかあ急に?」

危なげなくくるつと回って受け止めた青葉は、その小箱を見て首を傾げた。

「英国印度の土産だ」

「中佐最近英印行ききましたっけ?」

「いや、友人が土産にくれたのだがな。生憎私の好みはアッサムでな」

「……ま、頂けるものは頂いておきましようか」

先払いなんて、珍しいですね。そう呟かれた一言は聞かなかったことしておく。

沖縄県沖縄駆逐艦沈没事故調査室長。このやけに長つたらしい役職に求められるの言うまでもないが「政治力」である。というかそうでなければ飯田ではなくもっと別の人間が選ばれているはずだ。その立ち位置としては国際政治の駒に徹さねばならない軍人であるが、それがどれほど理想論であるかは軍人じゃなくても分かる。有史以来軍勢力とは支配力即ち行政権を裏付けるものであり、外交ではなく内政なのだ。

だから青葉は飯田を嗤うのだろう。

「あ、そうそう。もう一つお伝えしておかねばならないことがあります」

「?」

「……南西方面軍の件、ご存知ですか」

眉を顰める飯田。青葉にとってはそれだけで満足だったらしい。

「やっぱり飛んできて正解だったようですねえ」

そう彼女は、皮肉なまでの笑みをその顔にたたえて見せた。

飯田孝介が忙しいのは相変わらずのようだ。用事は済んだとばかりに立ち去る彼を見送りつつ、のんびりと一人ベンチに座る。

春が近づいた公園は、とはいえまだ春ではない訳で。常緑樹だけが葉をつける世界。奥には高層ビルが並び立ち、まるで公園と都市を隔離する壁のようだ。

「青葉」

聞きなれた声だ。だが先ほどまで話していた飯田とは違う声。面倒くさいので顔も動かさずに答える。丁度見上げていた空は中途半端に雲が多い。

「おや、休日出勤とは精が出ますねえ高遠さん」

「それは貴様もだろう」

フリーランスですよと返したのは無視されて、高遠はベンチに座る。もちろん青葉の隣だ。

「やだなあ勝手に座らないで下さいよ」

「他人にやられて嫌なことは他人にもしないことだ」

それから男は小さく息をつく。どうせこの後「飯田に接触した理由はなんだ」とでも言うのだろう。ならさっさと終わらせようと先手を打つことにする。

「なに、ちよいとばかり依頼を受けて……あとは南西方面軍のことを教えておいただけですよ」

いい感じに動いてくれると助かるんですがねー議会は数が命ですし。そうまくし立てれば隣は徐々に曇っていく気配。そりゃそうだ。彼にしてみりや聖域を荒らされたようなものなのだから。

「……衝突回避のためのイニシアティブは、君に譲ったつもりだったんがね我々は」

「そうですかあ。それはご期待に沿えませんで申し訳ありませんねえ高遠大尉？」

高遠と呼ばれた男はため息。なにが衝突回避のためのイニシアティブだ。外蒙古上空じゃあるまいし。こちらの至極馬鹿にした調子に、相手はもうため息を吐く様子もなかった。

「……で、お前が南西のことを口にするということは、やはり動くのか」

代わりに、情報を寄越せだそうだ。まあすぐ賞味期限の切れる情報だから別にくれてやってもいいだろうが……そう決めて口を開く。

「だって今年はダブル国政選挙ですよ？ 立憲友民党がこのまままでいると思いますか？」

「確定か？」

「値打ちがあるかどうかはともかく」

「そうか……だからこそ、冷静に動かねばならないと思うんだがな」

「おや？ 高遠大尉が主観で語るなんて珍しいですねえ」

その言葉を受けて押し黙る高遠。本当に変わった人間だと思う。少なくとも青葉や飯田よりかは変な人間だ。

「まあ、冷静に動かねばならないという意見には賛成ですかね。とはいえ、そうお考えでない方がいらっしやるから青葉は今ここにいます」

経済と戦争。国民の関心事はだいたいこれだ。

それを曲がりなりににも上手く回すことによって支持を取り付けてきた現政権のことを考えれば、沖縄での衝撃は政権に大きな影を落としている。あまりに多くの犠牲者が出ているのだから既に致命傷を負っているのかもしれないが……とにかく事後対応をしくじれば政権転覆の可能性も捨てきれない危機的な状況にある。

「……もつとも、海軍さんには関係のない話でしょうが。さっさと赤狩りに戻ってはいかがですか？」

「……海軍情報局が君に私をつける理由は知っているだろうに」

「やだなあ共産主義者だなんて。心外だなあ」

「とにかくだ。今後このようなことはないように……と言っても無理か」

「無理ですnee、青葉は愛国者予備軍ですのぞ」

「フン、抜かせ」

海軍情報局は軍内部の共産主義者の摘発と防諜を行うための組織と聞いているが、まあ彼の任務は飯田孝介という人間を守ることなのだろう。とりあえずこちらに興味はない。一方こつちの情報には興味津々なのがまた面白いところだが。

「高遠大尉。連中、本気ですよ」

「手段は？」

「ええ？ 職業軍人が聞くんですかあ？」

黙る高遠。なにを根拠に言っているのかと聞いているらしい。

「——ご存知の通り、九州及び南西諸島の防備を行う陸軍西南方面軍には海外派兵を想定した部隊が多く配置されていますよね」

西南方面軍の任務が九州地方の防護なのは当たり前であるが、実際には半島や台湾の暴動を抑えるためともいわれている。この国が東アジアにおいて圧倒的優位を保っているのは知っての通りで、故にその優位は維持されなければならないのだ。

「その中でも特に即応性の高い部隊。高遠大尉もご存知でしょう」

「……」

西南方面軍は輸送船による展開は想定しない。そもそも担当地域が山ばかりの南西方面軍には戦車が配備されていない。同様の条件であるはずの中部方面軍が機甲師団を持つのは輸送船による展開を目的としているからだ。

南西方面軍は航空輸送、または空挺降下を想定した部隊編成が多い。

「だが西方航空軍の輸送機を総動員しても数が送り込めない。沖縄本島には未だに大量の『やつら』がいる」

『やつら』が沖縄に上陸して以来、軍が航空機や偵察衛星による監視を怠ったことはない。しかもその情報は逐次公開されている始末だ。まあ国民の関心にこたえるという意味ではご立派ではあるが、政府と軍が『やつら』を敵ではなく生物だと、災害のようなものと未だに思い込みたがっている証拠でもある。

「満州国防軍に動きがあります。北満の輸送機を僅かではありますが、半島の国境線近くに移しているようです」

それは飯田にも伝えたことだ。これを知った高遠はこのことをどう生かすのだろうか。そんな意味もないことを考えてみる。彼は黙ったままで、まるで続きを言えと言わんばかりだ。

「実際の評価はお任せしますよ……まあとりあえず青葉が知っているのはそんなところですよ」

満足しましたか？ そう言外にひそめて言ってやれば。向こうはなにも返してこない。

まあ、別に沖縄奪還が不可能とは考えていない。実際戦力をそれこそ師団規模で投入すれば勝てるだろう。沖縄が掘り返されるぐらいの戦略爆撃をすれば勝てるだろう。革命戦争で自由主義連合軍がやったように、フランス沿岸に大量の戦艦を並べて鉄の雨を降らせれば勝てるだろう。

だが正直、そんなことをして何になる。

救出すべき邦人も居なければ、防護せねばならない重要拠点もない。核弾頭を無力化及び封印したという公式が、嘘だったのならまあ焦る気持ちも分かるが、起爆装置さえ動かなければあんなものはただの放射性物質に過ぎない。

沖縄が陥落してからも二週間。今すぐにも沖縄を奪い返したい気持ちは分かる。だが実際に取り返して何が得られるのだろうか。どうせインフラは徹底的に破壊されたのだ。復旧のめども、そこに帰ってくる人々だって大半は安否が分かっていないというのに。

「……まあいい」

高遠はなにも返さずに立ち上がった。やはり何も口にしないのか。

「青葉、今一度確認しておきたいのだが、お前はなぜ飯田に執着する」
「執着？ 笑わせないで下さいよ。飯田ちゆうぎの身辺警護をするつもりならもっとしつかり調べることをお勧めいたしますよお？」

「……ともかく今後とも下手に動いてくれるなよ」

それだけ言って立ち去っていく。残されたのは青葉だけ。

「執着、ねえ？」

本当に失礼な諜報組織サマである。恐らくは青葉と飯田が異性同士であることからあらぬことを想像しているのに違いないが、そもそも飯田は既婚者だ。スキヤンダル記事を送り付けて誰かを嵌めるのはまあ選択肢として悪いものではないが、相手が自分じゃただの自演ではないか。

「……私たち、そんな風に見えるんですかね」

そう聞けば飯田あのみとはなんと答えるだろうか。恐らくは純粹にそれを否定だけするのだろう。むしろ勘違いされたことを喜びすらするかもしれない。そうに違いない。

「ハッ、何考えているんだか」

ベンチを立ててほこりを払うように膝をはたく。公園の淵には高層ビルが立ち並び、その向こうに青空。まるで壁だ。空から見れば、ここは無機質な灰色の世界にポツンと残された自然。かつてロクな産業もないこの国は、今となっては疑いようもない先進国だ。

それが、たった一日。たった一日で崩れ去った。軍国たるこの国が『やつら』に完膚なきまでに敗れることによって崩れ去った。影響は沖繩を失っただけでは留まらないのだ。

だからこそ。

「青葉は期待してるんですからね？ 飯田孝介さんにはしつかり期待に応えて頂きませんと」

——西暦2022年3月14日。東京——

どこまでも広がる青空。春の太平洋は比較的穏やかで、温度変化の影響が及びづらい島嶼部はやはり本土よりかは暖かい。住所は東京とされても、ここが東京だと聞いて信じる者はそうそういないだろう。それはある意味では東京都という存在が単なる地方行政組織ではなく、68の都府庁道県の頂点に君臨している証拠と言えるのかもしれない。

「つまりアレですか、この島を捨てるかと？」

そんな東京都に属する太平洋の小島、どちらかと言えば整備されている港湾施設で立ちはだかるように構えるのは初老の男。長靴とタンクトップの組み合わせは彼が仕事を切り上げてここへやって来た証拠である。いきなり呼び出されもすれば当然機嫌が良いはずもなく、しかしそれを隠した彼は最低限度の穏やかな顔立ちで告げた。

無論、その抗議の声に込められた怒りを隠すようなことはしない。

そして、彼が対峙する相手こそ、日本という国家権威の象徴にして国民を守りし暴力装置——軍人であった。

数名とはいえ重武装の兵士を連れた彼は、嫌味なほどの豪勢な正装。鈍い灰色に塗り固められた巨大な箱——こんな巨大な鉄の塊が海を征くというのだから驚きだ——を背にし、何の感傷もなく言葉を発する。

「そういうことになります。これは内務省令に基づいた決定事項であり、全島民の退去は48時間以内に実行されます」

そう言いながら薄っぺらい紙媒体を渡す軍人。先ほど見せられた軍人手帳同様に法的効力を持つものではあるが、しかしそれだけだ。

「あんたらは何も分かっていない」

男はそれだけ言って軍人を睨む。港に流れる険悪な雰囲気は都の担当者があわたと手を上げたり下げたりするが、無論彼がどうこうできる問題ではない。いくら都の担当者と言っても所詮は部外者、避難

というのは生活の全てを捨てる行為だ。この太平の海の真ん中に放り出されたような島に生まれ、そして暮らしてきた人間にとって、避難とは自らを殺される、いや一族を抹殺されることに等しかった。しかし軍人は、決して語気を弱めることはしない。

国民の生活を守ることは出来ないかも知れない。

それでも、命を護ることは何においても優先されねばならないのだ。

「避難は実行されます。これは、陛下の御意志なのです。陛下はこれ以上の犠牲者が出ることをお望みではない……どうかご理解頂きました」

続けられた言葉に、男は言い返すことは出来なかった。出来るはずがなかった。

回転翼機ヘリコプターの羽音が、どこまでも広がる青い空に響き渡る。

東京都は千代田区。多くの中央省庁に囲まれた海軍省ビルは正直手狭だ。そして古臭い。修繕やら改装やらはしよっちゅう手が入るのだが、なかなか全部更地にして再建には踏み切らない。しかし軍というのは万年予算不足なもので、レンガ造りなら歴史の趣もありなお結構。そんな訳で海軍省ビルは今日も活況を呈していた。

まあ仮にも今は平時だ。有事の際にこそ国家の盾となり国民の面前で活躍せねばならないのが国軍だと考えれば、この状況は歓迎できないのだが。

なにはともかくそんな海軍省の一角。そこに設置された沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室。海軍省内部の部局で最も今ホットな部署はどこかと問われれば海軍省勤めの全職員は迷うことなくここだと言うであろうこの室は、僅か9名の海軍軍人たちにより構成される小さ

な所帯。しかし日本政府が唯一公式に認める『やつら』専門の対策組織だ。

『近衛兵団、小笠原諸島における避難活動を支援。輸送艦が展開』

「……離島の避難がようやく始まったか」

手元の新聞記事を見ながら飯田孝介海軍中佐——沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室の室長その人——は手元の新聞を眺めながら感慨深そうに言う。一面に堂々と掲載された写真には、陸軍兵士に護衛されながら巨大な輸送艦へと乗り込んでいく住民達の姿。

「……『房総』か？ いつの間に」

「でしょうね。近衛の要望に応えるのも大変だ」

どこか他人事のように言う飯田に、返す小河原。海軍は現役だけでも二十万を超える人員を抱える巨大組織である。言うまでも無く全ての人間の動向を把握出来るわけがなく、艦艇もまた然り。

掲載されている写真は艦の中央部を写している都合上艦番号は見えないが、呉から回したとも思えないその輸送艦は「房総」であろう。日本が現在保有する唯一のドック型輸送艦である大隅級は基本的に呉に配備され、横須賀に配備されるのは七番艦の「房総」ただ一つだからだ。

「それ、どうなるんですって。確か太平洋側の島嶼地域の住民を皆退去させるんですって？」

「最終的には瀬戸内海を除く全てが対象となるそうさ。まあ、比較的大きい大島や日本海側は除外となる可能性はあるそうだが……」

一面に記載された記事が扱うのは先日より始まった避難活動。近衛兵団が直接動いたこの作戦は、東京都の太平洋島嶼地域の住民を全て退去させることにある。統帥権委任法の適用範囲外とされる近衛兵団は国民にとっては最も近い天皇の顔。さしたる混乱もなく避難活動は進んでいるようであった。

「それにしても近衛を呼び出してくるとは……まあ、陛下の御意志が絡んでいるのは事実なんですよけども」

どこか愉快的な調子で言う部下^{おがわら}。少なくとも国家公務員の発言としてはあるまじきもの。飯田はため息交じりに新聞を机に置く。

「ほどほどにしておけよ小河原。周りが聞けばいろいろうるさい」

「いいじゃないですか。これで太平洋の小島に『やつら』がやって来ても、犠牲者が出ずに済みますし」

小河原の言葉を聞きつつ飯田は机に新聞を広げる。決して質が悪いとは言いがたい紙面に印刷されているのはいつもと変わることはない記事ばかり。その中でも沖縄に関する国会での論戦に咲かれた紙面は大きい。

与党はなぜこの事態に対処することが出来なかったのか、現政権は能力不足だ、直ちに解散せよ。新聞は国会の機能停止を危惧しつつも基本は政権批判に終始している。そしてそれは世論の意見とも合致していた。

まあこればかりは琉球諸島事変が通常国会の真っ只中、三月の頭であつたことが不幸であつたとしか言いようがないのだが。

「それにしても、ダブル選挙か……」

「ダブル選挙？ 衆参両院選ですか？」

何の話だと首を傾げる小河原。飯田の脳裏に浮かんでいたのは先日日の青葉の言葉だつた。

——南西方面軍が、動きますよ。

確かに与党は沖縄の奪還を目指すのだろう。いかなる敵が相手であろうと国家は引き下がる訳にはいかない。侵略者に立ち向かわない国家は国民によって打倒される。ましてやこの国は己の軍事力により幾度と無い脅威を撥ねのけてきた。その自負と矜持がある限り、国家に引くことは許されない。

だからと言って、無用な消耗が許されるわけがないのだ。既に沖縄に救うべき国民はいない。これは国民を護る戦いにはならない。そして恐らく、国土を護る戦いにもならない。少なくとも大迫海軍幕僚長はそう考えているだろう。

では第一党の立憲友民党は何を考えているのだろう。その政権与党の総裁、または各派閥の人間はどう考えているのだろう。

「……分からないな」

「何がです？」

「いや、このタイミングでの避難命令、そしてそれが素早く実行された理由を考えていた」

その飯田の言葉を聞いた小河原は部屋に気を配る。調査室の構成人員はたったの9名。そして活動は駆逐艦沈没事故の調査だ。朝礼時ならばいざ知らず、室員はあちらこちらに出向いてしまいここに残されているのは小河原と飯田だけ。

それを確認した小河原は、飯田に向き直った。

「……と、いいますと？」

「やけに遅いなど、そう思ってたな」

「そうでしょうかね？ 行政にとつての二週間ですよ？ むしろ早いぐらいでは」

すぐで半年なんていうくらいですし。聞く人間が聞けば顔を良くしないであろう言葉を悪びれもせずにそう言う小河原。

「いや、離島部のリスクは沖繩の時点で理解されるべきだ。そして近衛兵団が実行して見せたように、輸送艦を一隻動員するだけで太平洋沖合の避難については十分だ。しかし今日まで行わなかった。それは海軍も同様だ」

小笠原諸島を初めとする東京の島嶼地域。沖繩からあまりに遠く離れている。当然『やつら』が一度上陸してしまえば島民の命の保証はないが、しかしそれは可能性として危険視されることがあっても、だからといって即座に避難という話にはならない。避難とだけ言えば島民の為にも聞こえるが、それが余計なお世話でしかないことは誰もが承知だ。避難をしても生活は続く。彼らの衣食住、そして職を用意せねばならない。

だから、こうも易々と避難命令が下りるのはおかしいのだ。

逆に、避難命令が下りるほどの大事ならもつと早い内に下りないとおかしいのだ。二週間は長すぎる。

「うーん。そう言うものですかね？ 政府おかみの考えはどうも分かりません」

それでも小河原は何か引つかかるところがあるようで、うむむと唸る。

「……」

飯田の腹の底に流れるのは鈍い痛みであった。

思えば、沖縄の時の官邸の行動は決して合理的とは言えなかったのだ。駆逐艦「雷」の撃沈が認められ、沖縄本島方面への『やつら』の進行が確認された段階で何故か満州軍の撤退を命じた時もそうだ。あれは軍には理解しがたい命令だった。

確かに演習を主催する立場である日本として同盟国軍の安全を保証するのは重要なこと。いざ前線に立てば等しき価値を持つ満州国防軍だって、日本政府という立場で言わせれば「お客様」に過ぎないのかもしれない。

しかし、あの状況は明らかに戦時であった。駆逐艦が沈められ、沖縄本島に謎の魚群が近づいていた。核戦争を想定した防空警戒態勢すら発令されていた。あれを戦時と言わずしてなんといいのか。

だがその一方で、政府は嘉手納の陥落を聞くや否や素早く出された全島避難検討の指示。

そして輸送手段が決定的に足りていなかったあの状況で、本当に僅かしかない時間の中で、全島避難を検討し計画、可能な限り実行せしめ……それが万単位の住民を救ったのである。

政府の考えていることが全く分からない。それが鈍い痛みの原因なのだろう。

「……全くもって、傲慢だな」

「何がですか？」

「軍人は軍人だ。政府がどうのと議論する立場にはない」

その判断が如何に合理的であろうとなかろうと、やれと言われれば自国民であつても銃を向けるし、やるなど言われれば勝利の寸前でも矛を収める。それが軍隊に求められることであつた。

「でも中佐、調査室（こくさむろ）って端的に言うなら『やつら』へ対処行動を牛耳るための部署ですよね？」

あつけらかんと言つてのける小河原。飯田は頭に手を当てる。

「身も蓋もないことを言ってくれるな……まあ、大迫閣下のお考えは陸空軍からの主導権を奪うことなのだろうが」

「どう見ても軍隊にしか対処出来ない問題です。他省庁に口出しされましても……とは思うのですが」

そこまで言ってから言葉を濁す小河原。飯田は頷く。

「問題は運輸だ。アレをどう見るかで大分変わってくる」

「単なる海保と海軍の縄張り争いか、それとも運輸は内閣の尖兵か」

「いずれにせよ。石川係長とパイプを繋ぐ必要がある。誰かいないか？」

「誰かと言われましても、運輸省ですよ？ それにあんな宣戦布告をされた後では……」

実際、その通りである。先日、そう先週金曜日に行われた記念すべき第一回対策会議。そこに運輸省より参加した石川という男の態度は結局最後まで海軍に友好的とは言えなかったし、わざわざ独自で避難計画を立案していることすら明かした。

「ともかく、運輸省には沖縄での避難計画立案そして実行の実績がある。次の定例までにはどうにかするぞ」

「ということとは、タイムリミットは今週木曜までですか……」

時間はない、しかし慎重に動かねばならない。下手をすれば大迫海軍幕僚長が望むプランを崩しかねないからだ。そもそもこの調査室の設置は彼の手によるものであり、主導権を握るべく飯田が行動しているのも彼の指示によるものである。

無論、任された以上はその全てを判断し、進める。それが飯田の役目。「お伺い」などを立てることは出来ない。

「大迫閣下も、もう少し具体的な指示を下されれば良いものを」

しかし現実問題。飯田は大迫の考えを知っているわけではない。ただ『仮説』を聞かされ、その上でひとまずは調査室を任された。調査室は彼の計画の一端であり、その全てではない。

「いいじゃないですか。要は信頼されてるわけでしょう？」

「放任とも言うがな」

軽い調子で言う小河原に短く返し、飯田は机に向き合う。必要最低

限の物品が置かれた机は無駄がないが殺風景とも言う。なにか写真でも持ち込もうかなどと考えるのは現実逃避か。

その時、室の扉が軽く叩かれた。

「失礼します。飯田室長」

飯田の思考を遮ったのは水兵服の曹士。警備担当だろうか。

「なんだ」

発言を促した飯田に対し、曹士は直立の態勢で室内によく響く声で報告。

「陸軍中央即応軍の三鷹陸軍少佐がお越しです」

その言葉に飯田と小河原は顔を見合わせる。

中央即応軍の三鷹といえば『やつら』の鹵獲個体研究を密かに行っている特務実験大隊を率いる人間だ。確かにこの調査室に来るべき来訪者ではある。

「……小河原、聞いているか」

「いえ、何も」

「いやあ、お久しぶりです中佐」

海軍省は世間一般が考えるほど広くはない。狭くて良いことなど滅多にあるものではないが、少なくとも今日はその狭さ故に来訪者を無意味に長く待たせることはせずに済んだといえるだろう。

「うむ。尾羽以来だな」

陸軍の佐官帽は机に置かれている。出されたお茶を目の前にして人懐っこく笑う陸軍少佐、三鷹。彼と顔を合わせるのには樺太の北端に位置する尾羽の街で『やつら』の実験に参加して以来だ。

「いやはや。北樺太は寒さが過ぎますね。やはり私には三月の東京程度の寒さが丁度良いですよ」

それだけ言ってお茶を取ってお茶を口に含む三鷹。目を閉じて、味わうように目を閉じる。

「……」

飯田は黙って彼が一息を吐くのを待つ。

三鷹陸軍少佐は今回の沖縄で鹵獲した『やつら』の研究調査を行っている特務実験大隊の長。隊長というのとは基本的には自らの部隊を空けるようなことはしない。大方、重要な用事———を済ませに来たのだろうか……だからといって海軍省ビルを訪れる理由はない。

「結論から申し上げますと」

湯呑のお茶は半分ほど残っているだろうか。逆に言えば半分も減っていた。三鷹はその目を細く開き、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「アレの装甲は非常に脆い、それが大隊としての結論です」

「そうか」

脆い。なんとなくそんな結論が導き出される気はしていた。

なんせ沖縄では小銃しか装備していない部隊でも『やつら』と渡り合ったものがあるぐらい。機関銃が『やつら』に傷を与える様は飯田も樺太で直接確認している。

76式機動戦闘車の105mmや砲兵隊の155mmなどが過剰すぎるぐらいの火力であったという結論が出ているあたり、まあ装甲らしい装甲があるはずもないのだ。

この結論を出すために一週間。だが一週間はかける価値のある研究だ。沖縄は、琉球諸島事変は我が国の安全保障を根底から覆しかねないインパクトを持っている。軍国日本、東亜の反共戦線を支える武装国家の信頼を崩しかねない。

「問題なのは、器官の解明が進んでいないと言うことです。解剖が失敗したことは、まあご存じかとは思いますが……」

言葉を濁す三鷹。飯田の脳裏に蘇るのは先日の尾羽。爆発により傷ついたコンクリート。多数の怪我人。自爆した鹵獲個体。

「そうだな。では結局、そのまま何も解明されなかったと」

「死骸の調査だけでは、何分無理があります。表皮の劣化がかなり早く進行するのがありますが、それ以前に自重で大半の組織が潰れてしまふのです。それらもどのような働きをするのかは全く分かってい

ない状況でして……」

調査チームは音を上げています。お手上げだと言わんばかりに三鷹は首を振った。一方の飯田は怪訝な表情を作る。

「自重で潰れる？ 自重で潰れるのか」

「はい」

「……水棲生物と考えれば、まあ妥当か。しかしなあ」

妥当か。と呟いてみたところで、まさか妥当なわけがない。現に沖繩は陥落したのである。水棲生物は水中での活動。つまり水による浮力が働いている環境下での活動を前提とするために陸上に上げれば自重で潰れるなどという生物学は通用しない。沖繩本島の面積は1200平方kmと相当に広大。自重で潰れるなら脅威ですらないのだ。

「ええ、生きている内は自重で潰れないのです。そこにカラクリがあるように思うのですけどねえ。まあ憶測の域を出ません」

そう括って三鷹は湯飲みを持ち上げる。お茶を飲み干すつもりだろうか。

「……それで？」

「現状の研究はまだこの段階です。被検体も貴重ですので」

「……」
だが飯田は納得しない。するはずがないのである、この程度の報告で星一つとは言え上級将校である佐官がわざわざ他軍の施設を、それも何のアポもなく訪れると？ あまりにも常識を欠いた話だ。

湯飲みがそつと机の上に戻されたとき、三鷹の表情はいやに冷えていた。周囲を一度見てから、飯田をじつと見据える。飯田が大丈夫だと頷くと、彼は口を開いた。

「千駄ヶ谷閣下からの言伝ことづてをお伝えします。陸軍内部に奪還の動きがあるとのこと」

「……間違いないのか？」

飯田の問いに三鷹は首肯。

「そうか」

それは飯田にとっては既に聞かされている情報だった。それでも

飯田の声は低くなる。

三鷹の言う千駄ヶ谷という人間は南西方面軍と繋がりがあられるわけではない。その彼が伝えてくるのである。それは噂であろうと事実であろうと、この件が広範に渡り広がっている証拠。

遅かれ早かれ、この情報は漏れる。いや既に漏れていると言った方が適当か。

まだ広がっていないが、一度広がれば誰にも止められない。沖縄奪還を望んでいるのは票目当ての政権や面子を潰された陸軍だけではない。国民も望んでいるのだ。たちまち世論に後押しされ、そして圧倒的支持の下で即座に実施へと移されることだろう。

つまり、もはや根回しやら工作を仕掛ける時間は僅かしか残されていないということ。

飯田の内心を知って知らずか、三鷹は続ける。

「今回の一連の実験により、結局『やつら』は個体としての戦闘能力は低く、また複数個体で連携すると言ったようなことも確認されませんでした。敗因はこちらが『やつら』のことを理解していなかったこと、そして何より、手数です」

「手数か。あれだけの数を相手にするとなれば当然だろうな」

「はい。これは私見ではありますが、初動での誤認が問題だったのです。『やつら』が押し寄せた読谷村で一番始めに会敵した部隊の報告では榴弾より徹甲弾が有効だと報告が挙げられていました。その為に、53軍は……いえ、誰もが敵は装甲を備えていると考えたのです」

「……」

「しかし装甲などは存在しませんでした。仮に53軍の機動戦闘車がキャニスター弾で攻撃していたなら、結果は大分違ったものになっていたかも知れませんか」

結局『やつら』は装甲など備えてはいなかった。確かに軟目標を想定したキャニスター弾——大砲における散弾のようなもの——なら緒戦の結果は大きく変わったろうし、初期のうちから軟目標だと分かっていたら、積極的に阻止攻撃を行うという選択肢があったはず。終わったこととは言え嘆かずにはいられないだろう。

榴弾よりも徹甲弾が有効。この報告を信じた陸軍53軍は『やら』が「装甲を備えるが対戦車砲であれば攻撃は有効」な装備を保有すると判断。見積もられる『やつら』の数を鑑みて歩兵部隊による遅滞戦術は不可能と判断。装甲車両を中心とした機動防御を展開した。「ではその判断ミスが結果として部隊の早期後退、前線への圧力不足を招き、『やつら』の後方浸透を早めた、と」

「ええ、中佐の仰るとおりです。中には市街地における遮蔽物を利用して歩兵部隊を突撃させれば、更に戦果を拡張出来ただろうという声も」

「ふむ。そういうものか……」

とはいえ、結局は負けたであろう。

歩兵部隊を市街地に配置して反撃を行ったところで、それでは攻め手に欠ける。結局はよくて時間稼ぎである。さらに加えて言えば現実には53軍の機動防御への切り替え、歩兵部隊後退の決断よりも『やつら』の浸透は早かった。司令部が企図していないとはいえ歩兵部隊による遅滞戦術は行われているのである。

それは住民と市街地を巻き込む焦土戦と呼ぶにふさわしいモノだったかも知れないが、市街地での戦闘は行われた。真後ろに住民がいる以上は一歩たりとも引くことが許されない陸軍と、知性の欠片もなく突っ込んでくる『やつら』の先鋒、仮称Ⅱ型。

確かに局所的な勝利は収められた。仮称Ⅱ型の姿はずんぐりとした円筒形の胴体に奇妙な白い足が生えたこの世のモノとは思えない化け物だが、しかし寸法だけを見れば奇しくも戦車や装甲車の大きさに似ている。目標の大きさが似ていて、そしてどちらも地平を元気にいっぱい駆けるだけなのだから同じ戦術が有効だ。

陸軍が常々満州に押し寄せる赤軍機甲部隊との戦闘を想定し、市街地における対戦車戦闘をよくよく研究していた成果が出たとも言えるだろう。

だが負けた。

いやそもそも、沖縄では遅滞戦術や機動防御を行うことは不可能なのだ。いずれも劣勢の際に味方の増援を待ったための戦術。そして四

方を海に囲まれた沖縄には肝心の縦深がほとんどない。結局長くは持たずに海に押し切られた。

「実際、第53軍が沖縄本島での作戦をあまり想定していなかったのは事実です」

それは飯田も三鷹も重々承知していることで、三鷹は話を区切るようにお茶を口へと運んだ。

「ですが部隊の錬成は済んでいましたし、事前計画の時間も僅かとはいえありました。航空支援の体勢も決して貧弱ではない。緊急出動してくれた空軍の爆撃機が通常爆弾ではなくクラスター爆弾だったならなどという『仮定』は、仮定にもなりません」

「それでも、陸軍は奪還作戦を行うのか」

飯田のその言葉に、三鷹はかぶりを振る。

「だからこそです。陸軍は知らなかった」

そう、相手を知らなかったのだ。

相手を知らなかっただけなのだ。

今は違う。敵のスペックは分かっている。有効な武器だってある。数だけは分からないが、それでも持ち込めるだけの資材を持ち込めば勝てるはずだと。

だからこそ、陸軍で奪還作戦を望む声も強くなるのだろう。

「……千駄ヶ谷閣下はこの状況を憂慮されておられます」

千駄ヶ谷。三鷹が出すその名前は陸軍東部方面軍を預かる陸軍大将のそれ。飯田の立場である海軍中佐には手も届かぬ存在。階級以上に組織が違う。

逆に言えば、それは陸軍大将である千駄ヶ谷という男も同じだ。彼はどんなに偉かろうと陸軍の人間だ。今海軍の中で進みつつある『やつら』への対策室設立の流れに口を出すことは本来であれば出来ないのだ。

だからこそ、互いに連携する価値があるのである。伝手^{ツッテ}というものがあることに意味がある。あれば使える。使えるならば使う。飯田にしてみても千駄ヶ谷と組む理由は十二分にあるわけだ。

「しかし、私になにが出来る。確かに千駄ヶ谷閣下には昔お世話に

なつたが……」

しかし話が大きすぎる。上司である大迫の許諾なしに判断が出来るはずもない。口ごもる飯田に対し、三鷹は自信に満ちた表情を作る。

「いえ、簡単な話ですよ中佐」

対策室を陸海合同で作しましょう。それも今すぐに。

——西暦2022年3月14日。東京——

かの有名な桜田門外の変、そして昭和最悪の事件と名高い共産テロの舞台でもある桜田門通りより内堀通りへ。日露戦争の勝利を祝して整備された凱旋道路は車幅36mを誇り、その車幅が理由で多くの通行人が利用している。そして凱旋堀を渡ればそこは皇居前広場。皇居外苑の一部分に切り込むのである。

この場所がオリンピックピックやらその他諸々の改革の余波で開放されてから早くも六十年。これほどまでに車と人間の往来が激しいとなればもはや閉苑・開苑の概念自体存在しないことだろう。そしてこのヒトとモノの流れは、この場所が持つ歴史、あまりに多く流れた血の記憶すらも押し流してしまいそうであった。

「今日は装甲車が4両ですかね。通常通りの配置だ」

窓からチラリと外を見た小河原がそう呟く。皇居正門を護るのは近衛兵団の約1個小隊、平時の配置と考えればまあ十二分な警備と言えよう。

ちなみに説明するまでもないことだが、ここは海拔五メートル。東京湾に隣接する浜離宮よりは三キロも離れていない。

「……もし仮に甲経路だとするならば、近衛はどう動くだろうな」

そう呟いた飯田に、不思議そうな表情で振り返る小河原。

甲経路というのは『やつら』が東京に侵攻する可能性を考慮する際に挙げられた進行ルートのこと、浦賀水道経由で東京湾に侵入、そこから中央区や港区に直接上陸してくるといったもの。まさに首都直下地震以上の目の前に迫った脅威であり、東京が実際に戦場となる、それもいきなり戦場になるという最悪の想定であった。

「どうしたんです中佐。今上陛下なら、御身のことを顧みることなく近衛を全て投入なされると思いますけど?」

なにを当たり前な。と言わんばかりの調子の小河原。実際、千代田

区や港区での活動となれば、近衛が初動対応を担当するのは間違いないだろう。

「だから不安なのだ。東京が消えても国は守れる。国体はそうはいかん」

「……」

飯田に無言の視線を注ぐ小河原。この国は立憲君主制——天皇を頂点に据える政治体制を採用している。年号が変われば不況が起きる国だ。平成の御代も既に三十余年。その日がいつ来るとも知れぬ日々は続くが、それを最悪の形で迎えたならばこの国は一卷の終わりである。

「ところで中佐、内地総軍司令部には挨拶以外の用事はあるんですか？」

話を切り替えるように小河原が聞く。そもそもこの二人が自動車に揺られているのはこれより内地総軍司令部のある千葉県へ向かうため。それは先週金曜日に設立されたばかりである調査室の挨拶回りという性格を当然孕んでいるが、それ以外の目的があると考えてしまうのも無理はない。

なんせここは沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室、単に駆逐艦沈没の原因を探るだけならそれこそ艦政本部の技官にやらせればいい話。わざわざ飯田なんて中央寄りの人間が出てくる必要はないのだ。

「いや、今回については本当にただの挨拶回りだが」

「あ、そうなんですか。てつきり圧力をかけるものかと」

たかが海軍中佐が出向いた程度で圧力になるものかと言いつたところだが、飯田は無視を決め込むことにする。実際、たかが中佐でも背後に海軍幕僚長がいる以上は圧力以外のなものでもないのだから。

「敵は増やささないに越したことはない。まあ、三鷹が言うように本当に内地総軍が中立なのかどうか、確認したいところではあるが」

そう言う飯田に、小河原はどこか不満げな表情を作る。

「しかし納得出来ません。先ほど中佐が仰っていたように千駄ヶ谷陸軍大將が奪還に反対なのは事実としても、なぜその話が三鷹少佐から

来るのですか？ あの三鷹少佐は中央即応軍所属、立場としてはむしろ奪還作戦を実施したいはずなのでは」

現在、沖縄の防備を担当していた西南方面軍を中心に進んでいるという沖縄奪還の動き。

もし本当に沖縄奪還が行われるとすれば、無論それは陸軍の総力を挙げたものになるであろう。とするならば、投入されるのは陸軍の精鋭中の精鋭……陸軍大臣直轄の中央即応軍が投入されないはずがない。

「中央即応軍だつて一枚岩じゃないということだろう。そもそも三鷹は特務実験大隊とはいえ尾羽に送られているんだぞ？ 少なくとも主流ではないだろう」

中央即応軍。空挺・鉄道・輸送船といったあらゆる手段を用いて前線に急行するこの軍団は、連隊規模で各地に分散配置され特定の管区は持たない軍である。司令部の置かれる神奈川県座間市が軍都計画により陸軍系の教育機関が多く立地する相模原市に隣接することからも、中央即応軍が重要な位置づけにあるのは明白だ。

一方、特務実験大隊はどうだろう。大隊の基幹戦力は中央即応軍から抽出されたそうだが、その構成は大半が北部方面軍23軍。最果ての地、樺太駐屯の部隊。

「あー。言われてみればそうですね。いくら『やつら』への対策の最前線とはいっても見方によっては左遷……反抗するのもありえない話ではないと」

で、それで千駄ヶ谷陸軍大将を頼ったと？ その小河原の問いに、飯田は肯首。

「千駄ヶ谷閣下と三鷹には浅からぬ縁があるらしいからな。十分あり得るだろう」

そして沈黙が流れる。

突如海軍省に押しかけた三鷹少佐。彼が飯田にもたらしたのは沖縄奪還への動き、そして東部方面軍司令官である千駄ヶ谷陸軍大将の提案する「対策室」設立の提案であった。

「対策室を陸海合同で作りましたよ。それも今すぐに」

数時間前の海軍省。ほとんど何の前置きもなく始まったその提案は、目の前に座る三鷹陸軍少佐がもたらしたモノ。

「今すぐか」

「ええ、今すぐというのには語弊がありますが。少なくとも年度明けには発足です」

「その陸海合同というのは……」

言うまでもなく。陸海合同なんて組織は存在しない。そんなものがあるならば軍部は既に統合軍の形態を取っているはずだ。陸と海、明確な境界線があるからこそ陸海軍が別々に存在するのであって。

しかし、例外がないわけでもない。

「ええ。統合幕僚本部ですよ。我々にとっては、それが一番良い選択だ」

しかしそれは、大迫海軍幕僚長の考える筋書きとはかけ離れたものであることは言うまでもない。彼のシナリオは海軍による事態対処への独占、もしくは多大な発言権であり、少なくとも陸海の共同といった中途半端なものではないはずだ。

それに、統合幕僚本部に設置となれば確実に空軍も参入してくるようになるというのに。

「三鷹少佐。議論する価値がないとまでは言わないが、それは厳しい提案だな」

「それは『大迫派』としてですか？」

大迫派。今海軍の中で最大の派閥であり、有志による研究会である「新時代水雷戦の研究会」を母体とする派閥だ。大迫の直属におかれる飯田もまた、この研究会の所属である。

言うまでもなく、軍人組織の中に派閥などもつてのほかであろう。しかし現実問題として軍組織というのは巨大な官僚機構であり、戦争という国家の大行事を取り仕切る超が付くほどの重要組織である。絡む利権もさることながら、当然派閥が存在するのは致し方のないことであろう。

「ああ。そういうことだ」

それをなんの躊躇いもなく認める飯田も飯田であろうが、これについては彼と三鷹の信頼関係がなせるものである。

「説得は厳しそうですか。大迫大将にとつても、決して悪い提案ではないでしょう」

実際、それはそうだろう。今後『やつら』への対処を進めていく上で、当然陸軍の協力は欠かせないモノとなる。その際に陸軍の面子が潰れるとなれば、彼らは全力で反発することであろう。

だから、三鷹の提案の意義は理解出来る。しかし飯田は、大迫の考えが読めているわけではなかったのだ。海軍主導？ 共感にしても現実には不可能だ。彼の考えることだから無鉄砲ではないと信じたいものだが、その感覚を三鷹と共有するのは難しい。

なんせ、飯田自身も僅かながら揺らいでいるのだから。

「ともかく、一度大迫閣下に聞いてみるよ」

「分かりました。ではそのように」

「……で、どうされるおつもりですか」

「個人的には、悪い落としどころではない。要は誰の下に部署を設置するかだ」

例えば、統合幕僚本部の長である統合幕僚長は藤巻陸軍大将。この直属になれば当然藤巻陸軍大将の、つまり陸軍の発言力は多大になる。しかし幕僚本部運用部付の部署なれば、運用部の部長を務めるのは田端海軍少将だからそこそこ海軍としての融通も利かせられるわけだ。

それは海軍主導で『やつら』への対処を行おうとする飯田の上司、大迫海軍幕僚長の意にも沿うものであろう。

「まあ、もし閣下がこれ以上の腹案を持っていらっしやるなら話は別だが」

「上手く進めばいいのですが……その千駄ヶ谷大将、本当に大丈夫なんですかね？」

「確認は取る。心配はいらないよ」
「了解」

単なる合意なのか短く返した小河原を一瞥して、飯田は再び車窓の外を眺める。凱旋道路を挟んで、皇居の対岸に広がるのは丸ノ内の高層ビルディング。一見すれば直方体が立ち並んでいるだけだが、実際には個性を持ったそうと壁の色を変え窓の形を変え、それぞれが全く異なる建物として存在する。

外見が異なれば中身も然り、建造物の中では数えきれぬほどの多様な営みが繰り広げられていることだろう。

それは国防一色に染まったかに見える軍でも同じこと。誰も同じことなど考えていないのである。

「……千駄ヶ谷閣下のことを考えれば、既に東部方面軍の意思は奪還作戦反対で固まっているはずだ」

飯田は再び口を開く。東部方面軍というのは、千駄ヶ谷陸軍大將が指揮下に置く方面軍。関東地方と東海地方などの防備を担当している。

「そしてそれは西南以外の全ての方面軍にも言える。海軍抜きでの上陸作戦となれば、確実に方面軍の対戦車大隊が引き抜かれるだろうか
らな」

現時点で海軍に沖縄奪還について打診があつたという話は聞かない。それはつまり、陸軍が独力で奪還を実施するということ。

しかし上陸作戦というのはそうそう簡単にできるものではない。無論船がなくとも空挺なりで上陸を敢行することは可能ではあるが、問題は火力支援だ。

沖縄は本土から離れすぎている。いかなる陸軍の砲兵戦力を持つとしても南西諸島に砲弾を届けることは出来ない。空軍の弾道ミサイルならば届くだろうが、あまりにコストが高すぎて通常弾頭による運用は非現実的、戦術核は本土わきなわである以上論外である。

とすれば、運用されるべき『やつら』に有効な支援兵器は回ヘリコプター転翼機だ。航空機としては鈍足だが重武装と精密射撃を可能とするこの兵器は上陸作戦において貴重な直協火力となる。問題と言えばその回

転翼機の発進拠点であるが、これについては既にコンテナ輸送船を徴用、そのまま発進・整備拠点として使用するやり方が2013年の事変でもとられている。実績があるのだから陸軍はやるだろう。

しかし当然、箱があっても肝心の中身がなければどうしようもない。

高価で決して配備数が多いとは言えない回転翼機は各方面軍から引き抜かれることとなる。次、いつ何時『やつら』が現れるのか分からないこの現状。方面軍だって直轄の対戦車大隊——最新鋭の回転翼機により構成される陸軍最強の機動戦力——を手放したくはないはずだ。

「それに、まだ西南以外の方面軍は『やつら』に負けていない」

「名誉挽回を図りたいのは実際に敗北した西南方面軍だけ、というわけですか。しかしそれを政府は許しますかね？」

沖縄の失陥を許し、その状況を放置する。国際信用に関わる問題ではある。夏には衆参両院の選挙が控えているし、現状の支持率だって決していいものとは言えない。世界と国民はこの事態の早急な解決を望んでいるのだ。

にも関わらず、飯田と小河原の会話に踊るのは方面軍同士の内輪もめ。

正気の沙汰ではない。これが亜細亜の盟主たる日本の体たらくか。

「——だがもし本当に総理が奪還^{そとれ}を望めば、もう終わっているはずだ」

「無能の演出、とでも仰るつもりで？」

「どうだかな。私には分からん。なにを考えているのかは分からないが、少なくとも積極的に動く気配はない」

「それ、どうなんでしょうね」

敵に立ち向かわない政権というのは国民により打倒されるものだ。そもそも強大な敵に立ち向かうために生まれたのが共同体であり、国家である。それを成さない国家など、もはや国家ではない。

「人的資源は今日日貴重だからな。仕方もないさ」

しかし一方、国民を守らない政権というのも打倒されるべき存在

だ。沖縄にはもはや誰も居ない。救うべき人間は存在しない。少なくとも今採るべき選択肢は、これ以上犠牲を増やさない選択。そうであると思いたいものだ。

「……希望的観測ですね。中佐らしくもない」

小河原の言うとおりである。とはいえ、判断材料がない。希望的と言われるのは仕方がないし、飯田がするべきことは出来る範囲の情報でできる限りの判断を下し行動に移すのみ。

だから飯田は、無言で前を向く。

「ところで中佐。話は変わりますが」

「なんだ？」

「さっきの三鷹少佐の件、我々にも当てはまりませんか？」

「尾羽送りのことか？」

「ええ」

書類上で見れば飯田の前職は幕僚長補佐官、小河原は軍務局勤務。

それが今や、沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室とかいう意味の分からない組織の所属であるというのだから、これを左遷と言わずして何と云うのだろうか。

「……大迫閣下の目論見通り対処の主導権を海軍が握りさえすればいい。そうだろう」

「いや、そりやそうなんですけども、ねえ……」

——西暦2022年3月14日。千葉——

内地総軍司令部。日本国内の防備を担当する7つの方面軍——無
論、問題の西南方面軍はその一つだ——の上位司令部であり、満州に
設置されていた大陸総軍の廃止以後は海外派遣部隊に關しても統括
する日本陸軍の最高司令部でもある。その上位には陸軍大臣が、その
更に上は統帥権の被委任者たる内閣総理大臣が置かれ、有事の際は総

理大臣が陸軍の指揮を執るための中央機関として運用されることになる。

ちなみに、三鷹が所属しており西南方面軍同様渦中にある中央即応軍は陸軍大臣が直接の指揮下に置くので内地総軍司令部が関わることはないが……それでもこの司令部が重要なことに変わりはない。

そんな内地総軍司令部は、千葉県西部の船橋市や八千代市に跨がるように設けられた陸軍習志野基地に設置されていた。かつて明治天皇がこの地を行幸した際に習志野ノ原と名付けられたことから、明治帝ゆかりの地でもある。

「それにしても——本当に何もありませんでしたね」

ちよつと意外です。と言わんばかりの調子でいう小河原。

「ただの挨拶回りで何かあつては困るからな」

飯田と小河原がたつた今出てきた建築物こそ内地総軍司令部の庁舎。核弾頭の直撃を考慮して地下に設置された司令部の設計思想は相変わらずとしか言いようがないが、それでも地上部の建物はやはり日本の地上戦力のほとんどを統括するだけあつて立派なものである。「このあとはどうしますか？　このまま帰れば四時には戻れそうですが……」

そんな小河原の言葉を遮るかのように散発的な破裂音が響く。続いて腹の底に響くような鈍い音。

「演習だな」

「砲兵ですかね？」

習志野と言う地名は「ならし運転」のならしから来たとも言われるほどだ。習志野演習場は関東圏でかなりの規模を誇る大演習場であり、砲撃訓練や操車訓練、さらには空挺部隊の演習も行われている。故に演習などは日常茶飯事。砲声も聞こえない方がおかしいのである。

空を見上げる。空には真っ白な哨戒機。どうみても海軍機である。のんびりとした四発のプロペラが、関東の空を切り裂いていく。潜水艦を発見、攻撃するのが仕事である哨戒機が陸の上を飛んでいるということは、任務に向かう途中か帰り道、または訓練飛行だろう。

「霞ヶ浦の方から飛んできたんでしようかねえ」

小河原も空を見上げていた。とある軍歌の一節を口ずさめればそれはエンジン音と混じり合い、哨戒機は映画のようになどどこまでも飛んでいく。雲の空にはのんびりと鳥——鷹たかか、それとも鳶とんぼだろうか——が翼を広げて滑空しており、まさに田舎というべきか。

とその時、飯田の目にとまるものがあつた。

「ん？ 小河原、ドローンが飛んでいるぞ」

「え……ああ本当ですね。無人機ドローンだ。珍しい」

「いまさら珍しくもないだろう」

それは先ほどの哨戒機とは比べようにならないほど小さな無人機。複数のプロペラにより飛翔するマルチコプターとも呼ばれるそれは最先端をいく軍事技術の塊だ。小型故にレーダーに探知されにくく、バッテリーの高性能小型化により小包程度の運搬が可能、更に昨今の制御系技術の進歩により指示した場所に的確に向かう……破壊サボタージュ工作においてこれ以上優秀な兵器ツールはない。

今飯田たちの頭の上を飛んでいるようなマルチコプタータイプは荒い気象条件に加え回収の手段が乏しい海軍ではまだまだ物珍しいものが、それでも無人兵器というのは彼らの職場でも最早珍しくはない。

「本当に、物騒な時代ですよ。いつドローンがドカンしてもおかしくない訳ですから」

「まあ、流石に習志野だ。陸軍の偵察機かなにかだろう」

「最近は使い道が多いですからね……そういえば、海軍ウチでもあれの専属部隊が出来るとか」

「正気か？ 海の上だぞ。塩害で飛ばなくなる」

「今年度中に作る作るっていいながら出来なかつたですから、軍務局の方では結構必死ですよ？」

対無人機アンチドローンは港湾防護のためにも、必要ですよ。そういう小河原。戦争の形態はこの十年で大きく変わりつつある。いや、戦争の形態など常に変わり続けてきたではないか。

だからこそ、それに対処する努力は怠ってはならないし、可能なも

のなら自らの力で戦争の形態を変え、この国に有利な安全保障環境を構築したいものである。

「まあ、それもそうなのだろうが——」

そこで飯田の言葉が途切れる。理由は簡単、目の前から陸軍の佐官が歩いてきたからだ。ここは習志野、陸軍の基地。流石に雑談をしながらすれ違うのは良くないだろう。

互いの距離が徐々に詰まってゆく。珍しくもそれは女性の佐官であるようであった。今の時代、女性軍人というのも珍しくはないが佐官クラスにまで上り詰める女性はそうそう多くない。これは男女平等云々以前の問題で、そもそも佐官になれる人間はごく少数であるという事情がある。

ところが、ふと彼女の制帽に目をやった飯田は僅かに目を見開いた。その気配に気付いたのだろう小河原も若干身構える。

制帽自体は何処にでもあるデザインだ。陸軍の大演習場があるのなら陸軍佐官が百人いてもおかしくはない。つまり同じ制帽は百とあることだろう。

問題はその帽章。桜葉に守られた五芒星。飯田の顔も僅かに引きつる。背後の小河原からも身構える気配。この独特な帽章が許されるのは陸軍内部でのほんの一握り、滅多に預かることのない名誉。女性が足を止める。

「——失礼、そちらは飯田中佐とお見受けするが」

声がかかる。習志野は広く、ここには飯田と小河原の他に誰も居ない。ましてや飯田と名指しである。

「なにか……ご用でしょうか？」

もちろん表情を崩したりなどはしないが、流石に声をかけられたのは予想外。言葉を選ぶ飯田に、女性佐官は手を差し出した。

「貴官の活躍は聞き及んでいるよ。近衛兵団所属、神崎だ。階級は中佐」

「海軍幕僚部の飯田です」

握手を交わす。神崎中佐は飯田の手をしっかりと握った。それから神崎は、その顔に笑みを湛えながら穏やかに言う。

「得体の知れない連中がやって来てから随分と立つが、どうだろう。何か有力な情報は分かったかな？」

——聞き及んでいる。聞き及んでいるとは、随分とまあ正々堂々と喧嘩を吹っかけてくれたものだ。

海軍幕僚長、大迫善光。彼の直属として設立された調査室。無論室の設立もその構成人員も、隠されているというようなことはない。

だからといって、容易に手に入る情報でないのは事実。隠されていなくとも見せる気がないのだから当たり前である。

それを知っているということは、即ちその情報のための労力を費やしたということ。それだけ関心があるということ。

この状況においては、そんなことをするのは調査室を認めない、認めたくない人間だけだ。

「鋭意調査中です」

成果は出ていない。

いやそもそも、室が設立されて僅かに4日。それどころか、営業日としては2日——年中無休の国防を担う軍が営業日というのもおかしい話だが、実際問題休日だったのだからどうしようもない——で成果は上がるものではないし、仮に上がったとしてそれを口外することが出来るわけがない。

だからこそ飯田は穏やかに微笑んでみせるし、神崎も同じように笑顔のままだ。しかしその高圧的な視線が変わることはない。

「そうか、大いにやってくればいい。ところで飯田中佐、貴官ならば私の所属はご存じだろうか？」

「……」

近衛兵団。統帥権委任法により確固たる序列を確立している日本軍であるが、それでも例外というものは何時だって存在する。内閣総理大臣の指揮下に組み込まれず、陸海空軍よりも格上の組織とされる。

近衛兵団所属。陸軍中佐神崎向日葵——神崎駿夫陸軍幕僚長

たる陸軍大将の姪は、改めてにこやかに笑った。

改憲により男女平等が謳われるこの時代、例えそんなものがなかったとしても、産業形態の遷移、人口移動、そのた様々な理由により今や世間一般における「家族」という概念は崩壊している。それは連続と連なる一族を示す言葉ではなく、単に団地に住まう小さな共同体に過ぎない。

しかし、それはあくまで世間一般における話だ。

「……神崎って、神崎ですよね」

陸軍中佐はそのまま去る。飯田と小河原も留まる理由はない。故に小河原が口を開いたのは、東京を貫く大動脈、総武・中央線の車中であつた。

「そうだ。まさか神崎家が食いついてくるとは思わなかつた」

神崎家。形骸化しているとは言え爵位の与えられた華族であるかの一族は、陸軍に少なからずの発言権を持つ。軍内部における「神崎派」とは言うならば時代遅れの血統に頼る派閥であり、故に規模は小さい。

しかし、その長——神崎駿夫が陸軍幕僚長に就任してからは風向きが変わつた。

それは確かに短いものだろう。どう転ぼうとも神崎陸幕長はあと一年か二年で勇退するわけで、仮にその後のポストが待っているとしてもそれは中央ではない。陸軍幕僚長の次と言えば統合幕僚長であるが、今の藤巻統合幕僚長は陸軍の出。三軍の公平性を担保するためにも、同じ陸軍の大将が連続で統合幕僚長を務める可能性は低い。

だが、今この瞬間においてはその存在は大きい。彼は陸軍幕僚長だ。実際の作戦を実施する内地総軍司令部にも神崎はいるし、先ほどの中佐のように、近衛にも無視出来ない勢力がいる。血統派閥である

が故の重鎮としての意識、そして周囲の期待が取り巻きを生み、発言力が形作られていくのだ。

「しかし、本当にどうなるんでしようか。神崎中佐が沖縄沖駆逐艦沈没事故調査室の存在を歓迎しているとは思えません」それは、わざわざ口に出すまでもないことだろう。対策部署を海軍主導とするならば陸軍との対立は必至。海軍は駆逐艦を失ったが、陸軍に至っては師団を失ったのだ。

「しかし、これで陸軍内に意見の齟齬があることははっきりした」

即ち、沖縄をどうするか。即時奪還を行うのか否か。額面通りに受け取るならば神崎派が奪還派。それに対抗する勢力が千駄ヶ谷東部方面軍司令を中心とした派閥というわけだ。

「千駄ヶ谷閣下のいう共同での対策部署の設置が叶えば、神崎派との真つ向からの対立は避けられる」

「それは、大迫閣下の胸三寸なのでは……？」

自身を無くしたように小河原。実際それはその通りで、大迫海軍幕僚長が陸海合同を許容するかどうかは全くの未知数である。

「こればかりは聞くしかない……まあ、ここまでは大迫閣下の青写真通りなのだろうが」

「え、ああ。確かに」

一瞬戸惑った様子を見せるが、すぐに納得したように頷く小河原。「神崎家が食いついてきた」。要するに調査室自体、陸軍の様子を探るための餌なのだ。

そもそも陸軍やらその他の意見を無視して設立された調査室自体が喧嘩を売っている。しかしその存在を無視することなどは出来ないわけで、『やつら』と対峙したいと願う人間ならば誰もが調査室にコンタクトを取らざるを得ない。と言うことだ。

そして、現に多くの接触があつた。

具体的に例を挙げるならば、運輸省の石川、陸軍の三鷹——そして、近衛の神崎。これは単なる三人という数字ではない。彼らの母体組織、更にはその背後にいる人間……既に何百の人間が調査室に興味を持っている証拠なのだ。

設立からたった二日の営業日でこれだ。まだどれだけ増えるというのか。

列車は荒川へと差し掛かることでごちやごちやとした東京の街並みが開ける。江戸時代の治水工事により中州という名の堤防によって分断された荒川と中川。トラス構造の鉄道橋から見る眺めはなかなかのものだ。

「神崎陸幕長が奪還派なのはまあ想定の内だが、あまり大事にならないことを願うよ」

車窓を眺めながらそう言った飯田に、小河原は苦笑い。

「それ、火の粉をバラマキまくっている我々がいう台詞じゃないですよね」

「確かに、そうだな」

——西暦2022年3月14日。東京——

構内に設置されたアナウンスが音楽を連ねる。島式の立川方面ホームには各駅、快速両線が停車するわけだが、高層ビル群の中に横たわる鉄道と駅というのも見方によっては奇妙なものだ。高さとしては四階に相当する総武線ホームからは、線路の向こうへと沈んでいく太陽を見ることが出来た。

神田川を僅かに北、東京を東西に貫く中央・総武線と南北に貫く京浜東北線。その結節点である秋葉原駅は、ある人にとってしてみれば東京や上野以上の価値を持つ駅である。共産主義者による同時多発テロの反省から各官庁の一部施設——運輸省に至っては第一庁舎までも——が移転したことによりにわかに副都心として発展した立川から僅かに40分、東京駅から5分。地下鉄も日比谷・東西線という重要路線を抱え、さらには00年代には土浦方面の輸送を支えるつくばスカイアクセス線が開通。乗り換え客は数えようにも数え切れない。

空圧音。全ての車両の扉が一斉に閉まる。架線より供給された電力がモーターを動かし、列車はその巨体を動かし始める……が、それまで。列車はそれ以上加速することは無く動きを止めた。

「……非常停止ですかね？」

「みたいだな」

発車の合図がなってから数秒。扉の閉まる空圧音は聞こえたものの、駆動音が聞こえる気配はない。その代わりと言わんばかりに耳障りなブザー音が鳴り響く。

二階建て編成となる中央総武快速二等車の二階。飯田と小河原は陸軍習志野基地よりの帰路の途中、ここ秋葉原駅にて思わぬハプニングに見舞われていた。

「事故か？ どうなっている？」

「さあてどうでしょう。最近では線路に逃げ込む人間もいると聞きます

し」

二人が無責任な会話を繰り広げる中、二等車——グリーン車ともいう——の中には似たざわめきが広がっていく。耳障りなブザーが健在なこともあり、異様さの演出は十分といったところか。

やがてブザーが止むと、取って代わって車内放送が始まる。

『ご乗車中のお客様にお知らせいたします。ただいま駅の非常停止ボタンが押されましたため、中央総武線快速立川行きは運行をただいま停止しております。ただいま状況を確認しておりますので、お客様におかれましては今暫くお待ちください』

「人身か？」

飯田のつぶやきが二等車の空間に消えるのと同時に、野次馬めいたざわめきがやや恐れを伴ったものへと変わる。

「さつき間こえた警笛といい、間違いないでしょうね……」

興奮と驚きが入り交じったような小河原の顔を見つつ、飯田は嘆息。まさか人身事故の現場に居合わせるとは。珍しくはあるが、職務中とあつては迷惑でしかない。

再び車内放送が始まる頃には、車掌と思しき声の主の背後にはいくつかの音が入り乱れていた。

『ご乗車中のお客様にお知らせいたします。ただいま中央総武線快速の立川行きでございますが、秋葉原駅総武線千葉行きホーム、各駅停車線のほうで人身事故が発生いたしました。総武線ただいま運転を見合わせております』

「どうします？」

「どうするもこうするも、動かないのだからどうしようもないだろう」

「まあ、それもそうなんです」

そんな会話をしつつも、飯田は時計にちらりと目をやる。現在時刻は四時を少し過ぎたあたり。定時を迎える前に海軍省へと戻れる予定であったが、いつ動き出すかは不明である。となればここは四ツ谷まで向かうという本来のルートを諦め、京浜東北線で有楽町あたりまで出て都電に乗り換えるのが妥当。時間のロスは10分ほどで済むことだろう。

しかし、そんな計画も電車の扉が開かなければどうしようもない。進んだのは数メートル。されど数メートルだ。十五両を数える長大な中央総武線快速となればそれすらもドアを開けられない要因となる。

「これいつ動きますかねえ」

「さあ。どうだろうな」

「この手のは動きませんからねえ……」

車内放送による続報は無い。小河原はもう諦めた様子で鞆を持ち上げると、中に入った書類を整理し始めた。

中央の廊下を挟んで2列ずつ、合計で4列の席がある二等車は、見た目こそ乗車券のみで乗れる三等車と比べてゆったりしているように見える。しかしいざ座っていると手狭なのは事実で、流石に仕事をする気にはなれない。グリーン車の更の上、ホワイト車と呼ばれる一等車ならば話は違うのだろうか……今それを言ったところでどうしようもない。

『お待たせいたしました。ただいま電車を動かします。ご乗車中のお客様電車動かしますので揺れにご注意ください。本車両は動かしまして駅の停車位置に移動の後、ドア開きます』

そのアナウンスと共にブレーキが解除される音が聞こえ、僅かに振動しながら車窓の風景が僅かながら動く。結局列車に下った命令は運転の再開では無く、ひとまず乗客を降ろすことだったようだ。アナウンスと共にドアが開かれ、京浜東北線もしくは地下鉄線で振替輸送を実施するなどと言葉が続く。

「開きそうですね。ドア」

「だな。京浜か山手が出るか」

その言葉と共に、飯田は荷物を手に持つ。窓の外では列車より吐き出された乗客たちが群がっており、ラッシュ前だというのにラッシュ並みの混みようであった。

「このまま動くまで待って、直帰したいですねえ」

「何言ってるんだ。いつ動くかも分からないのに。いくぞ」

通路側に座った小河原に動くように急かすが、同じ考えの人間が通

路に溢れているのだからそもそも動きようがあつたものではない。二階建て構造で座席数は確保されているというのに、出口は三等車よりも狭く少ないのだから当然のことだろう。肩をすくめる小河原に、飯田は椅子に座り直した。

一般にホワイト車と呼ばれ、華族への優遇が消えてからはよほど忙しい会社員か政治家くらいしか使わなくなった一等車と違い、二等車というのは安い二等車乗車券で乗れる意外と手軽な存在である。

だから降りる乗客の顔ぶれも様々で、中には携帯を片手に遅れるからなんだのと電話を入れる者や、または無駄になりそうなグリーン券について不平を漏らすように降りていく者も居る。

その中に飯田は、同僚の姿を見いだした。珍しいかと言われればそういうことはない。航空母艦から陸戦隊までを擁する海軍は10万の人員を抱える巨大組織であり、東京勤務も少なくはない。

強いて珍しいものを挙げるとするならば、それが女性将校であつたということだろうか。

とはいえ女性士官というものはこの時代となつては珍しいものではない。登用も米国同様進んでいるし、ようやく女性士官が幹部としてのし上がる素地も出来つつあるのである。

背景には世界に広がる同盟国を護るために軍は慢性的な人材不足であるというのもあるが、やはり女性が家に入るものであるという固定観念が打ち砕かれつつあるのである。流石に時代は現代、ここはその先端をゆく先進国日本、というわけだ。

思い返せば、今日飯田に接触を図つた神崎中佐など女性将校の中でも出世頭というべき存在ではなかつたか。

彼女は女性としては初めての機甲科将校であり、そして今や近衛で唯一の女性上級指揮官である。女性の軍上層部進出の先駆け……そう考えれば、彼女に飯田への接触を図ってきたのは押しつけられた側面もあつたのかもしれない。神崎家という枠にだけ囚われていては、足下を掬われかねないと自省。

閑話休題。ともかく女性の軍部進出は進みつつある。海軍に至つては既に女性艦長も誕生していることであるし……女性が将官にな

り「提督」の称号を預かる日は、案外遠くはないかもしれない。

そんな飯田の視線にすら気付くことはないだろう。至極真面目な、職務中といった面持ちで出口へと向かっていく女性将校。彼女が扉から外へと出る頃には車内からはすっかり客が降り、飯田と小河原も流れにのって車外へと出る。

問題は、その女性将校が有名な人物であったことだ。

「中佐。先ほど見かけた方って……もしかして一航戦の紅一点でしたかね?」

「なんだ。お前も気付いていたのか」

小河原がそう言ったのは女性将校も見失った夕暮れ時の有楽町駅。都電乗り換えのために改札をくぐった後の事だった。傾いた太陽により高層ビルの上に長い陰が落ちる。

「いやまあ。広報でよく取り上げられていましたし」

一航戦の紅一点。読んで字の如く一航戦——第一航空戦隊——の紅一点、つまり女性航空士である。海軍の戦闘機乗りとしては初の女性パイロット、それも選りすぐりの第一航空戦隊にまで登り詰めて見せた。

軍というのは男性が未だに大多数を占める組織。それも空を守る海鷲となれば寧猛な人間ばかり。彼女が一航戦に配属されたことに当然妬みも多かったことだろう——海鷲を文字って雌鷲などは、もはや彼女のためだけに用意された蔑称といえる——しかし広報にとってはこの上ない格好の宣伝材料であった。

だから当然、有名にもなる。

とはいえ彼女が一航戦に身を置いたのは僅かな期間。それも十年も昔の話だ。単なる広告塔で終われば飯田も小河原も覚えてはいなかっただろう。

「……第十次上海事変の撃墜王^{エース}を、まさか帝都のど真ん中で見ることになるとは」

感嘆を交えるように小河原がそう言い、都電の架線が張り巡らされ

た空を仰ぐ。大陸で幾度も起こる動乱の、その何十回目かの大きな騒乱である第十次上海事変。その際に顕著な活躍を収めた彼女。

報道が逃すはずはなかった。一航戦の紅一点、大和撫子の面目躍如、紙面に躍る文字は、盛んに彼女を褒め称えたものだ。

「それにしても、よく覚えていたな」

そんな彼女だから、軍の広報活動の最先端にも使われていた。ただまあ、そんな大仰な取り上げられ方に不満たらたら士官は多かったわけで。そのような空気を知っているからこそ、飯田の印象には強く彼女のことが残っている。しかし、小河原はまだ当時は学生だったはずだ。

「丁度兵学校でした。いい息抜きです。あの白山中尉しらやまに一目会いたって、同期がよく騒いでました」

「なるほど。そういうことか」

彼女が美人であったことは疑いようがない。

「学生なりの息抜きですよ」

しょうがないでしょう、と小河原。国家の威信をかけ命を捧げる軍人であっても、女性である以上はその定めから逃れることは出来ないらしい。

白山海軍中尉しらやま。それが彼女の名前だ。撃墜は戦闘機4、爆撃機3と立派な撃墜王エース。海軍において初めての女性戦闘機パイロット。事変の後に中尉に昇進。今ごろはもう大尉に昇進したころだろうか。

「そういうえば、結婚されたんですっけ。じゃあ今はもう名前も白山しらやまから変わっているのか」

「……そうか。結婚したのか」

それは知らなかった。飯田にとってしてみれば言葉を交わしたこともない個人の人生に口を出す気も、それを知ろうとする気もさらさらないというのに、よく知っているものだと小河原に関心する。

「お相手は海軍じゃないって話ですけど……どうなったんだか」

やはり結婚というのも定め的一种であるようだ。本来ならば軍人ほど家庭を持つべきでない職業もない。家庭を持つというのは家庭に責任を持つことであり、軍務以外の責務を負うべきではないはずな

のだ。その大変な矛盾を抱えて、独身を謳う者も少なくはない。目の前の小河原がそうだ。昔は飯田自身もそうだったから、それに共感するところも多い。

「それにしても……妻や母が戦場に征くという光景は、一個人としては見たくないモノだ」

「そこに男女の括りはないでしょう。前時代的ですよ中佐」
「そうだろうか?」

置き換えてみて下さいよ。その小河原の言葉に、飯田は短く嘆息。どうやら彼にも、思い当たる節があるようだ。

「……軍人が結婚なんて、するものじゃあないですよ」

そんなことを話す間に、都電が停車場へと滑り込む。二人の海軍軍人は無言になって乗り込むと電車は駅前を離れ走り出す。混み始めたように見える自動車の列に紛れて、電停毎に乗客を降ろしたり乗せたりしながら軌道の上を進んでいく。

ふと、飯田は思い出したように言う。

「そうだ。小河原、ウチの望のぞみが次で三年になるんだ」

「ああ、望さんがですか? 早いですねえ。最後に見たのは昨年のものでしたか。元気ですか?」

「以前にも増して元気だよ」

懐かしむように小河原が眼を細める。望というのはもちろん飯田孝介の一人娘である飯田望のことで、いよいよ来年度からは高校三年生。国防大学校を第一志望に掲げる受験生である。

「……あいつも元はといえば白山中尉が原因でパイロットを目指すなんて言い出したんだ」

「ああ、よく言っていましたね。ここ数年は女性パイロットも増える傾向にありますし、十分いけるでしょう」

「しかしなあ。艦隊勤務や地上勤務ならまだしも、パイロットはなあ」
「でも、中佐は止める気ないんでしょう?」

そう言って笑う小河原。飯田も応じる様に小さく肩を揺らす。昔から剣道やら銃剣術やら柔道やら、やけに荒っぽいことばかりに興味のあった娘。見ているこつちとしては危なっかしい限りであるし、こ

んな時勢だ。海軍そのみちを選ばないでほしいと思わないことはない。

それでも、あれは優秀だ。ぼんやりしているように見えてもしつかり本質をとらえられる子だ。きつと、一航戦の紅一点なんてめじやない海鷲へと成長してくれることだろう。

「本人がやると決めたんだ。やると決めた以上最大限応援する。親子二代で海軍というのもまあ、悪い話じゃない」

「先ほどの前時代的な発想はどうしたんです?」
「言うな」

ビルばかりが建ち並ぶ窓からの景色はやがて凱旋道路を越え内堀へと変わる。アナウンスが次の停車駅を告げる、桜田門。皇居周りでもよく知られる景色である警視庁の目の前である。

系列が異なるのでここからは徒歩で海軍省へと向かうことになる。交通系ICカードを使う以上は軍人割引も存在せず、飯田と小河原は定額通りの運賃を支払い都電を降りた。

暗くなり始めた霞ヶ関の官庁街。鉄筋コンクリートをふんだんに使った庁舎に耐震補強の後付けトラスが窓を塞ぐ。95年のダブル震災で露呈したコンクリート建築の欠陥は耐震景気と巷で呼ばれるほどの補強工事需要を生み出したが、果たして来たるべき首都直下への備えは出来ているのやら。

「それにしても、親子二代か」

先ほど何気なく言った言葉を反芻してみる。脳裏によぎるのは軍服姿に着替えた娘の姿。軍人であることは国家の名誉たることである。この志願制の世の中においても、祖国のためと己の魂を燃え上がらせる若者たちを留めることは叶わない。本人が征くならば、それを留めることは許されない。

悪い話ではないではないか。どこの馬の骨とも知らぬ奴の嫁に行かれるよりかマシだとすら思う。

ただしそれは……戦争が起こらなければ、という前提の上に成り立っているだけなのだ。

「それで結局、説得はするんですか? しないんですか?」

茶化すように言う小河原は気付いているのだろうか。恐らくは気

付いていない。

無論、当然戦争が起こらないに越したことはないのだ。しかし今現在、その脅威はひたひたと迫ってきている。それが国家同士の戦争ではなく『やつら』との戦いであったとしても、国家の守護者たる軍が銃を取ればそれはそういうことだ。戦争という定義には当てはまらなくとも、それはそういうことだ。

だからこそ。止めることは許されない。ましてや飯田は海軍の身である。己の組織に来るななど、誰が言えようか。

こちらへ来ればきつと彼女は現実を知ることになる。内地にいれば教養としてだけ知っている現実を、肌感覚として知ることになる。たとえそうであっても、飯田は止めない。それは祖国に生まれた者の義務であり、ひいては本能ですらあるのだ。

止めることなど許されない。

「応援して欲しいが、お前からも忠告してくれ」

「矛盾してますって」

「そうだな。矛盾してるな」

しかし、だからこそ未来に種を蒔きたいとも思うのだ。

飯田は口角を吊り上げながら小河原を振り返る。

「だからこそ頼むんだ。お前が望の『トクベツ』になれば、あいつも言うことを聞くだろう?」

その言葉を聞いた小河原。既に何度かしている話だが、今回は奇襲だったようで決まりの悪そうな顔をする。

「やめて下さい。何度も申し上げた通り、私では娘さんに釣り合いませんよ」

そして中佐には申し訳ありませんが、私は生涯独身を貫くつもりです。そう言う小河原の抗議を背に受けながら、飯田は歩き続ける。

「今はいいが、いずれそんなことも言えなくなるぞ?」

「その時に考えることにします」

しかし飯田は知っている。こういう選択肢も数限りない可能性の中に転がっていることを。娘はこの17歳差のおっさんに少なくとも

も並の男よりかは懐いているし、悪い話ではないと思ってしまうのだ。

無論、それを決めるのは本人たちであるべきだと思う。だが自分だって祖父が縁談を組まなければ今の伴侶と出会うこともなかった。このくらいのお節介は許されると思っっているし、してあげたいと思うのだ。思えば老けたものだ。まだ五十にもなっていないというのに。「まあいい、今度またウチに来い。望だけじゃない、妻もお前に会いたがっている」

好かれているな、いいことだ。そう言えば、小河原が苦笑する。

「この件が一段落したら、お邪魔させていただきます」

「そのためにも、とつとつこの件を片付けよう」

「ええ。そうしましょう」

海軍省に戻り、室で細やかな書類整理に追われること数十分。駆逐艦沈没事故調査といつても、事態が事態であるしサルベージや潜水調査も行われていない以上は表向きの仕事はほとんどないため、飯田は幸いにも定時を迎える頃にはのんびりと紅茶を飲む作業に没頭することが出来ていた。

時計が午後五時を告げる。調査室の面々はせわしなさや怠惰の間点にあった。

「朝伝えた通り、今日は定時で帰るぞ」

飯田のその言葉に、特段誰も表情を変えることなく頷く。用意の良い者などは既に鞆を机の下から取り出したりしている。まあ至極妥当な対応といえるだろう。やることに無いのだから、帰り支度以外にすることは無い。

別に持ち帰るような書類はない。機密書類は書庫に戻してある。仕事用のパソコンを仕舞い、机の戸棚に備え付けられた小さな鍵つき引き出しに施錠。部下からの帰宅報告ラッシュを受け付けるうちに、室からはたちまち人氣が失せてしまう。もちろん飯田も留まる理由はない。そのまま室を閉じると、海軍省庁舎を去る。監視に見送られ

て出る霞ヶ関の街は、夕焼けの最後の輝きに包まれていた。

「さて……東京に出るか」

街路を歩きながらに考える。頭を悩ませる事柄というのは絶えないものだが、それは就業中にやるべきこと。今の飯田が考えるのは全く別のこと。ここでいう東京というのは東京駅方面、つまり日本橋や銀座といった高級商業地区……要するに、飯田の頭を悩ませるのは買物の内容であった。

かつてローマ帝国において、禁止されていた出征前の若者達の結婚式を行ったことで処刑されたバレンタイン司祭という人物がいた。それを偲んで設けられたのがバレンタインデー。キリスト教世界ではともかく、神道が主流な宗教として広がっている日本においてはあまり意味を成さない日。

ところが文化とは不思議なもので、現代日本においてはバレンタインデーというのは女性がプレゼントを、というかチョコを送るのがよく見られる光景である。ここ半世紀にも満たない風習であるはずなのだが、これがよく定着している。

で、その返礼をするのが翌月の3月14日。^{ホワイトデー}即ち平成34年は3月14日、今日なのであった。

『本日も、東京都交通局をご利用頂きまして誠にありがとうございます。この列車は……』

女性の声を模した自動アナウンスが流れる。

「いっただったか。恋人の日と呼ばれるそのバレンタイン司祭の処刑日に飯田は今の妻——当時でも婚約の段階にはあったが——に花を送ったことがあった。欧州ではこの日に男性が女性に対して愛の品を贈るとというのが一般的であり、それにならった訳なのだが……これがなんと不評だったのだ。」

「どうやら初めてのバレンタインデーということで意気込んでいたらしく、どうにもこちらの贈り物が恩着せがましく感じたらしいが……もちろん、飯田としてはそんなこと言われても、以外のコメントはない。」

しかしまあ、そんな出来事も過去の話、今では妻は世間一般に習う

ようにチョコを用意し、飯田はその一ヶ月後に返礼としてなにか贈り物をしているのであった。

ところが、今回その贈り物が問題なのだ。ホワイトデーといっても、料理に才のない飯田がなにかしらスイーツを作るといいうのは無理な話で、かといつてどこかで菓子を買いあげばいいというわけでもない。結局贈るのはクリスマスや誕生日と同様の品物プレゼントとなるのであるが……これをどうしたものか。そうそれを全く考えていなかったのである。

別に忘れていたわけではない。ただ最近忙しかったので思い出せなかっただけなのだ……とは、誰に対する訳でもない弁明。

とにもかくにも贈り物をこれから探すわけだが、果たして今の彼女になにか足りないものはあったらどうか。欲しがっていた化粧品の種類もなかったらうし、今使っている小物類でくたびれているものも特にはないだろう。春物のジャケットは去年買ってしまった。さて妙案はないものか。

そんなことを考える間にも都電は進む。景色は官庁街からオフィス街、そして商業地区へと。仕事終わりのシーツ姿が闊歩するのんびりとした街路は、既にかつてのガス灯を模した街灯によって照らされつつある。

都電を降りる。しばしの逡巡の後に百貨店へと足を進める。

思いつかなければ見つけければ良いのだ。飯田は開き直ったようであつた。

——西暦2022年3月15日。東京——

睡眠とは、例えようによつては仮死状態とも捉えることも出来る。良好な健康状態を維持している人間ならば、ゆつくりと知覚における諸機能が失われるように眠りへと誘われ、そしてその逆経路を辿るように目覚めへと浮かび上がる。その間、眠りの底へ沈んでいる間のこととは認知できないし、また認知する必要もないだろう。

身体を包み込む布団はいつも通りで、その保温機能をもつてしても夜の熱気を閉じ込めておくことは出来ない。まるで何事もなかったかのように、隣の布団はキッチンと丁寧に畳まれていた。シーツは取り外されていたが、まあそれは些細なことに過ぎない。

時計の針はまだ目覚めの最終ラインには遠い。まどろみの中に戻ることも今なら出来るかもしれないが、なかなか目覚めてしまうとそれも引けるものだ。

上半身を起こし、全身の筋肉を呼び覚ますように伸びをする。幸いにも、疲れが取り切れていないということとはなさそうだ。

「おはよう」

寝間着のまま、ポストへと放り込まれた新聞を回収するために外へ。ところが新聞はそこにはない。誰かが回収したのだろうか。仕方がないので軽い日光浴だったということにして家に戻る。

「ん、おはよー」

「おはようございマス、Darling。もう少し待って下さいネ」

ちらりと視線を遣ってから片手を挙げるだけの娘に、朝食を作っている妻。飯田の家族が勢揃いしていた。しかし、よくよく考えれば違和感が一つ。

「なんだ望^{のぞみ}、もう春休みだろうに」

「あぁー。今日は卒業式なんだよねえ」

お前のか、などと阿呆なことは言わない。飯田孝介の娘、飯田望は高校2年生、卒業は来年の話だ。とうの昔に試験も終わって春休みだ

ろうに、やけに早起きだったものだから意外に思ったのだ。

「そうか。卒業式だったか」

「うん」

それだけで会話は終わり、望は朝食を再開する。食事の内容は白米に味噌汁、そこに目玉焼きと納豆がついてくるという普段通りのもの。まあ望本人の卒業式ではないし、別に気張る理由もないと言うことだろう。

ふと見れば、机の上に新聞がぞんざいに投げてあった。大方、望が読み散らかしたのだろう。一面には『海軍駆逐艦面目躍如、沖縄掃海活動へ』。佐世保鎮守府が実施することになった沖縄近辺の哨戒活動が、さも『やつら』を駆逐するためかのように報じられている。

「できましたヨ?」

「ああ、すまないね」

いつの間にやら準備は出来ていたようだ。望のそれと全く同じ内容の朝食が飯田の前に並び始める。

「んじゃ、私急いでるんでもういつてくるわー」

「がんばれよ」

「まあ、私は別に座ってるだけなんだけどね。正直休みたい」

でも生徒会だからね、仕方ないね。そう言いながら望は立ち上がる。基本的にはなんでもやってみるといのが信条の娘のはずだが、最近どうにも「仕方ないね」と言うことが増えた気がする。まあ、これも受験の疲れという奴なのだろう。

しかし、現実問題として受験は必要なのだ。任官すれば学費が免除される国防大は、言うまでもなく多くの志願者がいる。それらの選別は絶対に必要であるし、そうでなくとも国防大とは将校を育成する機関。学のない人間に指揮されて死線をくぐるなんて、兵士からしてみれば溜まったものではないだろう。

ぱたぱたといなくなる望を見送りつつ、新聞を横に置く。少し待って妻が席に着くのを待ってから、飯田は箸を持った。望は急いでいたから仕方がないとして、食事の席は、できる限りは家族と囲みたいものだ。

「いただきます」

「車は玄関の方に回してあります。10時17分発の横須賀行きです」

「よし、では向かおうか」

極東で最も古い超巨大都市^{メガロポリス}、東京。三千万の都市圏人口を誇るこの広大な帝都は、網目のごとく張り巡らされた鉄道網、道路交通網にて支えられている。網目の一本一本が巨大な骨となり、幾多の建造物が細胞の一つ一つとしての役割をこなす。水道・電気・ガスの各種ライフラインは血管のように細胞に力を与える。それら全ての連携を持って、この巨大な都市は脈動するのだ。

そして、その営みを守るのが軍人の役目。海軍省は海軍幕僚部。その下に設置された沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室の室長を務める飯田孝介^{いいだこうすけ}もその一人だ。

「しかし、正面玄関から出発出来るなんて、嬉しいことこの上ありませんね」

「そうか？」

どこか弾んだ口調でそう言うのは海軍大尉の小河原敦^{おがわらあつし}。眼鏡の下はその表情も心なしか楽しげだ。

「補佐官を務めていた中佐と違って、自分は初めてですから」

駆逐艦沈没事故調査室、名前だけでは事故調査を主任務とするようだが、その内実は現状最も不明確な国家の脅威である『やつら』の調査、対策が目的の部署だ。もちろん重要度は高いわけで、よほどの格上で無い限り遠慮されがちな正面玄関に車を用意させることも出来る。確かにそれを体験出来るのだから、それはそれは楽しみだろう。その気持ちはよく分かる。

……だが、それは小河原が当事者でないからの話だ。いや厳密には当事者なのだが、少なくとも室のトップではない。これは大きい。

「……なんにせよ。今日も何事もなく終わると良いのだが」

「海軍は大丈夫だと思っんですがね」

今日の予定は関東一の軍港である横須賀で午前より昼食を挟んでの会議、相手は連合艦隊司令部と横須賀鎮守府。議題は『やつら』の関東侵攻を如何に防ぐか、というものである。

沖縄を一両日もかけずに覆い尽くした『やつら』の脅威は海の中にある。だからこそ、この東京、そして関東は言いようによれば風前の灯火なのである。

飯田が率いる室が提唱する『やつら』の関東侵攻経路は大きく二つ。東京湾より東京特別区——すなわち東京23区——への上陸、相模湾より神奈川への上陸、そして太平洋より千葉県への上陸。これをそれぞれ甲経路、乙経路、丙経路と呼称し……今回の会議の主題はその中でも特に厄介な経路である甲経路への対策……即ち、浦賀水道と横須賀、ひいては東京湾を如何に護るか、であった。

ことがことであるだけに、会議の紛糾は避けられない。

それでも、まだ海軍という身内での会議ならまだいい。室の目的は『やつら』への対策を名実ともに海軍のモノとすること。大事なものは活動することであり、最悪现阶段で話が纏まらなくても良いのだ。

そういう意味では、身内の会議ほど楽なモノはないだろう。

「……いや、どうやらそうでもないらしい」

ところが飯田が足を止め、数瞬遅れて小河原も立ち止まる。

「え？ ああ……」

海軍省は正面玄関。入省許可証を引つ提げたスーツ姿。海軍における冬服扱いの正装が開襟とはいえ、その紺色の背広姿はよく目立つ。

「ああ。飯田室長。丁度良かった」

運輸省所属、石川である。海事局の代表として先日の第一回会議に参加して貰ったのはいいのだが、その際には鉄道局の人間かというほど南関東の鉄道線の防護を主張し、最後には鉄道ではなく道路避難についての資料を見せびらかしてきた男。

ふざけてやっているのなら結構だが、これら全ての行動が「運輸省

に任せて貰う」と言わんばかりの喧嘩の売りようなのだから対処が難しい。

「おお、石川係長ではありませんか」

ひとまず挨拶は交わしつつ、飯田は内心苦い顔。後三分早く出ていればこんなことにはならなかっただろう。つまりどういふことかと言え、仕事始めの紅茶を飲まなければこの男と鉢合わせになることはなかったのである。

しかし、鉢合わせになってしまったのだから、もはや後の祭り。

「今日はどうされました？ 事前に連絡なさってくれば、お迎えする用意も出来ましたのに」

言外にアポなし訪問を非難すれば、石川は申し訳なきような顔。

「申し訳ない。私としてもいきなり取り次ぎを頼まれた所です。そのためこのように突然お邪魔することになってしまったのです」

そんな訳がない。組織の円滑な運営に欠かせないのは報、連、相。つまり報告、連絡、相談だ。よもや運輸省という巨大組織においてそれが出来ていないはずがない。

これに入省許可証を与える衛視は何をやっている、そんな文句の一つも言いたいところだが、しかし入省許可証はその実簡単に出てしまうのである。海軍省の本庁舎なんて一部を除けば給与計算と法律答弁作成くらいしかすることのない『お役所』に過ぎないし、必然的に機密を扱うことになる艦政本部やらも郊外に移転して久しい。

機密と呼べそうなのは電信施設、庁舎内の海軍大臣執務室や飯田の務める海軍幕僚部——旧軍令部——ぐらい。もちろん、その区画には一応の隔離が施されている。

なにはともかく、アポなし訪問は追い払うに限る。飯田は小河原に一瞬の目配せをすると、困ったような苦い顔を作った。

「しかしですな。ご足労頂いた上で大変申し訳ないのですが……」

そこへ言葉を継ぐように小河原が割り込む。懐中時計を取り出し、飯田に見せびらかせるように。

「中佐、電車の時間が迫っています。もう行きませんと」

「そういうことなのです。このように玄関へ向かっていることから」

お分かり頂けるとは思うのですが、私どもにはこれより向かわねばならない場所があります……申し訳ないが、日を改めて」

そう言うだけ言って歩みを進めようとしたときだった。石川とは異なる背広が飛び出す。まるで飯田の行く手を遮るよう。

「待った。お使いになるのは東京発横須賀行、10時17分の列車ですよね？ ならば31分に久里浜行があります。十五分で結構、我らに時間を頂きたい」

「……」

あまりに乱暴な物言いに面食らう飯田に対し、石川はいまさら気付いた風に微笑む。

「ああ、紹介が遅れましたね……こちら運輸安全委員会J R S Bの渋谷さんです」

渋谷。そう紹介を受けた男は、自信に満ちた表情で頭をぺこりと下げてみせた。

「運輸安全委員会、船舶事故調査官の渋谷誠しむやまことと申します。よろしく」
「海軍幕僚部、沖縄県沖駆逐艦沈没事故調査室の飯田です」

挨拶をされてしまったては返すほか無く、飯田は答える。渋谷と名乗った男は船舶事故調査官というが、果たして何を目的としていると
いうのか。

「ええよろしく。まずはですね、現在の我が国における海上交通輸送の状況について、これを把握しているのかをお聞きしたい」

その答えはすぐにもたらされた。もたらされたのは嬉しいことなのだが、せめて屋根の下で聞きたかったというものだ。本日の天気は晴天。三月中旬ともなれば気候は三寒四温の真っ只中というわけで、飯田は照りつける春の日差しから逃れるように帽子をかぶり直す。

「渋谷調査官……まずはですね、海上交通輸送の状況とは言いますが、沖縄諸島周辺における警戒情報が継続していることについての質問
でしょうか」

『やつら』による破壊活動。ここ数ヶ月各国の紙面や議会を騒がせてきたその行為は、沖縄を食い潰した後は拡大するどころかピタリと止んでしまった。まるで沖縄でガス抜きが終わってしまったかのよ

うに収まってしまったのである。

それには無論、沖縄県から全ての人間が撤退し、海上保安庁が周辺航路の封鎖を行ったことで事実上の隔離が確立されたために被害が増えることはない。という見方も出来るのではあるが……さてどうしたものか。

「説明しましょう。いいですか、我が国の海上輸送網は、控えめに言つて危機に瀕しています」

そのまま渋谷は言葉を連ねる。言うまでもないが、船舶輸送というのは世界で最もコストが安く、かつ大量輸送が可能である輸送手段だ。世界の交易というものの多くが海運に頼るようになって数世紀、今なお帝国主義時代の海洋航路は健在であり、いかなる輸送手段が登場しようともそれが廃れることはないであろう。

それは数百の島嶼により構成され、果ては遙か南洋までその動脈を伸ばす日本も、無論例外ではない。

故に言葉の羅列を連ねる渋谷調査官。一方飯田の胸中を支配していたのは、彼の言葉以上に彼の肩書きであった。

船舶事故調査官。

当然ながら『やつら』の存在は当初はソビエトの潜水艦とすら言われていた訳で、とはいえ扱いは「事故」であった。もちろんその処理の管轄は運輸省となるわけで『やつら』への対処を海軍主導にしようとする大迫海軍幕僚長を始め調査室の動きは、運輸省にしてみれば「今更なよくも」というところなのであろう。

答弁じみたことをこんなところでしたくはないが、とにかくこの場を丸く素早く収めないことには、相手方に遅延の一報を入れねばならなそうである。

「調査官の言わんとすることはよく分かります。本省としても、この未曾有の事態に一刻も早く終止符を打つべく――」

「終止符を打つ？ 私は思うんですよ。アレらが陸おかに登ってくるのを待つことが、一体全体なんの終止符になるのかと」

飯田の言葉を遮るように渋谷が言う。

結局、運輸省の意見はそれに尽きるのである。かつての大戦で海上護衛を軽視した海軍が民間の商船に大きな犠牲を強いたのと、一体全体何が違うのかと。

「調査官、ひとまず落ち着いて下さい。海軍としてはこの事態を重大な懸念事項として扱っております。そもそも本省は“海軍”省です。対処といたしましては、まずは海上における防御こそが、我が国喫緊の課題を解決する唯一の手段であるというの——」

「唯一の手段？　なるほど、つまり海軍は事変発生から一週間近くを事態の收拾のみに当てておきながら、それを喫緊の課題だと仰るわけですね？　となればなるほど我が国は強靱だ」

鉄砲玉だ。もはや疑いようもなかった。飯田は小河原に目配せ、それを受けて小河原が一步前へ出る。これ以上関わる理由はない。

「……渋谷調査官、少しばかり場所を弁えられてはいかがでしょう？」
「弁える、とは？」

「あなたの発言はいささか冷静さを欠いているように見受けられます。何らかの抗議があるのですから、それはしつかと文章で、機関の名前までを明示して貰った上で抗議して頂きたい」

そう言われた渋谷は、狼狽するどころかむしろ笑って見せた。

「あなた、お名前は？」

「小河原です。沖縄沖駆逐艦沈没事故調査室副室長」

相変わらずやけに長い組織名称を諳んじてみせる小河原。ちなみに副室長というのは対策室内に飯田以外の佐官がおらず、小河原が室の中で先任の大尉だったから割り振られた役職である。

「ではですね副室長、抗議という言葉すら現実ではないのです。問題はむしろ、現実を起こっている被害、この原因究明と、それへの対策ですよ。海軍の対策は、あまりに現実を観ていない」

「その根拠のない発言をお控え頂きたい、と言っているのです。さも海軍が何の対策も講じていないかのように言われるのは困ります。我々は既に南西諸島に駆逐艦を派遣、状況の解決に全力を挙げているのです」

「ですがそれが航路の安全に寄与しているでしょうか？ 現実を観て下さい、既に海上輸送網について致命的な打撃が出ていることは、皆さん方もご存じのはずだ」

そんなことは分かっている。というより、知らないはずがない。『やつら』による貨客船への被害が現れたのはもう一年も前のことなのである。そのころから各種貨物船は安全な航海を期すために若干の航路変更を行わねばならなかったし、被害が次第に台湾沖、南西諸島沖へと迫ってくるにつれて航路変更だけでなく船舶保険などの値上がりも

渋谷はそこでようやく声を潜めた。ここは海軍省本庁舎の表玄関。当然ながら周囲の眼につく場所だ。衛視は既にいつ介入するかを迷うようにこちらに視線を向けているし、ここを通る全ての人間が素通りしているわけではない。

「ああ失礼。少々声が大きすぎましたかな」

そうわざとらしく言うのと、ふいに渋谷は声を落としました。「なにも喧嘩を仕掛けに来たわけではないのです。いかんせん、我々も《協会》の圧力からは逃れられない次第でありまして」

協会。その言葉を、果たしてここまで話を積み上げられて察しない人間がいるだろうか。

——全日本海員協会。

企業別労働組合が主流である日本において、この協会は唯一の産業分野別労働組合である。労働組合の目的とは企業、即ち雇い主に抵抗すること。同業種となると同情ストなども発生しないことはないが、日本においては企業同士の労働組合の繋がりは決して深いとは言えない。

ではなぜ、全日本などという強大な規模で労働組合が設定されるか。

理由は単純。彼らの対抗すべき相手は企業などではない。その企

業、資本家の力を持つてしても抵抗が叶わない存在——即ち、国家。

第二次世界大戦期……いわゆる「総力戦」の時代において、国力に個人や企業といった些細な境界は存在しなかった。なにせ軍と民に境界がなかったのである。まだ飛行機がヒトの輸送に寄与しない時代。海洋国家であった日本の輸送力とは言うまでも無く船舶であり、それを支える船舶会社であった。

そして時代は流れ、陸軍兵士を自らも砲雨に晒されながら運んで見せた勇敢な民間船舶が血を流す時代は終わった。しかし現実に通商破壊という概念は未だ存在する。そして『やつら』が貨客船舶破壊を行うと言うことは、流血を最も強いられているのは——沖縄までは——彼らであったのだ。

国家に命じられれば身を投げ出す彼らを、平時ですらも国家が守れないのであれば。

それは果たして彼らが忠誠を誓う理由たり得るのだろうか？ 最早企業は国家などなくしても存続しうるというのに？

飯田と小河原が怯んだのは一瞬だっただろう。しかし渋谷調査官にとってはそれは永久に等しい時だったらしい。彼は一步踏み込み顔を近づけると……それから一步引いた。

「……まあまあ渋谷調査官、そのくらいにしておきましょう」

なぜならば、渋谷調査官と飯田室長、二人の間に石川係長が割って入ったからである。

「つまるところ、安全こそが肝要なのです。その点は室長もご理解頂けたと思いますし」

その言葉に渋谷は石川を見る。見てから、肩をほぐすように身体を震わせて見せた。

「そうですね。駆逐艦を二三隻の派遣で航路の安全が確保できるならそれも結構、そうでなくても、海上保安庁には期待していますよ、石

川係長？」

石川に向けて満面の笑みを浮かべて見せる渋谷。それが飯田達に見せるための笑顔であることは容易に理解できる。

「それは私の部署ではないのですが……まあ、伝えておきましょうか」「ええお願いします。では飯田室長、小河原副室長、失礼しました」

そう言っただけで突然頭を下げると、渋谷は踵を返してさっさと立ち去ってしまった。結局彼は、海軍省の屋根の下に入ることをしなかった。彼が戦場に外を選んだのは間違いなく彼の恣意的なものであることは分かるが、案外この布陣は「素早く退く」ためだったのかもしれない。

残されたのは、飯田と小河原、そして石川のみ。

「……石川係長。これはどういうことだ？」

「まさか渋谷調査官があそこまで感情的になられるとは思わなかったのです。お許し下さい」

あくまで渋谷の単独行動スタンドプレーだと言わんばかりの石川。そんなわけがない。石川の海事局と渋谷の運輸安全委員会は名前が似ているだけではない。結局は同じ運輸省の人間なのだ。

「ともかく、運輸省からの抗議であれば然るべき筋を通して下さい。それだけは重々、お願いいたしますよ」

「善処いたします。では、金曜日の定期会議で」

結論から言えば、渋谷調査官の言ったことは間違っていないかった。東京発横須賀行は10時31分に定刻通り出発、一路横須賀へと向かう。少なくとも会議の日程に支障が出ることはないだろう。

しかし全てが予定通りとはいかない。ことがことであるからおっぴらに話すことも憚られ、飯田は結局ホワイト車を買おうとした。グリーン車なら海軍手帳を見せれば車内改札をパスできるが、流石に密室という環境に電源とさらにWi-Fiまで備えたホワイト車でそれは出来ない。仕方なく二人分のホワイト車料金を支払うと、席に着いた。東京駅の地上二階に設置されるホームは、相

変わらずと言うべきか人が多い。

「しかし、分からねえ。どう思う？」

「渋谷調査官ですか」

窓の外を眺めたままの飯田に、返す小河原。ホワイト車は華族議員などが使うことを想定して作られた車両だ。言うまでもなく、機密性は担保されている。

「いや、石川係長の考えだ。渋谷調査官については大して警戒する必要もないだろう」

「確かに、調査官とは当顔を合わせることもないでしょうし」「そういうことだ。だが石川係長は違う」

調査室が外部省庁の意見を汲む——という名目で設置された連絡会議。もちろん駆逐艦の沈没事故で内務やら陸軍省の意見を汲む必要はないわけで、つまるところこの会議こそが『やつら』に対して設けられた今現在唯一の公式な議論の場である。

「あれですら形式的な会議だ、それを理解して各省庁参加しているはずだが、石川係長だけは敢えて海軍との対立姿勢をとった」

それは単なる発言レベルでの対立ではない。運輸省は敢えて室が提案した計画とは異なる案を出してきたのだ。先日開催された第一回会議にて議論された『やつら』の関東上陸への対策。運輸省も既に同じような事態を想定した対策を打ち出し、まとめていたのだ。

最も、それが会議の場に持ち出されることはなかった。石川係長は飯田に計画の存在を示しはしたが、しかし飯田の面子を潰すことはなかった。

そう。彼は明確に対立軸を作っては見せたが、それでも海軍の面子を潰したりはしなかった。直接の対決は避けていたはずなのだ。

「前回の会議から方針を変えたことは確か……しかし、係長の考えが読めません。何をやる気なんだか」

車窓から小河原が睨むのは海軍省のある霞ヶ関、そこを飛び越えて立川の運輸省本庁舎。無論高層ビル群に阻まれてその姿は見えないが、この決して狭いとは言えない帝都に多くの政府機関がひしめいているのだ。ならば、多少の小競り合いや縄張り争いは必至。

「目的がいずれにせよ。相応の礼をもって対応せざるを得まい」

運輸とはことを構えたくないんだがな。その眩きは、列車の駆動音に消える。

厄介な話である。そもそも調査室は陸軍との縄張り争いを行う組織ではないのか。しかし運輸省が国家運輸の中枢を担う運輸安全委員会までも政争に駆り出すというのならば、海軍こちらとしても本気で動かざるを得ないのである。

飯田の表情を読み取った小河原は、意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「そういう意味じゃ、今日をXデーに選んでしまった石川係長はご愁傷様以外の言葉がありませんね……今夜でしよう？ 幕僚長との会食」

彼が言う幕僚長とはもちろん大迫海軍幕僚長のこと。一中佐が絶大な裁量を持つ海軍幕僚長との会食など信じられない話ではあるが、そもそも飯田は一週間前まで幕僚長の補佐を行っていたのであり、それに調査室は海軍幕僚部の直属、つまり飯田の直接の上司は未だに大迫海軍幕僚長である。

とはいえ一対一の会談というわけではない。大迫海軍幕僚長、彼が主導となって設立された有志の団体「新時代水雷戦の研究会」。その定期会合である。

「懸案事項が増えたことに変わりは無いがな……ともかく、金曜の連絡会までにはなんとか間に合わせよう」

今日は火曜日。飯田は頭の中でカレンダーを捲る。今夜の会合で仮に方針が固まったとしても、猶予は二日しかない。果たして間に合うのかは怪しいところである。

なにはともあれ、列車は横須賀へ。調査室としての仕事を片付けるのが、なによりも先決である。

——西暦2022年3月15日。神奈川——

横須賀。帝都東京を背後に控える浦賀半島の一大軍事拠点。ひとしきりの工作機械を備える工場と造船所を持ち、太平洋に睨みを聞かせる東京湾の守護者。

NR横須賀線を下車した飯田と小河原は、待つてましたと言わんばかりに駅前ロータリーに滑り込んできたバスに乗り込んだ。運転手は二人の姿を確認するだけで料金を求めたりはしない。それもそのはず、二人が海軍第一種軍装を着込んでいるからである。

そして海軍軍人が乗って料金を取られないバスといえば、海軍のバスだけだ。横須賀駅周辺はほとんど海軍工場の施設であるため、このように巡回バスが走っているのである。

「そういえば、小河原は横鎮勤務経験はあったか？」

「いえ、ありませんね。呉には二年ほどいましたけど……」

そう言いながら経歴に思いを巡らせるかのように宙を見つめる小河原。飯田にとっても横須賀鎮守府への勤務経験はない。それでも横須賀という土地には太平洋側の警備を司る横須賀鎮守府だけでなく連合艦隊の司令部も置かれているのため、決して土地勘がないわけではなかった。

車窓から見える横須賀本港。本港の岸壁に並ぶ駆逐艦はまだ岸壁を埋め尽くしてはおらず、警戒のためか大半の潜水艦は出払っている。それでもそこそこの賑わいと表現が似合うくらいには多くの艦艇が暫しの休息を取っていた。

「壮観ですね。佐世保や呉じゃもつと奥に隠すのに」

確かに、横須賀ほど大っぴらに艦艇を観られる場所も多くはないだろう。要塞地帯法だのなんだのがあった頃ならいざ知らず、横須賀本港を隠すような壁は存在しない。バスが走っていくこの道路だって、入ろうと思えば誰でも入ることの出来る公道だ。

それでも、全てが無防備かというところという訳ではない。例えば空

母棧橋。あの病院や宿舍といった建築物により巧妙に隠された棧橋には第一航空戦隊の旗艦であり栄えある連合艦隊の旗艦、航空母艦「出雲」が整備のために錨を降ろしている。

流石に、重要な所はしっかりと隠しているのである。

それにしても、横須賀という港は狭い。いや十二分に広いのはあるが、それでも空母を収容するとなると話は別だ。現代における空母は八万、九万トンが常識。強襲揚陸艦でも三万トンを超えるのである。

結果として、横須賀の収容能力は飽和した。それこそ、潜水艦棧橋すらも丸見えという悲惨な状態だ。

「そういえば、横須賀の拡張工事はどうなっているんだろうか」

「未着手ですよ。46年完成目標で先は長いとはいえ、間に合うかどうか」

46年とは平成46年のこと。それまで平成の御代が続くかどうかはともかくとして、西暦に直せば2034年にあたる。工事の始まる気配もない横須賀本港を見ながら小河原は続ける。

「言っちゃ悪いですけど軍務局でも大分軽視されていますからねえ、設備投資。正直、空母が港から溢れる未来しか見えません」

いや、既に溢れていますかね。ため息交じりに言う小河原。後方の職務は艦隊の規模に比例して増えるものだ。そして後方が軽視されがちなのは、今に始まった話ではない。

「軍港から溢れるほどの艦隊なんて、一日本人として一度は見てみたいモノだがな」

飯田の言葉は半分は夢で残りは悪夢だ。相模湾まで溢れ出す連合艦隊など運用の側から見れば吐き気を催す存在以外のなにものでもないのだから。

小河原は飯田に合わせるように笑った。

「昇進が望めるんなら悪い話じゃありませんね」

最も、壁は多いですが。笑いを途切れさせるように零れた小河原の言葉に、飯田も押し黙る。

「……まあ、沖繩の件で計画の見直しは免れないだろうな」

計画。それが示すのは、無論海軍の建艦計画……即ち拡張計画だ。海軍は今、大々的な拡張期にある。それは東西の軍事バランスが崩れている証拠だ。

そもそも、東西冷戦というのは始まりより海と陸の戦いであった。幾多の紛争・動乱において西側諸国が空母を持ち出さなかつた日はなかつたし、東側が戦車を持ち出さないこともなかつた。

そう、制海権うみというのは常に西側の味方であったのだ。それが共産主義の旧大陸からの噴出を辛うじて防いだし、西側の確固たる制海権の元で運用される航空母艦は遊弋するだけで共産主義者の喉元に刃を突きつけることも出来た。

しかし、五年前。その半世紀以上続いた神話は崩壊することになる。発端は地中海に巨大な造船フロートが出現したこと。いや、出現してしまったことだ。それは西側諸国が一笑に付していたとある計画が実行に移されたことの証明であり、西側にとってあまりに致命的な敗北。

航空母艦「ヨシフ・V・スターリン」級。

それは艦隊運用という文字を投げ捨てた三胴艦艇。そもそも東側に航空母艦の保有をないものと分析した専門家は、空母という箱よりもむしろ空母機動艦隊を構成する随伴艦、その空母機動艦隊という戦力パッケージの運用の煩雑さから空母保有を否定してきたのだ。

だが造船フロートの存在は、東側の空母保有計画をいややようにも裏付ける。原子力発電所をそのまま詰め込んだような主胴メインハルはそれ単体でも全長300mを超え、飛行甲板面積は三万平方メートル弱。搭載艦載機は露天駐機を抜きにしても100を数えるという。副胴サブハルには洋上に持ち出すには豪華すぎる飛行機整備工場を備え、稼働率は通常の航空母艦の比ではない。

「しかし、大迫幕僚長が果たして計画の方針を改めるものでしょうか？ 洋上にて稼働状態にある空母艦載機比率はヨシフスターリン級が後3、4隻揃えばひっくり返されるんですよ。」

一説によれば、スターリン級登場以前の東西の空母艦載機における稼働機数の比率は13:1だと言われていた——地上基地訓練や母艦の整備、その他諸要因で変動し続ける稼働機数がどうしたらそんな分かりやすく表せるのかは全くの謎である——が、ヨシフスターリン級が一隻就役すればその比は7:2へ、3隻が就役している現在では4:1になるというのだ。五年前に造船フロートが完成し、既に四番艦の「ウラジミール・I・レーニン」が艤装工事中であることを踏まえるなら……今後十年のうちに東西の海上航空戦力は逆転することになる。

もちろん実際には、ソビエトは西側航空母艦と対峙する以前に巡洋艦や駆逐艦、ミサイル艇といった総勢四〇〇を数える水上打撃群に封じ込まれることになるのであろうが……純粋な数だけがモノを言うのが国際政治という生き物だ。

大西洋の航空劣勢。それは自由主義国にとっての悲劇以外のなにものでもない。

いかに軍官僚が資料を揃えて国防体制の万全さを語っても、核弾頭を引つ提げた攻撃機が米東海岸を、もしくは英国印度や日本に襲いかかるかも知れないという恐怖は拭いきれないのだ。

そのために、海軍は拡張期にあった。

「それでもだ。見直しは免れない」

「しかし見直しとは言いますけれど、一体なにを見直すんです?」

飯田にしてみれば『やつら』への対処のほうが早急に行われるべき事案だ。航空母艦の建造を含める建艦計画の見直しは避けられない。

一方の小河原といえば、一つ一つの言葉に懐疑の色がにじみ出ていた。

「図上演習ですら、露天駐機により稼働機150機を実現したヨシフスターリン級一隻を封じ込めるのに二隻の空母では足りなかったんです。米国の正規空母は十二、我が国と英連邦の分も合算して西側はこちらようやく二十余隻……」

小河原、いや日本にいる全ての軍関係者の口から漏れるのは夥しい不安だ。空母というのはその性質から一隻で一つの海を抑えることも出来るが、数にしてみればそこまで揃っている訳ではないのであ

る。西側の航空母艦は仮に少数の垂直離着陸型艦載機が運用可能な強襲揚陸艦——いわゆる制海艦——を数に数えたとしても、ようやく五〇を超えるかどうかと言ったところ。一つの国を護るには多すぎる数だが、西側世界となつてくると話が違ふ。

半世紀以上の歳月を費やして順調に維持してきた海上航空優勢。

それが、喪われようとしているのである。

これでも西側海軍はかつてない規模を誇るのだ。というのに、不安が拭えないとは信じられない。

しかし、それが分析すべき現状であり……西側が突きつけられた現実だ。

十五年も待てば東側のスターリン級は二桁を数えることになる。^{スターリン}書記長が1ダース揃うのである。そして合計して優に千機を超える航空機を積み込んだ艦隊、いや破壊装置がジブラルタルから放たれることになるのだ。

その炎は大西洋を焼き、果てはインド洋、そして太平洋へも延焼するであろう。

にも関わらず、建艦計画を見直すとは。

確かに、正気の沙汰とは言えなかった。

「そこまで『やつら』のことを海軍幕僚長は恐れている、と」

「恐れている、か」

その反応を見て飯田はむしろ懐かしくなる。そうだ、これこそが正常な反応だ。『やつら』により沖縄県が消滅したとしても、国家の軍隊が対峙すべきは国家の定める敵でなくてはならない。国防大綱で定められた仮想敵国は明確にソビエト、共産主義国家群を示している。

——だからこそ、^{このわたし}海軍幕僚長がこの仮説を表立って主張するわけにはいかないのだよ。

脳裏に蘇って止まない上司の声。あの時彼は、なにか底知れぬものに怯えるような風ではなかっただろうか。

だが、それは小河原は知らなくていいことだ。確かに大迫海軍幕僚

長は『やつら』を恐れているのかもしれない。しかしそれを知るの
一部の人間だけでいい。

なにせ国は、未だ『やつら』を明確な敵として認識していないの
から。

「……まあ、確かに恐れているかもしれない。現実には国民が大勢亡
くなつた。怯えないわけにはいかない。予算だつて陸軍に傾くかも
しれない」

「なるほど。確かに沖縄で海軍は避難手段にはなつても決して沖縄県
民を救う決定打にはなり得なかつた……さしもの海軍幕僚長も国会
に予算を握られてはどうしようもないですものね」

小河原が返す。飯田の部下は上司の意図を確実に汲んでくれたよ
うであつた。

『やつら』はさしたる敵ではないが、それでも沖縄が海軍の予算が奪
われるくらいの大事件であつたことは否定できない。しかし海から
来る『やつら』を防ぐのは結局のところ海軍だ。海軍予算が減らされ
ることを避けるためにも、海軍が『やつら』への対策の主導権を握る。
握らねばならない。

今はそれでいい。

「そういうことだ」

程なくして正門前へと辿り着いた二人は横須賀鎮守府本庁舎へと
向かう。植えられた梅が、彼らを歓迎するような淡い桃色で側道を
彩っていた。

大迫善光海軍幕僚長。

彼は海軍の中ではちよつとした有名人である。それはもちろん現
役の海軍幕僚長だから有名という側面もあるのだが、それ以上に彼が
成した海軍の改革が評価されていることによるものが大きい。

彼が海軍幕僚長に就任したのは、まさにヨシフスターリン級の造船

ドックが完成した年。海軍は今後十年で様変わりすることが確定している海戦事情への対応を迫られており、一方で予算は縮小傾向……関係者の間に暗雲が流れる状況で、大迫海軍幕僚長はその統率力、そして政治力を存分に発揮した。

まずは「攻勢連合、守勢鎮守府」を合言葉にした海軍の戦闘編成における改革。なるべく新鋭艦を前線部隊である連合艦隊に回しつつ、東側に押し込まれることを前提にした近海防衛のシステム構築に尽力。後方基地としての色合いを濃くしつつあった鎮守府に再び要塞的性質を持たせた。

言うまでもないが、海軍に突きつけられていた喫緊の課題は装備の旧式化だ。沿岸防衛を担う鎮守府だけでなく、連合艦隊ですら旧式艦艇が目立つ有様。ソフトウェアの更新は出来ても、戦闘能力が艦艇ハイドに依存する以上、限界はある。

故に、大迫が目指したのは小さいながらも強靱な防衛体制。これをくみ上げることにより予算が縮小されようと国防に差し障りはないと言ってみせたのである。

しかし、成り立つからと言って近海まで攻め込まれることを極東の盟主たる日本が許すかといえればそれは別の話。そもそも日本が引きこもって敵を奥深くまで引き込むその時、八紘あめのしたに広がる同盟諸国はどうなってしまうというのだ。

さらにこの改革で各鎮守府には陸戦部隊である防備隊などが復活した。実際には工作人員などによるテロ対策の側面が強いこの改革だが、海上部隊であるはずの海軍が海を捨てるのかと少なからずの弱腰非難を浴びることになる。

しかし、これが彼の狙いであった。

軍があえて率先して縮小の気配を見せたことで一気に醸成された「海軍の縮小を許すな」という声。それを待っていたかのように彼は各方面に「ヨシフスターリン級」の脅威を説いて回ったのだ。

海軍は先十年で近海防衛に追い込まれるほどの劣勢を迎える。それを避けるためには、例え予算が縮小されようと負けない体制。それに加えて今以上の大艦隊建設が必要なのだ、と。

そうして彼は、諸予算が縮小傾向にある中でも大規模建艦計画を立ち上げてみせた。

それが八・八艦隊計画。かつて帝国海軍を苦しめた建艦競争の遺産である八八艦隊と同名の建艦計画。これを財政再建中であるはずの日本。それ誰よりもよく理解しているはずの国会予算審議で通してみせたのである。

この予算成立に関係者が漏らした安堵の息は大きい。

なにせ、装備の維持費だけで予算が消えるほどに海軍の予算は逼迫していたのである。艦隊の華である航空母艦ですら、半世紀前に就役した榛名型を無理矢理用いて頭数を揃えている状況。もちろん時代遅れの四万トン空母が現代戦で活躍できるわけがない。

これを改善するためには、とにかく予算が必要であった。

艦隊計画の謳う航空母艦8隻、制海艦——現行の艦種区分では強襲揚陸艦——8隻という夢のような艦隊が本当に必要かどうかはともかく、この計画のおかげで海軍はようやく落ち着いて旧式化していた艦艇の更新が出来るだけの予算を獲得する目処がついたのであった。

このようにして、大迫善光海軍幕僚長は海軍の編成改革、更には艦艇の更新作業も成し遂げて見せたのだ。八・八艦隊計画は平成33年度、つまり昨年度から予算の取得を開始しているため、未だ効果は見えないが……五年後には見違えて、十年後には今とは質も規模も桁違いの連合艦隊が誕生することであろう——もつとも、今の話には『やつら』に邪魔されなければ。という枕詞がつくのであるが……。

ともかくそんな鮮やかな政治手腕で海軍の財政を救った。それが大迫海軍幕僚長に向けられる海軍内の眼であった。

しかし彼は所詮は海軍大将に過ぎないはずである。それが海軍幕僚長たる海軍大将になつたところで、僅か五年のうちにここまでの改革、そして建艦計画の実行など出来るはずもない。

疑問に思う人間もいたことだろう。何故彼がこの短期間で、海軍の再編成に大規模建艦計画、どちらか一方をとつても十数年かかりそうな仕事をやってのけたのか。

しかし、それは決して不思議な話ではなかった。なにせ大迫善光は彼一人でそれを成したのではない。彼を支えた有志の団体、その組織力あってこそその改革だったのだから。

その有志の団体とは——新時代水雷戦の研究会。

彼らをよく思わない人間には「大迫派」と呼ばれる……大迫善光率いる海軍将校の研究会。

その定期会合が今日、行われる手筈となっていた。

「よう、飯田」

都電で降りた飯田はその姿を認めると、僅かに眼を見開いた。

「西園中佐。てつきり来られないものかと」

電停で飯田を待っていたのは二期上の先輩である西園。今は駆逐艦「時雨」の艦長を務めているはずで、沖縄で『やつら』と対峙して僚艦の「雷」の最期を見届けたために艦ふねと共に千島列島に留め置かれていたはずだ。

「俺もそう思っていたんだが、報告のために本省かすみがせきに呼び寄せられたんだ」

大方、今夜の会合に参加させるためだろうな。そう零す西園に飯田は無言で肯定とし、歩き出した西園の後に続いた。西園は前を向いたまま口を開く。

「随分早かったな。調査室っていうのは暇なのか」

西園のいうことは尤もである。飯田が室長を務めるのは沖縄沖駆逐艦沈没事故調査室。そもそも存在することに意義のある部署のため仕事が多いわけではないが、それでも定時より前に上がるといのはまあ、いいことではないだろう。

「今日は横須賀でしたので、まあ一日くらいは直帰にしても問題はありません」

それに、先輩が来られるとも聞きましたし。その言葉に嘘はない。実際、二人が落ち合った電停は目的地ではなかった。

「なるほど。俺もどうせ職場は北方だ。直帰も仕事もない」

皇居方面にでも行こう。その言葉を合図によく目的地を得た二人は歩き続ける。

まだ五時を回らない日比谷の街は夜の賑わいからはほど遠い。そういう意味では、巡邏というわけでもなく軍人が、それも中佐という高級将校が歩き回っているのは若干特異な光景である。しかし霞ヶ関の海軍省に三坂の陸軍省。近衛までもが入り乱れる東京駅、そして皇居の周辺という場所が違和感をなくす。すれ違う勤め人も飯田達のことをを気に掛ける様子はない。

「事変以来、最初の集まりになるな」

そんな中、先に言葉をひねり出したのは西園であった。

「……」

飯田は何も答えなかった。正確に言えば、何を答えるべきか迷っていた。

僅かに二期の差しかない二人は、既に二十年來の旧知の仲。お互いの家庭について語らうもよし、趣味の話をするもよし。それこそ最近スランプ気味で90から100の間をふらついている——決して良いとはいえない——ゴルフのスコアについて相談してもいいだろう。もちろんそんな私的な話をするべき場でもないのだが、それが許されるくらいには三人の仲はよかつたのだ。

そう。三人だ。

「抜かれたな」

西園が足を止める。視線は都電、小洒落た繁華街とオフィス街の境界線を走ってゆく二両編成の路面電車に注がれていた。

「はい、抜かれました」

何を抜かれたか。よもや言う必要もあるまい。

「うーん残念だ。先輩でありながら抜かれるとは、本当に失態だ」

どこか言い聞かせるように言葉を溢す西園。後にも恨み節を続けるが、その台詞の節々に、だんだんと苛立ちがにじみ出す。

「なあ飯田。お前は悔しくないのか」

そう言ったのは、歩行者用信号が青に変わり、丁度凱旋通りを渡り

きつた時だった。面前には皇居外苑が広がり、後ろには高層ビルディングが控える。

「私は七位でした。主席には勝てませんよ。必然といえれば必然です。ですが」

ですが。その続きを続けるか一瞬は迷う。幸いなことに、背後を車が通り過ぎることはあれど歩行者はいない。当然だ。こんな中途半端な時間に皇居観光や皇居マラソンなどする人はいないし、そうでもないければ皇居外苑などには来る人間はそうそういないのだから。

だから飯田は、口に出すことにした。

「ですが、こんな早く出世するとは思っても見なかった」

「本当だな」

そう言つて西園は足を速める。速めたのが彼の意味なのかそれとも飯田が急かしたのか、それはどうでもよかつた。

「昔、ここで写真を撮りました。ほんの学生だった頃、単なる気まぐれでした」

懐かしい。生まれ故郷の神戸を離れ、まだ標準語が板についていなかったあの頃。飯田の同好の志であり、また同様に海軍の道を目指した親友。何の気もなしにやって来た皇居で、丁度歴史の定期試験にも出てくる有名な事件を復習しながら写真を撮つた。

「写真？」

「ええ、確か合格記念だった気がするんですけど……まあよくは覚えていません」

そう言いながら、飯田は鞆に忍ばせていたそれを取り出す。

男同士の間柄だ。風景は撮つても人物なんて撮りはしない。

故にそれが最初で、最後の写真だ。高校の卒業写真とは訳が違う。

この写真はインスタントカメラによるものだ。何故インスタントを持つていたのかは今では覚えていないが、わざわざ現像しているということとはきつと旅行か何かで使った余りだったのだろう。

決して良質とはいえない写真。そこには、確かに目の前の景色と変わらぬ桜田門と水を湛えた内堀。

そして————もはやこの世に存在しない影がひとつ。

「松原」

まつばらしょうへい
松原昌平。

海兵118期の主席卒業生。飯田にとっては、高校以来の付き合い。118期の卒業序列は七位にも関わらず一番乗りに所帯を持った飯田を最も恨み、もつと祝福してくれた同期。このままじゃ独身歴も一位になるぞと飯田が散々脅し続けた戦友。

そして琉球諸島事変で沈没した駆逐艦——飯田が率いる沖縄沖駆逐艦沈没事故調査室の調査対象である——「雷」の艦長。

その高校時代の姿が、写真には収められていた。

我ながら馬鹿げていると思う。大の大人が家族以外の写真を持ち歩いてなんになるというのだ。こんなもの、何の役にも立ちはない。

だが、本来ならば今日の会合にも出席できるはずであった彼の残滓を、飯田はここへ持ち込みたかったのである。

「118期は何人目だ？」

「彼で5人目です」

端的に答えた飯田。別に感傷に浸りたい訳ではない。軍属となり、命を捧げると誓った時から「この日」が来るのは当然のこと。去つた兵はこの国を護つてくれたりなどはしないのだ。だから淡々と仕事に勤しんできた。

それでも、開いた穴が埋まることは決してない。

「116期はまだ3人だ。お前らに比べれば幸せなほうだな」

そうは言いながらも、西園の言葉には棘が潜む。そんなことは飯田も分かっている。たった一人の人的資源の喪失を嘆いては始まらない。いやそもそも、人的資源に優先順位が、重みの違いがあつていいはずはないのだ。

それでも、同期というのは特別なものだ。何年も同じ屋根の下で学び、争い、激論を交わしてきた。自らこそが国家の盾となり矛となるに相応しいと信じ、時には文民統制なんて言葉も忘れてあるべき国家の姿にも論は及んだ。熾烈な座学の主席争いもしたし、巧みな連携で寮長を騙したこともある。

高校から続く付き合いなら、なお一層のこと。

「分かってますよ。今だけです」

空を仰ぐ。皇居はこの高層建築の森林である東京に開いた穴だ。彼の視界を遮るものはない。

まもなく時計は午後五時を告げるだろう。そうすれば大した時間も置かずに会合が、飯田と西園が、そして松原が属した新時代水雷戦の研究会による定期会合が開かれる。

前のみを見て、未来のためだけに進む研究会には松原の居場所はない。なにせ彼は過去になってしまった。煌びやかな勲章も、階級章も、国を護るのには使えない。

飯田に西園が聞いたのはそんな時だった。

「会合まではまだ一時間はあるな。行くか？」

その目線の方向を見れば何処へ行こうとしているのかは分かる。飯田は写真を仕舞いながら笑った。

「遠慮しておきます。初めから神頼みじゃ、松原に向ける顔がありませんから」

「そう、だな」

それじゃ、ご挨拶は全部片付いたらにでもするか。そうやって西園は電停へと歩き出す。

二人の海軍軍人は皇居のさうらうへへと思いを馳せる。

「神様になった奴の顔を拝みに行こう。なるべく早くな」

「なるべく早く終わらせたいものです。松原のためにも、この国のためにも」

松原海軍中佐……もとい、二階級特進で海軍少将。

海兵118期を主席で卒業した男は、予定調和のように同期の中で一番乗りの将官——提督になった。

それを誰が望んだのかは、今となっては分からない。

二人の将校は帝都の喧騒へと紛れてゆく。

今日は新時代水雷戦の研究会——新水研の定期会合。それは

二か月前から予定されていたもので、一人の中佐が消えたくらいで取り止めになるものではないのだ。